

# ダイの大冒険の世界を 念能力で生きていく

七夕0707

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ダイの大冒険の世界へ転生した主人公。

神様から念能力を貰ったオリ主が大魔王バーンを打倒するべく奮闘します。

作者はにわかですので、過度な期待はしないで下さい。

念能力は独自解釈も含まれています。

――追記――

このSSはオリ主のオレツエーといった内容ではありません。またストーリーは原作沿いとなるため苦手な方はブラウザバックを推奨いたします。



3 8	助っ人	253
3 7	深域へ	245
3 6	支援	239
3 5	予想外	233
3 4	衝撃	228
3 3	離脱	219
3 2	戦乱	211
3 1	念能力&アイテム紹介	202
3 0	真の勇者	191
2 9	小さな勇者	183
2 8	新たな勇者	174
2 7	協力者	168
2 6	逃亡	162

5 1	それぞれ	336
5 0	本音	330
4 9	祝賀会	322
4 8	決着	317
4 7	解呪	311
4 6	勝者は	305
4 5	自爆	300
4 4	挑発	293
4 3	出陣	287
4 2	大魔導師	280
4 1	禁呪法	273
4 0	氷炎將軍	266
3 9	狼煙	259

6 3	6 2	6 1	6 0	5 9	5 8	5 7	5 6	5 5	5 5	5 4	5 3	5 2
詰問	錬金術士?	故郷	闘気	覇者の剣	武術大会	ロモスへ	心情	5 地上最強の戦い	敗北	実力	葛藤	ドラゴン
424	418	411	404	399	392	384	378	369	362	355	348	342
7 6	7 5	7 4	7 3	7 2	7 1	7 0	6 9	6 8	6 7	6 6	6 5	6 4
チエス	連戦	死神	死の大地	残る者たち	出発	迷い	決戦に向けて	遭難	死闘	孤立	ダイの剣	ロン・ベルク
522	515	507	498	492	486	478	469	462	453	446	438	432

8 8	この先に待つ運命	4	617
8 7	この先に待つ運命	3	606
8 6	この先に待つ運命	2	600
8 5	この先に待つ運命		591
8 4	敵と味方		582
8 3	影		575
8 2	最悪の事態		569
8 1	反撃の狼煙		561
8 0	懸念		553
7 9	大魔王		544
7 8	合流		536
7 7	休戦		529

# 1 プロローグ

ベッドに横になりごろごろと過ごす。

別にだらけている訳ではない。これでも修行中なのだ。

何の修行かって？ もちろん『念』だ。

ウイングさんが言っていただろ、最も自然だと思いうポーズをとれるなことを。

俺はそれを忠実にまもり、ベッドに横になっているのだ。

意識を集中し、全身のオーラを体に留める。

四五行の一つ、『纏』だ。

これにより体は強固になり、肉体は若く保たれるらしい。

実際これの効果は本当にすごいと思う。

なにしろ5歳児のこの俺が、森の中をたった一人で生き抜いているんだからな。

纏を維持したまま体を起こす。

そろそろ夕飯を採りに行かないとな。

木造の簡易的な家から外へ出ると、いつもの様に果物やきのこを採りに森の奥へ向か

う。

今から二年ほど前、俺はこの世界へ転生した。

突然神様が現れ、異世界に転生させると言ったのだ。

その際にチートをくれるというので、俺はHUNTERXHUNTERの念能力を貰うことにした。

どの世界に行くかはランダムだと説明されたので、どこでも応用の利きそうな念能力にしたのだ。

チートを貰い、いざ異世界へ転生させられたと思つたら、そこは森の中だった。

3歳児を森の中に転生させるのだから神様はとんでもない畜生だと思つたぜ。

しばらく途方に暮れて練り歩いていると小屋を見つけた。

誰も使っていないようだったので、そのまま住み着いているのである。

本当は誰か小屋の持ち主なりが現れて保護してくれることを期待しているのだが、一向に来る気配はない。

もしかしたらこの小屋自体、神様が用意してくれたのかもしれないな。

子供の体と言っても念のお陰で結構生活に苦勞はない。

纏をしているだけでも身体能力は劇的に向上するからだ。



今もこうやって、木に登りリングゴを採っているところだ。

5歳児だったらかなり危険な作業だが、今の俺には楽々である。

今日と明日食べる分を背中に背負った籠に入れると、木から飛び降りた。

まるで階段を一段とばしで降りた程度の衝撃だ。

本当に念は便利だと思う。

ひと通り食料を調達し帰ろうとした所、茂みの方から気配を感じた。

『円』を使っているわけじゃないが、森で生活しているせいかわ物音や気配がなんとなく分かるのだ。

籠を下ろして身構えていると、茂みから何か飛び出してきた。

「ピギー」

聞き様によつては可愛い鳴き声。

しかし、これが大の大人の命を奪ってしまうというのだから油断はできない。

そう、その生き物とはスライム。

ドラクエで定番のあのスライムだ。見た目も一緒だ。

どうやら俺はドラクエの世界に転生したらしく、何度もスライムやおおがらすと戦っている。

この森は強いモンスターが出なくて良かったよ。

今だってスライムが鳴き声を出しながら体当たりをかましてきたが、まるで痛くない。

昔読んだ本の情報によると、スライムの体当たりは金属バットのフルスイングくらいの威力だというが、纏をしている俺にはあまり効果が無いようだ。

スライムを念を込めたパンチでぶっ飛ばし、家路につく。  
早く家に帰って修行しよ。

異世界に転生し小屋を見つけた後、俺はこの世界がドラクエなのだ気がついた。

森を出る前に気がついてラツキーだった。

だって、凶悪なモンスターがいたら念があっても絶対やられるし。

この辺にスライム程度のモンスターしか居ないのは本当に良かった。

自然豊かなお陰で食料にも困らないし、『発』を修得するまではここを離れないと決めている。

二年間念の修行を行っているため、今ではかなり強くなった筈だが、それでも子供には変わらない。

毎日食料を採っては家で『纏』『練』『絶』を繰り返す毎日だ。

これが中々に充実しており、『発』をどんなものにするか妄想しながら過ごしている。しかし、一つ懸念事項がある。

それは、この世界がどのドラクエなのか判明していないことだ。

俺はドラクエは友人との話でかなり聞いてはいるが、実際にやったことがあるのはIIIとVIだけなのだ。

その二つでさえもほとんどストーリーは覚えていないしな。

時系列的に主人公たちが活躍する時代かも分からないし、判断材料がない。

正直詰んでね？

そもそも主人公に関わるべきなのかも迷っている。下手なこととしてゲームオーバーになられても大変だしね。

ただ、せっかく異世界に来たんだから冒険してみたいのが男の子というもの。

大きな町を探してモンスター退治して、英雄とか勇者とか言われてみたいなあ。

それにドラクエの女の子って可愛い子が多かった気がするし、イチヤコラしたい。

主人公を見つけて、関係ない場所で適当に遊んで暮らしたい。

俺の基本方針はそのような形で結論がついた。

そのためにも強くならないとな。

今日もさっさと家に帰って念の修行だ。

## 2 少女

そろそろ『発』が欲しいなあ。

転生して2年半。ずっと念の修行をしていたが、そろそろ良いんじゃないだろうか。潜在オーラも結構なものになってきている気がする。

きつと天空闘技場にいたズシよりは上だと思われる。

今バカにしただろ？ でもこれでも結構伸びてるんだぜ。

ズシだってゴンとキルアのせいで影が薄いだけで、作中では才能のある方だからね。神様からチート貰う際に、ゴンキルくらいの才能くれって言ったんだけどさ。

素質はあげるけど、結局ズシくらいになるって言われたから。

理由を聞いたら、素質はあってもそれを活かせるセンスが無いと意味ないよって。

やっぱあいつらハンパねえ。

そんなわけで、俺の才能はズシレベルということさ。

でも良いんだ。俺ってゆっくりやりたいタイプだから（震え声）

気を取り直して『発』を覚えようと思う。

つてことでまずは水見式だ。

近くの川から汲んできた水にその辺の葉っぱを浮かべる。

両手を近づけて練を行う。

すると、葉っぱがくるくるとゆっくりであるが回り出した。

操作系かあ。ドラクエ世界で操作系はどうなんだ。

強化系が理想だったんだけど。

あ、なんか今の俺クラピカっぽかったな。

まあいつか。操作系は操作系でできることいっぱいありそうだしな。

よし。とりあえず、能力を考えるよりも先に発をより顕著にできるように修行だ。

来る日も来る日も水の上の葉っぱを動かす。

両手に凝でオーラを集めたり、指先に集めたり。ただ水見式をするのではなく、色々工夫して実験も兼ねる。

やはり水に近づけるオーラが多くなるから凝のほうが顕著に葉っぱが動くなあ。

それにオーラを近づけた際に、葉っぱを動かすことに意識を集中すると更に激しく動く。

念って言葉通り、念じることが重要なんだな。

そうだ。食料の採取をこれでやってみよう。

葉っぱの動きで唐突に思いつき、実践するべく外に出る。

果物のなる木の下まで行き、リングゴへ向かってオーラを飛ばす。

リングゴ全体をオーラで包む様にして、引っ張る。

「ふんっ。おらっ。ほおっ」

中々落ちないな。というか結構木の実って強く枝に実ってるんだな。

全然落ちる気配がないぜ。

捻るか。

リングゴ全体を回して枝からネジ落とそうと苦心する。

30分程頑張ったがまるで取れる気配がないので、今日は諦めることにした。

これ以上粘ってオーラ使い果たしたところをモンスターに襲われたらヤバいからな。

水に浮かべた葉っぱがよく回っていたのでいけるかと思ったが、質量の大きなものを動かすにはまだ発の練度が足りなかったようだ。

これからは手を使わずに物を動かして生活すべてを修行にしてみようか。

でも、操作系で物を操作する場合は愛着のあるものがどうのと言っていたな。

超能力者がやるような念力をイメージしてみたんだが、やめておこうかな。

元々念能力の詳細はHUNTER X HUNTERの原作でも語られていない部分が多い。

思い込みさえ強ければ念は大丈夫そうだけど、それでも非効率な部分があるのでくるのはあんまりなあ。

制約と誓約で威力を高めたりもやりたいけど、相談できる相手がいないのは厳しいな。

どうせならHUNTER X HUNTERの世界に行きたかったぜ。

・・・でもあそこだと死亡フラグ多すぎるか。

せめてこの世界が作者が同じ幽遊白書なら玄海師範とかに聞けばなんとかありー。

そうか！

幽白の能力をそのまま持つてくればそれなりに強いんじゃないか？

紙とペンが無いので、地面に木の枝を使って制約と誓約をまとめてみる。

〔 霊丸 〕

・ 一日に最大4発しか使えない。

・ 使用した後、残弾補充に1発、24時間の間隔が必要。

・連射はできない。1発毎に1分のインターバルが必要。

・5発以上使用を試みた場合、発動しない。

「こんなところか」

霊丸は放出系能力と言う感じだが、操作系と隣同士だからまだ良いだろう。戦闘用としては申し分ないしな。

誓約はつけなかったけど、まだどのくらい役に立つか試してないしな。色々と能力考えて、必要だったら誓約でカバーしよう。

制約と誓約はあくまで最終手段。基礎修行に重点をおいて修行しよう。

「プギー」

お、ちようど良いところにスライムがいた。

さっそく練習してみよう。

スライムに気付かれないように絶を使って少し近づくと。

俺の絶は完璧じゃないが、それでもスライムに気付かれず近づくといいは簡単だ。20メートルくらい離れた場所から人差し指にオーラを集めて準備をする。

おお、なんかスゲーオーラが集まってるぜ。

あの程度の制約でもちゃんと効果あるんだな。



外さないように狙いを定めてつと。

「くらいやがれ、霊丸ッ」

俺の気合と共に、ものすごい勢いでオーラの球がスライムへ向かって飛んで行く。

断末魔の叫びもなく、スライムは地面ごと消し飛んだ。

すつげえ威力だな。地面が1メートルくらい吹き飛んでる。

霊丸の威力に大満足して小屋へ帰ると、中から人の気配がした。

なんだ？ 小屋の持ち主か？

でももう俺が住み着いてから2年以上経ってるしな。

ゆっくりと小屋の扉を開けると、そこには今の俺と同じ年くらいの女の子がリンゴを齧っていた。

## 3 町まで

扉を開けると中でリンゴを齧る少女は肩を震わせた。

「ご、ごめんなさい。わたし、ずつとつ。ずつと迷子で、なにも食べてなくて」  
声を震わせながらリンゴを無断で食べたことを謝罪する。

「ああ、いい、いい。リンゴくらいまた採ってくるから」

精神年齢的には30歳近いので、食料を無断で食われたくらいでは何とも思わない。  
それよりも、この世界へ来て初めて人にあつたので結構感動していたりする。

「他にも何か食うか？　つていつても山芋とかよく分らない酸っぱい木の実とかし  
かないけど」

小屋の隅においてある籠から状態の良さそうなものを選んで囲炉裏に火をくべる。

そうそう。何故かこの小屋、ドラクエ世界なのに江戸時代風なのである。

なので少女が無断でご飯を食べているよりも、土足で上がっていることの方が気になつていたりする。

しかし子供のしていることなので咎めない。うーん、俺って大人。

鍋に水を入れて芋を茹でる。

味気ない食事であるが、調味料がないのだから仕方ない。

その間に瓶の中に放流していた川魚をつかみ出して棒で刺す。

囲炉裏の端に指して遠火で焼く。

「あ、あの」

「ん？」

少女の声に反応する。

「……、あなたのお家なの？」

「そうだよ」

本当は違うけど、わざわざ言う必要はないよな。

「お父さんとお母さんは？」

「いないよ」

「あ、えつと。……、ごめんなさい」

俺の両親が死んだと思ったのだろう。少女は申し訳無さそうに謝った。

この子、本当に5歳児か？ 少なくとも俺が5歳の時ならなんにも気にしないで。

なんか可哀想になったので別の話題を提供する。

「君はどうしてこんなところにいるんだ？ 近くに住んでるのか？」

もしかしてこの近くに町でもあるのかな。

だったらこれを機に町に出てみるのも面白いかもな。

「ううん。町からきたの」

否定するってことは町は遠いのか？

「どうやって迷ったんだ？」

「妹と遊んで。そしたらはぐれちゃって」

そう言っただけでまた涙ぐむ少女。

んー。中々要領を得ませんね。

相手が少女なのだから仕方ないのかもしれないけど。

黙ってたら迎えに来るなんてのは楽観的だよな。

少なくとも俺はこの辺りで2年近くも人の気配を感じてないし。

「とりあえず、今日は此処に泊まってけよ。明日一緒に町まで行こう」

「うんっ」

「よし、そうと決まればご飯食べてゆっくり休むといい。魚も焼けたみたいだし  
そう言っただけで焼けた魚を少女に渡す。

「ありがとう。えっと、お名前は？」

「ああ、名前ね。おれは遠矢」

「トーヤくん？ 変わった名前だね。私はマリンドラクエ世界だと確かに変わった名前だろうな。」

「呼び捨てで良いぜ。よろしくな、マリン」

「うん」

翌日、時間にして10時くらいだろうか。

俺は籠を背負い、マリンとともに町を目指す。

「町の方角わかるの？」

「まあな」

自信満々に答える。

何故なら昨日の夜に町の間所を確認したからだ。

俺が住んでいる小屋は山の麓にある。

背面の崖を登ると山の中腹まで行くことができた。今までは山の上の方は強いモンスターがいる恐れがあるので近づかなかつたのだが・・・。

しかし、昨日の夜はマリンを町へ送るために意を決して崖を登ってみた。

そしたら間抜けな話であるが、モンスターもいないし町は普通に見渡せるので、俺の

数年間は何だったのかという始末だ。

まあ、見た感じ森は結構広かったから人が来ないのも頷けるけどね。

俺の小屋から東に10キロくらい歩いたところに町が見えた。

他に町は見えなかったもので、おそらくそこがマリリンが来た町だろう。

マリリンの手を引いて森を歩く。

よく考えれば、よくマリリンはこんな森を彷徨って小屋までこれたな。

スライムくらいしか居ないとはいえ、モンスターまで出るのに。

なんて思っていると、さっそくスライムのお出ました。

しかも5匹も。

マズいな。俺はダメージを負わないから良いとしても、マリリンは普通にヤバイ。

金属バットのフルスイングなんて耐えられないだろう。

「マリリン。後ろにー」

「まかせて」

後ろに下からせよとしたら、マリリンが俺の前へ出た。

ああ、ちよつと。勝手なことしないで。

作戦名はめいれいさせろだから。

## 4 呪文

スライム5匹に怯むこと無くマリンは前に出た。

スライムはこれでもモンスターだ。最弱とは言われていが、それでも5歳児よりは遙かに強い。

それが5匹もいるんだ。命にかかわるぞ。

マリンをすぐに後ろへ下がらせようと腕を伸ばす。

「イオっ！」

マリリンがスライムに向かって唱えると、光の玉が手から飛び出し大きく爆発した。

スライムたちは吹き飛ばされ、そこには無残な死骸だけが残る。

ちよつと可哀想だと思う。

っていうかこれなに？ イオ？ 強くね？

俺の靈丸と大して変わらないじゃん。

俺なんて制約つけて一日4発しか撃てないんですけど。

「・・・す、すごいな、マリリン。もしかして魔法使い？」

なんとか気を落ち着け、マリリンに賛辞の言葉を送る。

劣等感が半端ない。

もしかして念って大したこと無いのかな。

「うん！ 賢者なの。まだ卵みたいなものだけど」

「へ、へえ。凄いいねえ」

褒めるとマリンはとても喜んでいた。

本当に凄すぎるでしょ。俺の二年あまりの念の修行は何だったんだよ。

いや、待て。人と比較するのは良くない。

魔法だったら俺だって使える可能性はあるし、その上で念で強化すればいいのだ。

「メ、メラア！」

誰もいない木に向かって思いっきり叫ぶ。

しかし何も起こらなかった。

「ど、どうしたの？」

突然の行動にマリンは驚いて俺の方を見る。

「・・・いや、俺も使えないかなって」

「呪文？」

「そう。メラならできるかなって」

「トーヤは魔法使いになりたいの？」



「いや、別にそういうわけじゃないけど。使えたらカッコいいなって思つて」「だったら私が今度教えてあげるね。きつとすぐ使えるようになるよ」やめて、そんな無邪気な目で見つめないで。せめてバカにしてくれ。

2時間ほど歩いたところで休憩にした。

時間もちようど昼くらいなので、ここらで昼食にしようと思う。

道中で採取した果物を籠から取り出しマリンに渡す。

「ありがとう。トーヤは凄いね」

「え？ 何が？」

「私は道に迷つた時に食べ物もないし喉が乾いても何もできなかったのに、こんなに簡単に食べ物採つてきちやうんだもん」

なにかと思つたらそんなことか。

「森で暮らしてたら嫌でも身につくよ。できなきや死ぬだけだしな」

梨のような果実に齧り付きながら、周りにモンスターがいなか気配を探る。

「・・・ずつとこの森に住んでるの？」

「そうだな。気づいたらこの森に居たよ。それからはずつと食べ物採つて小屋で過ご

しての繰り返しだ」

嘘は言っていないよ。でも、なんとなく俺の話はこれ以上したくないな。ボロが出そう  
だ。

「とりあえず、それを食べて少し休んだら出発しよう。それから、魔法はあとどのくら  
い使える？」

「えっと。イオだったらあと4回くらいかな。メラとかヒヤドならもう少し使えると  
思うよ」

「なら、今度からモンスターは俺が倒すから、マリンは自分の身を守るだけにしてく  
れ」

「う、うん。わかった。でも、トーヤはモンスターと戦えるの？」

さつきメラが使えなかったからって甘く見られてるな。

なら、今度は俺の戦闘能力を拜ませてやろうじゃないか。

昼食を食べ終えしばらく休んだ後、俺達は再び町を目指して歩き出した。

再び歩き出してから2時間くらい経った。

モンスターは一向に現れる気配がない。

いや、良いんだけどね。良いんだけど、なんか寂しい。せつかく俺の強さを見せつけてやろうと思ったのに。

「もうすぐ森を抜けるな。町まであと少しだぞ」

「うん！」

マリンは口には出さないが、とても疲れているみたいなので元気づける。

どれくらい歩くかわからない状況だと精神的にも辛いだろうしな。

最悪は俺が背負って行っても良いんだが、モンスターにすぐ対処できなくなるからな。

「お、見ろよ。あそこから平原が見えるぞ」

話しているそばから森を抜けれられそうだ。100メートルくらい先に開けた場所が見える。

「ほんとっ?」

マリンは疲れを忘れて走りだし、俺もその後を追う。

「みてみて、トーヤ。あそこに家が見えるよ」

一足先に森を抜けたマリンは、遠くに町を見つけたのか喜びの声をあげた。しかし、はしゃぐマリんと裏腹に俺は酷く焦っていた。

一步遅れてマリんに追いついた俺はそいつと目があってしまったのである。

こいつの名前はなんと  
言っただろうか。  
そう、確かグリズリー。  
どうみてもクマです。

## 5 実力

ハイイログマ。通称グリズリーと呼ばれるそのクマは日本ではヒグマとして有名である。

北アメリカのアラスカからカリフォルニアで生息するハイイログマはヒグマの一種なのだ。

体長は2.5メートルから3メートル。体重はなんと500キロにもなるらしい。

以上、俺が子供の頃に行った動物園からの情報でした。

「ぐおおおおおおお」

とてつもなく低い声で雄叫びを上げる。

恐えよ！

すぐ近くで吠えられたため、マリンは竦んで動けなくなっている。

雄叫びで動けなくなるとかゲームが違うやん。反則だ。バグなのですぐにこのクマを消してくれ。

そんな心の声も虚しく、本物のハイイログマよりも一回り大きいグリズリーは二本足で立ち上がった。

俺が昔見たのは動物園の普通のクマで、こいつはモンスターなのだ。きつとモノホンのクマより強いんだろうな。

5歳児の俺では到底勝てそうに思えないが、どうなんだろう。念があればイケるのだろうか。

今にもマリリンに飛びかかりそうな状態なので、俺は全力で練を行い攻撃の体勢を整える。

「ぐおおおおおおお」

再び雄叫びを上げて、俺の方を向く。

どうやら練を行ったことでマリリンではなく俺を攻撃対象にしたようだ。

ここで戦ってはマリリンが巻き込まれてしまうので、俺は全力でグリズリーへジャンプし、顔を踏みつける。

その顔を踏み台にして再び大きくジャンプ。グリズリーの背後へ着地した。

子供の体重で踏みつけた程度じゃほとんどダメージはないようで、すぐに俺へと爪を振り下ろしてきた。

それをなんとかバックステップで躲し、背を向けて走りだす。

「おおおおお」

グリズリーは小さな雄叫びを上げながら俺を追ってくる。

よし、このままマリンから離れるぞ。

両足に凝をして全力で駆ける。

スピード的には俺の方がやや遅いのか、少しずつ追いつかれる。

しかし、熊は時速50キロで走ると言われているから、俺はかなり脚が速いと思う。

グリズリーが真後ろに迫る恐怖をむりやり拭い去り、俺は地面を蹴りつけるようにし

て急ブレーキを踏む。

「オラアツ!!」

そのまま方向転換し、グリズリーの顔面に凝をかけたままの蹴りをお見舞いする。

自身の速度と体重では急停止も回避もできず、グリズリーは無防備のまま蹴りを喰ら

う。

痛つてえ。

足自体は何とも無いが、体重に押された。膝が砕けるかと思つたぜ。

ダメージ自体はグリズリーの方が上だろう。起き上がってくる様子はない。

地面に座り込み、足をさすっているとマリンが小走りやってきた。

「だ、だいじょうぶっ!」

追いつくのずいぶん早いな。

と思つたけど、グリズリーとの戦いは時間にして10秒にも満たないものだったのだ

ろう。

よく見るとさつき出てきた森から100メートルも離れていない場所だった。

「怪我したの？ 見せてーホイミ」

マリンは俺の足に手を当ててると、回復呪文を唱えた。

おお、これがホイミか。

なんだか湯たんぽみたい。あつたかくて気持ちいい。

感想が庶民だな。

「ありがとう。すっかり痛くなくなったよ」

「お礼を言うのは私の方だよ。私、怖くて全然動けなかった」

「なに言ってるんだよ。俺たちまだ子供だけ、こんなの大人だつてー危ないッ」

とつきにマリンを抱えてその場から飛び退く。

お姫様だつこなんて本当にすることあるんだな。

「大丈夫か」

「う、うん。トーヤこそ大丈夫？ 私重くないかな」

「そーゆー問題と場合じゃない」

どこかで聞いたようなやり取りをしながら、俺はさつきまでいた場所を見た。

「ぐおおおおおおお」



しつこいな。ただの雑魚キャラなんだからあれで沈んどけよ。

俺はマリンを抱えたまま全力で町の方へ走りだした。

「マリン。お前はこのままの状態であいつにイオを連発してくれ、できるか」

「わ、わかった。イオッ!」

まるで移動砲台のように追ってくるグリズリーに呪文をぶつける。

「イオッ!」

「イオッ!」

「イオッ!」

「イオッ!」

マリンが自己申告した数よりも多くのイオをぶつけているのにグリズリーは速度こそ緩めるが追走をやめない。

そして、やはりというか魔法力が尽きて攻撃手段がなくなる。

このまま町に入るわけにも行かないし、どうするか。

「ぐあッ」

そんなことを考えながら走っていると、後ろからの衝撃に吹き飛ばされた。

どうやら追いつかれたようだ。マリンを抱えていた分、走るのが遅くなったのか。

グリズリーの腕に弾き飛ばされるも、何とかマリンを守ろうと抱きかかえて地面を転

がる。

数回転して止まると、起き上がるためマリンを抱きかかえたまま全身に力を込めた。

「グルルウ」

直ぐ目の前までゆっくりと迫ったグリズリーは低く呻きながらまたもや腕で俺とマリンをなぎ倒した。

「うッ」

俺とマリンは地面に投げ出され、俺は仰向けに転がった。

グリズリーは俺の左肩に前足を乗せて動けないように抑えこむ。

「ぐあッ」

あまりの体重に俺の左肩は砕け、今まで味わったことのないような痛みが全身を襲う。

「トーヤッ!!」

地面に投げ出されたままのマリンが叫ぶ。

しかし、体は動かず魔法力も尽きているため、マリンには何もできない。

グリズリーはゆっくりと俺へと顔を近づけ、大きな口を開けた。

「そ、そんなに腹が減ってるならこれでも喰らいなッ」

右手の人差し指をグリズリーの口に向けて大きく叫ぶ。

全身全霊を込めた霊丸をグリズリーの口の中にお見舞いする。霊丸は昨日とはまるで違う威力でグリズリーの頭部を爆砕した。

「はあ、つはあ。危なかったぜ」

グリズリーに下敷きにされた状態からなんとか這い出し、一息つく。

「トーヤ、トーヤ。よかったあ」

俺に抱きつき、泣きじやくるマリリン。

肩痛いからやめて、今はやめて。

あまりに痛すぎて声も出せず。俺はその痛みに耐え続けるのだった。

## 6 別れ

痛えわ。マジで痛えわ。

だつて左肩碎けてるんだもん。

肩を押さえたまま動けずにいる。

この世界で骨折つてどうなんだ。

ホイミつてどこまで出来るんだろう。さつきは足の痛みは消せたけど。

「トーヤ、肩見せて。今治すから」

ようやく泣き止んだマリリンが俺の肩を心配して呪文をかけようとす。

「治すつて、マリリン。魔法力もう無いだろ。さつき限界まで魔法使つてなかった？」

それともホイミは消費MPが少ないから使えるのだろうか。

思案していると、マリリンは首から下げたアクセサリーを取り出した。

「それは？」

紐が通してあるそれは指輪のように見えた。というか指輪だな。

「これ祈りの指輪っていうの」

マリリンはその指輪を紐から外し、指に嵌めた。

「こうして祈ると魔法力が回復するんだって。テムジン様から貰ったの」  
テムジンって誰やねん。

「何回か使うと壊れてしまっただ話で、これもテムジン様が使った後のものらしいけど。後一回位は大丈夫だと思うの」

「良いのか？ それってかなり高価なものなんじゃないのか？」

「うん。でもこういう時に使うためのものだから。――」

そう言ってマリンは目を閉じて何かに祈りを捧げた。

すると指輪が僅かに輝き、宝石の部分が砕け散った。

あ、壊れた。

勿体ないな、魔法力なんてしばらく休めば戻るだろうに。

壊れた指輪をまるで意に介さず、マリンは俺の肩に手を添える。

「ホイミ」

温かい光に包まれ、俺のダメージはみるみるうちに回復していく。

1分もしないうちに治療は終わったらしく、肩を動かすとまるで痛みを感じなかった。

魔法ってすげえな。

町へ着くと、武装した大人たちがいっぱいいた。

なんでも最近この辺で凶悪なモンスターが出没するようになったらしい。

それってもしかしてグリズリーかなとか思ったけど、俺は気にせずマリンを送り届けることにした。

町に入るとマリンは道が分かるらしく、迷うこと無く進んでいった。

「道が分かるならもう良いよな。ここで俺は帰るぜ」

「あ、待つて。まだちゃんとお礼もしてないし、もう少しでー」

「ああ、いいって。礼なんて。俺もそれなりに楽しかったからさ」

そう、俺は結構この二日間を楽しんでいた。

この世界に来てから初めて人にあっだし、かなり痛かったけど冒険っぽいこともした。

ついでに町の場所も分かったしな。

まさにドラクエって感じのイベントだったぜ。

「ほら、早く帰ってみんなを安心させてやれよ。妹も無事だと良いな」

そう言うて手を振って別れようとするのだが、マリンは納得しない顔だ。

「あ、そうだ。その指輪くれないか」

マリンの首から下がっている、宝石のない祈りの指輪。それを指さし俺は続ける。

「こういうのがちようど欲しいと思つてたんだよ。ダメか？」

「う、ううん。じゃあ、これあげるね」

「ああ、さんきゅー」

指輪を受け取り、今度こそ帰ろうと踵を返す。

「私、しばらくはこの町にいるから、絶対遊びに来てねー」

マリンが手を振って俺を見送る。

「おお、その時はまたどっか遊びに行こうぜー」

それに手を振って応え、俺は町を出た。

「さてっと」

本当は町で保護してもらう予定だったが、やる事が出来たな。

しばらくは一人でじつくり修行だ。

町で保護なんてされたら自由に修行できないだろうからな。

あんなクマにやられかけるなんて、この世界じゃ生きていけない。

少なくともあの程度は自分一人で倒せるようになりたいな。

「ま、気長にやるか。新しい発も考えたし」

それに魔法も覚えなきやな。

やり方はまた後でマリんにでも聞けばいいだろ。

指輪を無くさないように首から下げ、俺は小屋まで帰っていった。



## 7 仕事

「お金がほしいです」

マリンのいる教会の神父に俺は相談していた。

新しい念能力を開発するにあたり道具を買いたい。

先日マリンから貰った指輪を使って能力を作ったら、意外にも上手くいったからな。戦闘用と補助用ので多数の念能力が必要だと思う。

念能力の長所はその汎用性だ。

ならば霊丸だけでなく、多種多様な能力開発は進めておくべきだろう。

「うーむ。ならば道具屋に薬草を売るのはどうでしょう」

「薬草？」

「はい。トーヤくんは森に詳しいから、薬草の類を探すのは簡単でしょう」

「でも、薬草ってどんなものか分からないんですが・・・」

「幾つか買い置きがあったので持ってきてきましょう。それを参考に集めてくるといい」  
神父はそう言って別室へ引っ込んだ。

ここは町の教会。マリンがこの町に滞在している場所だ。

マリンはこの町の住民ではないらしい。

パプニカでお姫様が産まれたらしく、その顔見せに同行しているのだそうだ。

しばらくしたら国に帰るらしいが、それまでは町へ来るたびに俺も教会に立ち寄るよ  
うにしている。

あと、この町の人達には俺は森の小屋で両親と一緒に住んでいることになっている。

マリンにもグリズリーを倒したことや一人暮らしのことは口止めしてある。

あの子は口が固そうなので大丈夫だろう。

「トージャじゃないか。何をしているんだ？」

神父が戻るのをぼうつと待っていたら声をかけられた。

「おお、アポロか。ちょっと神父に相談をね」

少年の名はアポロ。マリンと同じくパプニカから来たらしい。

もうお気づきかと思うが、一応言っておこう。

ここ、ダイの大冒険の世界だったわ。

アポロとパプニカって聞いて思い出したわ。

マリンって結構普通な名前だし、全然気づかなかったぜ。

気づいた時はかなりシヨックだった。

だってダイの大冒険ってことは、ボスは大魔王バーンだろ？

あいつクツソ強いじゃん。

念能力でなんとかなるレベルとは思えない。

しかも放つといたら地上吹き飛ばされかねないし。

マジでブルーだわ。

「相談？ 私で良ければ相談にのるぞ」

バーンをどうするか考えていると、アポロが人の良さそうな笑顔を向けてきた。

イケメンかコイツは。いや、イケメンだけでも。

「ちよつと欲しい道具があつて、金が必要なんだよ」

「お金か。私もあまり持ち合わせはないな。高いものなのか？」

「特に買うもの決めてるわけじゃないよ。生活用品とか色々な。だから稼ぐ方法を聞きに来たんだよ」

「なるほど、そういうことか。なら、手伝えることがあればいつでも言ってくれ」

「あ、ああ。その時はお願ひするよ」

まるで誠実と言う言葉が服を着て歩いている様なやつだな。ちよつと恐い。

アポロと雑談していると、神父が薬草を持って戻ってきた。

「はい、これは君にあげるよ。森で同じものを見つけて道具屋に持って行けば買いつけてくれるでしょう」

神父に礼を言つて、さつそく薬草を採りに森へ戻ることにする。

「あ、トーヤ。来てたの」

しかし、教会を出ようとしたところでマリんに声を掛けられた。

「こんにちは」

そのとなりで、マリンの妹のエイミが行儀よくお辞儀をする。

「ああ。こんにちは」

エイミは挨拶をするとすぐにマリンの後ろに隠れた。

「これから遊びに行くの?」

「いや、もう帰るところだよ。薬草探しに行くんだ」

「私も手伝うっ」

「おい、マリリン。君はしばらく町の外から出ないようにつてテムジン様がおっしゃつていただろう」

「あ、そうだった」

アポロに窘められたマリリンが悲しそうな表情で俯く。

先日行方不明になったことが尾を引いているようだ。

そういうえば同じく行方不明と思っていたエイミだが、実は普通に教会に居たそうだ。一緒に隠れんぼをしていて、マリリンがキメラの翼を間違つて使つたらしい。

そして気がついたら森に居たそうだ。

マジックアイテムって怖い。

「明日また来るから、そしたら遊ぼうぜ」

「うんっ」

マリリン達に手を振って俺は教会を後にした。

森へ入ると俺は両目に『凝』をした。

「お、あつたあつた」

薄くオーラを纏つた植物、薬草だ。

教会で薬草を受け取つた時、変な感じがしたので凝で見てみた。

すると微弱ではあるが、薬草からオーラが出ていることに気づいたのだ。

薬草は使用すると魔法のように輝き体力や傷が回復する。

もしかすると天然でホイミを蓄えるアイテムなのかもしれないな。

毒消し草や満月草も同じような要領で見つけることが出来た。  
背負っている籠がいつぱいになるまで採取をし、今日は小屋へ戻ることにした。

## 8 買物

打倒大魔王バーンを掲げてからの一番の懸念事項は修行時間であった。何しろ時間がなさ過ぎる。

ダイがバーンと戦うまでの時間は後どれくらいあるのだろうか。

恐らく10年程度は先だろうが、それでも短すぎると思う。

ゴンキル並みの素質は貰ったと言っても不安の方が強い。

ビスケは60歳であの力だ。

ビスケ自身もの凄い実力者なんだろうが、それでも大魔王バーンに勝てるかと言われるとムリだろう。

ネテロなら勝ちそうだけど。

どちらにしろ、あと10年でビスケ以上に強くならなければいけない訳だ。

生半可な方法じゃムリだろうな。

そういうわけで、俺はまず修行時間の解決法を考えた。

それがこれだ。

## 【強制する指輪】

・指輪をはめたものは強制的に『堅』の状態になる。

マリンから貰った指輪に細工し、新たに作った操作系の能力だ。

この能力により、俺は常に修行をし続けることが出来る。

風呂入ってる時も、飯食ってる時も、寝ている時も。常に修行だ。

最も常に全力で『堅』になるわけではない。

1割程度の堅が維持され続ける。

これは俺の操作系能力が未熟だからではなく、そうしないと他に何もできないくらい疲弊してしまうからだ。

グリードアイランド編を終えたゴンたちでさえも堅を1時間維持することは出来なかった。

しかし、それは彼らが全力で堅を行っていたからに過ぎない。

どの程度なら丸一日堅を維持できるかを検証し、それを能力に組み込んだ。

そしてもう一つ。

## 【蓄える指輪】



- ・この指輪を嵌めた状態で生み出されたオーラの3割は指輪に吸収される。
- ・吸収されたオーラは、この指輪に『周』をすると還元される。
- ・この指輪のオーラを直接肉体の強化に使うことはできない。

こつちの指輪は薬草を道具屋に売った金で買ったものだ。今後、念でアイテムを作る際に使う予定だ。

操作系なら物体にオーラを留めることは簡単だしな。

それに体から離さなければオーラの損失も関係ないし。

『強制する指輪』でオーラの絶対量を増やし、『蓄える指輪』で強力な道具や武器を作る。

これで10年の間になんとかバーンを倒せるようになっておかないとな。

ま、ダイ達が倒す可能性のほうが高いから杞憂かもしれないけど。

でも、原作読んだ感じだと薄氷を踏むレベルの戦いだっただよな。

少しでも力をつけておいた方が良さだろうな。

『強制する指輪』を使用して最初の1週間は結構つらいものだった。

常に倦怠感がつきまとい、何をするのも億劫だった。

しかし、最近になってようやく倦怠感が薄れてきたのだ。

『強制する指輪』の効果は、オーラの固定値ではなく割合なので、オーラ総量の不足からくる倦怠感なら薄れることはないはずだ。

だから、俺の倦怠感が薄れたのは俺自身の『堅』の技術が向上したからに他ならない。当たり前前の話だが、念の基本技術である『練』『纏』『絶』『発』にもそれぞれ熟練度がある。

そもそも念能力とは、オーラを自在に操る技術のことを示す。

どんなに強力な念能力を作っても、技術が未熟ならその効果は半減してしまうだろう。

「結局、操作系で正解だったみたいだな」

俺は根気が強いわけじゃない。毎日毎日厳しい修行をする生活を10年近くも続けられるとは思えない。

自分を操作して修行をするのは我ながら良い案だと思う。

即効性はないけどね。

元々原作のHUNTER X HUNTERでも戦闘用の発を修めるのは変わり者って風潮だったし、この選択は正しかっただろう。

「さて、と。今度は念能力だけじゃなくて、普通の戦闘の準備しようかな」  
いつも通り籠いっばいの薬草と、先日買った財布をポケットにしまい町へと向かった。

「はい、これは薬草の代金500Gね」

「さんきゅー、おっちゃん」

買い取って貰った代金を道具屋の主人から受け取る。

1Gが大体100円くらいだから、500Gは5万円だ。

結構な金額である。

俺はあの広大な森を凝で見回るだけで苦勞なく籠をいっばいにできるし、こんな楽な仕事他にないぜ。

森はモンスターがでるため、町の人達はあまり近づかないようだ。

今は魔王がいらないからモンスターが大人しいと言っても、絶対に襲われないというわけではない。

積極的に襲ってくることはないとはいえ、野生動物と遭遇するくらいには危険視されているようだ。

なので薬草類を納品する俺みたいな存在は重宝されるみたいだ。

そんなことより、今日は何を買っていいのかな。

道具屋の商品をじっくりみながらどれにしようか迷う。

とりあえず紙とペンは必要だろ。

あと、手帳みたいなものってないのかな。できればポケットサイズの。

納品を始めてからすでに半月。納品はこれで6回目なので、俺の財産は3000G。

無駄遣いをしてても余りある程財布には余裕がある。

このあと武器屋に寄るけど、そんなに高いものを買うつもりはないから大丈夫だろう。

塩、胡椒、鍋、包丁。あとは紙とペンとインクと。

色々あるな。全部書いたけど、荷物になるな。

ま、いつか。何度も買いに来るの面倒だし、全部買ってしまおう。

「まいど、全部で497Gね」

よし、次は武器屋だ。

## 9 準備

ひのきのぼう、こんぼう、どうのつるぎ、せいなるナイフ、くさりがま、てつのやりなんとも微妙なラインナップだ。あとは木刀とかメリケンみたいなのかドラクエの商品とは違うようなものも置いてある。

どれにしよう。やっぱり聖なるナイフかな。

鎖鎌は絶対使いづらいし、槍はかさばるしな。

「どれにするの?」

俺が商品を見ながら悩んでいると、マリリンが尋ねてきた。

さつき道具屋から出るときにばったりと出くわしたのだ。

武器屋に行くと言ったら一緒に行きたいというので連れてきた。

「んー。どうしよう」

「お金はどれくらいあるの?」

「それは心配ない。一番高い鉄の槍でも普通に買えるくらい持つてる」

「凄いね。この間までお金ないって言ってたのに」

「まあな」

一番威力があるのはやつぱり槍かなあ。でも、我流でどこまで使えるようになるか。剣やナイフとは違って扱いづらそうなイメージがあるよな。

「トーヤは武器を買ってどうするの？」

え？ そりゃあ、ねえ。バーンを倒さないといけないし。

そこまで考えて、ふと気づいた。

ここで買った武器でバーンを倒すなんてことあるわけないし、こんなに悩む必要ないよな。

あくまで武器の練習として買うだけで、しばらくしたらロン・ベルク探して作ってもらうつもりだし。

そう考えたら今買うべきなのは、最終的に手に入れる武器の練習用としてだよな。つてことは剣か。

ロン・ベルクは刀鍛冶だ。

自分にとって最強の剣を作るために鍛冶をやっている。

ということは作るのが得意な武器はやはり剣だろう。

ならば俺が選択するべき武器も当然剣となる。

マリンが居てよかったな。

そうと決まれば銅の剣一択だ。

樽の中にぞんざいに入っている銅の剣を取り出し、鞘から抜いてみる。

「痛って」

指を切った。超痛ってえ。

血出ちやったよ。

「だ、大丈夫？」

マリリンがすぐに俺の手を取りホイミを掛けてくれる。

銅の剣の分際でなんて切れ味だ。

これは扱いを間違えたら大怪我するぞ。

「この木刀下さい」

恐いので隣の樽に入っている木刀にしておいた。

うん。木刀のほうが練習に向いてるし、コツチの方がいいな。

それに銀さんみたいでかっこいいし。

「あのね、もうすぐパプニカに帰らないといけないの」

武器屋から教会へ行く途中でマリリンがそう言った。

「そうなんだ。寂しくなるな」

なんだかんだで一ヶ月近く遊んだり喋ったりしてたからな。

5歳児と一緒にでもつまらないだろと思うかもしれないが、基本独りの俺からすればこれでもいい話し相手だったりしたのだ。

「ま、また。会えるかな」

「そんなの簡単だろ。パプニカとここは同じ大陸なんだし、会おうと思えばすぐだよ」  
「ほ、本当っ」

「ああ、会いにいくよ。呪文も教えてくれる約束だろ」

「うんっ」

そう。まだ呪文を教わってないのだ。

念の修行の方を優先してたのもあるけど、この世界だと呪文は契約というものをしないと覚えることが出来ない。

その契約の魔法陣が載っている呪文書がこの町にはなかった。

大魔王と戦うなら魔法の一つも覚えておきたいところだ。

万が一才能があれば強力な武器になる。

マリン達は3日後にパプニカに帰るらしい。

その日は見送りに行くよと約束をして教会で別れた。



そういえば姫が産まれたからここに顔見せに来たって言ってたけど、姫ってレオナ姫だよな。

どうせならひと目見ておきたかったな。

すごい美人だつてダイが言つてたつけ。

あ、今は赤ちゃんか。

マリんとエイミは子供でも美人になりそうな顔立ちだよな。

アポロなんかすでにイケメンだったし。

この調子で行くと作品切つての超絶イケメンのヒュンケルなんてどんな顔になるんだ？

あんまり原作介入はしたくないけど、ちよつと気になるな。

ホモじゃないぞツ。

「さて、こんなもんかな」

小屋に戻り、今日買ったばかりの木刀を見る。

その木刀には所狭しとペンで文字を書き込んでいる。

H U N T E R X H U N T E R でダルツオルネが持っていた剣と同じだ。

あれには神字と呼ばれるオーラを増幅させる文字が刻まれていた。

俺は神字が書けないので、固有の能力として習得した。

【旧文字】

・『蓄える指輪』のオーラを込めたペンを使用し、対象物に文字を書き込むことで、その文章通りの効果を得る。

- ・文字はその使用者が読み解けない場合発動しない。
- ・誤字脱字がある場合発動しない。

これで本当に効果がでるかはわからない。

しかし木刀を普通に『周』や『硬』で強化するよりはマシになるはずだ。

木刀には漢字でこう記した。

強靱・無敵・最強・屈強・強固・堅牢・強烈・剛力・豪胆・不屈・気鋭・  
ちよつと見るだけでもこれだけの文字が書かれている。

「・・・だつせえ」

何がこんなもんかな、なの？ 超ダサイんですけど。

しかも誤字ダメとか結構重い制約つけちゃったし。

こつちの世界だと漢字忘れても確かめようがないし、大体誰が誤字を指摘できるん

だっつーの。

試しに木刀にオーラを送ってみると信じられない程のオーラが吹き出した。

・・・なんか複雑な気分だな。

成功したのは嬉しいけども。

## 10 呪文習得

「でつけえ町だなー」

パプニカの城を見上げながら独り言ちる。

さすがにこの世界では大都市だけある。都市という言葉があつてるかどうかは知らないが。

パプニカは俺の住んでいるベルナの森から東方に位置する場所にある。

ベルナの森の近くの町（名前は知らないけど多分ベルナの町）から6時間くらい走ると着く距離にある。

マリンやアポロ達と別れて4ヶ月が経った。

そろそろ会いに来てても可怪しくないだろうという時期を見計らい、俺は満を持してパプニカへとやってきた。

これなら日帰りも出来そうだなとか思いながら、やっぱり疲れたので宿を探すことにした。

子供の見た目であるので、少し勿体ないが3人分の料金を払い両親は後で来ると伝えておいた。

これで部屋の鍵を閉めてしまえば怪しまれることもないだろう。ところで、マリン達へ会うにはどこに行けばいいんだろう。

やっぱり城かな。でも突然行っても門前払いをくらいそうだ。でも他にどうしようもないし、とりあえず行くだけ行ってみるか。

「坊や、どうしたんだい？ 迷子かな？」

20代半ばくらいの若い兵士が俺の頭を撫でながら言う。

このクソガキ、俺よりも年下の癖しやがって。馴れ馴れしく手なんか置いてんじやねえ。

いや、落ち着くんだ俺。彼は仕事をしているだけだ。

「あの、友達に会いに来たんですけど。多分城の中にいる・・・」  
尻すぼみになりながら子供らしく答える。

「お友達？ お城の中でこの坊やくらいのつていうとアポロ様かな」

「あ、そうそう。それです。アポロです。他にもマリンとエイミつていう子もいますか？」

「おお、未来の賢者様と知り合いだったのか。なら、ちよつと待たせてくれよ。今から呼んでくるから」

30代後半くらい別の別の兵士はそう言うのと城の中へ入っていった。

「トーヤ。久しぶりー」

遠くからマリリンが手を振りながら走ってくる。

「おう、久しぶり。約束通り会いに来たぜ」

マリリンの後ろから少し遅れてアポロもやってきた。

「トーヤ。久しぶりだな。会えて嬉しいよ」

「あ、ああ。俺も嬉しいよ」

何だコイツは、俺を攻略しようとしてもしているのか。

なんでこんなにナチュラルに恥ずかしいこと言うんだ。

ひと通り挨拶を交わすと、城の中へ通された。

ちなみにエイミはお昼寝中だそうだ。まあ、まだ3歳児だしな。

「でっけえ部屋だなー。ここお前たちの部屋か?」

「ここは私たちが勉強をする場所だ。いつもここでマリリンとエイミと一緒に賢者としての知識を学んでいるんだ」

「へー。勉強部屋にしても立派だなー」

「ねえ、ねえ。それで、これからどうする？ 城下町でも案内しようか」  
マリンが外へ出かけたがっているようだが、俺はパプニカへは目的があつて来ている。

遊ぶのはそれが済んでからだ。

「呪文を教えて欲しいんだけど、前に約束しただろ？」

「なんだ、トーヤは魔法使いになりたいのか」

呪文と聞いてアポロが勘違いをする。

「違うよ。ただ、呪文の契約つてやったことないから興味があつて」

アポロに説明していると、マリンは本棚から背伸びをして一冊の分厚い本を取り出した。

「はい。これが初級呪文の魔法陣が載つてる呪文書だよ」

おお！ これがそうなのか。

初級のくせに随分荘厳な感じの表紙だな。いかにもそれっぽい。

魔法陣を描くために、城の外へ出た。

アポロは手際よく魔法陣を地面へ描くと俺をそこへ立たせた。

「そこに立って祈りを捧げるんだ」

祈り？　なんだそれは。

何を祈るんだろう。

とりあえず目でも瞑ってみるか。

ポーズだけが祈りの体制に入ると、突然魔法陣が輝きだした。

「おお！　契約成功したぞ」

あ、そうなんだ。

特に何もしてないし、変わった様子もないんだけどな。

「これは何の呪文なんだ？」

「メラだ」

メラか。まあ基本だよな。

「もう使えるの？」

「ああ。あの練習用の丸太に向かって唱えるといい」

アポロは庭の真ん中の方にある地面に突き立ててある丸太を指さした。

「オーケー。それじゃ、メラッ」

・・・。しかし何も起きなかった。

「メラア！」

・・・。



「・・・契約失敗してね？」

「そんな筈はない。ちゃんと魔法陣は反応していたしな。あとは練習次第だ」  
本当かなあ。

「ねえ、他の呪文も契約してみたら？」

横で見ていたマリリンが呪文書の別のページを開きながら言う。

「お、そうだな。とりあえず契約するだけしてみようぜ」

練習なんて後ででもできるしな。今は契約が最優先だ。

結論から言うと、俺が契約出来たのはメラだけだった。

他の攻撃呪文や回復呪文は一切契約が出来なかった。

俺って才能ないのな。

「元氣出して。戦士だったらメラだって契約できたりしないんだよ」

マリリンが気を使って慰めの言葉をかけてくる。

ええ子やな。でも結果は変わらないんやで。

「ほら、トーヤは闘気を使って戦うんだから、魔法なんて使えなくても大丈夫だよ」

「それは凄いな。トーヤは闘気を使えるのか。パプニカの兵士にだって使える人はい

ないのに」

闘気つてもしかして霊丸のことか。

そういえばこの世界の戦士は闘気を使って戦うんだったな。

「マリンはいつ見たんだ？」

「前に迷子になった時にグリーー。モンスターが出た時に見たの。すごい威力だったよ」

マリンは一瞬グリーブリーと言いかけたが、口止めたことを思い出したのかすぐに言い直した。

「良ければ見せてくれないか。本でしか知らないんだ」

「まあ、良いけど」

人差し指に意識を集中し、丸太に向ける。

「霊丸ツーン」

人差し指から放たれた霊丸は、直径70センチくらいの大きさとなり、凄まじいスピードで放たれた。

丸太に見事命中した霊丸は、まるで速度を落とさずそのまま突き進み、轟音と共に城壁を粉碎した。

その轟音に兵士たちは騒然とし、城中の人たちも含め、中庭へと人が集まってきた。

——正直泣きそうです。

## 11 新居

「いやー、話のわかる人で良かったよ」

城下町の食堂で注文した料理を待ちながら笑顔で二人に話しかける。

「本当に、パプニカ王の懐の広さに救われたな」

「もう、二人とも。少しは反省しないと」

マリンは少し呆れた様子で俺とアポロを窘めた。

「わかってるって、ちゃんと反省してるよ」

マジで。もう二度と町中で霊丸は使わない。

「トーヤの責任じゃない、私にせがんだせいだからな。パプニカ王にはテムジン様を通じてもう一度謝罪するつもりだ」

もう終わった話なのに、なんとも殊勝なやつだな。

パプニカ王は子供のしたことだからと笑っていたというのに。

よく考えたら、マリンもイオとか使えるんだよな。

子供に刃物を渡すだけでも危ないのに、あんな爆裂呪文を使えるような子供が三人も城にいるのって割りとヤバいことだよな。

「おまたせしましたー」

店員さんが俺達の前にどんどん料理を並べていく。  
きたきたー。

「ず、ずいぶんな量だね。食べられるの?」

マリンは並べられた料理の量に驚いている。

俺が頼んだのはミートソーススパゲティとグラタンだ。

それを二人前ずつ。

マリンとアポロはサンドイッチとコーンスープのみ。

小食だな。俺がご馳走するからなんでも頼んでいいって言ったのに。遠慮してんな。  
かな。

やはり町の食事は良い。

調味料がふんだんに使われてるため、味がしっかりしている。

森での食事は味気ないからな。

素材の味が活きてると言えば聞こえは良いが、素材の味を殺してでも俺は濃い味のも  
のが食べたい。

だから町での食事は本当に良い。引越してこようかな。

というわけで引つ越してきました。

パプニカの町ではなくて、近くの森の中だけどね。

岩壁にスコップで穴を掘って洞穴みたいにしてみました。

こういうのはこだわるタイプなので、四角柱を横に突っ込んだみみたいな状態で壁にはランタンをいくつも掛けて全体的に明るい感じにしています。

やっぱり明るい気分が違うよね。

じゃあ気分も変わったことだし、魔法の練習でも始めますか。

石の壁ってのはこういうとき便利だよね。

わざわざ外に出るのを探する必要もないし。

そもそも森だからメラなんて気軽に使えないしね。

俺は精神を集中させて、手のひらを壁に向ける。

「メラッ」

・・・。

やっぱり何もでないな。

もしかして魔法力不足かな。MPが足りなければ呪文が唱えられないのは当然のことだろう。

そういえば、ダイの大冒険の世界では呪文の威力は調整出来るんだっけ。ものすごく弱いメラだったら出せたりするのかな。

気合を入れすぎていたのかもかもしれない。もっと気楽にやろう。

人差し指を立ててそこに火が灯るイメージをしてー！。

「メラ」

呪文と共に、俺の人差し指に小さな火が灯った。

おおっ！

これが魔法か。軽く感動したぜ。

・・・でもこれだけか。

俺はメラの契約しかできなかったしな。

・・・これ、実践で役に立つ？

ムリだわな。呪文は諦めて念の修業に専念するか。

紙とペンを用意して『旧文字』を使って文字を書き込む。

『旧文字』は気を使うのでやたらと時間がかかる。

「よし、出来た！」

「同行（アカンパニー）」

・呪文の使用者を行ったことのある場所か会ったことのある人の元へ飛ばす。

内容はうる覚えだけど、大切なのは効果だから大丈夫だろう。

外に出て実験してみよう。

「アカンパニー、オン。パプニカへ」

・・・あれ？ 何も起こらないな。

おかしいな。木刀の時はちゃんと能力発動したのに。

やっぱり書いたことがそのまま能力になるなんて都合が良すぎたか。

もしくは文章になにか問題でもあるのかな。

グリードアイランドのカードが作れればサポートとしてかなり強いと思ったんだけどな。

『同行』はほとんどルーラと変わらないし、放出系能力で出来そうだったから期待してただけだ。

これが発動しないとすると、他のカードなんて絶対作れないわ。



## 12 錬金術

スコップで洞窟の隅に釜戸のような土台を作る。

すでにこの洞窟には初日に食事を作る用の釜戸を作っているのだが、今準備しているのはそれよりも一回り大きなものだ。

日曜大工も板についてきていて、釜戸を作るのに一時間もかからなかった。

これ仕事にできそうだな。バーンを倒したら大工にでもなるか。

一旦スコップをしまい、パプニカの道具屋で買ってきた大きな釜を準備する。

ドラクエの民家でよく見るあのでかい壺よりでかい釜だ。

そこに俺は『旧文字』で丁寧な文字を書き、土台にセットする。

続いて準備するのはこの間失敗したスベルカードだ。

〔同行（アカンパニー）〕

・スベル名を読み上げ、起動（オン）と唱える。その後、場所か人の名称を宣言すると発動する。

・呪文の使用者を行ったことのある場所か会ったことのある人の元へ飛ばす。

どうして失敗したのか理由を考えたのだが、もしかして発動条件を書いていなかったからじゃないかという結論になった。

『旧文字』の能力は「対象物に文字を書き込むことで、その文章通りの効果を得る」というもの。

木刀の場合は、強靱とか強固とか対象物自体に作用するものだったから問題なく発動したのでだろう。

しかし、この前作った『同行』は「呪文の使用者を行ったことのある場所か会ったことのある人の元へ飛ばす」としか書いていなかった。

これではいつ発動して、どこを指定して飛ばすのかが書かれていない。

どういう条件で場所を指定し、呪文を使用したことになるのか。それが明記されていなかったのだ。

だから使用方法を明記することで解決を図った。

まあ結果は失敗だったけど。

だけどまだまだ俺はスペルカードを諦めないぜ。

これさえあればドラクエの魔法が無くても困ることは少ないだろうからな。

バーンと戦うのには絶対必要になるだろう。

ということとで今度はこの釜を使う。

釜に水を入れて沸騰するまで待つ。

でかい釜なのでかなり時間がかかる。

ーーー。

ようやく沸騰したので、そこへ『同行』のスペルカードとキメラの翼を入れてよくかき混ぜる。

ぐる、ぐる、ぐる。

しばらくかき混ぜていると、釜の中の液体が輝きだした。

成功か!?

あまり自信がなかったが、この反応は大丈夫そうだな。

輝きが収まり釜の中を覗くと、そこには一枚のHUNTERXHUNTERの原作で見た通りのカードがあった。

「熱つつちー」

長い菜箸のようなもので釜の底からカードを拾う。

「同行（アカンパニー） ランク F 回数 1」

・カード名を読み上げ、起動（オン）と唱える。その後、場所か人の名称を宣言すると発動する。

・呪文の使用者を行ったことのある場所か会ったことのある人の元へ飛ばす。

「おおおっ!!」

これ絶対成功してるやつだよ。

だつて回数とか入ってるし。

今度こそ完成の手応えを感じ、俺は外に飛び出した。

「アカンパニー、オン。ベルナの森！」

スペルカードを使うと眩い光に包まれ、無重力のような浮遊感を感じた。

10秒くらいその感覚に包まれ、気がついたら俺は森に立っていた。

「いよっしやーッ！」

思わず叫ぶ。でも仕方ないよね、それくらい嬉しいんだから。

手元に残ったカードを見ると、回数が0になっていた。

凝で見ると、『旧文字』で書かれた文字もオーラを失っている。

一応記念にとっておこう。

カードを大事に懐にしまい、帰ろうとして気がついた。

ここ、ベルナの森じゃん。  
パプニカまで帰るのかよ、遠いなあ。

〔錬金釜（アルケミー）〕

・沸騰したお湯が入った釜にアイテムを入れてかき混ぜると想像した通りの物を作る  
ことができる。

・釜に入れるアイテムはお湯に入りきっていないとアイテムと認識されないので注意。

最初に作った『同行』はただ紙に『旧文字』で効果を書いただけの簡易なものだった。  
いくらオーラを込めたからといって、それだけで書いた通りになつたら魔法の域だ。  
念能力は便利な魔法じゃない、歴とした物理現象だ。とクラピカの師匠も言っていた。

であれば俺一人でグリードアイランドのカードを再現するなど夢のまた夢。

一旦は諦めかけ、ルーラとかキメラの翼があるからいいかな。なんて思ったが、ふと  
気づいたんだ。

元々ある道具を媒体に使えば相乗効果で書いた通りの効果を持たせられるんじゃないかってな。

最初は直接キメラの翼に『旧文字』を書き込もうとしたんだけど、書きづらいでムリだった。

で、考えた結果アイテム自体を自分で作ってしまおうとなった。

そしてアイテムを作るといえば『アトリエシリーズ』だろ？

というわけで錬金釜を用意しました。

まさかカード化できるとまでは予想外だったけどね。上手くいって良かった。

この錬金釜はきつと、キメラの翼や『旧文字』に付与されている能力のみを取り出すことができるんだ。

キメラの翼だっては翼の形をしているだけで、その形自体に魔法効果があるわけじゃない。もちろん『旧文字』もな。

あとは操作系か具現化系か、はたまた変化系能力かは知らないがカードの形に形状を変えて能力を付与したんじゃないかと思ってる。

なんて、適当に理屈をつけてみたけど実際はどうだろう。

まあ、いつか。それよりこれからはカード作りで忙しくなるぞ。

そのために素材となるアイテムをじゃんじゃん探しに行かないとな。

ドラクエらしく冒険の始まりだ。

# 13 破邪の洞窟

カメラの翼を10個と『同行』を入れてつと。

ぐる、ぐる、ぐる。

しばらく釜をかき混ぜると輝き出す。

現在俺は14歳。バーンを倒す準備は順調に進んでいると言っているだろう。

出来上がったカードを見て、満足気に頷く。

「同行（アカンパニー） ランク F 回数 218」

これに気づいたのは、最初に錬金術を成功させてから1年くらい後のことだった。

より強力なカードを作りたいのに、魔法具が全然ない。

世界各地の道具屋へ行き色々を見て回ったのだがどれもパプニカで売っているのと同じようなものだった。

ダンジョンも地底魔城とか行ってみたけど、特に良いアイテムは落ちてなかった。

やっぱりゲームと違って伝説級のアイテムなんてダンジョンに転がってるわけない



よね。

大体あそこ今は廃墟だし。

話が逸れたが、そういう経緯があり俺はその時思い悩んでいた。

そのせいでうっかり『同行』のカードとキメラの翼を釜へ放り込んでしまったのだ。入れてしまったものは仕方ないと調査を続けた結果、カードの回数が1回加算されていたのだ。

更にその『同行』にキメラの翼を加えて調査したところ回数がもう1回加算されていた。

これは嬉しい発見だった。

なにしろ何回も『旧文字』で『同行』の文章書くのつてメチャクチャ面倒くさいんだもん。

スペルカードを作るための補助で用意した錬金釜だったけど、これは想像以上に役に立っている。

例えばスペルカードをしまうバインダー。

紙束と布を入れて調査したのだが、システム手帳のようなポケットサイズのバインダーが出来上がった。

普通のバインダーなので特殊な能力とかは何もないけど、スペルカードを持ち運ぶのにはとても便利だ。

同じ要領で、身に付けるものはすべて鍊金釜を使って調合した。

この服もそうだ。しかし、この世界のファッションセンスは微妙にズレているようで、現代的には普通のジーパンにTシャツを着ているだけなのに町では目立ちまくっている。

かなり人目は気になるが、それでも良いんだ。長年着慣れたもののほうが動きやすいし。

おっと、そろそろ時間かな。

俺は隅に立てかけてある木刀をベルトに指し、身支度を整える。

そして外に出てバインダーにしまったばかりのスペルカードを取り出した。

「アカンパニー、オン。パプニカ」

アポロたちの勉強部屋だという扉をノックし、返事も待たずに中に入る。

「おじゃましまーす」

中に入ると、机に座ってまるで授業中の中学生のように真面目に座る三人が目に入っ

た。

「あら、トーヤ。早いわね、まだ約束の時間まで随分あるわよ」

「待たせちゃ悪いからな」

俺は言いながら、勝手知ったるなんとやらで許可も取らずに椅子に座る。

ちなみに今のはマリンド。

子供の頃と違って最近なんだか女らしい口調になっている。

これが思春期というやつだろう。

体つきもなんだか最近エロくなってきた気がする。っていうか服装がエロい気がする。生地が少なすぎるんだよ、この国の人達は。

正直目のやり場に困る。

「どうしてあなたってそういう常識はあるのに、ノックの返事も待てないのかしらね」俺に小言を言うこの声はエイミだ。

エイミもマリンの真似をしているのか口調が最近はこんな感じだ。

やたらと小言が多いのだが、普段はそんなことはない。大体原因は俺にあるからだ。

「良いじゃないか。トーヤももうこの城では顔なじみとなっている。咎める者なんていないさ」

アポロよ、今まさにあなたの目の前で咎められているじゃないか。

彼らと知り合って早いもので、もうすぐ10年が経とうとしている。

半月に一度くらいでしか会っていなかったので時間に換算してしまえば短いのだろうが、それでも俺は彼らのことを友人だと思っている。

大魔王バーンが出てくるのはそろそろかと思っていたが、この三賢者の容姿を見るにまだ先になりそうだ。

残された時間は後どのくらいあるのだろう。

実はこの世界はダイの大冒険を模しているだけで、実際に大魔王なんて出てきませんよ。なんてことになれば良いのに。

しかしそれは希望的観測というものだろう。準備をしておいて損はないのだ。

「で、いつ行くよ。俺の方はいつでも行けるぜ」

「もう今日の分の勉強は済んでいる。私もいつでも行けるぞ」

アポロに続いてマリリンとエイミも頷き、俺達は出かけることにした。

そう、破邪の洞窟へ。

きつかけはアポロだった。彼はこの頃伸び悩んでいるらしく、特訓がしたいと言いつつ出た。

バーンのことなんか知らないくせにどうして強くなりたいたのか謎だが、彼が強くなつて困ることはないのだから俺は協力することにした。

かといって賢者である彼と模擬戦なんてやったらどちらかが大怪我しそうなので代案をマリんに求めたら破邪の洞窟を勧められたのだ。

マリんと一緒にいたエイミも、私も特訓したいなどと言い出したので、三賢者+俺で破邪の洞窟へ行くことになったのだ。

まるでピクニックだな。

「準備は良いか？ それじゃ、ルーラっ」

俺は皆に見えないようにカードを手に持ち、小声で『同行』を使った。

「凄いわよね、ルーラって。一瞬でこんな遠くまで来てしまえるんだもの。昔はメラも使えなかったのに」

「何年前の話してんだよ。メラだつて今じゃバツチり使えるっつーの」  
感心するマリんに軽口を返して、見えないようにカードをしまう。

この世界でルーラを使える人は少ない。三賢者である彼らでさえもルーラは使えないのだ。

となると馬車か気球か徒歩で移動となるが、そんなに時間が掛かるのは御免こうむ

る。

だからルーラを使えるという嘘を吐いてこうして移動してきたのだ。

破邪の洞窟は前に来たことがあるしな。

「みんな、今日は付き合わせてすまない。今回の目標は15階にあると言われているマホカトールだ。ムリをせずに危ないと思っただらすぐに引き返そう」

アポロは先頭を歩き、破邪の洞窟へと踏み込んでいった。

俺は最後尾を歩き、彼らの背中を見守りながら心の中でつぶやく。

15階って目標低すぎやしませんかねえ。

## 14 洞窟一周目

アポロ達と破邪の洞窟へ潜って4時間程経った。

「ヒヤダルコっ！」

エイミの呪文はさまよう鎧を完全に凍りつかせた。

「そつちも終わつたようだな」

「ええ。良い調子ね。これなら予定よりも早く15階まで降りれそうね」

さつきまでキャットフライと戦っていたアポロは僅かに息を切らせながらエイミへ声をかける。

二人は後ろに俺とマリンがいることを確認すると先へと進んでいった。

俺はその後姿を無言で見つめて付いていく。

「どうしたの？ さつきからずつと恐い顔して」

少し先を歩くマリンが振り返って心配そうな顔をした。

「・・・いや。何でもないよ」

一瞬迷ったが、俺はやはり何も言わずに前の二人を追った。

「体調が悪いなら言っちゃようかいね」

俺を気遣うマリンの声に適当に相槌を打ち、先を急いだ。

洞窟での戦闘はすべて三人に任せていた。

アポロ曰く、俺が戦闘へ参加しては特訓にならないからだそうだ。

なら俺がいる意味ないよね。とは思いつつも口には出さない。

しかし何故、アポロは俺が強いと思っているのか。長い付き合いではあるが、アポロにそう思わせるような力を見せた覚えはないのに。

ってそういうえば前に霊丸撃って見せたっけ。・・・でもあれだけでそこまで強くは感じないよな。

まあ、実際に俺が戦闘に参加したら本当に特訓にならないだろうけど。

しかし、見ているだけってのはかなり辛い。

今もー。

「メラゾーマ」

あばれザルを呪文でオーバーキルしながら、アポロはどんどん先へ進んでいく。

破邪の洞窟はモンスターがうじゃうじゃ湧いてくるからな。モタモタしてたらあつという間にモンスターに囲まれてしまうだろう。



だからそれは良い。それは良いんだ。

でも、あばれザルごときにメラゾーマって何考えとんねん。

しかも魔法に余裕があるから使いまくっていると言う訳では無さそうだ。みんなにはかなり疲労の色が見える。

ゴンとキルアを見守っていたビスケもきつとこんな気持ちだったのだろう。

すごいヤキモキする。

今だって彼らは前方の敵に夢中で、背後から忍び寄るマミーにまるで気付く気配がない。

案の定あっさりと背後をとったマミーはマリんに掴みかかった。

「きゃあつ」

マリンの悲鳴が響く。

ああ、もうくっつ。

「おらあッ！」

腰の木刀を抜き、オーラを込めて思いっきりマミーに叩きこんだ。

「あ、あり、がとう」

マミーに絞められていた首が開放され、マリンは苦しそうにしながら礼を言う。

その言葉を聞き終える前に俺は駆け出していた。

アポロの横を風のように走りぬけ、ミイラ男とわらいぶくろを木刀の一振りでなぎ倒す。

そのままの勢いで、更に背後に控えるじごくのハサミを蹴り碎き、その死骸をヒートギズモへと思い切り投げ飛ばした。

時速160キロの豪速球もかくやとばかりにじごくのハサミを投げつけられたヒートギズモは、為す術もなく霧散した。

天井からぶら下がるバンパイアはその光景をみて逃げ出そうとした。

「逃さないわっ。ヒヤダルー」

「よせッ。ー放っておけ」

呪文でバンパイアを攻撃しようとしたエイミを留め、俺は木刀を腰のベルトへ納める。

「トーヤ、君は見ていただけと約束しただろう。確かに先ほどは少し危なかったがー」

一息吐いているとアポロが小走りで近づき、俺へと軽い批難の声を浴びせた。

だが、俺はそれを遮るように大声で怒鳴る。

「ーあほか~~~~っ!!」

あまりの大声に皆は一瞬硬直する。

「ど、どうしたの。そんなに大声出して……。」

「どうしたもこうしたもあるかいっ！ 思わず見てられなくて手え出しちまったよっ」

マリンの声を無視して俺は更に続けた。

「あんな雑魚相手にどんだけ苦戦してんだよ」

「そ、それは……。き、君から見たら私達は弱いかもしれないが、だからこそつ。こうして特訓しているんじゃないか」

悔しそうに拳を握りながら、アポロは俯く。

あつ、なんか落ち込んでるぞ。言い方が悪かったかな。

「悪い悪い、お前らが弱いとかそういう話じゃないんだ。つていうか強いよ。お前たちは、うん」

「気を使うな。俺と君の力の差は明白だ。実際さっきのモンスターを君は一瞬で蹴散らしてしまったじゃないか」

「それは今まで戦ってなかったから体力が余ってただけだつての」  
「フォローするが、まるで聞いていないようだ。面倒くさいヤツだな。」

「だあゝつ、もう。とにかく、一旦外に出るぞ。こつちこい」

アポロの腕を掴んでマリんとエイミの傍まで行き、見えないようにスペルカードを取

り出す。

「リレミトっ」

と言いつつ『同行』を使い洞窟の外へ出る。

「ちよつとお前らそこへ座れっ」

外へ出た俺は、三人を一旦落ち着かせるために座らせることにした。

だというのに何故かみんな座らずにキョロキョロしている。

「・・・あなたリレミトも使えたの？ それにしてもおかしいわ。破邪の洞窟ではモンスター達の放つ邪気のせいでリレミトは使えないはずなのに」

やっべ、忘れてた。

「良いから座れっのっ」

深く考えだす前にマリンの肩に手を掛け強引にその場へ座らせた。・・・もう遅いかもしれないが。

マリンが座ったことで、アポロとエイミもようやくやく腰を下ろす。

三人の視線を受け止め、咳払いをして彼らに向き合う。

「これから戦闘時における呪文の使い方について講義を行います。終わったら一人ず

つ洞窟へ入ってもらおうので、しっかりと聞くように」

勢いで誤魔化そう。

未だかつてない程、俺は熱く戦鬪の何たるかを彼らに語るのだった。

## 15 講義その1

「ーって感じで、一人で戦う場合とパーティー組んで戦う場合じゃ力の配分が重要なんだよ。わかった？」

黒板にチヨークで呪文の種類を羅列しながらペース配分の重要性を語る。

ちなみに黒板はさつき一人で『同行』で家に帰り取ってきた。

他にも必要そうなものをリュックへ入れて大量に持ってきたので特訓の準備は万端だ。

俺は先程の洞窟探索での彼らの呪文の使い方について指摘していた。

「私もそれくらいは考えている。しかし、多少ムリをしてでも早く進まなければモンスターに囲まれてしまうじゃないか」

「じゃあ聞くけど。魔法力がフルの状態でもラゾーマ何発使えるんだよ」

俺の質問にアポロは目を閉じ思案する。

「そうだな、大体12, 3発だろうか」

「私もそれくらいかしら」

「私は10発はいかないわね」

そんなに使えるのか。こいつら魔法力多いな。

ゲームで言えばレベル30くらいか？ でも関係ないか、マンガでもレベルの低いポツプがメラゾーマ覚えてたりしたしな。

他のステータスが低くても魔法力だけ多いってこともありえるよな。

「で、だ。お前たちは洞窟でどれだけのモンスターと戦うと思ってるんだよ。雑魚相手にメラゾーマ使ってたら15階に到達するまでに魔法力空になっちまうぞ」

「そ、それは。魔法の聖水や祈りの指輪で回復してー」

「んなもん使うくらいならもつと効率のいい戦い方覚えろ」

「言うのは簡単だが、どうすれば良い。敵がどの程度の攻撃で倒れるかなんて分からないだろう」

「コントロールさえ上手くできれば、初級の呪文でも十分に戦えるぞ。工夫だよ工夫」  
言いながら右の手でメラを発動させる。

ロウソクの火のように小さな炎だ。手を頭上に掲げ皆に声を掛ける。

「良いか、良く見てろよ」

小さなメラは直径1センチ程度から徐々に大きくなり、直径3メートルを超える大きくなった。

「す、凄いわ。これ本当にメラなの。メラゾーマとほとんど変わらないわ」

マリリンが感嘆の声を上げ、頭上のメラを見る。

「ふう、ざつとこんな感じだ。つていうかやろうと思えばお前たちも普通にできると  
思うぜ」

メラを消して椅子に座る。ちなみにこの椅子も家から持ってきた。

みんなは地面に直接座っているけど、先生と生徒だから当然と言えよう。

「じゃあ、ここで問題です。メラをこのように威力を調整してメラゾーマのようにする  
利点はなんでしょうか」

質問をすると、地面に座ったアポロが手を上げた。

学校じゃないんだからそこまで律儀にやらなくてもいいのに。

「はい、アポロくん。どうぞ」

「メラゾーマよりも少ない魔力で放つことができる」

「ぶつぶぶ、違います。むしろ使う魔力は多くなります」

「はい」

続いてマリリンが手を上げる。

「マリリンくん、どうぞ」

「呪文の発動時間が短くなる」

「おお、いいところに気がつくね。でも今回はバツ。メラの場合は威力を上げるのに



かなり集中力があるから、慣れてないと時間が掛かります」

「もう。早く答えを教えなさいよ」

エイミが焦れて急かしてきた。

「おーけー。では答えを言おう。メラをメラゾーマ並にする利点。それはー」

一旦区切り、タメを作る。そして続く言葉をみんなに言い放つ。

「ないの。全然。これっぽっちも。まったく利点はない」

答えを聞いて、みんなはマンガのようにずっこける。・・・マジでずっこけるヤツいるんだな。

「お、おい。君は私達をからかっているのか。なら今見せたのはまったく無駄じゃないか」

起き上がったアポロが訴えた。

「まあ、まあ。待ちなつて。今のはメラを強くした場合の話」

「どういうことだ？」

「逆ならどうだ。メラゾーマをメラ並に弱く放つた場合、その場合でも同じようなことが言えるか？」

その質問に彼らは口を閉ざし、真剣に考え始めた。

「そうかつ。そういうことなのね」

何かに気づいたマリリンが声を上げる。どうやら答えに一番早く気がついたのは彼女ようだ。

「どうということなの？」

エイミが答えを聞こうとマリリンに問いかける。

「トーヤ。もう一度今のメラを見せて頂戴」

言われた通りにさつきと同じメラを唱え、頭上に掲げた。それを見たマリリンは合点がいったとばかりの表情をする。

「やつぱり。思った通りだわ」

「教えてくれ、マリリン」

「アポロもエイミもよく見てみて。トーヤのあのメラだけど、少し変だわ。確かにメラゾーマ並に巨大な炎だけど、それほどの熱量を感じない。こんなに近くで燃えているのに」

言われて気づいた二人は俺のメラを凝視する。

「ほ、本当だわ。こんなに近いのに、それほど熱くない」

「トーヤのメラは威力自体は変わらない。大ききだけ変えただけだつてことよ」

俺はニヤリと笑い、マリリンを見る。

「ご名答。良くわかったな、大したもんだ。ちなみに熱量を上げることだつて出来ない

いわけじゃないぜ。っほらよッ」

メラに魔力を送ると熱量が跳ね上がった。一気に周辺の温度があがり陽炎のように空気が歪み始める。

「もつとも、更に魔力の消費は大きくなるけどな」

暑くなってきたのでメラを消し、再び椅子に座る。

「やっぱり魔力の消費が大きくなるのね。でもメラゾーマを小さくした場合は消費が少なくなるのよね？」

「そういうこと。ここからの説明は俺がしよう」

先生のお株を奪われる前に、黒板を使って説明を始めた。

ある日、メラを練習している時のことだった。

指先に小さく灯る炎に思いつき魔力を注いで見た。

すると炎は巨大化し、まるで部屋に暖炉でもあるかの様に凄い熱気を出し始めたのだ。

その後、俺はメラの炎の熱量を変えずに大きくしたり、更に小さくして熱量を上げてみたりと、思いつくことは全部試した。

そしたらある疑問が浮かんできた。どうして同じメラ系なのに呪文が複数あるのかと。

メラの威力が強められるのならメラミもメラゾーマも要らないんじゃないかって。

だってそうだろう？ メラの威力を強めればメラゾーマと同じことが出来るんだから。

もちろん無駄な呪文が生まれまいかと言われればそんなことはないだろう。しかし、無駄があることと受け継がれていくことは別である。

もし本当に無駄なだけの呪文なら廃れて消えていくはずだからだ。

それがないということは、何かしらの利点があるということになる。

その利点とは、ずばり消費魔力だ。

メラ、メラミ、メラゾーマの呪文はその熱量と範囲が段階ごとに強力になっていく。

メラは直径50センチ、1,000度。メラミは1,5メートル、2,000度。メラゾーマは直径4メートル、3,500度。

昔見たドラクエの考察サイトの情報だ。

各呪文はそれぞれの熱量や範囲で放つ場合、最適な魔力消費で放つことが出来る。という推論を立てた。

俺はメラしか使えないから実証は出来ないが。

メラの場合。直径50センチ、1,000度というのは消費魔力に対してもつとも自然な状態だ。

熱量やサイズは元の状態から小さくした場合、消費魔力を抑えることが出来る。変換する魔力を使わずに済むのだから、それは当然と言えるだろう。

熱量のみを下げたようとした場合は比例してサイズも小さくなるのだが、浮いた魔力をサイズに変換すれば補填が効くことは実験済みだ。

逆にサイズのみ小さくしても、総合的な熱量は下がるが、単位あたりの熱量は変わらない。

この場合は浮いた魔力を熱量に変換すると熱の性質上サイズが大きくなってしまふ。

同系統の呪文であるメラミやメラゾーマでも、同じことが起こることは想像に難くない。

「という訳で、熱の低いメラゾーマなら、めっちゃでかいの放てるから。やってみ」

「それだけ理屈こねくり回して結論それだけ？」

エイミが呆れた表情でため息を吐く。

1時間近くも懇切丁寧に説明してやったというのに、なんて失礼な。

## 16 講義その2

「熱量を上げると大きくなる。下げると小さくなる。サイズは変えても熱量は変わらない。ということが良いか」

「はい」

「魔法力は熱量を上げると増加して、下げると削減できるのね」

「はい」

「同じく魔法力はサイズを大きくすると増加で、小さくすると少なくなるのね」

「そうです」

俺の1時間にも渡る熱弁を30秒で終わらせられた。

偉そうなことを語ってただけにこれは恥ずかしい。

さつそく彼らはメラミをメラ並みの威力に変え、その分の魔力を大きさに変換させていた。

俺が先程みせた炎よりも巨大なものができあがり、辺りをジリジリと熱気が襲う。

直径にしたら5メートルくらいか。めっちゃくちゃでかいな。

「やったつ。私にも出来たわ」

マリンが自分のメラミを見ながら喜び飛び跳ねる。

そんな物騒なもの掲げながらはしゃがないで下さい。

「これなら低階層の雑魚モンスターは一掃だな」

「なるほど、配分と工夫というのはこういうことか」

感心しながら彼らは呪文を試す。

「よし。次は戦闘中の基本というか、注意事項をいくつか説明する」

気を取り直して講義を続けることにする。本当は呪文のコントロールを手取り足取り教えてやろうかと思っただけで、普通にできるみたいなので省略だ。

大きさを変えるだけじゃなくて他にも使い方とかあるんだけど、それは実践で説明しすることにしよう。

「注意事項？」

マリンが小首をかしげて俺を見る。

「そう、注意事項。大きなのは二つあって、一つ目はエイミ」

「え、私？」

急に矛先を向けられて驚いたようだ。

「そうだよ。さっきの洞窟での戦闘中の話だ。逃げようとするモンスターに攻撃しよ

うとしてたよな」

「え、ええ。逃がさないようにそうしたのだけど」

何が悪いかわからず、微妙にオロオロします。ちよつとかわいいなクソ。

「軍隊とか組織とか、とにかく後が控えてるような敵だったら追撃はありだけど。今回みたいなの窟探索では体力や魔力消費は最小限に留めるのが基本だ。逃げる敵を追うことはしないでくれ」

「わかつたわ、次からは気をつけます」

なんか素直だな。

「でも、相手の知能が高くて増援を呼びそうだったら攻撃したほうが良いから、そこは臨機応変にな」

実際間違つたことをしようとした訳ではなかったため、フオーローしておく。

「で、二つ目なんだけど。これは実際に見てもらつた方が早いと思うから付いて来てくれ」

破邪の窟へ入って少し歩く。

そこでモンスターがでるまですこし待つ。



1階だから出てくるとしたらスライムだ。

「あ、モンスターよ。どうするの」

マリンが現れたスライムの方を指さした。

「ちよつと俺が相手して時間稼いでくる。集まってきたら声かけるから待っていてくれ」

アポロ達をおいてスライムの方へ走る。

スライムは俺の様子を伺いつつ、隙を見て体当たりを仕掛けてくる。

「じギー」

残念だけど、もうコイツの体当たり程度じゃまるでダメージ通らないんだよね。

俺の体は指輪の効果で常に『堅』の状態になっている。全力の1割の『堅』で更にそのオーラの三割は指輪に吸われているため、本気の7%の『堅』だ。

それでも十分なほどの防御力だ。といっても相手はスライムなので自慢できるほどのことではないが。

何もしないでスライムの攻撃を受け続けて5分が経つと、更にスライムが集まってきた。

全部で12匹か。練習にはちょうど良いかな。

俺は後ろに控える三人へ大声で話しかける。

「これから、こいつらをメラだけで倒すからっ。よく見てろよっ」

彼らが見やすいように立ち位置を意識して、スライムとの戦闘を開始する。

「まず、相手が大勢いて囲まれた時の対処法だっ」

そう言って12匹のスライムの真ん中に大きくジャンプして飛び込んだ。

突然の奇行に三人が息を吞んで見守る中、俺は戦闘を続行する。

「こういう場合、ちんたら手をこまねいていたら袋叩きに遭うだけだっ。どこでもいから抜け出せそうな場所に穴を空けろっ」

包囲しているスライムの間隔が一番離れている辺りにメラを放つ。

「このとき敵に直接呪文をぶつけても良いが、目的はこの状況からの脱出なので命中させるのは二の次だっ」

狙いの適当なメラに半身を焼かれてスライムが倒れる。その隙間を縫ってスライムの包囲網から抜け出した。

「今のが包囲された時の対処法っ。次に、敵をかい潜って向こう側へ行かなければならない時の戦い方を見せるっ」

時間を掛けたためか、1匹倒したにも関わらずスライムは14匹に増えていた。

スライムの群れへ駆け出しながら、メラを掌に生み出して突っ込む。

「さつき包囲を抜けたとき同様っ。進行方向に呪文を撃って道を作る」

言葉通りにメラを投げ込み僅かな道を作る。しかし、今度は数も多いため向こう側へ抜けるほどの隙間はない。

「重要なのは呪文を放つたらずぐに次の呪文の準備をして、いつでも放てるようにしておくことだ」

近づく俺にスライムは体当たりをしてきたが、少し体をずらして回避する。

そしてそのスライムがその場を離れたことでできた隙間にメラ撃つ。

メラが波紋となつて僅かな隙を作り、更にその隙間にメラ撃つていく。

次々と生まれた隙間を縫うように走り、向こう側に抜けた俺は、みんなに大きく手を振った。

「呪文を上手く使つて、こうやってモンスターの群れを突つ切るんだぞっ」

さて、ここまで見せればもう良いだろう。

メラを先程洞窟の外で見せたように巨大化させる。

直径4メートルにもなるメラを大きく振りかぶり、スライムの群れへと投げ込んだ。

サイズこそ大きいが威力は普通のメラより抑えてあるので、通れなくなる程熱くはない。

『堅』を少し強めに纏い、メラ炎をかき分けてみんなの元へと歩いて戻った。

「どうだ？ 全然戦い方が違うだろ。コッチの方が絶対良いって」

アポロの肩に手をおいて声を掛ける。

そしてその時、マリリンが不思議なモノをみるような眼差しで見ていることに気がついた。

「ど、どうかしたか？」

もしかして俺の戦闘が凄すぎたか。それでも力をセーブして戦ったのだが。

マリリンは俺がグリズリーと戦っているのも過去に見ているしな。強いからって次期勇者だなんだと騒がれたら困るんだけどな。

固唾を飲んで彼女の次の言葉を待つと、返ってきたのは意外な言葉だった。

「あなたの服。どうしてあの炎の中をゆっくりと歩いても燃えないの？」

マリリンの言葉に俺はマンガのように大きくずっこけることになった。

・・・意外に気持ちいいな、こうやってコケるの。

## 17 講義その3

破邪の洞窟へ来てから5日経った。

三賢者は俺が教えた甲斐あつてかかなり強くなったと思う。

ステータスの話ではない。戦い方、戦術の面での話だ。

なんと、初日に潜った時には13階で引き返してきた訳だが、今では一人で10階まで潜れるほどだ。

元々ポテンシャルは高かったからな。

無駄な戦闘をせずに効率よく進めばあいつらなら当然の結果だろう。

今日は一旦洞窟に潜るのをやめてもらい、今後の戦闘に対する対策を伝授することにした。

彼らは知る由もないことだが、あと数年もすれば魔王軍のフレイザードとか言う怪物と戦うことになる。

中途半端に強くなっているのは逆に命の危険が出てくるのだ。

「今日は複数の特性を持ったモンスターと対峙した時のことを想定して見ようと思う」

恒例となった黒板に文字を書き込みながら三人を見る。

「そうだな、例えば……。メラ系の効かない溶岩魔人とヒヤド系の効かない氷河魔人が同時に出てきたとする。そしたらどうする？」

例えばとか言いながら思いっきりフレイザードを意識したチョイスをする。

でもコイツはフレイザードのことまだ知らないし、知るのも数年後だから大丈夫だろう。

「はい」

「はい、アポロくん。どうする」

「それぞれの弱点属性の呪文をぶつけて戦う」

「その答えだと50点。ちなみに満点は100点だからな」

あえて厳し目にする。じゃないと将来文字通り痛い目に遭いそうだし。

アポロは唸りながら、次の答えを考え始める。

「はい」

「エイミさん。どうぞ」

「イオ系やギラ系、バギ系の呪文で戦います」

「おお、良いね。80点ってどこか。合格」

拍手をしてエイミを褒め称える。

「モンスターの中には特定の呪文が効かないどころか、吸収したり跳ね返したりする奴がいるからね。戦い方を間違えたら命取りだ」

次の問題に移ろうと黒板を消し始める。するとアポロが疑問を口にした。

「今の答えが80点なら、100点の答えは何なんだ？もしかして闘気で戦うとか」

「正解。ま、普通に考えたら闘気で戦うのが100点だよな。お前たち賢者には出来ない戦い方だよ」

フレイザードを相手に戦った場合、呪文よりも闘気で戦う方が安定してダメージを与えられるだろう。

作中ではなかったが、ギラのような炎熱系の呪文は吸収されることもありうるしな。

「でも、そうだな。個人的には90点くらいの変わった戦い方があるんだが、それは賢者が魔法使いにしか出来ないだろうな」

「なにっ!? そんな方法があるのかっ。どんな戦い方なんだ」

思った通りの反応に嬉しくなる。

「そんなに気になるなら教えてやろう。これはかなり通な戦い方だけど、知っておいで損はない。その方法とはー」

午前中の戦い方講座を終え、昼食の時間となった。マリんと一緒に昼食を作り、みんなで食事を取る。

自分で作った料理を食べて、俺は満足そうに頷く。

今回の特訓で、何故か俺は料理の腕を上げていた。

今まで一人で作ってた時には気にならなかつたのだが、どうやら俺の料理は下ごしらえが圧倒的に足りていなかつたらしい。

野菜を切るときも皮を剥いてぶつ切りにして煮こむだけ。味付けも醤油や味噌を入れるだけ。

コクや旨味というものを一切考慮しないこつた煮状態だつたのだ。道理であんまり美味しくないと思つたよ。

出汁という概念がまるで抜け落ちていたかのように無かつたのだ。

前世ではまったく料理なんてしなかつたからな。

でも、マリんに料理を教わつたおかげで大分マシになつたぞ。

今にして思うと、以前までの料理は何だつたのかというレベルだ。きつとこの特訓で一番効果がでたのは俺だろうな。

「午後はどうするの？」

エイミが食器を片付けながらこちらを振り向く。



「次は実践だ。と言っても洞窟には入らないよ」

俺も食べ終えた食器を片付け、午後の準備をする。

『ヒーリングサルブ』、『メンタルウオーター』、『神秘のアンク』ってこんなもんか。マリンは気になったのか、いつの間にか隣でじつと俺の手元を見ていた。

「変わったアイテムね。どれも見たことがないわ」

「どれも世界中飛び回ってかき集めたからな（素材を）。見たこと無くて当然だよ」  
嘘はついてない。

「ヒーリングサルブと神秘のアンクは薬草。メンタルウオーターは魔法の聖水だと考えてくれ。どれも効果はそれらよりずっと良い。俺のお墨付きだぜ」

これらは俺が錬金釜により作り出したアイテムだ。  
アトリエシリーズでは定番のアイテムでどれも序盤はその使いやすさから重宝するんだ。

中でも『神秘のアンク』は戦闘不能状態も蘇生できる回復力があるからな。・・・試しては無いけど。

そんなアイテムを用意して一体何をするつもりなのかって？

決まっている。フィンガーフレアボムズの対策だよ！

## 18 講義その4 (実技)

「本当に大丈夫なの？」

マリンがヒヤドを右手に留めながら心配そうな顔をする。

「ヘーキヘーキ。もしものときの準備も万端だし」

先程準備した回復アイテムと、その隣に沸かしてある風呂を指さしながら答える。

風呂は仮にヒヤドが直撃した場合の凍傷治療のためだ。

マリン達は回復魔法も使えるし、ここまで準備しておけば万が一ということもないだろう。

「いつでも良いぜっ」

左腕に装着したガントレットを構える。

「それでは、いくぞ。ヒヤドッ！」

アポロのヒヤドに併せてマリンとエイミも同時に俺に向けてヒヤドを放つ。

3つの呪文が飛んでくる中、着弾を待たずに呪文へと駆け出す。

呪文が目前に迫る瞬間、ガントレットでその内の1つを受け、そのまま速度を落とさずに駆け抜けた。

両脇を残り2つの呪文が通り過ぎ、俺が元いた場所で炸裂した。

「つとこんな感じ。て冷たッ」

凍りづけになったガントレットを即座に外してメラで腕を暖める。

「随分と無茶なことをするな。これを私たちもやるのか」

アポロがその様子を見ながら少し引いている。

今やっているのは、フレイザードのフィンガーフレアボムズの対策である。

呪文を同時に放つてもらい、それを躲す特訓だ。

フレイザードのことは話せないので、魔法を使う敵に囲まれた時の対処法として皆に話してある。

やっていること自体はこの間のスライムに囲まれた時の特訓と同じなので大したことはないだろう。

だからだろうか、エイミが不満の声を漏らす。

「この特訓って、モンスターに囲まれた時にやってたことと大して変わらないじゃないかい。こんな危険な方法でわざわざ特訓する必要あるの？」

その疑問は尤もだ。何しろこの後に彼らは同じことをやらされようとしているんだからな。

「この特訓が無駄に見えるってことか。確かにそう見えるかもな。ではここでクイズ

だ」

だから、あらかじめ考えていたこの特訓をやらせるための理由を説明することにした。

「10分で地面に1メートルの穴を掘る人間がいたとする。その人間が100人集まったら、10分で100メートルの穴を掘れるか否か」

「・・・できない」

少し考え、エイミは答える。

「理由は？」

「同じ場所で穴を掘る作業をできる人数が限られているからよ」

「正解だ。ではそれが敵の攻撃だと考えてみてくれ」

説明しながら三人の真ん中辺りに移動する。

「こんな風に周りを敵が囲んだ場合、同時に攻撃できるのは前後左右にいる4人くらいだ。それ以上多くなるとそれぞれが邪魔をしてしまうからな」

「当たり前のことを真剣に話すのってなんか恥ずかしいよね。だけど皆を納得させるためだから仕方ないね。」

「だけどこれは武器や素手で戦う相手を想定した場合の話。もし相手が魔法使いだったらこうはいかない。呪文はさっきの例えとは違って、僅かな距離さえとれていれば2

0人や30人で一齐に攻撃することができずからな」

右手でメラを発動させ、さつき俺が立っていたところへゆっくりと投げる。

のんびりと飛んで行くメラが向こうへ着弾する前に立て続けに4発のメラを投げる。

時間差で放ったメラは放物線を描き、5発動時に同じ場所へ着弾した。

「こんな感じで呪文はスペース関係なく襲ってくるからな。弱い呪文でも上手く避けないとタダじゃ済まないぞ」

説明だけでなく実際にその威力を見せたからだろう。みんなは納得したようだ。

気が変わらないうちにさつきと特訓を始めるとするか。

フィンガーフレアボムズはとても強力な呪文だ。

同じ方向から同時に5発もメラゾーマを放たれたのでは完全に避けるのは不可能だからだ。

もちろん5発のメラゾーマを耐えることなんてもつとできない。

なら、ダメージ覚悟で突っ込むしか無いだろう。

そのためにガントレットを用意したのだ。これを使ってダメージを最小限に抑えて攻撃に移るのが最良の戦い方だろう。

あと何年後になるかは知らないが、確実に皆はフレイザードと戦うことになるのだ。友達として黙って見ていることは出来ない。

これを今経験しておけば、後で必ず役に立つはずだ。

こいつら真面目だからな。今回の特訓が終わっても、きっと練習し続けるだろう。

椅子に座って彼らの特訓を眺める。

よくやるよな、目標もないのに。

それとも立派な賢者になることが彼らの目標なのだろうか。

そうだ。頑張ったご褒美と言ってはなんだけど、彼らに装備品でもプレゼントしようかな。

特訓も大事だけど、いい装備を整えるのも重要だからな。

そうと決まれば何がいいかな。

『旧文字』を書いただけの装備品は文字の読めない者には使えないし……。

かと言ってグリードアイランドのカードは渡せないだろ。というかあれはまだ俺以外のやつが使えるか試してない。試すつもりもないけど。

ならやつぱり錬金釜で調合するか。

錬金釜で作ったアイテムはその素材に『旧文字』を使用していたとしても問題なく使

うことができる。

それは彼らが俺の作った『ヒーリングサルブ』や『メンタルウォーター』を使っていることから分かる。

ただ、俺が念を送り『ヒーリングサルブ』を使った場合は光を放ってホイミのように回復するのに、彼らの場合は普通の薬のように使わなければならなかった。

それでも塗って数分で傷がなくなったり、魔法力が回復したりと異常に効き目が早い。

アトリエシリーズで戦闘中にアイテムを使用できるのが錬金術士だけなのは、こんな理由なのかなと思ったりした。

## 19 贈り物

アポロ達と破邪の洞窟で特訓を終えて半月が経った。

今日は商人の町と言われるベンガーナへ来ている。

ここでは普通の店ではお目にかかれない逸品があったりするのだ。

それらをゲットし、能力で強化すれば強力な武器の出来上がりだ。

そういうわけで、今はデパートを隅々まで見て回っているところだ。

それにしてもこの世界でエレベーターとは驚きだよね。

一体どういう原理で動いているのか。

電気もなしでエレベーターを作るとか、ある意味スゴイ技術なのではなからうか。

考え事をしながら装飾品売場を歩いていると、あるものが目についた。

『祈りの指輪 2500G』

前世で言えば約25万円か。

使い捨てアイテムが25万は高すぎるよなあ。

左手の小指に嵌めている『強制する指輪』を見る。

懐かしいな、もう10年近くも前になるのか。



あの時は怪我をしている俺を治すために、マリリンが祈りの指輪を使ったんだけ。それで宝石が壊れたその指輪をマリリンから貰ったんだよな。

人助けのためとはいえ、これを躊躇なく使うなんてお人好しだよな。

少し休めばホイミなんてすぐ使えるようになっただろうに。

・  
・  
・

「よし、決めたっ」

この指輪を使って装備品を作ろう。

あの時のホイミの礼をしていない。10年越しになったけど、礼をするのに遅すぎ  
るってことはないだろう。

俺は祈りの指輪3つを買おうと、すぐに調合をするために文字通り飛んで帰った。

指輪を使ってどんなものを作るか考えているうちに深夜になってしまった。

人に物を贈るのがこんなに神経を使うものだったなんて思わなかった。

どんなものを贈れば喜んでくれるのか、どんなものを欲しがっているのか。考えれば  
考える程、楽しいような不安なような不思議な気持ちなる。

だからだろうか。上手くいっているはずなのに、失敗しているような気がするの。

つい今しがた完成したばかりの手袋をみてため息をつく。

【祈りの手袋】

・装備者のMP消費を僅かに抑える。

これは祈りの指輪と素材の布を組み合わせて作ったものだ。  
ちなみに何故このアイテムの効果が変わるのかというところのメガネの力である。

【スケルトンメガネ】

・アイテムの主効果をみることが出来る。

グリードアイランドの指定ポケットカードの一つ、スケルトンメガネだ。

原作では名前の通り物を透かしてみることが出来るメガネのだが、俺が作ったものはアイテムや念の効果をみることが出来る。

伝説級に便利なメガネであるが、隠された効果があるアイテムがゴロゴロしているわけではないので、欲しがるのは俺か商人くらいだろう。

ま、そんなことは措いといて。

いつもだったら錬金釜で作るアイテムは素材の力を大きく上回るものが多い。

にも関わらず祈りの指輪を使っておいて、効果がMP消費を僅かに抑えるだけっていうのは微妙なんじゃないだろうか。

手袋にしたのが悪かったのか？

今度は別のものにしてみよう。

――。

「できた。．．．今度はどうだ」

さつきよりは出来の良さそうな腕輪をスケルトンメガネで見してみる。

「祈りの腕輪 充填速度 小」

・放っておくと僅かに宝石に魔力が蓄えられていく。

・祈りを捧げることで使用者のMPが回復する。

おー、これは中々いい効果じゃないか。

元の形状に近い物の方が良い効果が出るのだろうか。

10年近く錬金釜使ってるけど、未だに新しい発見が尽きないな。

『旧文字』もそうだけど、俺の念能力って効果がイマイチはつきりしないんだよなあ。

その分成功した時の能力も強力な気がするんだけど。

ただ今回は人に贈るものなので、そんな一か八かな真似はしない。っていうか素材が高価だから失敗したくないし。

最後の祈りの指輪と素材の宝石を入れて釜をかき混ぜる。  
ー。

おおつ。なんか釜から取り出す前からオーラを感じるぞ。

かなりの手応えだ。これは期待できる。

スケルトンメガネをかけてアイテムの効果を確認する。

【法力の指輪 充填速度 中】

- ・ 装備者のMP消費を抑える。
- ・ 放っておくと宝石に魔力が蓄えられていく。
- ・ 祈りを捧げることで使用者のMPが回復する。

「うっしやー！」

やっぱり指輪を素材にものを作るなら指輪がベストだったのか。プレゼントするのが惜しいくらい良い物になったぜ。

いや、あくまで言葉の綾で普通にプレゼントするけども。

あいつらの喜ぶ顔が目には浮かぶようだ。

早く明日にならないかな。

プレゼント用に綺麗にラッピングしたアイテムを見ながら、眠りについた。

## 20 指輪

「姉さんだったら今日は出かけてるけど。帰ってくるのは夜じゃないかしら」

「ええ、そうなのか。．．．でも良いか。二人には先に渡しちやおうかな」

プレゼントを完成させた翌日。俺は朝早くからパプニカへ訪れていた。

しかし、どうやらタイムिंग悪くマリンはいないようだ。

せつかくだからみんな揃っているところで渡したかったけど、仕方ないか。約束もしていないのに来た俺が悪い。

持ってきたリュックから綺麗に包装してある手袋と腕輪の入った箱を取り出すと、遠慮する二人に半ば押し付ける形でプレゼントを渡した。

「凄く良い生地できています。丈夫でよく伸びる」

アポロは手袋をつけて嬉しそうにしている。どうやら気に入ってくれたみたいだ。

良かった。その手袋は効果こそ他の二つと比べたら劣るけど、デザインでは群を抜いてるからな。

鋼の錬金術師のマスターグ大佐の手袋を黒にした感じだ。厨二心を擽る最高のデザインとなっている。火はでないけど。

アポロも14歳だからな。きつと気にいると思つたぜ。

「姉さんには何をプレゼントするつもりなの？」

エイミは腕輪をつけ、姿見で自分の姿をチェックしながら聞いてきた。

「ああ、指輪だけど」

何気なく答えると二人は顔を見合わせた後、俺の方を見る。

「なんだよ」

「いや、別に」

「そうね。別に」

俺が質問すると二人はそっけなく返し、そっぽを向く。

「姉さんとあなたって仲良いわよね。よく二人で食事に行ったりしてるみたいだし」

「そうか？ マリンと出かけるよりもアポロと出かけることの方が多と思うけど。

なあ？」

同意を求めてアポロを見るが、なんか微妙な表情をしている。

「・・・姉さんって結構モテるのよね」

「へえ、そうなんだ」

ぼそつと漏らすエイミの言葉に、俺は相槌をうつ。

マリンは可愛いからな。エイミもそうだけど、普通にモテても可怪しくないだろう。

「そうなのよね。この間も、城の兵士に食事に誘われてたわよ」

「え？」

その言葉に俺は一瞬ワケがわからなくなった。

「あら？ 気になるのかしら」

「あ、ああ。それで、マリンはその兵士とどうなったんだ？」

「その時はあなたとでかける約束があるから断つてたわね」

「そ、そうか。なら良いんだけど」

ほっと胸を撫で下ろした俺を、エイミはニヤつきながら見る。

「そうだわつ。今夜姉さんに渡したらどうかしら。場所と時間はこちらで決めて伝えておくわ」

「え？ あ、ああ。プレゼントの話ね。そりや早く渡したいからそれは嬉しいけどー」

「なら、予約取ってくるから少し待ってて。一時間位で戻るから」

そう言って返事も待たずにエイミは部屋を飛び出していった。

何なんだ一体。情緒不安定か。



つていうか予約つてなんだ？

「マリンが兵士に食事に誘われていたら、気になるか？」

エイミが飛び出して行った後、しばらく雑談していると急にアポロがそんな質問をし  
てきた。

さつきは妹のエイミが居たし、姉であるマリンの話はしづらかったのだろうか。  
だから俺も気兼ねなく素直な感想を口にする。

「なるよ。お前はならないの？」

「私は別に気にならないな」

「マジか。マリンって結構可愛いだろ。四六時中一緒にいるんだから、お前も少しは  
何か思わないのか？」

「確かに美人だとは思いますが、彼女とはあくまで同じ道を目指す仲間といったところだ  
からな」

なるほど。一緒に職場で働く同僚みたいなものか。

職場恋愛はしませんってタイプだな。雑念が入ると仕事も雑になりかねないしな。

真面目なアポロらしい意見だ。城の兵士も見習えよな。

「しかし、そうか。．．やはり君は」

「おい、どうしたんだ？」

「いや、何でもない。それより、私に協力できることがあつたら言ってくれ。力になるよ」

「ん？ あ、ああ。そうだな。何か困つたら相談するよ」

何かよく分からないが、アポロの眼に強い意志の力を感じる。一体何が起きたんだ。それにしてもアポロは兵士にマリリンが口説かれても何とも思わないのか。

もしかしてこの世界だと普通なのかな。

だつてこの城の兵士つて、若くても20代後半のやつらなんだぜ？　そしてマリリンは

14歳。

どう考えてもおかしいだろー。

前の世界で言えばその辺のサラリーマンが中学生を口説こうとしてるんだぞ。しかもマジモードで。

ヤバイでしょ。気になるでしょ。守らないとでしょ。

今夜マリリンとあつた時に、その辺のことをそれとなく話してみよう。

プレゼントの指輪を見つめ、心のなかでマリリンのことを考えるのであつた。

「( )なの？」

夜、マリオンと待ち合わせをしてエイミが予約をとったレストランを訪れる。

エイミが探してきた店なので、俺も来るのは初めてだ。

「ああ、そうみたいー。じゃなくて、そうだよ」

何故かエイミじゃなくて俺が予約をしたことにしろと言われたので、言われた通りにしておく。

聞いたところによると、パプニカではお洒落なレストランとして有名らしい。

店の外観は城を彷彿とさせるような綺麗なものとなっており、内装もそれに遜色ないほど整っている。

たしかにお洒落だ。そしてメチャクチャ高そうだ。

財布的には全然問題ないが、何故エイミはこんな高級店を選んだのだろうか。ウエイターに案内され、窓際の席へと座る。

「ず、随分と良い席ね。海が綺麗だわ」

「そうだな」

言われて窓の外を眺める。確かに夜の海って綺麗だなー。沖に出ている船の灯りがいい味だしてる。

「きよ、今日はどうしたの？ 突然こんな・・・」

「ん？ ああ、ちよつと話したいことか。まあ色々だよ。とりあえず今はこの食事楽しんでからにしようぜ」

本当はプレゼント渡したいだけなんだけど。こうして場所を整えられるとイキナリは渡しづらいよな。

っていうか、なんかマリンの挙動がおかしい気がする。

顔赤いし、いつもよりなんか大人しいよな・・・。

城で慣れてるって言っても、こういうかしこまった場所は苦手なのかもしれないな。俺もそうだからその気持ち分かるよ。

食事を終えてようやく調子が戻ってきたのか、マリンの緊張がほぐれてきたようだ。

「そういえば、マリリン。エイミから聞いたんだけど。兵士から、なんていうかのー」

話そうと思うと言葉が出てこないというのは結構あるもので、特にこういうデリケートな話題はさらに気を使う

「食事に誘われたって話？ さつきエイミから聞いたわよ。わ、私が兵士に誘われて

る話をあなたに教えたら、お、怒ってたって……」

「……いや、怒ってはないけどさ」

エイミのやつ、なんて人聞きの悪いことを。俺はただ、マリリンがロリコンのクソ野郎に手を出されなにか心配なだけなのに。

ちやうどその話もしようと思っただけだから、このタイミングでしておこうか。

「マリリン。真剣に聞いてくれ」

「はい、はい」

真剣な眼差しを受けてマリリンは居住まいを正して俺の方を見る。

「エイミから兵士の話を聞いた時、すごい嫌な気持ちだったんだ」

「そ、それってー」

「最後まで聞いてくれ」

口を開くマリリンを制して、俺は続ける。

「だけど、この気持はとも自分勝手なものだと思っただけだ。俺がマリリンのやることに口を挟むことはできないし、そんな権利はない」

そう、そんな権利はないのだ。恋愛は自由だからね。外野が文句を言うなんておこがましいにも程があるってものだ。

「でも、もしその場に居合わせてしまったら、きつと邪魔をする。そんな連中がいる限

り、きっと俺はそうしてしまふんだ」

前の世界の倫理観が抜け切らない限り、俺はその場面を見過ごすことはできないだろう。

「そんな俺をマリンは煩わしく思うだろう。だけど、そうなったとしてもこれだけは覚えておいてくれ。その相手を本当にお前が好きなのか、真剣に考えてから行動してほしい。俺はお前の幸せを願っている」

「ーは、」

俺の想いは伝わったのだろうか。マリンは頷くと、少し俯き静かになった。

おっと、説教臭い話で空気が悪くなったな。

ここは、俺のプレゼントでひとつ明るい空気に変えなければ。

「マリン。受け取ってほしいものがあるんだ」

プレゼントの指輪が入った箱を開けて、マリンの前へ差し出す。

「俺の気持ちだ」

「えっ!? き、気持ちっ!?」 突然、そんなー」

驚いてる驚いてる。アポロやエイミもかなり驚いてたからな。

あ、そうだ。あの二人にも言ったけど、マリンにもちやんと言っておかないとな。

「お返しとか、そういうのは要らないんだ。俺の想いを形にただけだから。今は何

も言わずに受け取ってほしい」

こいつら親の教育が良いのか、プレゼントなんてしたらお礼とかいって何か返してきそうだからな。

日頃世話になってる礼なのに、その礼を貰ったらキリがない。

「あ、ありがとう。とても嬉しい。大切にするわ」

指輪を握った手を抱きしめるようにして、マリリンが礼を言う。

そんなに喜んでもらえるなんて、苦勞した甲斐があつた。

それから半月経つた頃。エイミに聞いた話なんだが。

何でもあの日の後、マリリンを誘う別の兵士がいたらしいのだが、キツパリとお断りされたらしい。

その断り方には一切の迷いがなく、兵士は取り付く島もない様子だったという。

良かった。あの日の話をすっかりと聞いてくれたようだな。

これでしばらくロリコン兵士の心配はしないで済みそうだ。

## 2 1 バルジ島

「本当に何にもない場所だな」

舟から降り、周りを見渡した第一声がそれだった。

「そうね。でもだからこそ人も寄り付かない安全な場所として候補にあがったのよ」  
俺に続いてマリンも舟から降りる。

「で、どうする。海水浴でもするか？」

「も、もう。遊びに来たわけじゃないのよ」

俺の冗談に対して微妙に残念そうに返すマリン。本当は遊びたいんだな。

でも海水浴はやめた方が良いと思うよ。仕事とか関係なくさ。

だって、こんな遠くでも見えるくらいメチャクチャでかい渦があるんだもの。

そう、ここはバルジ島。でかい渦に守られた、塔以外に何にもない島である。

事の発端は数日前に城で行われた会議の議題にあった。

なんでも、パプニカには有事の際の緊急避難場所に指定されている場所があるのとこのと。



このバルジ島もその避難場所のひとつなのだが、ここ数年視察を行っていないなかったらしい。

防災上の観点からそれはマズいだろうということになり、数名が視察へ駆りだされた次第である。

俺は別にパプニカの人間じゃないので関係ないのだが、マリンがバルジ島へ行くというので付いて来たのだ。

バルジ島へはいずれ来ることになるし、一度来ておけば『同行』で訪れることが出来るようになるからだ。

以前に珍しいアイテムを探すために世界各地を巡ったが、その時でさえもこのバルジ島へは来なかった。

渦が邪魔で遠回りをしなければいけないし、島にはバルジの塔があるだけだからだ。いずれ機会があれば来ようとは思っていたので、今回の話は俺的にはちようどよかった。

そういえばアポロとエイミは城でやることがあるとのこと。今回は来なかった。

エイミが出掛けに「しつかりやりなさいよ」とか言っていたが、ただの下見でしつかりも何もないだろうに。

あつという間に10日が経った。

視察は本当にただの視察で、これといってやることもなく見て回るだけ。

それでも無駄にでかい島なので疲れたし時間がかった。

大きな災害のあとがないかとか、危険なモンスターが住み着いていないかといったこと調査して廻った。

内容自体はクソつまらなかったが、マリンと適当に遊び半分で島を巡るのは結構面白かった。

その視察もつい先ほど終わり、今は帰り支度を始めているところだ。

「ぎゃあつ」

荷物をまとめていると、海辺の方からマリンの悲鳴が聞こえてきた。

俺はまとめている荷物を投げ出し、悲鳴の聞こえた方へ向かって全力疾走する。

もしかしてモンスターでも出たかつ。

海辺へ駆けつけマリンの姿を見つけたが様子が少し変だ。顔が青ざめている。

「どうした。何かあつたのか？」

俺が問いかけると、マリンは無言で沖の方を指さした。

その指差す方へ視線をやる。

「あつ」

それを見て俺も思わず声を出す。

そこには俺たちの乗ってきた小舟がゆらゆらと漂っていた。

近くの岩場をみると、舟を繋いでいたロープが見える。

どうやら結びが甘かったらしい。解けてしまったようだ。・・・慌てて損した。

「ど、どうしましょう。舟がないと帰れないわ。ここには滅多に人なんてこないし」

嘆息を吐く俺の横で、対照的な様子で取り乱したマリンは両手で顔を覆って座り込んだ。

「おいおい、落ち着けよ。別に大したことないだろ」

マリンの肩に手をおいて声をかける。

「どうしてそんなに落ち着いていられるの。私たちこのままずっとこの島から出られないかもしれないのよ」

涙目で俺を見つめるマリン。どうやら相当テンパっているらしい。

「あ、でもそうしたらずつとあなたとここで二人なのね。それはそれでー」

かと思えば今度は一転して何か血迷ったことを口走り始める。

「落ち着けての。あんまり長い間帰らなかつたらアポロたちが迎えに来るってーの」

その一言にマリンはピタリと動きを止めて固まった。

「つていうかルーラで帰れるし」

全然気づかなかつたらしく、マリンは顔を赤らめて俯いてしまう。まったく、どこか抜けてるんだよな。

バルジ島の視察が終わり、俺とマリンはパプニカへ帰ってきた。

行きと違って帰りは『同行』を使ったため一瞬だった。

城の前でマリンと別れる際、近くにいたエイミが「上手くいったの？」と何故かこそこそ聞いてきたので、俺はドヤ顔で親指を立てて返した。

あんな視察で失敗もなにもないだろうけど、エイミはその返答に満足していたみたいなので良しとする。

そのあと適当な場所で食事を済ませてから自宅へ帰った。

「ええつと。これと、これと。あとこれも必要かな」

自宅へ帰った俺は荷造りを始めていた。

リュックに荷物を詰め込み、スコップや軍手や着替えも各種用意する。

それらを部屋の隅においてある巨大なコンテナの中に適当にぶち込んで準備完了で

ある。

「こんなもんか」

忘れ物がないか確認を終えると、ポケットからバインダーを取り出す。

「それじゃあ、行くか。アカンパニー、オン。バルジ島」

再び光に包まれ、俺は先ほど帰ってきたばかりのバルジ島へと向かうのだった。

## 2 2 家庭菜園

バルジ島。そこは無人の孤島である。

巨大な渦が外部からの上陸を妨害する自然要塞と化している島。

人を寄せ付けないそんな場所で俺はひたすらに振り続けている。

なにをって？ 決まってるだろ。鋏だよ、鋏。

深夜3時、島全体緑化計画中を絶賛遂行中なのである。

「よいしょー。よいしょー。あ、よいしょー」

リズムカルに鋏を振ることにより寂しさから逃走中。

一人暮らしも長くなるとこういった術を自然に身につけるものなのだ。処世術です

ね。

今日ーもとい昨日の昼までマリンと視察で訪れていて気がついたのだ。

この島は閑散とし過ぎであるということに。

思い返せばダイの大冒険原作でも避難していた兵士たちが食料のことで喧嘩をしていた。

ならば今のうちに自然豊かな島に変えておけば快適な避難生活を送れるというもの。  
「俺ってちよー親切だよね」

人のために苦勞を惜しまないこの姿勢。素晴らしいと思いませんか。

っていうのはただの理由付けで、実際は念の修行を思いつきりするのに最適だと思う  
たからなんだけどね。

今まではアイテム探したり作ったりで念修行は指輪の能力に任せつきりだったから  
な。

少しは靈丸とか他にもテクニツク的な修行をして慣らしておかないと。

なのでまずは『周』の練習からだ。

鍬にオーラを流して地面を耕す。

ゴンとキルアがビスケの元でやっていた穴掘りと同じ様なものだ。

念能力はどこまで行っても基本が大事。こういう地味な努力がいずれ実を結ぶの  
だ。・・・多分。

しかしいくら修行と言ってもただ地面を耕しているだけじゃモチベーションが上が  
らない。

なので先ほど言ったようにこの島を実り豊かな島に変えてみようかなあ、なんてね。

辺りがある程度耕し終えたころ、俺はポケットからカードを取り出して唱えた。

「リターン、オン。トーヤ」

唱えるとカードに記されている数値が一つ減り、目の前に丸い光る球が下りてきた。

光が収まると、そこには自宅のコンテナに入れてあった荷物があつた。

これは俺のスペルカード、『再来（リターン）』の能力だ。

「再来（リターン） ランク E 回数 104 」

- ・ 指定された場所にある荷物を、宣言した場所や人の元へ飛ばす。
- ・ 場所の指定には『道標（ガイドポスト）』が必要。

このカードも『同行』と同じくスペルカードだ。

やはりというか、何故か本家のグリードアイランドとは効果が違う。

しかもこのカードに限っては別のスペルカードと併用しなければ使えないのだから最初は困惑したものだ。

カードの作成者が俺だから、きっと俺の曖昧な記憶を元に適当に作られているのだろう。

『道標』の作り方は簡単で、『旧文字』で「使用した場所や人を記憶する」と紙に書い



て材料にするだけでできた。

かくして俺は荷物 of 搬送には苦勞することが無くなつたわけだが、良く考えてみると『同行』の往復で荷物なんてどうとでもできるので大したカードではない。

そんな想いを頭の隅に押しやり、緑化計画を再開する。

木を植えるにしろ野菜を作るにしろ、水の準備をしないと。

荷物の中から器を取り出し、設置しやすい場所を探す。

### 「湧水の器」

・きれいな水が常に一杯になっている不思議な器。少しでも減るとその分すぐに湧いてくる。

・湧いてくる水の量は18,000リットルまで。蓋をして一日経過するとまた湧くようになる。

このアイテムは一日おきに蓋を開閉しないといけないから、ずっと使うことを考えると身近な場所へ設置することが好ましい。

川のように上流に置くよりは湖や池の様な場所で橋を架けて手軽に行き来できるようにした方が良いのだ。

しかし、この島にそんな場所はない。ならば仕方ない。

俺はバルジ塔へ登ると、最上階まで上り外を見た。

「あの辺ならいいかなー」

適当な場所へあたりをつけ、人差し指を向ける。

そこへ意識とオーラを集中させ全力の霊丸を放った。

子供の時以来の全力の霊丸。以前とは比べ物にならないほどの大きさのそれは、着弾と同時に爆撃でもあつたかのような轟音を響かせた。

土煙が晴れると、そこには直径20メートル近い大きなクレーターができていた。

「おおっ！ ーりやすげーわ。毎日の『堅』の成果だな」

オート修行は楽しいわ。

1分のインターバルを空けて、立て続けにもう3発の霊丸を放つ。

縦横に2?2で隣接するように霊丸を放ったことにより、その中央には十字状の道ができた。

あとは道を綺麗に舗装し、それぞれのクレーターの底を繋げれば湖の完成だ。

そのためにスコップを片手にクレーターへ飛び降り開通作業を開始した。

「よ、ようやく終わったか。意外にしんどいな」

十字の道の下部分を小さく掘って繋げた。水がそれぞれに流れる程度の小さな穴だったか、思った以上に疲れた。

地盤が元々硬いのか、それとも壺丸を4回撃ち切ったためにオーラが切れているのか。どちらにしろ随分と時間が掛かってしまった。

疲れたし今日はもう休もうかな。

水場を作るだけでこんなに掛かるなんて予想外だった。こんなことなら地面耕すよりも先にこっちの作業に取りかかれればよかった。

こういうとき段取りの悪い自分が嫌になる。

額の汗を拭い、『再来』でこちらへ飛ばした風呂桶を準備する。

風呂桶が入るとか自宅のコンテナどんだけデカいんだよとか思うかもしれないが、ちゃんと分解して入れたから気にしないでくれ。

再び組み立て終えた風呂桶に『湧水の器』で水を入れる。  
水が溜まるまでの間に選んでおこう。

何を選ぶのかというと、これだ。

「美肌入浴剤」

・この入浴剤をお風呂に入れるとあらゆる肌の悩みが解決する。疲労回復効果あり。

この入浴剤、実に15種類以上もあるのだ。効果は変わらないが香りはどれも違うので、どの入浴剤を使うかは俺の日々の楽しみだったりする。

「今日は薬湯にするかー。疲れたしな」

風呂桶の水をメラで沸かして入浴剤を入れる。

「くはー、生き返るぜえ」

オヤジ臭く風呂へ浸かり、一日の疲れを癒やす。ひと目を憚らず入るのは良いな。いや、普段もひと目なんか気にしてないけどね。

風呂からあがると片付けは明日にして、今日はもう寝ることにした。

リュックから枕を取り出してバルジ塔の中へ入る。

床へ毛布を敷いて場所を確保し寝転んだ。

「これがあればどこでも安眠だ」

### 【快眠枕】

・この枕に頭をのせて眠ると4時間で8時間寝たのと同じくらいぐっすり眠れる。枕に頭をのせていないと意味が無いので、寝相の悪い人は注意。

明日は湖完成させたいな、なんて考えながら俺の意識は沈んでいった。

## 23 念修行

昨日（5時間前）の教訓を活かし、まずは湖の完成を優先させることにした。

と言つても昨日の時点ではほとんど完成しており、あとは『湧水の器』の設置と陸へと繋がる道を舗装するだけだ。

『湧水の器』は全部で5つ持っているが、その内一つは俺の家で使っているためここへは持ってきていない。

数もちょうど良いので、器をそれぞれのクレーターの方へ傾けて設置した。

このクレーターが湖になるのは大体一ヶ月後くらいだろう。

その頃にはこの島の緑化計画もかなり進んでいることだろう。

そしたらここだけではなくもつと湖作らないと植物が枯れてしまうかもしれない。つてそんなこと心配するのは気が早すぎるか。

気持ち切り替えて道の舗装をすることにした。

スコップに『周』をして道を平にしていく。その作業自体は簡単で、一時間もしないうちに終わってしまった。

水が溜まっていない湖って見窄らしいな。それとも裝飾が足りないのかな。

どうしよう。レンガで舗装するのも良いけど、そのレンガを用意するのはかなり手間だ。

錬金釜でレンガを作ることはできるが、一つ作るのに釜の水を沸騰させなければならぬ。

俺の錬金術は便利なアイテムを作ることとはできても数百単位でもものを作るような大量生産には向いていないのだ。

・・・昼飯食ってから考えるか。

面倒なので後回しにすることにした。今の世の中作業効率が大切だからね。わからないことをいつまでも考えてたって仕方ない。

「619、620、621、622つ。くっそー割れちゃった」

昼食を済ませた俺は、島の岩場で強化系の系統別修行を行っていた。ビスケの修行でゴンとキルアが行っていた石で石を割るアレだ。

一日一個の石を使って石を割り続ける。手に持っている方の石が砕けたら終了。俺は石が砕けても気にせずトライし続けるけどね。

強化系と変化系のあの二人でさえ、最初は200個足らずしか割れなかった。操作系

で相性の悪い俺がこんなに割れたということは、あの時点でのゴンとキルアは超えていると考えていいのだろうか。

昨日の霊丸の威力から考えてもあの二人より大きく劣っているということはない筈だ。

だからといって安心するわけにはいかないが。あくまであの二人は通過点。最終目標はネテロレベルなのだから。

「もう一回最初からか。．．．1、2、3、4ー」

石割りをしながら俺はふと思う。

石を強化しているときの俺のオーラの系統はどうなっているのだろうか。

横においてあるコップに一枚の葉を浮かべて石を持った手を近づける。

すると浮かんでいる葉はこれでもかって程に盛大に回り出した。

「やっぱり操作系だよな」

念を強化に使っているのに、そのオーラを近づけてもオーラの性質は操作系。．．何故だ。

オーラとは生命エネルギー。それが個人の資質により生まれ持った性質が異なるのはわかる。

だけどその性質を各系統に近づけて使用したのなら、その系統のオーラへ変化するの



が自然じゃないのか。もしかして根本的な考え方が違うのか。

オーラで石を強化していると考えていたけど、本当は強化しているのではなくて操作しているとか。

他の事象で考えてみよう。例えば操作系の念能力者が空を飛ばうとしたとする。

操作系なら周りの空気を操作して自分を押しやり空を飛ぶ。放出系ならオーラを推進力にジェットエンジンの如く空を飛ばばいい。強化系は翼の様な道具を持って腕力で鳥のように空を飛ばたけば良いだろう。

こんな感じで同じ事象を再現しようとした場合、方法の違いこそあれ空を飛ぶという結果は再現可能だ。

ではこの石割りの場合で考えたらどうだろう。

強化系の場合は石の分子結合を強化し、言葉通りに石を強化しているのかもしれない。  
い。

しかし操作系の場合は純粋な強化ではなく、石という物質の状態を操作し形状を固定し続けることで結果として強化しているのではないだろうか。

「・・・なーんてな。強化できてりゃ後は知ったこっちゃねーや」

手元の砕けた石を放り投げ、次の石を手を持つ。

無心でやるのはキツイので妄想をかきたてながら一日中強化系の修行を続けた。

終わる頃にはそれはもう大量の石ころの山ができていたのだった。

「これだけあればレンガの代わりにはなるだろう」

昨日の石割りでできた石の山をみて呟く。突然石割りの修行を始めたのは、何も湖の舗装作業を諦めたからではない。

ちやんとレンガに代わる案を考えた結果に基づくものである。

すなわち、石割りでできた小さな石を砂利のように道に敷き詰めれば良いじゃん。という案だ。

修行と物資調達の一石二鳥。どうだ、とても効率的だろう。

あとはこれを道に敷くだけだ。

スコップと巨大な桶を使って運んでは舗装する作業を繰り返す。

クレーターの隙間の道は横幅が2メートルはあるので中々に骨がある。

昨日は石ころを作りすぎたかなと思っただけ足りないくらいだ。

石が足りなくなつては足し、足しては運んでの繰り返し。

地味な作業だが、満足の行く仕上がりになるまで結局3日も掛かってしまった。

湖に水はまだまだ全然溜まっていない。あと半月は土でも耕して過ごすかね。

## 24 土壌整備

母なる大地とはよく言ったもので、土がなければ植物は育たない。

植物が育たないということは食料がないということ。食料がないということは生き物がいないということだ。

というわけでこの島に足りないのは土だ。

耕しまくった地面を眺めてため息を吐く。

地面っていうかこれ石だわ、マジで。砂漠で植物が育ちますか？ 生き物が住み着きますか？

そこでサボテンがあるじゃん。とかサソリとかラクダとかいるじゃん。とか考えるあなた。そういうことじゃないんですよ。

良いですか？ この場合のことを言っているんですよ、今の状況のことをね。

緑化計画なんだから、緑化しなければいけないのだ。

この辺の雨量は知らないが、対岸に見える大陸には普通に木々が生い茂っているので降ることは降るのだろう。

この島は貧相だけど、植物が全くないというわけではない。あくまで人が暮らせない

程度の環境というだけだ。

ならば何が足りないのか。それは栄養だ。土が貧弱だから植物が育たないのだ。

ではその土はどうやって準備するのか。他の大陸から土を拝借するにしても、この島は大きすぎる。もっと別な方法を考えたほうが早いだろう。

考えた結果、俺は閃いた。土がないのなら土を作ってしまえばいいじゃない。

というわけでバルジ島の土壌整備を行おうと思う。

そもそも土とは何か。正直詳しくないが、その正体は細かい砂や岩などの鉱石と微生物や植物の死骸をバクテリアが分解したものが混じりあったものだ。・・・ややこしいな。

砂や岩はいっぱいある。この半月の間延々と鍬で地面の岩部分を粉砕しまくってたからな。

問題は微生物と植物をどうするかだ。

そこでこれを用意した。

〔栄養剤 500ml〕

・ 土地を豊かにする液体。撒くだけでどんな植物でも早く成長する。使う場合は1、000倍に希釈してから使ってね。

あんまりこういうのってよく分かんないけど、とりあえず栄養さえ与えとけば適當に  
どうにかなるだろ。

俺は用意した『栄養剤』？20本を半ばまで水の溜まった湖へ投げ込んだ。

それだけでは育つ植物がないので、島に元々ある土と植物（苔や水草）を少し持つて  
きて同じく湖にぶち込んだ。

あとは時間をおいて見に来るか。失敗したらしたで別の方法探さなきゃな。

「お、おおう」

翌日、湖の様子を見に来た俺はその光景に圧倒されていた。

湖が苔だらけだ。一面が緑色。緑一色。

栄養剤の効果が嬉しい半面怖くなる。なんて恐ろしい物を作ってしまったんだ。  
使い方を間違えたら生態系を大きく狂わせる代物じゃないか。

まるで十年以上放置していた水槽のように汚い色をした湖を見て悲しくなった。  
だけど苔と水草が生えているだけで水が汚いわけじゃないはずだ。

あとはパプニカカベルンの森へ行き、手頃な水棲生物を放流してやれば湖は完成だ。

湖が完成したあと、俺は湖を起点に緑化を進めていった。

苔ごと桶で水を掬ってはうち水のように辺りへ撒くと、その場所は湖と同じく苔や草で覆い尽くされていった。

日々栄養剤入りの水を撒き続けた甲斐があつてか、1年が経つ頃にはバルジ島の5割は森のようになっていた。

「・・・やり過ぎたな」

塔の頂上から島を眺めて眩く。

どうしてこんなことになったんだっけ。すっかり当初の目的を忘れた俺は黄昏れながら辺りを見渡す。

ああ、そうだ。そういえば避難民たちの食料確保が目的だっけ。

その目的なら完全に達成したと言って問題ないだろう。

島にはでかい湖が10箇所ある。霊丸4発ぶんで1つの湖なのだが、その直径は大体40メートル。

それが10箇所もあるのだ。生態系に干渉しまくりである。現代知識を持つ俺としては若干の罪悪感があつたりなかつたりだ。

そんな感傷に浸っている俺を余所に、下では小鳥たちが果物をついばんでいる姿が見

える。

〔豊作の苗〕

・枝ごとに異なる種類の実がなる不思議な木の苗。毎日必ず1つ果実を実らせる。成長を終えると普通の果樹になる。

島全体で5,000本以上苗を植えたのに、動物たちが食べに来るので競争率は高い。食料が豊富になったからか最近はどこにいたのかネズミやリスのような小動物をよく見る。

虫や爬虫類も多くなって、正直勘弁してほしいと思ったり。

食物連鎖ができたことで、もうこの島には俺が手を加える必要はないだろう。

1年半という長い歳月をかけて手がけた緑化計画であったが、終わってみるとあつという間だった。

達成感に満たされてすぐ、俺はそれよりも強い虚しさを覚えた。・・・どうして気づかなかつたんだ。

「はああ。帰るか」

ため息を吐いて荷物をもとめ始める。

念の修業も順調だった、当初の目的の島の緑化も上手くいったというのに俺の心は晴れることはない。

それどころか先を思うと暗澹たる思いが胸を支配していた。

「じゃあな、バルジ島。結構楽しかったぜ」

その想いを抱いたまま、自分で作り上げた第二の故郷へ別れを告げる。

本当はもつと居たいが、これ以上愛着が湧いたら困るからな。

「あーあ。数年後にはフレイザードの氷炎結界呪法で全部壊されるんだよなあ」

やるせない気持ち言葉をにして、俺はバルジ島を後にした。



## 25 勇者

「あの一、相席宜しいですか」

バルジ島から帰って一年。俺はパプニカ周辺で今まで通り修行に励んでいた。

今はパプニカの食堂で昼食を食べているところだ。そんな折、俺に声をかけてくる人物がいた。

「ああ、別に良いで一ーぶおふっ」

行儀悪くも口に物を含んだまま喋ったのがまずかった。思わぬ出来事にむせ返ってしまう。

「ありやりや、大丈夫ですか。はい、お水」

「つげっほげほッ。ど、どうも」

水を受け取り咳き込みながら礼を言う。

「いやー、それにしても良い町ですねえ。ちよつと立ち寄っただけなのについ長居してしまいましたよ」

「へ、へえ。．．．そうですか」

適当に相槌を打ち窓の方を向いて水を飲む。

そつぽを向きつつも気になるのでチラリと横目で盗み見る。

「どうかしましたか？」

「っ!? い、いえ、別に」

視線に気づいたその人物と目があつてしまい、挙動不審になりながらも平静を装つた。

「ーですからね。私も是非見てみたいなど思つちやつたりしたわけなんですよ」

「は、はあ。」

相席したその男はとてもお喋りだった。偶々相席しただけなのにやたらと話しかけてくる。

その勢いと人柄のためか、やめといた方が良いのにつられて会話をしてしまう。

「旅行みたいなものですか。パプニカは豊かな国ですからね、ちょうど良いと思ひますよ。お一人で旅行してるんですか？」

「ええ、そうなんですよ。当てのない一人旅つてやつです。まあ、仕事も兼ねてるんですけどね」

ただ話しているだけでは不毛なので、適当に探りを入れてみたり。

「ーというわけなんです。そうそう申し遅れました。私・・・、こうゆうものでございます」

そう言う男は巻物のようなものを取り出して広げてみせた。

「アバン・デ・ジニユール三世。勇者育成のための所謂家庭教師というやつです」  
人の良さそうな笑顔で自己紹介をする勇者アバン。

その自己紹介をきき、途端に俺は強い不安を覚えるのだった。

偶々相席した相手に自己紹介をする人間はどれ程いるだろう。

少なくとも俺はやらない。個人情報とか防犯意識とかそういったものとは関係なく  
普通は自己紹介なんぞはしないのだ。

じゃあ人が誰かに自己紹介をするときはどういう時か。答えは簡単だ。その人物と  
長く関わることになると感じた時だ。

名前や素性を明らかにすることで円滑なコミュニケーションを取ることが出来る。

ではどうしてアバンは俺に自己紹介をしたのか？ それも答えは簡単。アバンが俺  
とがつつりお知り合いになろうとしているからだよっ！

この男、偶然のフリしてるけど俺のこと知ってて近づいてきた可能性が高い。

考えてみればアバンは城の人間と繋がりを持っていて。パプニカ城の者なら俺の特  
徴や居場所なら普通に答えられるだろう。接触すること自体は容易に行える。

ではどうしてアバンは俺に接触してきたのか。考えられる理由は二つある。

一つ目は俺の持っているアイテム。

俺は回復薬を始めとした便利なアイテムを多数所持している。パプニカで流行り病が起きた時や、作物が不作なときに何度か手をかしたことがある。

便利なアイテムを持っていることはその都度口止めしているが、人の口に戸は立てられぬというやつで噂は結構出回っている。その噂を聞きつけたとしたら、学者気質のアバンなら一目見ようと訪れても不思議はない。

二つ目は俺を弟子にすることだ。

さっきの流行り病とかと一緒にだが、パプニカ周辺で凶悪なモンスターが出た時に俺が退治することがあるのだ。修行も兼ねて。

これも同じく城内では結構な噂になっているため、次期勇者候補を探しているアバンが目をつけたとしても可怪しくないだろう。

ただ、もしもこっちの理由だとしたら厄介だ。何故なら、俺がアバンの弟子になるとでポツプやダイの弟子になるタイミングがズレる恐れがあるからだ。

正確に覚えていないが、彼らがアバンの特訓を受けた期間はあまり長くなかったはず。俺が余計なことをして狂わせる訳にはいかない。

色々な可能性を考え、俺は不安を募らせる。

しかし、この不安はあくまでも俺の妄想の料を出ない。まだアバンは俺に対してなにもアクションをしていないのだ。

本当はただの営業で、誰でも彼でも適当に宣伝行為をしているだけかもしれない。だから今の俺の取るべき行動は全力でしらを切ることのみだ。

「それにしても珍しいものをお持ちですねえ。その木刀、普通の木刀ではありませんね」

アバンは立てかけてある木刀を手にとって観察した。

「あ、ちよつとっ」

それを慌てて取り返し、抗議の声をあげる。

「おっと、失礼。つい気になってしまいました。……ふうむ、やはり変わった木刀だ。

あなたもそう思いませんか？」

この木刀は『旧文字』が書き込まれており、一度『周』をしただけでもしばらくオーラを留め続けるという名刀に勝るとも劣らない逸品である。

現に今も昨日込めたオーラが僅かに残っている。闘気を操るアバンならその僅かなオーラを感じる事が出来るのかもしれない。

アバンはそれを分かった上で探りを入れているのだろうか。そうだとするとなんて答えるのがベストだろう。

この木刀の所有者である以上、知らないと言ひ張るにしても限度はある。入手した経緯や性能を適当に話しとけばいいだろうか。

「そうですね。随分と昔に別の町の武器屋で買ったんですが、重宝してますよ。変な文字は書いてあるけど、普通の木刀よりめちやくちや頑丈ですからね」

「ほほう、武器屋ですか。それは是非行ってみたいですねえ」

「それならベルナの森の近くの町にありますよ。10年以上前に買ったので今もその武器屋があるかは分かりませんが」

どうせ行っても売ってるのは普通の木刀だけだな。

「おや、その町なら私も以前に行つたことがありますね。午後に行つてきますかねえ」

「まだ売つてると良いですね、木刀。――では俺はこれで」

「もう行つてしまふんですか。もつとお話したかつたんですが。――貴重な情報をあげがとうございました。またどこかで会いましょう、トーヤくん」

ちやうど話の区切りがだったので俺は立ち上がり食堂を出ることにする。

これ以上一緒にいてボロを出したら嫌だからな。

・・・。

どうやら俺の不安は杞憂だったみたいだ。結局ただの世間話をしただけ。変わった木刀見つけて気になったただけだなあれは。

だけどしばらくパプニカに行くのは控えよう。アバンとは接触しない方がいい。

俺は自宅のベッドで横になりながら今日の出来事振り返っていた。

そして意識が朦朧としだした頃、唐突に別れ際の言葉を思い出して勢い良く起き上がった。

アバンは別れ際にこう言った。

ーーまたどこかで会いましょう、トーヤくんーー

名乗った覚えなんかない。俺のことを知った上で近づいてきたんだ。

どういう意図があつてやっているかは知らないが、そっちがそう来るなら俺もそれ相応の対応をさせてもらう。

俺は荷物を纏めると深夜にも関わらず家から勢い良く飛び出すのだった。

## 26 逃亡

人が生きるには適度なストレスが必要というのは本当なのだろうか。

少なくともこの世界へ転生してからというもの、バーンによる世界滅亡へのカウントダウンのせいでストレスはマツハである。

転生特典を考慮しても、俺がここまで強くなれた理由として一番大きな割合を占めているのがそのストレスなのだから、成長にストレスが必要だということに関しては認めざるをえない。

そして現在、俺にはもう一つの懸念事項が襲いかかっていた。

勇者アバン。かなりの切れ者で俺の正体を暴きかねない恐ろしい男である。

別に俺の正体がバレるくらい良いじゃないかと思うだろうが、当事者からするとそう簡単な問題ではない。

何故なら勇者アバンは大魔王バーンから信じられないくらい警戒されている。

そんな男と行動を共にして俺の正体が知られるようなことがあれば、地上崩落の前に俺の命がヤバイのだ。

バーンがどの程度アバンの動向を探っているかは知らないが、俺の存在を仄めかすよ



うな真似はできない。少なくともダイと魔王軍が交戦するまでは絶対にバレたくない。そんな理由もあり、俺はアバンとの接触を断つべく逃亡生活へと踏み切っていた。

逃亡生活1日目。場所はベンガーナである。

昨夜遅くに自宅を飛び出し、アバンから逃れるべく別の町へとやってきた次第だ。

木を隠すには森というように、人が隠れるならば人の多い町へ入るのが一番だろう。

ここで1ヶ月くらい時間を潰して、ほとぼりが覚めたらパプニカへ帰ろう。アバンの目的は分からないが、居もしない相手を1ヶ月以上も待ち続けるとは思えない。

しばらくは宿屋で大人しく念の修行でもしながら観光でもして過ごすつもりだ。

お腹が空いたので食事にすることにした。宿屋の1階にある簡易的な酒場へ訪れるとカウンターへ腰を下ろした。

メニューに目を通して少しがっかりする。酒場だからツマミと酒がメインのようだ。俺みたいに酒の飲めない奴からするといいい迷惑だ。

適当なの一つ頼んで外でちゃんとした食事処を探そう。

「すいません、ミルク一つお願ひしー」「ミルク2つお願ひします」

俺の注文にかぶせて、別の誰かが先に注文をした。

無礼なやつだなと思いつながら批難の視線とともにその声の主を見る。

「んげっ!？」

その姿を見て思わず声を上げた。

「奇遇ですねえ。昨日に続いて今日もお会いできるだなんて。これも何かのご縁というやつですかね」

そこには昨日と同じように笑顔全開で俺を見る勇者アバンの姿があった。

「ア、アバンさん。どうしてここに。パプニカに居たはずじゃ・・・」

動揺しながらも何とか言葉を捻り出し、アバンに問いかけた。

アバンは俺の横の席に座り、俺の質問なんかまるで気にせずメニュー開いて悩ましげに唸り声を上げた。

「この宿のお酒は絶品らしいですよ。いかがですかトーヤくん。何なら私がご馳走しますが」

「ーいえ・・・俺は酒ダメなんで」

「そうですか。では私もやめときましょう」

メニューを閉じると何を話すでもなく無言で空を見つめていた。時間にして一分も経っていないが、俺にはとても長く感じた。

「あなたもお気づきかと思えますので、単刀直入に言います。私はあなたのことを初

めから知っていて声をかけました」

ある意味で予想外のその言葉に俺は無言で返した。

「まさかこうして逃げられるとは思いませんでしたが。警戒させまいと隠したつもりでしたが逆効果だったようですね」

「あなたの目的はなんですか？ どうして俺を・・・」

「目的ですか。ふうむ、そうですね。――私もそれが知りたい。あなたの目的はなんですか？」

真剣な表情で俺を見つめるアバン。この人は一体何を言っているんだ。

「どうやらトーヤくんは個人で持つには大きすぎる力を持つているようですね。それも生まれながらではない。修行の末に手に入れた力だ。並大抵の努力ではない。一体どんな理由で？」

力とは単純に戦闘能力のことを指しているのだろう。だけどそれが何だと言うんだ。

「別に、強くなりたかったから修行したまでですよ。そんなやつ珍しくもないでしょう」

「ではこのアイテムは？ これほど強力なアイテムを王国ではなく個人で所持しているなんて聞いたことありませんよ」

そう言ってアバンはテーブルに『フェニクス薬剤』を置いた。

以前パプニカで流行り病が起きた時にレオナ姫に渡したものだ。どうやら使いきらずに手元に残していたようだ。

「不治の病でさえも瞬く間に治るほどだとか。それを個人で所持し、尚且つ無料で振る舞うだなんてちよつと信じられませんね」

「あなただって俺と同じ状況だったらやるんじゃないですか？　人並みの正義感があればそれくらいやりますよ」

「1つや2つならそうかもしれないですね。ですがあなたの場合はその数が多すぎる。値段の話をしているのではありませんよ、問題は何故それほど貴重なアイテムを大量に所持していたのかということですよ」

「なぜって……。そりや偶々手に入ったから」

自分でもわかっていた。言い訳になっていないことに。

「私の考えはこうです。あなたはいずれ訪れる何かしらの大きな災いへの準備をしていた。だから強大な力と強力なアイテムを蓄えていた」

俺は返す言葉を失っていた。まさか会って二日目にしてここまで見抜かれるなんて。

「もしそうなら私も力になりたい。どうですか、トーヤくん」

真摯な眼差しを受け、俺は必死に考えていた。

このままアバンの提案を受け入れ、協力を仰ぐべきなのか。それとも逃げてでも原作

通りにことを運ぶべきなのか。

アバンの頭脳はバーンが恐れる通り脅威的だ。会ったこともないはずの俺の噂程度の情報からここまで言い当ててしまうなんてもはや予知能力といっても過言ではないだろう。

しかしこのまま何もせずとも原作通りならバーンはダイが倒してくれる。わざわざ危険を犯して世界が滅びたらどうする。

彼の視線から逃げるように俯いて考える。そして考えが纏まると強い意思を持ってアバンに向き合うのだった。

「アバンさん、聞いて下さい。実はこの世界はあと少しでー」

## 27 協力者

夜の帳が下り街中が静になる一方、対照的に騒がしくなるのが酒場というものだ。

自室にいるのも関わらず騒ぎ声が微かに聞こえてくるのだから、これはこの宿屋のシステムに問題があると言っていていいだろう。

しかしながら、本来なら鬱陶しく感じる騒音であるが今はその方が助かる。何も考えたくないからな。

オーラを右手・右足・左足・左手と順に回して『流』の練習をしながらベッドで寝転がる。

用件が済んだのだからすぐにパプニカに帰ればいいのに、俺はアバンと話を終えてからこうして無為に時間を過ごしていた。

―5時間前―

「――とういうことです。アバンさん、あなたはこの話を信じますか」

「・・・にわかには信じ難い話です。しかし、あなたの様子をみるにウソを吐いている様子は無い」

俺の話最後まで聞いていたアバンは事の真偽を図りかねているようだ。

「アバンにはダイやバーンに関する詳細ではなく、これから起こりうる未来の結末だけを話した。どうせ信じて貰えないだろうけどな。」

だが、信じてもらえないということは裏を返せば話してしまっても問題無いということだ。さすがに異世界転生や念能力に関しては話すつもりはないが。

「その情報は一体どこから？ 何故あなたがそんなことを知り得たのでしょうか」

「神様からのお告げ——所謂神託というやつです。詳しい説明はできませんが、先ほど話したことはこの世界に絶対に訪れる未来なんです」

神託というどうとでも言い訳のできるウソにより、アバンにこの世界の危機を知らせた。

これを信じて協力をしてくれるのならラッキーだし、世迷い言と切り捨てられたとしてもこの話はアバンに無意識的な影響を与えることだろう。それはきつと今後の弟子育成にも表れる。

「ふうむ、神託ですかあ。それだけで信じるには少し理由が弱いですねえ」

だからアバンがこのような反応を示すのは予め予想出来ていた。しかし今はこれで十分。世迷い言と思うのならこれ以上付きまとわれることもないだろう。

「信じて貰えないなら仕方ないですね。俺はこれで失礼しますよ」

一方的に押しかけられた形であるが、今回のことは俺にとつては好都合でもあった。カウンターにおかれたミルクを一気に飲み干し、この場を去るべく席を立ち上がった。

「神託だけでは説明のできないことが多すぎます。例えばトーヤくん。その木刀、あなたが作りましたね。木刀だけじゃない、他の諸々のアイテムはすべてあなたが作ったものだ」

意外な一言に思わず立ち上がったまま動きを止めてしまった。

「……いいえ、違いますよ。なぜそう思うんですか？」

「昨日、その木刀の話をしたときにあなたはこう言っただけです『変な文字は書いてあるけど、普通の木刀よりめちやくちや頑丈ですからね』と」

「言いましたよ。でもそれが何か？」

アバンの言葉を頭のなかで反芻し、おかしいところがないか考える。しかし特に変なことなど有りはしない。普通の会話だと思う。

訝しげな俺を余所に、アバンは木刀を手に持ち文字を指さした。

「私にはその木刀に書かれているのは模様には見えません。これでも代々学者の家系です。それなりの教養は持っているかと自負しているんですが、こんな文字を見るのは初めてです」



ーしまった。この世界の人間にとって現代の文字は読めないだけじゃなく、文字にすら見えないんだ。そんな簡単な事にも気づかないなんて。

「神託を授かったとしても、文字の読み書きや知識まで貰えるとは思えません。あなたには私には話せない秘密があるようですね」

たった一言のミスでここまで問い詰められる結果につながるとは予想外だった。しかし、こうなつては開き直るしか無い。

「・・・その通りです。例え協力を仰ぐ立場にあつても俺は自分の能力を明かすことはしません。これは戦士としての矜持つてやつです。自分の能力は明かせない。誰であつてもね」

リスクをムダに抱えることはできない。アバンの協力は絶対に必要なわけではない。これ以上『念』に関して探ろうというのなら全力で逃走するまでの話だ。

「ふふ、矜持ときましたか。では仕方ないですね。仕方ないのであなたに協力することにしましょう」

「fbc」

思わずマヌケな声を出し、俺はその場に佇むことしかできなかつた。

ーなんてやりとりをしたのが5時間前。

アバンはそれ以上の詮索はやめ、自分は何をすれば良いのかと聞いてきた。今の段階でアバンにやって欲しいことは色々あるが、まずはポップを弟子にして欲しかった。

だから俺はランカークスへ向かって欲しいとだけ伝えた。そこへ行つて思うとおりに行動して欲しいと。

そんな曖昧な頼みにもかかわらず、アバンは疑問も口にせずすぐに出立した。

アバンが何を考えているのかはまるでわからない。しかし、どうやら俺に協力してくれると言う話は本当のようだ。

魔王軍が動くまで安易な行動はできない。アバンに本格的に動いてもらうのは彼がメガンテを使い、戦線から身を隠している間になる。

アバンのストーキング行為から開放された俺は、もうここへ留まる理由を失っていた。

なので宿を引き払いパプニカに帰つてもいいのだが……。

「はああああ、疲れたあ。今日はもう寝るか」

たった2日の出来事なのにアバンのせいで憔悴しきっていた。

疲れたことを言い訳に、俺は念の修行も中途半端に終わらせ眠りについた。

今日の分は明日やろう。そう自分へ言い聞かせ、酒場から聞こえる騒ぎ声の子守唄に

して眠りに落ちるのだった。

## 28 新たな勇者

アバンの件から数ヶ月経ったある日のこと。いつもの様にパプニカへ訪れた俺は違和感を感じていた。

やけに街中が騒がしいような気がするのだ。食事をしてから城へ向かおうと思っていたのだが、予定を変更して城へ向かうことにした。

城に到着し、マリン達に会うためにいつもの部屋へ向かっていると廊下の向こうから人影が見えた。

「あら、また来たのね。相変わらず暇そうで羨ましいわ」

菌に衣着せぬ物言いと俺に声を掛けたのはパプニカの姫——レオナ姫だった。

「おかげさまで。姫様もいつもと違って今日は忙しそうだね。何かあった？」

「おい、トーヤ。レオナ姫に対して無礼だぞ」

レオナ姫に連れ立って歩いてきたアポロが前に出て俺を非難する。無礼なのはお互い様だろうが、俺だけじゃなくて姫さんにも言えよ。

「いいのよ、彼はこの国の人間じゃないんだから。それに前にそういうのは止めてっ  
て私が言ったんだもの」

元々形式的な口上だったのか、アポロはそのまま黙って素直に後ろに下がる。その更に後ろに控えるエイミが俺を睨んだような気がした。

そんな視線も慣れたもので、俺は気にせず話を続けた。

「で、何かあったの？ 城もそうだけど、街中なんかざわついてる気がするんだけど」

「何かどころじゃないのよ。ついこの間私の命が狙われたんだから」

「ええっ!? 大丈夫ー夫だったんだよな。それにしても一体どうして」

「立ち話もなんだし、お茶でも飲みながら話しましょう。一日中会議ばかりで疲れちゃったわ」

言いながら歩き出し、その後をアポロとエイミは慌てて追いかけた。俺もそれに倣う。

「ーでね、いつも窮屈なのにこれからはこんな風にボディーガードをつけるって言うのよ。頭きちやうわ」

「あ、ああ。大変だな」

レオナ姫の話を聞き始めてから1時間。俺はずっとこの調子でレオナ姫の愚痴を聞き続けていた。

「どうやらパプニカの司教率いる一派がレオナ姫の暗殺を目論んだことに端を発しているようだ。」

暗殺事態は見ての通り失敗に終わったようだが、他にどこの誰が暗殺を目論んでいるかわからない。しばらくは護衛をつけるという形で会議は終結したそうだ。

レオナ姫の後ろに佇んでいるアポロとエイミは護衛ということなんだろう。レオナ姫の気持ちも分からないではないが、四六時中護衛しなければならぬこいつらとしても堪ったものじゃないだろう。

「姫、ここにいらしたんですね。あら、トーヤも来ていたのね」

レオナ姫を探していたのか、マリンはレオナ姫を見るなり歩み寄った。

「王が探していましたよ。次の会議が始まるのにどこへ行つたんだって」

「またなの？ いいじゃない別に。私なんていてもいなくても勝手に会議は進むんだから」

レオナ姫は苦言を漏らすと机に項垂れた。動き出す気配がないところを見ると会議に行くつもりはないようだ。

「そういうえば暗殺未遂ってかなりの重大事件な気がするけど、被害者とか怪我人はでなかつたのか？」

「・・・何人かは兵士に犠牲者もでたわ。私もかなり危なかつたわ」

「そっか・・・それは残念だったな。でもお前たちは無事でよかったな」  
本心から彼らの無事を喜んだのだが、その一言で何故か皆の表情が暗くなった。

「ー私がついていければ姫を危険にさらすことはなかった。ムリを言つてでも付いて行くべきだったんだ」

「ふーん。お前らはついていかなかったのか」

「ええ。バロンー別の賢者も護衛についていたし、私達も他に仕事があったから。まさか自ら護衛を買つて出た彼が暗殺計画に加担していたなんて思いもよらなかつたけど」

マリンも付いて行かなかつたことを悔やんでいるのか表情を曇らせている。なるほど、護衛についていたやつが暗殺者だった。そりや会議も難航するわな。

「お前らの内一人でも付いてれば簡単に撃退できただろうしな。相手もそれを見越してわざとお前たちが来られないようにしたんだろ。つてかよくレオナ姫はそんな中で無事に帰つてこれたよな」

暗い話はしたくないので、話題の転換を試みる。

「そうなのよ、聞いて頂戴っ。なんとね、私を助けたのはちっちゃい男の子なのよっ」  
まるで水を得た魚のように息巻いて話すレオナ姫。どうやら話たくて仕方なかつたらしい。つていうかちよつと待て！

「テムジン達が用意したモンスターを一人で退治して、毒に侵された私を守ってくれたのよ。きつと将来立派な勇者になるわよ、あの子」

男の子ってダイのことだよな。俺の知らない間にそんな重大イベントが発生していたなんて。

「へえー、す、すごいなあ。その男の子って今どこにいるんです。見てみたいですね」「ーなんて敬語なのよ」

動揺のあまり敬語になってしまった。

「まあ良いわ。その子はダイくんって言ってるね。デルムリン島っていうモンスターしかいない島に住んでるのよ。会うのは難しいんじゃないかしら」  
「やっぱりそうか。．．．ついに来てしまったのか、この時が。」

その後もしばらくレオナ姫による勇者ダイの武勇伝は続いた。．．．そろそろ帰りたいんだけど。

「私も立派に姫様やって、いずれダイくん之恩返ししなくっちゃね」

「．．．恩？」

レオナ姫が何気なく発したその言葉に、俺はつい反応してしまう。なんだろう、何か



忘れていたような気がする。

何だったか、何か苦言を呈してやろうとずっと考えていた筈なのだが。

・・・ああっ!!? 思い出した。

「そういえば、姫。恩で思い出したけど、俺もあんたに借りがあるんだった」

「え、何かしら。心当たりは何もないけど」

そうか、忘れてるなこいつは。そうか、そうなのか。ならばつきりと言ってやろう。

「このヤロウ。よくも勇者アバンに俺のこと話しやがったな。口外しないって約束だったじゃねえか」

「えっ!!? あ、あはは。・・・そ、そうだったかしら」

笑って誤魔化そうとしているのか、目を逸らしてバツの悪そうな顔をする。

マリン達もそのことは知らなかったのか若干レオナ姫を責めるような目で見ている。

「口外しないってのを条件にタダでアイテム譲ったのによお。・・・頼むぜ」

「た、確かに悪い事をしたかなあとは思ったけど。相手があの勇者アバンだったから・・・つい」

ついで情報漏らされたら堪ったものじゃない。俺は呆れてため息を吐いた。

「で、でもほら。考えても見てよ。そんな便利なものがあるんだつたらもつと有効に活用するのが世のためつてもものよ。勇者アバンなら絶対に悪用なんてしないでしょう

し」

その言い訳を聞いて更に俺は呆れてしまった。

「あーあ、せっかく信用して手を貸したつていうのに。ひでえ話だよな、信じて裏切られて」

同じようなことをされても困るので敢えて意地悪な言い方をする。レオナ姫の言う通り、アバンならまだいい。しかし、他の王国にでも知られたらどうなるかわかったものじゃない。

「最初のうちは感謝してても、事が終わればすぐにそのことを忘れちゃう。信じた俺がバカだったんだ」

レオナ姫はしつかりしてるし、この程度でも言っておけば同じことはしないだろう。とはいえ雑談という雰囲気では無くなってしまったため、俺は帰ることにした。

「ど、どこへ行くの?」

立ち上がる俺にマリンは声を掛ける。

「帰るわ。じゃあな」

簡潔にそれだけ伝えると、俺は城を後にした。

「ふうう、ついに来るのか」

自宅へ帰り、遠出の準備をしながら気合を入れる。

またしばらく留守にするつもりなので、家財はすべて洞窟の奥に作った鉄扉の奥の部屋に閉まっておく。

この家は洞窟を掘って家になっているため、セキユリティが甘々なのだ。最初は気にしていなかったが、俺の噂が広まりはじめたとあつてはそうもいかない。

今では貴重品はすべて洞窟の奥に作った鉄扉の向こうだ。鉄扉は岩壁と同色、それに洞窟内は薄暗いためその存在を俺以外が気付く可能性は低いだろう。

家の入口に普通に扉を作るよりも、こうした方が安全である。ある程度の呪文を使えるものならば破壊して押し入ることなど簡単だからだ。まさか入口に扉もなく、生活感まで出しているくせに奥に扉があるとは夢にも思えない。

準備を終え、さっそく出かけることにする。気のせいか体が震えているような気がした。

これは武者震いなんかじゃない。恐いのだ、戦うことが、戦って死ぬことが。

「よしっ！　行くか、デルムリン島へ」

大声を上げ、自分を鼓舞する。恐いからといって今更逃げ出すことはできない。歩みを止めることも。

開戦のカウントダウン。それはすぐそこまで迫っているのだから。

## 29 小さな勇者

「そーれ、いちっ にっ さんっ もっと大きな声でっ」

手拍子でリズムを取り、それに合わせて少年は木刀を振る。

「いちっ！ にっ！ さんっ！ ー！ー」

モンスター島と呼ばれるここデルムリン島の砂浜で、俺と少年は特訓をしていた。

少年の名はダイ。いずれこの世界を救う勇者になる者の名である。

俺がこの島へ訪れたのは5日前。パプニカを出たのは10日前だ。

レオナ姫からダイの話を聞いた俺は、すぐにデルムリン島目指して旅立った。すべてはダイの特訓をするために。

原作では確かレオナ姫とダイのイベントから少しして魔王軍の侵略が始まったはずだ。

歴史を変えずにダイを特訓するにはこのタイミングしか思いつかなかった。アバンはこのあとレオナ姫とダイのイベントが終わった後にポップを連れてデルムリン島を訪れる。

ダイの修行期間がどれくらいだったかは覚えていないが、恐らく半月とかそんなものだろう。勇者育成のためのスペシャルハードコース。ポップがそれを受けると言ったダイを引き止めていたのが強く印象に残っている。

レオナ姫と知り合ってから既に三週間は経過している。魔王軍が攻め込んでくるまで残り半年あるかどうか。

何故アバンに直接頼まずに俺がやっているのか。それには俺なりに理由があった。・・・ダイにとって酷な理由だが。

それは措いという、今は特訓である。一番の懸念事項であったダイの籠絡はあまりにもあつさり上手くいった。

ダイは俺がパプニカから来たという事と、何度かパプニカを襲ったモンスターを退治したことがあると教えたなら自ら特訓を志願してきた。

勇者に憧れている子供だけあつてその辺は単純で助かった。

「でやつ はっ！ りやあああ」

何度も打ち込まれる木刀を軽くないなし、距離を取ると鋒を下ろす。

「ー少し休憩にするか。疲れただろう」

「はあはあ、まだまだ。もっとできるよ、俺」

息を切らせて隙を伺うダイの目には強い闘志の色が見えた。流石は生まれながらの戦士といったところか。

「そう焦るなつて。休むのも修行の内だぜ。つていうか俺が疲れた」  
木陰まで移動すると、冷たいジュースをコップへ注ぎダイへ手渡す。  
礼を言つてコップを受け取るとダイはそれを一気に飲み干した。

「つくはあぁ。すつごく美味しいよ、これ」

「ははは、そりゃ良かった。まだまだあるからいっぱい飲んでくれ」

「魔法のケトル 1. 8L」

・液体を入れて1時間おいておく。注ぐときに飲みたいものを念じるとその通りのものが出てくる。どれもすごく美味しい上に、栄養満点。

・注ぎ口が2つあり、青い口からは冷たい、赤い口からは温かい飲み物が出る。

「あと1時間は休憩だから好きなことしていいぞ」

「だったらさ、トーヤの話もつと聞かせてよっ！ 戦ったモンスターとかさ、冒険で行った場所とかっ」

「良いけど、大した話じゃないぞ」





「とにかく、その場に偶然居合わせた俺は悲鳴を聞いて駆けだした」

俺はその時のことを思い出しながら何とかダイを楽しませようと言葉を紡ぎだす。

「駆けつけた先には小さな女の子とその父親らしい人が蹲って震えてた。その奥にはデスストーカーが斧を振りかぶってたんだ」

その様子を想像したのか、ダイは俺の話を固唾を呑んで聞いていた。

「正直、助けるかどうか迷ったよ。木刀しか持ってなかったし、そのデスストーカーも普通のやつ以上のデカさだったからな」

「で、でも。トーヤは助けにいったんだろう?」

「はは、そうだな。斧が振り下ろされるよりも早く走りだした俺は、その斧を白刃取りで抑えて叫んだんだ。『俺のことはいいから早く逃げろ』ってな」

キラキラした眼差しで感嘆の声をあげるダイ。その期待にこたえるために俺は更に続ける。

「その二人が無事に走り去るまでモンスターを引きつけた俺は、回りを見渡した。もう周辺には誰も居ない、モンスターと俺だけだ。城の兵士達も駆けつけるには時間が掛かるだろう」

「・・・そ、そんな強そうなモンスターと1対1。そ、それから?」

「あとはなんやかんやでモンスターを倒してめでたしめでたし。被害もかすり傷程度

の怪我人が数人。みんなハッピー。そんな感じだな」

「たはっ ト、トーヤあ。そりやないよお。一番いいところだったのにい」

拍子抜けしたダイがズッコケて抗議してくる。

「木刀で頭ぶつ叩いたらー発で沈んじやったんだからしようがないだろ。俺だって命がけで向かったのにあっさり終わったから驚いたんだぞ」

こうして俺の武勇伝は微妙な感じで幕を閉じた。しかし、ダイはそれでも十分満足したようで楽しそうな表情をしていた。

特訓の目的はダイの基礎能力の向上にあった。原作のダイはアバンからの特訓をドラーの襲撃に邪魔されれ途中で中までしか受けることができなかった。

大地を斬り。海を斬り。空を斬る。それらすべてを習得した後で完成するのがアバンストラッシュ。

ダイがそのアバンストラッシュを完成させるのは空の技である空裂斬を覚えた直後。フレイザード戦の時だ。

アバンの技の中で一番難しいのが空の技とされており、その習得は一朝一夕にはいかないという話だ。

仮にアバンのスペシャルハードコースを1ヶ月と考えた場合。確かダイは半分くらいしか特訓を受けていなかったから半月くらい期間と予想できる。

1週間で大地斬。2週間で海波斬って感じだろう。残りの2週間で空裂斬を教えるつもりだったんじゃないだろうか。

俺との特訓により基礎能力のが高まったダイならばハドラー襲撃までの間に空裂斬を覚える可能性は十分にありえる。

空裂斬を覚えた程度でダイがハドラーを倒せるとは思えないのでこの程度は予定調和の範疇だろう。続くクロコダインやヒュンケルも素の状態のダイなら厳しい相手だ。

ダイにはポップ達との冒険を通して成長してもらわなければいけないんだ。身体ではなく心の。ダイの冒険は紋章を使いこなすための冒険といっても過言ではない。

そして竜の騎士の紋章の力は心の影響が大きいのと思う。もしかしたら人の血を受け継いだダイだけが特別なのもかもしれないが……。とにかく心の影響という点では『念』を使う俺も同じなのでよく分かる。

自分の心や意思の強さがそのまま力になるのが『念』の特徴だ。原作において何度も意思の力で紋章を操っていたダイもきつとそうだ。

成人するまでは自由に紋章を使えないとダイの父親である balan は言っていたが、それは強大な力を意思で抑えこむことができないからだろう。balan 自身、竜魔人と化し

た己の心を制御しきれていなかった。

だから、俺はダイにあえてアバンがハドラーにやられるところを見せることにした。これはアバンにも話せないことだ。

子供のダイには酷なことかもしれないが、俺にはダイ抜きでバーンを倒す手段が思い浮かばない。……すまない。

そんなことを考えているなんてことを知る由もないダイは、今も無邪気に木刀を振り続けるのだった。

## 30 真の勇者

「ねえ、トーヤ。この間の話なんだけどき」

今日の特訓を終えると、ダイはおもむろに俺に質問をしてきた。

「この間ってなんだ？ なんの話だったか・・・」

「あれだよ。街中にモンスターが現れて退治したってやつ」

「あー、あれな。どうかしたか？」

「うん。前にトーヤは自分のことを勇者じゃないって言ってたけどさ。やってることは勇者と変わらないじゃん。どうしてトーヤは勇者じゃないの？」

「ダイと出会って半月は経った。四六時中一緒にいれば結構仲良くなるもので、それこそ色んなことをした。」

おいしい果物が群生している場所や景色が綺麗な場所など教えてもらったり、洞窟の中を探検したりした。勇者の話もそんな時に軽くでてきた内容だった。

ダイは俺のことを勇者じゃないかと言ってきたのだ。もちろん俺はそれをすぐに否定した。勇者どころか兵士にも劣るとダイに語ったのだった。

「モンスターから街の人達守ったんだよね。それって勇者と同じだと思うんだけど」

「違う違う、全然違うぞ。勇者つてのはなあ、どんな悪にも果敢に立ち向かって行って、誰からも頼りにされてて・・・正義の塊のようなヤツのことを言うんだよ」

「でもトーヤだつてモンスターに立ち向かつて行つたじゃん。パプニカの王様からご褒美もらつたり町の人から感謝されたりしたんじゃないの？」

「え?・・・褒美・・・感謝か。うーん」

言われてその時のことを思い出す。あの後は確かー

「確か兵士に怒られたな、『モンスターを刺激して被害が広まったらどうする。次からはむやみに手を出すな』つて」

「うそっ!?!・・・そ、そうだ。助けた街の人は? トーヤに感謝してたでしょ」

「いや、むしろそんなバケモノを軽く倒したつて噂のせいで微妙に怖がられてたな」  
「な、なんでっ。せつかく頑張つたのに」

冗談で済みそうな話なのに何故かダイは悲痛そうな表情をする。いかん、これではダイの中の勇者像がピンチだ。

「ま、まあ。そういうこともあるよな。でも俺は別に何とも思つてないぜ」

「ど、どうして。そんな目にあつてるのにトーヤは平気なんだよっ。みんなのために頑張つたのにそんなのつて酷いよ・・・」

「そうか? 俺は普通の反応だと思うぜ。兵士が怒るのも、街の連中が俺を怖がるの

も」

曇るダイの表情を晴らすために努めて明るく振る舞う。

「もちろんムカつくぜ。身体張ってモンスター倒したのに怒られるなんてき。でも、もし俺がそのモンスターにやられてたらどうだ？」

「トーヤがやられていたら？」

「ああ。もしそうなっていたら兵士の言う通り刺激されて興奮したモンスターのせいで被害がもっと大きくなっていたかもしれない」

モンスターと暮らしているダイには興奮したモンスターがどれ程厄介か分かるのだろう。納得はしていない様だが押し黙ってしまった。

「街の住民の反応も当然さ。自分たちじゃ敵わないバケモノよりも強いやつが目にいるんだからな。本心とは関係なく、恐怖ってのはそういうもんだろ？」

「・・・そうだね」

ダイなりに思うところがあるのか難しい顔をして考え込んでいた。そんなダイの頭に手をおき、クシヤクシヤと撫で回す。

「うわ、わわっ。トーヤ、何するんだよ」

「言つたる？　めでたしめでたしって。誰も怪我をしなくてよかった。俺はそれで十分だぜ。そんなちっちゃいこと気にすんなよ」

「・・・それで十分か。ははっ。そうだよねっ」

笑う俺につられてダイも笑顔になった。

ダイは優しい男の子だ。人の痛みや悲しみを分かち合うことができる。だからこそ人の醜い部分にも敏感に反応してしまう。

きっとダイはこの先何度も同じ疑問や悩みを抱くことになるだろう。ならばせめて今だけでも笑って過ごして欲しい。

その楽しかった思い出が、いつかきつとダイを支えてくれると信じて。

デルムリン島へ訪れて2ヶ月が過ぎた。

ダイの特訓は上手くいったと考えていいだろう。俺の役目も終わりの時がきた。ダイと別れるのは寂しいけど、アバンとの修行の邪魔をする訳にはいかない。

魔王軍の進撃が始まる前にこの島を立つとしよう。

俺はパプニカでまだやることがあると行ってダイに別れを告げた。それを聞いてダイが泣きながら別れを惜しんでくれたことがとても嬉しかった。

荷物を纏め、昼に島を出ることを伝える。するとダイは最後にもう一度稽古をつけて欲しいと頼まれた。



「はああああ。でりやあああつ」

「ふんツ！」

袈裟斬りに放たれた木刀を鐔で受け止めそのまま腰を入れて押し返す。

「うわっー。いてて」

押された勢いで思い切り飛ばされ、ダイは砂まみれになっていた。

「大丈夫か？」

駆け寄り手を差し伸べる。するとダイは俺の手を掴んで笑った。

「やっぱりトーヤは強えや。いつかトーヤより強くなれるのかな」

「そんな弱音吐いてちゃまだまだだ。パプニカには俺と同じくらい強いアポロ達もいるんだぜ？ そいつらを超えないとレオナ姫はお前を勇者だつて認めないだろうなあ」

「アポロつて確かパプニカの三賢者だつて。そんなに強いのが三人もいるのか。凄いなだね。パプニカつて」

実際は俺の方が強いだろうけどな。

「ま、頑張れよ。次に会うときには俺より強くなつてろよな」

「げええ。そんなのムリに決まつてるじゃん」

「・・・ダイ。最後に俺から良いことを教えてやろう。勇者としての心構えつてやつだ」

「勇者っ。なにになっ？」

勇者と聞いてダイは過敏に反応する。

「勇者には絶対に負けちゃいけない相手がいる。それは誰だと思う？」

「負けちゃいけない相手……。うーん、魔王……。かなあ」

「違う。絶対に負けちゃいけない相手。ーそれは自分自身だ」

「ー自分自身」

「そう。どんなやつに負けても、自分にだけは負けちゃいけない。それが勇者にとつて一番大切なことなんだ。つて俺は思うぜ」

俺の言葉をどう受け取ったのか、ダイは噛みしめるように俺の言葉を繰り返して呟いた。

「俺に最初から勝てないなんて考えるなよ。お前はきつと強くなる。そう信じて頑張れ」

「うん、そうだね。俺、頑張るよ」

やる気に満ちたダイの返事に満足し、俺はデルムリン島を後にした。次に会う時が楽しみだ。

『同行』により一瞬で自宅へ帰還した俺は、恐らくあと1ヶ月後に控えているであろう魔王軍との戦いに備えることにした。

つい最近ようやく作ることに成功したあるスペルカード。そのカードを可能な限り準備しておきたい。

「大天使の息吹 ランク S 回数 1」

・あらゆる怪我や病気を一息で治してくれる天使。一度治すと消えてしまう。

ハンターハンターのグリードアイランドで出てきた最高峰のカードだ。これを完成させるのに相当苦労した。

作り方もわからずアイテムと時間を浪費するばかり。本当に諦める寸前だった。成功したのは偶然である。

そのきっかけは長年の疑問であった『ランク』にあった。ついにこの謎を解くことができたのだ。

このランクとは成功率のことだった。それをアルファベット順にすると以下のようになる。

S 5%

A	20%
B	40%
C	60%
D	80%
E	95%
F	100%

これに気づいてから検証するのに膨大な時間を費やした。よく調合する『同行』はランクFのカードのため、失敗することは無かったために気付くことができなかつた。

ランクの意味に気づいたのはランクAの『贗作』を作っている時だつた。元々失敗することが多いカードだとは思つていた。

『贗作』たいして役に立つカードではなかつた。しかし失敗するということは調合難易度の高いカードだということだ。ならば繰り返し繰り返し調合すれば成長できると思つた俺は何度も何度も繰り返し繰り返し調合し続けた。

1ヶ月以上それを繰り返し続けたが成功率はまるで変わらなかつた。しかし大体5回に1回成功するので、もしかやと思つて他のランクのカードと成功率を比較してみた結果、先ほどの結論へ至つたのだ。

『大天使の息吹』はその結論を元に延々と調合作業を繰り返した末に作り出せた産物

である。

さすがに『大天使の息吹』となると貴重なアイテムを多数使用するため、失敗するのはかなり痛い。カードの使用回数を増やした方がかさばらなくて便利だが、失敗したらオシヤカになってしまう。ランクの高いカードは諦めて複数枚所持するべきだろう。

本日すでに10回目の調査失敗により俺は少なからずショックを受けている。

『ヒーリングサルブ』? 5 『ネクタル』? 2 『フェニクス薬剤』? 2 『エリキシル剤』? 1

最低でもこの数の回復アイテムが必要になる。『ヒーリングサルブ』は薬草でいくらでも作れるから良いとしても、他のアイテムはそれぞれ調査した特別なアイテムを使つて作るアイテムだ。手順を踏まねばできないために手間暇がかかる。ムダにすることはできない。

しかも1回調査するのに湯を沸かすことから始まるために時間がかかる。今更ながらにこんな時間に追われるなんて思わなかった。

失敗に次ぐ失敗により俺の心は疲れきっていた。気分転換をしようと鉄扉から外へ出る。

「ぎゃあああつ!?!」

扉を開けてすぐそばに招かれざる客がいたため、驚いて大声を上げてしまった。

その招かれざる客とは腐った死体であった。それも3体。普通のモンスターならともかく、腐った死体は普通にホラーだ。だからさっきの叫び声は当然だよな。

「お、お、お驚かしやがってっ。気持ち悪いなあ、もう」

そそくさと鉄扉の奥に戻ると木刀をとって戻り腐った死体を撲殺する。頭部を数度殴打すると腐った死体は動かなくなった。

この辺ではあまり見ないモンスターだな。しかもよりにもよって俺のいる洞窟に入ってくるなんて。

死体を洞窟の外へ引つ張りだして森へ向かって投げ捨てる。ちよつと残酷な気がするけど、ほつといたら洞窟が臭くなるから仕方ないよな。

洞窟へ戻ると家具がボロボロになっていた。犯人は腐った死体だろう。

鉄扉を頑丈に作り過ぎたな。まるで外の物音に気付かなかつた。

「まあ良いか。これからは扉の奥で生活するつもりだし」

かたすのも億劫だったので散らかつた部屋はそのままにすることにした。

「ん?」

洞窟から外へ出ると遠くから何やら音が聞こえてきた。微かに聞こえてくるそれは

花火のようだった。

「・・・祭りか。そういえば去年もこれくらいの時期にパプニカで祭りやってたっけ。こんな時じゃなければ行きたかったなあ」

そういえばマリン達にも数ヶ月間会っていない。『大天使の息吹』を数枚完成させたら会いに行くかな。

気分転換に外を軽く散歩した後、俺は数日間扉の奥へ籠もるのだった。次にここから出るときは魔王軍との決戦になるだろう。

### 3 1 念能力&アイテム紹介

話も長くなってきたので、ここでトーヤくんの念能力と不思議アイテムを纏めようと思います。

#### ◆ 名前 ◆

「トーヤ」

本名 室田遠矢（むろた とおや）。前の世界では平凡な社会人をやっていた。病気による突然死をきっかけに異世界へ転生した。

HUNTERXHUNTERをこよなく愛する普通の男性。他に特筆するべき点は無し。

神様からはHUNTERXHUNTERで出てくる『念能力』とそれを使う『才能』の2つのチートを貰った。SS内での現在の年齢は20歳。前世も足すと中年である。

#### ◆ 念能力 ◆



### 【靈丸】放出系

- ・一日に4発しか使えない。
  - ・それぞれ1発使用した後、24時間の間隔が必要。
  - ・連射はできない。1発毎に1分のインターバルが必要。
  - ・5発以上使用を試みた場合、発動しない。
- ※読者様からの指摘により補足致します。

最大装填数4発の銃があるとして、1発を撃つ後に次弾装填に24時間の間隔が必要という意味です。

表現力が不足しているためこれでご理解いただけるか分かりませんが、あとはニュアンスで受け取って戴けると嬉しいですよ。

### 【強制する指輪】操作系

- ・指輪をはめたものは強制的に『堅』の状態になる。
- マリンから貰った祈りの指輪のリング部分に念を込めて作った能力。子供の頃は左手の親指に嵌めていたが、大きくなってからは左手の小指に嵌めている。

### 【蓄える指輪】操作系

- ・この指輪を嵌めた状態で生み出されたオーラの3割は指輪に吸収される。
- ・吸収されたオーラは、この指輪に『周』をすると還元される。
- ・この指輪のオーラを直接肉体の強化に使うことはできない。

道具屋で買った普通の指輪に念を込めて作った能力。指輪に込められたオーラは別能力を発動させた際の補助として使用可能。

能力を作ったトーヤ本人でさえ気づいていないが、『強制する指輪』と『蓄える指輪』は同一の能力である。

トーヤの念能力の本質は指輪を使用した『自身を操作する能力』である。そのため「強制的に絶にする」「強制的に○○する」という指輪を作った場合、自身にかける場合に限り一つの念能力としてみなされるため、同時に発動可能。

#### 【旧文字】 操作系 放出系

『蓄える指輪』のオーラを込めたペンを使用し、対象物に文字を書き込むことで、その文章通りの効果を得る。

- ・文字はその使用者が読み解けない場合発動しない。
- ・誤字脱字がある場合発動しない。

HUNTERX HUNTER原作に出てきた神字をアレンジした能力。『蓄える指輪』を経由して書かれた文字はトーヤの想像した通りの能力を再現しようとする。

オーラ量をいくら大きくしてもトーヤ本人にできないことは再現できない。逆に少しでもできることであれば再現可能。しかしその際は実力に応じて膨大なオーラが必要になる。

「錬金釜（アルケミー） 一強化系 変化系 具現化系 操作系 放出系

・沸騰したお湯が入った釜にアイテムを入れてかき混ぜると想像した通りの物を作る  
ことができる。

・釜に入れるアイテムはお湯に入りきっていないとアイテムと認識されないので注意。

あらゆる念の籠もった複合能力。釜に『旧文字』を使用することでできた新たな能力。トーヤは新たな念能力ではなく『旧文字』による便利アイテムだと勘違いしている。実際は『旧文字』にブーストされたハイブリットな能力である。

調合の際に『蓄える指輪』↓『旧文字』↓『錬金釜』と経由してオーラは使用される。本人は気づいていないが『蓄える指輪』のオーラはガンガン減っている。

## ◆ スペルカード ◆

〔同行（アカンパニー） ランク F 回数 1〕  
 ・カード名を読み上げ、起動（オン）と唱える。その後、場所か人の名称を宣言すると発動する。

・呪文の使用者を行ったことのある場所か会ったことのある人の元へ飛ばす。

〔再来（リターン） ランク E 回数 1〕

・指定された場所にある荷物を、宣言した場所や人の元へ飛ばす。

・場所の指定には『道標（ガイドポスト）』が必要。

〔道標（ガイドポスト） ランク E 回数 1〕

・人や物、場所を記憶させることができる。

※記憶したものは使用後の『道標』のイラスト部分に記される。

〔大天使の息吹 ランク S 回数 1〕

・あらゆる怪我や病気を一息で治してくれる天使。一度治すと消えてしまう。

〔贗作（フェイク） ランク A 回数 1〕

・人や物に使用すると本物そっくりにカードその形や大きさを変える。見た目と触感

は本物と見紛うほどそっくりとなる。

・24時間経過するか、形状に大きな変化を加えられると消滅する。

## ◆ 錬金アイテム ◆

## 【 祈りの手袋 】

- ・ 装備者のMP消費を僅かに抑える。

## 【 スケルトンメガネ 】

- ・ アイテムの主効果をみることができ。

## 【 祈りの腕輪 充填速度 小 】

- ・ 放っておくと僅かに宝石に魔力が蓄えられていく。

- ・ 祈りを捧げることで使用者のMPが回復する。

## 【 法力の指輪 充填速度 中 】

- ・ 装備者のMP消費を抑える。

- ・ 放っておくと宝石に魔力が蓄えられていく。

- ・ 祈りを捧げることで使用者のMPが回復する。

## 【 湧水の器 】

- ・ きれいな水が常に一杯になっている不思議な器。少しでも減るとその分すぐに湧いてくる。

・湧いてくる水の量は18,000リットルまで。蓋をして一日経過するとまた湧くようになる。

【美肌入浴剤】

・この入浴剤をお風呂に入れるとあらゆる肌の悩みが解決する。疲労回復効果あり。

【快眠枕】

・この枕に頭をのせて眠ると4時間で8時間寝たのと同じくらいぐっすり眠れる。枕に頭をのせていないと意味が無いので、寝相の悪い人は注意。

【栄養剤 500ml】

・土地を豊かにする液体。撒くだけでどんな植物でも早く成長する。使う場合は1,000倍に希釈してから使ってね。

【豊作の苗】

・枝ごとに異なる種類の実がなる不思議な木の苗。毎日必ず1つ果実を実らせる。成長を終えると普通の果樹になる。

【魔女のケトル 1.8L】

・液体を入れて1時間おいておく。注ぐときに飲みたいものを念じるとその通りのものが出てくる。どれもすごく美味しい上に、栄養満点。

・注ぎ口が2つあり、青い口からは冷たい、赤い口からは温かい飲み物が出る。

## 【ヒーリングサルブ】

・切り傷、擦り傷によく効く塗り薬。スキンケアにも最適。

## 【メンタルウォーター】

・香りと味で頭をスッキリとさせる効果がある特殊な飲み物。

## 【神秘のアंक】

・様々な加護がある不思議なアंक。一説では精霊が宿っているとされている。

※トーヤはSS内で戦闘不能回復とっていたが、それはゲームでの話でこの神秘のアंकにはそんな効果はない。

## 【ネクター】

・刺激物が多く含まれる危険な飲み物。気付け薬としても用いられる。子供に飲ませるのは、あまりおすすめできない。

## 【フェニクス薬剤】

・どんな病気でも治すという奇跡の薬。寿命には効かない。

## 【エリキシル剤】

・「不老不死の薬」「奇跡の薬」など様々な通り名を持つ、最高の薬。実際は不明。

以上。トーヤくん&アイテム紹介でした。

念は全部で4種類。能力数が多い気もしますが、ゴンキルと同じくらいに才能を貰っているので大目に見て下さい。クラピカでさえも5つ持つてるので、きっと大丈夫。



## 32 戦乱

世界各地で起こった魔王軍の進撃。ここパプニカ王国も例外ではなく、厳しい戦いを強いられていた。

「――港だっ！ 港にまだ逃げ遅れた人達がいるぞっ！」

とある兵士の声が城内で響いた。しかしそれはこの兵士に限った話ではない。そこかしこからあらゆる人間の怒鳴り声ともとれるような声が響き渡っている。

不死騎団の攻勢が始まって10日。パプニカはよく持っている方だ。

ここパプニカのあるホルキア大陸は、かつて魔王ハドラーの居城があつた地である。それ故に魔王軍の進軍もより一層激しいものとなっていた。

その激しい攻撃を辛うじて押さえ込んでいただけでも称賛に値するものである。

それも限界。このままでは城が落とされるのも時間の問題だろう。彼らは選択を余儀なくされていた。すなわち、国を捨てる選択を。

「本気ですかっ!? 国を捨ててどうなさるといふのですっ」

パプニカ王の決断に周りの者達は一様に驚きの声を発した。

「仕方あるまい。戦線は少しづつ城へ迫っておる。ここは一旦離脱し、体制を立て直

すのだ」

「しかし、民はどうするのですっ!? 城の兵士はっ!」

「わかっておるっ! しかし他に手立てがないのだっ」

王の間を怒鳴り声が飛び交う。しかし不死騎団の襲撃以来この光景は見慣れたものとなっている。国中どこもかしこも余裕もなく焦るばかり。

国の終焉は確実にすぐそこまで迫っていた。

「浮かない顔だな。我らがそんな顔をしていては周りの者達も不安がるというもの」

王の間と離れた別室でアポロはマリリンに声を掛ける。そういったアポロの顔にも疲労の色が濃く現れていた。

「・・・アポロ。仕方がないでしょう、敵は不死身の軍団で普通の兵士たちじゃ歯がたたないのよ」

不死騎団の一番厄介なところは力ではなく、その特性にあった。骸骨剣士を中心としたその布陣は力そのものは大したことはなかった。

それこそ兵士の中でも実力の劣るものや、街の力自慢でさえも簡単に撃退することができた。——問題はやられてもすぐに再生するその不死性にあった。

不死騎団は名前の通り死なないのだ。倒しても倒しても何度でも復活する。それに対処できるのは国の数少ない僧侶や魔法使い、賢者だけだった。

そして厄介な特性はもうひとつ。彼ら不死騎団には疲労というものがない。朝でも夜でも昼間でも、いつでも同じ勢いで攻撃を続けてくるのだ。

どんな生物でも活動時間というものがある。例えばモンスターであっても昼行性か夜行性かはあつて然るべきである。しかし、元々死んでいる彼らには生き物らしい習性は存在しなかった。

結果としてパプニカはこの10日間休む間もなく戦線を維持し続けることとなつて  
いる。

「マリリン。私が言いたいのはそのなことではない。彼のートーヤのことが気になる  
のだらう」

「それは……。そうだけど、でも」

その先を口にすることはマリリンにはできなかった。それを口にしてしまつたら確か  
めずにはいられなくなつてしまいそうだったからだ。

3ヶ月前、トーヤはレオナ姫を糾弾し帰つていった。それ以来トーヤは姿を見せな  
い。今の城の現状を考えるとその方が良かったとも思えるが、同時に不安でもあつた。

マリリンはトーヤの事を子供の頃からよく知っている。半月に一度。間隔が空いても

一月に一度は必ず顔を見せに来るのだ。

それが3ヶ月も音沙汰が無い。トーヤはパプニカを去ったんじゃないか。そんな不安をずっと抱えていた。

「……こんなことになるのなら、もつと早く彼に会いに行けばよかった。そうすれば……」

謝ることができたのに。とマリンは後悔していた。

マリンはトーヤの事をよく知っている。それ故に思うのだ。ルーラでいつでも駆けつけることができるはずなのに、トーヤが現れないのはパプニカという国を見限ったから。あるいはルーラを使える状況にない。つまりはもうこの世にはいないのではないかと。

前者であればまだいい。見限られたことは悲しいが、それでも落ち度は自分たちにあるのだと納得できる。しかし、後者だったら……。

そう思うだけで、マリンは全身の力が抜けそうになった。不安を拭うために彼から貰った指輪を見るが、より一層悲しみが込み上げてきた。

「見てられないわね。そんなんじゃないや護衛なんて怖くて任せられないわ」

「――姫」

混乱の只中であつて尚、気丈なレオナ姫がマリンへ声を掛ける。

「つい今しがた決まったわ。今夜この城を捨て、別の地へ避難するわ。あなたたちにはそれまでの戦線の維持と避難の際の護衛をしてもらおうわ」

「わかりましたっ！」

レオナ姫の命令にアポロはすぐさま返事をする。マリンはというと返事こそすれども、心ここにあらずといった具合だ。

「マリン。あなたにはそれに加えて別の任務があるわ」

「は、はいっ」

直接名前を呼ばれたことにより、マリンは即座に姿勢を正した。

「あなたには近隣の森へ行き、トーヤの搜索をしてもらおうわ。そして協力を仰いで頂戴。魔王軍と戦うために」

それはレオナ姫なりのマリンへの心遣いであつたが、それを受けるのは躊躇われた。この状況下においてマリン程の実力者が戦線から長時間離れる訳にはいかないのだ。

「そ、それは。私が離れては他の兵たちの士気が・・・」

「それについては問題ないわ。エイミがあなたの分も戦線へ出るそうよ」

「ーエイミが・・・分かりましたっ。その任務必ず成し遂げてみせます」

一刻の時間も惜しい。マリンはレオナへそう告げるとすぐにパプニカを立とうとした。

「ちよつと待つて。ローもし、彼が協力を受けなかつたら……一言だけ伝えて頂戴。……約束を破つてごめんなさいって」

そう言つてレオナは諦観とも悲哀ともつかない表情をした。

「ロー姫。必ず伝えます」

そしてマリンは走つた。トーヤのいる森を目指して。

鬱蒼とした森の中をマリンは走り続けていた。パプニカからトーヤの住む洞窟まではかなりの距離がある。

早朝ではあるが今夜にはパプニカから避難しなければならぬので、残り時間に余裕があるとは言えないだろう。

息を切らせながら一心不乱に森を駆け抜ける。その足は時間がないこと以上に彼を思う気持ちに突き動かされていた。

ようやく辿り着いた洞窟に入り、彼女は絶望した。

トーヤの住んでいた洞窟はメチャクチャに荒らされていたのだ。

走っている最中、彼女はずっと考えていた。最初にあつたら彼になんて謝ろうかと。期待を裏切つてごめんなさい。私達を許して欲しい。私にできることなら何でもする。

きつと彼なら笑って許してくれるんじゃないか。そんな淡い期待を抱いていた。：：  
さつきまでは。

レオナから彼への伝言を受けたとき、内心彼女は喜んでいた。レオナはトーヤが生き  
ていることを信じている。だからきつとトーヤは生きているんだろうと。

レオナを信じるマリンだからこそ、その言葉に絶対の自身を持つていた。謝って許し  
てもらえなくても生きてくれてさえいればそれで良い。そうマリンは考えていた。

ーしかし、甘かった。トーヤは強い。だからきつと生きているなんて樂觀的過ぎた  
のだ。魔王軍の猛攻にたった一人で耐えるなんてことできるはずがないのに。

亡骸はない。しかし生きているのなら必ずトーヤは駆けつけてくれる。そんなこと  
分かっていたはずなのに、と。

洞窟の前で佇んだまま、彼女は一人で涙を流した。

洞窟やその周辺を確認したところ、やはりここにも不死騎団の襲撃があったようだ。  
すぐ近くに動かなくなった腐った死体を見つけた。最初みたとき、マリンそれをトー  
ヤの亡骸かと思ったがすぐに違うことに気づくと安堵の息を吐いたのだった。

しかし彼女は思った。こうして生きているのか死んでいるのかも分からないままこ  
の先ずつと彼のことを思い続けるのかと。

どことも知らない地で、誰にも知られずに腐ちていくであろう彼のことを考えると胸が切なくなつた。

ままならない想いを抱えたまま、彼女は洞窟を去るのだった。

——洞窟の前に一輪の花を添えて。



## 33 離脱

「はあはあ。——ヒヤダルコツ」

眼前に突如現れた骸骨剣士を凍りづけにして、エイミとレオナは城を走る。

すでに50を超える敵を倒している。不死身の軍団の魔の手を掻い潜り彼女たちは先を急いでいた。

着々と避難の準備が進む中、その報せは届いた。

——城門が破壊された——

籠城していた城の者達や街の人達はその報せに恐怖した。誘導する兵士たちの声も届かず、彼らは一心不乱に逃げ出した。

王家の者達は近衛の騎士や魔法使いと共に隠し通路を使って脱出を試みた。

幸い不死騎団は戦鬪力では他のモンスターに劣るため、逃げるだけなら街の者たちでも辛うじて可能であった。

蜘蛛の子を散らすように城を離れる住民たちにモンスターは追撃を仕掛けなかった。彼らの目的はパプニカの壊滅。城の占拠にあったからだ。

しかし、王家であるレオナは別である。不死騎団は執拗にレオナを追い立て脱出を阻

んだ。住民が逃げ出した後の城内には、入れ替わるようにモンスターが入り込んでいた。

それが30分程前のことである。

現在レオナとエイミは潜伏していた城の地下室から抜け出し屋上を目指していた。幸いなことに気球の準備は整っている。後は屋上へ行き乗り込むだけで城を立つことができるだろう。……無事に辿り着ければの話だが。

最上階目掛けて走る彼女達を休む間も与えずモンスターは襲いかかった。

「……ヒャドっ」

呪文で凍りづけにしては先を急ぐ。

武器で砕こうが、呪文で吹き飛ばそうが何度でも復活する不死身の騎士。故に凍結させ動きを封じる。それが不死身の軍団に対する彼女たちの唯一の手段であった。

……ようやくやく辿り着いた最上階へ続く最後の階段。その目前の開けた場所にその騎士は佇んでいた。

全身に禍々しい鎧を纏い堂々と佇むその騎士の姿は明らかに常軌を逸していた。

レオナを自身の後ろへ庇い、エイミは息を呑む。

眼前の騎士の横をすり抜け、屋上の気球へと乗り込む。たったそれだけのことなのに

彼女たちは動けずにいた。

先に動いたのは騎士だった。手に持った剣を構えもせず ゆっくりと歩み出す。エイミはなんとかレオナだけでも屋上へ逃がそうと隙を伺うが、まるで活路を見出すことはできなかつた。——まさにその時である。

「メラゾーマっ!!」

迫り来る騎士を灼熱の炎が呑み込み視界を覆い尽くす。

「姫っ、エイミ。無事かつ。ここは私が引き受けるっ。早く屋上へっ」

「——アポロっ?! 無事だったのね……私も一緒にっ」

奇跡的ともいえる救援にエイミは驚きと喜びの声を上げた。

「あなた達も一緒に逃げるのよっ。この城はもうすぐ敵の手に落ちるわ」

城に残ると言う二人にレオナは待ったをかける。——彼らとレオナの間には微妙に齟齬があつた。

レオナは彼らが城へ残り城中の敵を引きつけようとしていると考えた。しかし、眼前の敵はそれほど甘くはない。彼ら二人は未だ炎に焼かれる騎士を見据えていた。

数度の会話を交わす間に、突如目の前の炎が切り裂かれる様に霧散した。そこには何事も無かつたかのように佇む騎士の姿があつた。

その姿をみてレオナは驚愕し、アポロとエイミは追撃の呪文を唱えるため魔力を溜め

た。

「エイミっ。君はずっと戦い続けて魔力が殆ど無いはずだ。俺一人の方が戦いやす  
いっ」

再び逃げろというアポロに、エイミは素直に従うことにした。アポロの言うとおり魔  
力は残り僅か。レオナも一人で逃すには心許ない。

結論を下したエイミの行動は早かった。レオナの腕を引くと屋上へ続く階段を駆け  
抜けていった。

「――意外だな。てつきり後を追うのかと思ったが……」

逃げる彼女たちを守るように階段の前に立ち塞がり、片手に呪文を携えながらアポロ  
は問う。

「ふっ、下らん。あんな小娘を逃したところで、何が出来る。国が滅びたことに変わり  
はない」

答えなど期待していなかったが、眼前の騎士は意外にも言葉を発した。

「……姫がいる限りパプニカは滅びないっ。必ず貴様らを打ち倒し、再び国は蘇る！」  
「世迷い言を。ならばゆっくりとこの世の行く末を見るがいい。あの世でな」

騎士は剣を構えると挑発するようにアポロへ強い殺気を送った。

「脆弱な人間共がどうやって俺を倒すのか興味がある。死ぬ気で掛かって来いっ」  
強い憎悪の念を言葉にのせ、ゆっくりと一步を踏み出した。

先に仕掛けたのはアポロだった。

騎士が一步を踏み出すと同時にイオラを放つ。爆音と衝撃波により大気が震えた。

確かな手応えを感じてアポロは敵を見る。しかし、そこにはまるで変わらぬ姿で騎士が立っていた。

その結果をアポロは少なからず予想していた。先ほど不意打ちで仕掛けたメラゾー  
マ。その直撃を受けてもまるでダメージを負っていないことに気づいていたからだ。

理由はわからない。だがこの相手には呪文が通じないのだとアポロは考えていた。

「どうした。その程度で俺を倒すなどとほざいていたのか。来ないのならばこちらからいくぞッ」

重苦しい鎧をものともせず、その騎士は神速の攻撃を繰り出した。

近接戦闘を行う戦士と、遠距離攻撃を行う賢者の戦い方は大きく異なる。戦士は接近し武器や拳をもって敵を討つ。反対に賢者は敵から一定の距離を保ちながら呪文で相

手を倒すのだ。

故に元々広くない城内で呪文主体で戦うアポロは不利だった。そんな場所で間合いを詰められ、剣戟を繰り出されたのであれば並みの賢者や魔法使いであれば負けることは確定している。

「ーそう、並みの賢者であれば。

「でりやああ！ーなにッ!?」

刃が届く寸前、アポロは騎士へ再びイオラを放った。

「ぐあッ」

至近距離で炸裂したイオラの爆発によりアポロは呻き声と共に吹き飛ばされた。そして彼我の間には再び大きく距離が開いた。騎士にはダメージはなく、アポロはその衝撃により全身に大きな傷を負う。

距離を詰められれば為す術はない。賢者や魔法使いにとつての常識をまるで意に介さない戦い方だった。

傷を回復呪文で癒やしながら、アポロは再び闘志を燃やす。

「ふふ、決死で挑むか。面白いッ」

アポロの闘志に呼応するように騎士も闘志を燃やす。

仕切り直し、互いに睨み合う。そしてやはり先に動いたのはアポロだった。

その行動に再び騎士は驚愕する。先ほど自爆覚悟で距離を開けたにも関わらず、今度は自ら距離を詰めてきたのだ。

近接戦闘を得意とする騎士にとっては遅く感じる速度だった。それを補うためかアポロはイオの弾幕で応戦する。

前後左右、縦横無尽に周囲を駆けながらアポロはイオを唱え続ける。呪文のランクを落とすことで高速かつ簡単に呪文を唱えることができるからだ。

呪文の威力が上がれば上がるほど、その場で足を止める必要がある。初級呪文のイオであれば全力で駆けながら唱えることは容易だった。

すでに三桁近いイオを唱えながらもアポロは攻撃の手を緩めない。

「ムダだということがまだわからないのか。呪文で俺を倒すことは出来ん」

呪文の効かない騎士にとって、その行動はまるで意味の無いものだった。しかし、その言葉とは裏腹に騎士はアポロを攻め倦ねていた。

動き回るアポロは速度こそ遅いものの、意図の分からないその動きを予測が出来ずにいた。更にはイオの生み出す爆風や衝撃波に視界や体勢を崩され剣戟を繰り出せずにいるのである。

いつまで続くともされない呪文の弾幕の中、騎士は違和感を感じた。

この程度の呪文で自身を倒せないのは分かりきっているはず。ならば何故それを続

けるのか。そして思い至った。これは時間稼ぎ。

先ほどの姫や城内に残る者を逃すために俺を足止めしているのだ、と。

「……たいした忠誠心だ。命をかけてあんなクズ共を逃がそうなどと」

バカにするような騎士の言葉に、アポロは動きを止めて騎士を見た。

「私の使命は姫をお守りすること。そのためであれば私の命などどうなっても構わない」

「ふつ。ならば手を止めて良いのか？ 今から貴様の大切な姫とやらを殺しに向かっ

てもいいんだぞ」

「追えるものなら追ってみるがいい」

屋上へ続く階段を指し示しアポロは答えた。

「こ、これは……貴様最初からこれが狙いでっ」

屋上へと続く階段。先ほどまでであったはずの階段はその半分以上が呪文により崩れ落ちていた。階段だけではない。今いる場所の至るところが呪文により崩れ落ちそうになっている。

これでは屋上へ向かうことは出来ないばかりか、床が崩落してしまうだろう。

「ムリに動けば下へ真つ逆さまだ。いかにお前とて、この高さから落ちればタダでは済まないはず」



「くっはっははは、はははっはははっ」

「ー何がおかしいっ」

突如笑い出す騎士にアポロが怒りの声を上げる。

「いやなに、貴様があまりにバカなのが愉快だな。まさかこの程度で俺を倒した気になつているんじゃないだろうな」

「なんだと!？」

「この鎧は大魔王バーン様より賜ったもの。この高さから落ちる程度では毛ほども感じぬわっ」

怒声ともつかぬ声を張り上げながらアポロへ詰め寄った。不意を突かれ、アポロはその場を動くことが出来なかった。

騎士はアポロを必殺の間合いに捉え、その凶刃を振り下ろした。

## 3 4 衝撃

呪文を発動するには高い集中力と時間を要する。

その性質から所謂攻撃呪文に分類される呪文を戦闘中に発動させるのはそれなりの経験が必要である。

個人差はあるが、長年の修行をしてきたアポロでさえ初級呪文に1秒。中級呪文なら5秒。上級呪文であれば20秒はかかるだろう。もっとも連射となれば話はまた変わってくるが。

また、いま述べた時間についても感じ方はそれぞれである。1秒を早いと感じるものもいれば、遅いと感じるものもいる。

残念なことにアポロと対峙している騎士――不死騎士団長ヒュンケルにとっては後者であった。それも圧倒的なまでに。

彼の剣技は人間に到達できる限界へ迫っていた。その剣技を持つてすれば1秒の内に10以上の斬撃を放つことも可能である。

肉体的には並の人間と変わらないアポロにそれを捌くことなど不可能だった。

故にこれは決して油断とはいえない。何故なら彼の繰り出す斬撃にアポロは為す術

もなく切り裂かれるはずだったのだから。

「ーぐつ。．．．ば、バカな。ー正気か貴様ツ」

ヒュンケルはアポロのとつた奇行に戦慄し困惑した。

あるうことかアポロは視認すら危ういヒュンケルの斬撃を左手で受け止めたのだ。

「鎧がどうのと言っていたが、こちらにも強力な防具ならもっている。自分だけが特別だなどと思うんじゃないツ」

アポロの両手にはトーヤから貰った黒い手袋がはめられていた。その手袋の強力な防刃性により魔剣の一撃であつても切り裂かれずに済んだ。

狼狽えるヒュンケルの隙を逃すはずもなく、アポロは話しながらも右手に蓄えていた魔力をヒュンケルに向けて開放した。

「ーイオラツ!!」

残る魔力の殆どを注ぎ込んだ渾身の一撃。それを掌打のようにしてヒュンケルのがら空きの腹部へ打ち込んだ。

直後その爆発でアポロの身体は大きく後ろは弾き飛ばされ壁へと激突した。

アポロは激突の衝撃で吐血しながら、床の崩落とともに階下へ落ちていくヒュンケルを見るのだった。

斬撃を受け止めたことにより砕けた左手と呪文の熱で焼けただれている右手を庇い

ながらなんとか壁を背にして起き上がる。

すると廊下の向こうから見知った人影が走り寄ってきた。

「アポロっ!? ーいま回復呪文をかけるわ。動かないで」

「マ・・・マ・リン」

駆け寄り回復呪文を唱える彼女をみてアポロは安堵した。

治療の間アポロはマリンへ色々話そうと思つたが、結局口を噤んだままだった。

どうしてここに。無事でよかった。よくここまで登つてこれたな。姫様とエイミは屋上にいるはずだ。

聞きたいことや言いたいことは山ほどある。そして一番気になることも・・・。

ートーヤはどこにいる?ー

たったそれだけのことを聞くことが出来なかった。



「ふわああああ。．．．だりい」

薄暗い洞窟の中、大きな欠伸をして独り言ちる。

言った後失敗したと思った。疲れたとか怠いとかって口にする余計にそう感じるよな。

『大天使の息吹』を作るため洞窟の奥へ籠って17日目。俺はつい今し方、ようやく2枚のカードを作ることに成功した。

以前に作った分も含めて3枚。奇しくもHUNTERXHUNTER原作のカード化限度枚数と同じ枚数になった。

若干不安は残るけど、他の回復アイテムもあるし3枚あればなんとかなるだろう。てか時間ももう無さそうだしね。

本当はすぐに寝てしまいたいくらい疲れているんだが、ずっと籠もりきりだったので外に出たかった。

気分転換にパプニカで飯でも食うか。良く考えたら最後にパプニカに行つてから3ヶ月以上経つてるし。

マリン達に会いに行くか。そう思つて鉄扉を開けると、散らかり放題の家具が目についた。

「．．．ああ。そういえばこれも片付けなきゃな。マジでだりいな」

嫌なことは先延ばしにするタイプなので、洞窟の掃除は一旦頭の隅においやる。

そのまま外へ出ようとしたところ、一輪の花が目についた。

「なんだこれ？　なんで一本だけこんなところに……」

枯れそうになっているその花をみて少し疑問に思ったが、やはり深く考えずに目的地へ向かうことにした。

「アカンパニー、オン。パプニカへ！」

さーて今日は何を食おうかなー。久しぶりの外食だしメニュー端から頼んでやろうかな。

などと考え、パプニカの街へ入ろうとしたところ、俺はとんでもない光景を目の当たりにした。

「で、で、で、で出遅れたあああああつ!!!」

荒れに荒れきったパプニカの街をみて、一人絶叫するのであった。

## 35 予想外

穏やかな昼下がり。ウミネコかカモメかは知らないが鳥が優雅に飛んでいる。

少し気温は高い気がするけど、湿度が低いせいかな？ 昼寝でもしたくなるようないい気候だ。

こんな状況じゃなければね。

「うおおおっ」

俺は今、超絶イケメンが繰り出す闘魔傀儡掌を必死に『堅』で耐えていた。

「俺の闘魔傀儡掌を受けてここまで耐えるとはな。だがどちらにしろ身動き出来んのでは貴様に勝ち目はないぞっ」

そのイケメンはそう言うのと傀儡掌を掛けたまま剣を構えた。やばいつて。これ絶対あれだよな。早くこのチート技から抜けださなくては！

気合の雄叫びをあげながら、傀儡掌から逃れようと必死で身を振る。

微妙に動けるけど抜け出せそうにはない。チートかよこの技。クラピカのチェーンジエイルも真っ青つてくらしいの性能だよこれ。

縛り上げられて動けないどころか、全身が引きちぎられるんじゃないかってくらい

引っ張られてる。

それでも『堅』を全力で展開すればなんとか動けそうな感じだ。だから早く逃げないと、ヒュンケルの必殺技のブラッディースクライドが来る前に。

「どうせこの世はすぐに魔王軍の手に落ちる。このまま死んだ方が地獄を見ずに済むというもの。今楽にしてやる」

勝手なこと言いやがって。そうこうしている間に、ついにヒュンケルは構えた剣を俺に向かつて突き出した。

渾身の一撃を放っているというのに、まるで傀儡掌は緩まない。熟練にして洗練された技だ。振りほどいて逃げるほどオーラはまだ練れていない。どうやら逃れることはできなさそうだ。

「ぐああああああ」

俺は叫び声をあげながら瓦礫の中へ吹き飛ばされた。

瓦礫の中でうつ伏せになって俺は痛みを耐えていた。どうしてこんなことになったのか。俺はただ廃墟となった街を散策していただけなのに。

廃墟を歩いていたら突然クールガイが話しかけてきたんだ。俺はひと目でそいつが



ヒュンケルだつてわかったけど、敵意とか感じなかったから油断していた。

だから魔が差したつてやつなんだろうね。本当ならすぐにでも逃げ出した方がいいのに、情報収集なんてしようとしちゃったんだよなあ。

で、その会話の最中に何者だつてきかれたから、旅人ですつて言っただけだね。今は世界中がモンスターだらけなのに木刀一本で旅するやつなんているかってめっちゃ怖い顔するんだもん。

そんなにムキになるなよ。いるかもしれないじゃん。お前の師匠のアバンとかやりそうじゃん？ なら俺だつてそうかもしれないじゃん。ほつといてよ。

その後なんやかんやでヒュンケルが突然攻撃してきたのであった、まる。

薄目を開けてヒュンケルの方を見ると、剣を鞘に収めて棒立ちしていた。・・・どうやら死んだふりが上手くいつているようだ。

全身から迸るオーラを徐々に『隠』で隠していくという俺流死んだふり。この世界の連中は何故か知らないけど念を使えなくせにオーラを肌で感じるからな。密度が濃いと見えるみたいだし。

そのため生命エネルギーであるオーラを少しづつ見えなくしていくという方法をと

れば、死んでいく様子と勘違いするものと踏んでの行動だ。

先ほどのブラッディースクライドは『凝』で胸に集めることでなんとか防いだ。死ぬかと思っただけど、案外防げるものだね。凄く痛いけど外傷は無さそうだ。

あとはこのままヒュンケルが立ち去るのを待つだけ、なんだけど。・・・このまま帰すのも癪だよな。

そうと決まればさっそく行動あるのみだ。

俺は死んだふりを続けながら懐からカードを取り出した。

そして油断しているヒュンケルへと近づきカードを使用する。

「トレース、オン。ヒュンケルっ」

「なにっ!？」

突如動き出した俺に驚き硬直するヒュンケル。そのまま為す術もなくスペルカードから放たれた光が直撃する。

「き、貴様っ。何をしたっ!？」

正体不明の術を受けたヒュンケルは動揺しながら剣を抜いた。

スペルカードの光が収まるのを確認すると、俺は準備していた『同行』を使いすぐにその場を離脱した。

あばよ!!

『同行』によって自宅へ帰還した俺は、すぐにカードを確認した。  
「南西9キロか。よし、上手くいつてるようだな」

「追跡（トレース） ランクC 回数 1」

・対象者1名の現在位置を知ることができる。

『追跡』は使用するとカード名の部分が対象者の名前に変わり、イラスト部分には方位磁石のような矢印と距離が表示される。

地図の機能はないがカーナビの様に常に相手を指し示すため、その名の通り追跡に便利なのだ。

人に使うのは初めてだったので上手くいって本当によかった。  
実はこのカード、作成したは良いが実用性皆無だと思ってほとんど使ったことがない。

仲間と合流したいと思ったら『同行』で十分だしね。だからモンスターに試して以来数年ぶりに使用したので、成功してホッとしている次第である。

なにはともあれ、これでヒュンケルの位置情報は常に知ることが出来る。

ヒュンケルがパプニカに居たということは、まだダイと接触していないということに他ならない。であれば、今後のヒュンケルの動向を探ることで、物語の進行度合いを予測することが可能だ。

パプニカがすでに滅んでいたことには驚いたが、元々ダイの冒険に合流するのはもう少し先にする予定だった。

なのでこれは予定調和というやつだ。・・・強がつてなんかないぞ。

『追跡』のカードを無くさないように懐にしまいつつ、俺は次の行動を起こすために頭を切り替えた。

ダイと合流するまでの間に、あれを済ませておかないとな。

俺は再び『同行』を取り出すと、ある場所へと向かった。

## 36 支援

「っ!? あ、あなたは・・・トーヤくんじゃありませんか」

『同行』の光がやむと、目の前にはアバンが立っていた。アバンの場所まで飛んできたので当然のことではあるが。

「お久しぶりです、アバンさん」

驚くアバンに軽く挨拶を済ませ、俺は今いる場所を確認した。

「ここは、破邪の洞窟ですか?」

修行のために何度も入った場所。簡素な作りではあるが、見覚えのある場所なのでぐに分かった。

「・・・ええ。私自身の持つ、破邪の力を強めようと思いましたが。外の現状は理解していますか?」

「その話は先に進みながらでいいですか? 地下に潜るのなら俺も協力しますよ」  
言いながら俺は洞窟の先へ歩みを進める。

「あ、トーヤくん? そっちじゃ逆戻り。地下はこっちですよ」

「・・・」

恥ずかしさを誤魔化すため、無言のまま足早に進んでいった。

「ーそうですか。パプニカが」

俺は外でのことを簡単に話した。といつても魔王軍の侵略によりパプニカが崩壊したことくらいだが。

「あなたの言っていた神託の通りになりましたね。ならばこそ我々もできることをやらねばっ」

アバンの正義の心に火が点いたのか、拳を握りしめて気合を入れている。

「ところでアバンさん。あなたの弟子たちは無事に旅立ちましたか？」

「ダイくとポップのことでしょうか。あの子達ならちゃんと旅立ちましたよ。デルムリン島から出立するのを確認しましたから」

それを聞いて胸を撫で下ろす。

ヒュンケルの行動から原作の進捗は予想が出来ても、実際に他が原作通りに進んでいる保証はない。ダイやポップがハドラーにやられていたとしても不思議はないのだ。

「その様子だと神託に出てきた魔王と戦う弟子というのはあの二人で間違いなかったようですね」

アバンには神託として世界の危機を話したが、アバンの弟子が大魔王と戦うとしか説明していない。今の俺の反応から自分の選択が間違いないと判断したんだろう。相変わらず油断ならない人だ。

ぶっちゃけアバンは最終決戦までここに籠もるから隠す必要はないんだけど。それでも敢えて話す必要もない。必要以上に隠すことはしないが、バレても誤魔化すのは面倒なのでやめることにしよう。

「ダイの特訓は上手くいったんですか？」

「それはもうバツチリ……とまでは言えませんが、7割方教えることは出来ましたよ。あなたの基礎訓練の成果ですね」

「うっ」

やっぱり俺がダイを特訓していることはバレたか。口止めしなかったしな。

でも7割か、随分といい調子なんじゃないだろうか。それならクロコダインに一方的にやられる心配はないだろうか。

しかしクロコダインの皮膚は鋼鉄並みに硬いつて話だしな。紋章なしじゃ難しいのかな。

「ここで重大なお知らせがあるんですが」

俺がダイの先行きを心配していると、アバンが真剣な口調で語りかけてきた。

「な、なんですか?」

「実はですね。私自分の分しか食料を持ってきていないんですよ。半分こしてもいいんですが、そうすると地下へ潜るのはベリーベリーハードとなってしまふんですよ」

冗談めかして話すアバン。俺はその言葉にアバンが背負う巨大なリュックを見る。

洞窟へ潜る場合に重要なのは戦闘能力よりも装備と食料、それに灯りだ。

さつき俺はアバンに協力すると言ったが、アバンからしてみたら何も道具を持たない俺は足手まといでしかないだろう。

「それなら問題ありませんよ。俺は自前のものを使うので。というかアバンさんの食料や回復アイテムも俺のを使うといいですよ」

「ああ、なるほど。あなたは先ほどルーラのようにここへ突然やってきましたもんねえ。その要領で外への出入りは自由という訳ですか」

「それでも良いですが、もっと便利な道具を使いますよ。見ていて下さい。…リターン、オン。トーヤ」

呪文を唱えると、俺の目の前に便利なアイテムの数々が現れた。それらを指さし、自慢気にアバンを見る。

「どうです? これで食糧問題は解決です」

「おお、これは凄いですねえ。ルーラの応用でしょうか。いや、そのカードの効果です



か。どちらにしろ素晴らしい能力です」

アバンの称賛の言葉に俺は気を良くする。しかし、良く見るとアバンの表情は少し曇っているようにみえる。

訝しがっていると、アバンはそれに気づき口を開いた。

「あ、いえね。こんなに大量の荷物をどうやって運ぶのかと思ひまして。移動するたびにそのカードで呼び寄せるのかなあ、なんて・・・」

「それなら心配いりませんよ。よく見て下さい、台車に載っているでしょう」

「・・・確かに台車に載っているようですが、このままずっと押していくつもりですか？」

洞窟で台車を押していくなんて邪魔にも程がある。さすがに俺だってそこまでバカじゃないぞ。

「ご安心を。これは生きてる台車と言って、このタグを目印に勝手に付いて来ますので。アバンさんの荷物も乗つけちゃって下さい」

【生きてる台車 積載量350キロ】

・後ろを勝手についてきてくれる台車。お買い物や採取に便利。

「他にも色々便利アイテムがあるので、それは進みながら説明します」  
こうして俺は破邪の洞窟でアバンをサポートしながら身を潜めた。  
アバンには原作より早く地下へ潜ってもらいたいからな。

## 37 深域へ

破邪の洞窟へ潜ってすでに8日。現在は地下100階くらいにいる。

「いやあ、やはりあなたがいると楽で良いですねえ。想像以上のペースで進めていきますよ」

モンスターの大量を一人で蹴散らしたアバンは剣を鞘に収めながら戻ってきた。

当初、戦闘は交互に行うという取り決めだった。しかし何故かアバンは途中から一人で戦うというて聞かなかった。修行のつもりだろうか。

「しかし結構下まで来たと思うんですが、大魔王と戦えるような呪文は見つかりませんねえ」

さすがに疲れてきたのか、この洞窟へ入って初めて弱気なセリフを吐く。

戦闘後の回復アイテム手渡し係と化している俺は、アバンへ『メンタルウォーター』を渡しながら返事をする。

「そうですね。25階のミナカトルでしたっけ？ あれ以降は目ぼしい呪文も無いですしね」

その割にモンスターはどんどん強くなっていくのだから堪ったものではない。

原作でこの先に秘宝があると知っているから良いが、そうでなければただの苦行でしかない。普通なら早々に切り上げているだろう。

「それにしてもトーヤくんのアイテムは素晴らしいの一言につきますねえ。どれも効果はピカイチな上に味も良いとは。文句なしです」

俺の持つてきた『メンタルウォーター』を飲みながらアバンが言う。

「大魔王を倒した後はアイテム作りの特技を活かして商売でも始めてはどうでしょう」

「あはは、褒めても何も出ませんよ」

「おや、アイテム作りというところはスルーですか。てつきり否定するかと思いましたが」

「・・・ま、今更それくらいは別に」

元々バレないようにしてたのは準備が整う前に魔王軍に目をつけられないようにするためだったし。

つていうかこれらのアイテムを俺が作っていることをアバンは既に確信していたしな。

「であれば教えて欲しいですねえ。どうやって作っているのか」

「ダメですよ、前にも言いましたが手の内は明かしません。つていうか俺以外には教

えても多分できないですし」

「むう、そうですか。残念です」

ただの会話として言っただけなのだろう。アバンは言葉とは裏腹にまるで気にしている様子はない。

「・・・アイテム作りといえバアバンさんも得意ですよね」

ちように良い機会なので、以前から気になっていたことを聞いてみることにした。

「ん？ どういうことですか？」

「いえね、初めて食堂で会った次の日。俺は全然違う別の街に逃げたのに普通に追ってきてたじゃないですか。あれってそういうアイテム使ったんですよね？」

俺が気づいていることが意外だったのか、アバンはとても驚いた表情をしていた。

「目印みたいなもんですかね。それをきつと食堂で俺の木刀に触ったときにつけたんですよ。大まかな方角と距離さえ分かればルーラで最寄りの街まで飛んで追えばいいんですか？ 合ってるでしょう」

「こ、これは驚きました。正解です。ただ追っただけでそこまで推測してしまうとは」  
そう言っアバンは懐から砂の入った小瓶を取り出した。

「これは私が調合した魔法の砂・・・名前はまだありませんが、あなたの言うとおり目印のようなものです」

やっぱりアイテムだったか。この砂って確かアバンがキルバーンと戦った時に使ってたやつだよな。ムダに使って本番で無くなりましたなんてやめてくれよ？

「ですがこれを私が作ったなんてどうして分かったんでしょうか？」

「俺はアイテムを探す旅で世界中飛び回ったことがありますからね。人を追うようなアイテムは見たことも聞いたこともないです。普通なら俺が知らないだけで終わる話ですが、アバンさん程の人が相手なら自作したと考えた方が自然だっただけですよ」

とか言つて本当は原作知識でアバンが「魔弾銃」を始めとするマジックアイテム作りが得意なのを知っていたからなんだけどね。キルバーンに使った砂だとまでは気付かなかったが。

「で、どうやって作ってるんですか？」

お返しとばかりに質問してみる。

「なんてことありませんよ。ルラムーン草という植物の特性を利用しただけに過ぎませんからね。私の作るアイテムは書物や人伝に聞いた珍しい植物や鉱物を元に作り出しているんですよ。なので新しい町へ行つては情報収集ばかりしています」

なるほど。俺はアイテムを作るとき既存のアイテムを材料に効果を強めていたからな。植物や鉱物の特性を利用するなんて当たり前のことだけどやらなかったな。

もちろん面倒だということもそうだけど、それ以上に時間と基礎知識が足りなすぎ

る。たった一人、短時間で一からアイテムを生みだすなんて真似俺にはできない。今更ながらに俺は自身の貰ったチート能力が本当にチートなんだと思い知らされた。

「そういえばトーヤくん。ちよつと疑問に思ったんですが・・・」

そう前置きをしてアバンは俺を振り返った。

「神託とやらはいつ頃授けられたんでしょう。大魔王討伐のために蓄えたアイテムを見るにかなりの前から準備していたように思いますが」

「えつと、5歳くらいの時ですね」

転生した時は3歳くらいだった。この世界がダイの大冒険と知って準備を始めたのはその数年後だから確か5歳くらいだったはず。

アバンはそれを聞いて何を思ったのか神妙な表情をしている。

「・・・あなたはそこからずっと準備を？ 一人で？」

「ええ・・・まあ、そうですね」

「誰かに協力を仰ぐことはしなかったのですか？」

「いえ、してません。だって誰も信じないでしょう」

実際は信じる信じないに関わらず話さないだろうが。原作と未来が大きく変わって

しまったらまずいからな。

「信じてもらえなくてもご家族に相談とかしなかつたのですか？　子供が一人で抱えるには大きすぎる問題です」

「あー、俺家族いないんです。物心ついた頃には森に住んで、それからずっと一人で生活してました」

「それはー」

何かを言いかけてアバンは口を閉ざした。きつと言うべき言葉が見つからなかったのだろう。俺も逆の立場ならそうなってしまいうだろう。・・・まあ、アバンの想像と違って悲惨でも何でもないんだけど。

「・・・先を急ぎましょう。過去を振り返るのも感傷に浸るのも後で出来ますよ」  
いたたまれなくなつたので強引に会話を終わらせることにした。

ーだというのにアバンにさつきまでの陽気さがない。・・・当たり前か、普通に聞いたら俺の過去はかなり暗いものだ。

とはいえこんな空気で先へ進むのは御免こうむる。というわけで俺は努めて明るく別の話題を提供することにした。

「そうだ、アバンさん。俺のアイテムで気になる奴とかがありますか？　俺自身使い道が



思いつかない奴もあるので良ければ差し上げますよ」

「そ、そうですねっ。ではお言葉に甘えちゃいましょうかねっ」

どうやらアバンも話題を探していたのか、俺の言葉に勢い良く食いついてきた。

台車を適当にごそごそと漁ったアバンは、小さな小箱を取り出した。

「これなんか気になりますね。ただの箱とも思えませんし、一体どんなアイテムなんですか？」

「あーそれですか。それは『時の小箱』と言って、箱の中の時間を早めたり遅くしたり出来るんですよ」

「時の小箱」

・時の流れを操れる不思議な箱。蓋に—10から+10までのメモリが付いている。10にメモリを合わせると箱の中の時間が外の10倍早くなる。—10にメモリを合わせると箱の中の時間が外の10分の1になる。

・蓋をきちんと閉めないと効果はない。

※—1から+1は変化なし

効果自体は凄いんだが、箱があまりに小さいために役に立たないアイテム筆頭であ

る。

「・・・このタネは？」

「それは調べてきたらできた訳のわからない植物のタネです。俺もよく分かってません」

【謎の種】

・何が育つか分からない謎の種。

一応これも錬金術でできたアイテムなんだよな。でも作つてからは放置している。だつてただのタネだし。

なんだろう。あの箱でタネでも育てるつもりかな。

台車のアイテムを端から引つ張りだしては質問してくるアバン。余程俺のアイテムが気になって仕方ないらしい。

夢中になってアイテムを漁る後ろ姿を眺めながら、早く先に進みたいなあと一人ため息を吐くのだった。

## 38 助っ人

数時間前。俺は破邪の洞窟でカードの異変に気がついた。

そのカードとは、ヒュンケルの名を登録してある『追跡』のカードだ。

方位磁石の様に対象者の向きを示し続けるその針が大きく動き、記されている彼我の距離数が数キロ単位で変動していたのだ。

これはダイとの戦いに決着がついたに違いないと確信し、アバンとの別れを手早く済ませ走ってやってきたのだ。

カードの示すままに進み、俺はようやくヒュンケルとついでにクロコダインを見つけたのであった。

なにやら話し込んでいる二人の会話に耳を傾けていれば、なんとダイを助けにバルジ島へ向かうというではないか。

ならちようど良いので俺もこれを機に本格的にパーティーに参加しようかなと思ったりしたのである。

最初は突然現れた俺を凄く警戒していた二人だが、ダイの知り合いだということを経切丁寧に説明することによってようやく打ち解けることが出来た。

今は自己紹介&作戦タイム&回復タイムである。

ヒュンケルは（ダイにやられて）ボロボロだし、クロコダインも（ヒュンケルにやられて）かなり弱っているようだ。

原作の彼らはよくこれでダイたちの加勢になんぞ行ったものだ。

常人なら死んでも可怪しくない怪我なので、俺は『エリキシル剤』を二人に与えて傷を癒してもらうことにした。

「ほう、これは凄い。体の底から力が湧いてくるようだ。以前よりも強くなったような気がするわい」

薬を飲んでクロコダインがそう言った。それは気のせいだよ。

上機嫌なクロコダインと対照的に、ヒュンケルは暗い表情のまま動かずにいた。

どうしたんだ一体。早く傷治してダイの加勢に行かなきゃいけないんだけど。

不思議に思っているとヒュンケルが俺を見て口を開いた。

「・・・お前は俺達の話聞いていなかったのか。俺達は魔王軍だったんだぞ」

薬の小瓶を持つ手は、自身への怒りなのか微妙かに震えていた。

下らないこと言っていないで早く薬飲めよ。そうしないと飲んじやったクロコダイン

の立場がないだろうが。

飲み会で乾杯前に飲み始めちゃった人みたいになってるじゃないか。

だというのにヒュンケルは俺の答えを待ったまま一向に薬を飲む様子がない。……仕方ないな。

「――元魔王軍ね。ちゃんと聞いてたよ」

「ならば何故こんなマネをする。恨みはないのか?」

「恨みって言ってもな……。魔王軍にいたなら魔王軍として人間と戦うのはおかしいことじゃないし。今は人間側にいるんだから、仲間に恨み事言うのはそれこそおかしいんじゃない?」

「……な・かま・だと?」

「いや、仲間だろ? これからダイを助けに一緒に戦いに行くんだから」

「ワッハッハッハハハ!!! ヒュンケルよツ。これが人間という生き物だツ。これ以上ヒトの好意を無碍にするものではないぞ」

大声で笑いながら俺の背中をバンバンと叩くクロコダイン。ちよつと痛いです。

再度薬を飲むことを進めると、ようやくヒュンケルは薬を飲んだ。そしてその効果に驚いた様子で手を握って身体の調子を確認するのだった。

事情を知らない体を装っている俺は、二人からダイたちの状況を聞いていた。

ダイたちとフレイザードがバルジ島で戦ったこと。禁呪法によりバルジ島では皆の力が封じられてしまうこと。ダイの仲間が人質に取られたこと。

すべての話を聞き終えた俺は、こいつら事情通だなど思いつつも直ぐに出発するために立ち上がった。

「早くダイたちと合流しようぜ」

「待て。合流するのはダイたちが魔王軍と戦い始めてからの方が良い」

そんな俺に待ったをかけたのはヒュンケルだった。

「どうして?」

「恐らく魔王軍はバルジ島へ乗り込んだダイを総出で迎え撃つだろう」

だろうな。だからこそ早く合流した方が良いと思うのだが。

続くヒュンケルの言葉を待っていると先にクロコダインが口を開いた。

「魔王軍が総出で掛かるといっても、魔王軍とダイたちでは戦力に差がありすぎる。

奴らは少なからず油断しているはず」

「なるほど、魔王軍の意表をつくわけだな。．．確かに元軍団長が二人もダイへ加勢していると向こうへバレたら厄介なことになりそうだ」

どうりで原作でクロコダインやヒュンケルがタイミングよく現れたわけだ。さすが軍団長やってただけあってかなり戦い慣れた様子。頼もしい限りだ。

「ダイたちはフレイザードよりも先に炎魔塔と氷魔塔を破壊しようとするだろう。俺とクロコダインはそこで待ち構えているはずの敵を食い止める」

「ああ。いくら多勢に無勢とはいえ、奴らの隙について塔を破壊することくらいは出来よう」

「俺は？」

「トーヤはどちらでも構わない。体を張るのは俺たちの役目だ。ダイたちと合流したらそのままフレイザードの元へ向かってくればいい」

「なんだ自由か。なら俺はさっき言った通り島へ入る前にダイと合流しても良い？」

「それは構わんが、何かあるのか？」

俺の意図がわからずヒュンケルは質問してくる。

「まあね。俺はお前たち二人と違って魔王軍に警戒されていないから合流しても変わらないだろうし。それなら先に向こうでやっておきたいことがあるんだ」

「そういうことなら異論はない。オレとヒュンケルは一足早く島へ行つて待機しているや」

話が纏まると、俺は二人と別れてダイの元へ向かうことにした。

『同行』を使うわけにもいかないのでバルジ島への道のりを全力で走っていたら、俺はあることに気がついた。

「結局別行動かよ。話しかけた意味無いじゃん」

ガルーダに運ばれ、どんどん姿が小さくなつていく二人を眺めて俺はやるせない気持ちになるのだった。

つていうか俺もそれに乗せて欲しかった。



## 39 狼煙

ダイは伝説の勇者アバンに弟子入りして修行を受けた。だが修業を終える前に、アバンは蘇った魔王ハドラーに倒されてしまう。

ダイは真の勇者を目指し平和を取り戻すために、兄弟子であるポップと共に冒険の旅に出た。

デルムリン島からロモス王国へ向かったダイとポップは、もう一人のアバンの使徒であるマームに出会う。

三人はアバンの意思を継ぐ仲間として力を合わせ、ロモス王国を襲撃した百獣魔団長クロコダインを倒した。

ロモス王国を発ちパプニカ王国へ到着したダイたちは魔王軍団軍団長の一人、不死騎団長ヒュンケルと戦うこととなった。

ヒュンケルに苦戦するダイたちの危機を救ったのはクロコダインだった。クロコダインの足止めによりダイとポップは逃走することはできたが、マームは捕らえられてしまふ。

マームを救出するため地底魔城へ侵入したダイは魔法と剣の合体技を編み出しヒュ

ンケルを倒した。

ヒュンケルを倒したダイたちはレオナ姫の行方を求め、神殿で信号弾をあげるのだった。

「ーあかんあかん。火薬玉はすべて吹っ飛んじまったわい」

地下倉庫の階段からあがってきたバダックはため息と共に嘆いた。

パプニカでは戦場の合図として信号弾を用いる。『我勝てり』の赤い信号弾をあげることにより、レオナ姫からのコンタクトを図ろうとしたのだ。

しかし、信号弾のある地下倉庫への入口は瓦礫で埋もれていた。その瓦礫に頭を悩ませていたところ、ダイはその役目を買って出たのだった。

呪文と剣技の合体技により、見事瓦礫を吹き飛ばすことに成功した。だが呪文によって火薬に引火したことにより信号弾の火薬玉は暴発してしまったのだった。

「でもとりあえず信号弾はあがったんだし、どこかでレオナ姫が見てるかも」

小さくなって反省しているダイを見かねてマアムがフォローする。

「どうかなあ、あんなむちゃくちゃな色の信号弾じゃかえって怪しまれるんじゃねえかな」

足で小突きなポップはダイを意地悪く責めるように言う。

これからどうしたものかと悩んでいるとマアムが空に浮かぶ何かに気がついた。

「みんな！ あれを見てっ!!」

「あれは……!! あれはパプニカの気球船じゃっ!!」

マアムの指差す方を単眼鏡で除くバダックが大きな声で叫んだ。

「おおっ!!」

気球船から降りたエイミをみて思わずといったふうにダイとポップは声をあげる。

「エイミ殿ではないか！」

「バダックさん。あなただったのね、あの信号弾は」

「なあじいさん。紹介しろよ」

エイミを見て鼻の下をだらしく伸ばしてポップはバダックを見る。

「バカモンっ。おそれ多いぞ。この御方こそパプニカ三賢者の一人。エイミ殿  
じゃっ」

「三賢者!!? この人が!?!」

誰よりも早く反応したのはダイだった。

「あなたは?」

「お、おれダイって言います」

「ダイっ!? あ、あなたが?」

ダイがレオナから貰ったナイフを見せると、エイミはダイたちを気球船に乗せてすぐにバルジ島へと向かった。

気球船に乗りバルジ島へ向かってから随分と時間が経った。

「そういえばダイ。さつきエイミさんが三賢者つて聞いて驚いてなかった?」

「そりゃそうだろうよ。こんな若くて美人なヒトが三賢者だなんて言われたら。俺はてつきり爺さんみたいな連中かなあつて」

「あんたと一緒にしないでちょうだい」

話が進まなくなるからかマアムはポツプを冷たくあしらう。三賢者という言葉に対するダイの反応にマアムは微妙な違和感を感じていたのだ。

「俺はトーヤから話で聞いたんだよ。だから本人が目の前に現れてビックリしただけだよ」

「トーヤつてダイのお師匠さんよね。その人もパプニカの人だっけ?」

「何の話?」

微妙に聞こえてきた会話にエイミとバダックが反応した。

「おおっ! そうじゃったそうじゃった。エイミ殿っ。このダイくんはなんとトーヤ

殿と知り合いだったそうなんじゃよ」

「ええっ。トーヤと!? ダイくん本当なの?」

詰め寄るエイミの剣幕に気圧されつつもダイはトーヤの話をエイミに話して聞かせた。

「・・・そう、なのね。まさかデルムリン島へ行っていたなんて・・・」

話を聞き終えたエイミは考えを纏めているのか心ここにあらずといった感じだった。

「知り合いとは聞いたが、まさかトーヤ殿がダイくんの師匠じゃったとは」

「そんなんじゃないですよ。トーヤは師匠とか先生って柄じゃないし、どっちかという友達って言う方が近いかもしれない」

「良かったなあ、ダイ。トーヤって人もパプニカの人間なんだろ? ならバルジ島で会えるんじゃないか?」

「・・・残念だけど、彼はバルジ島にはいないわ。3ヶ月前に見たのが最後なの。デルムリン島へ行っていたことも知らなかったわ」

「そ、そんな。・・・それじゃトーヤは」

レオナと行動を共にしていると思っていたダイは、エイミの暗い表情を見て不安を募らせる。

もしかして死んでしまったのではないか。そんな考えがダイの頭を過った。

「なあに、心配要らねえよ」

そんなダイを元気づけるためポップが大きな声を出してダイの背中を叩く。

「トーヤって人が島を出てから直ぐに世界中で魔王軍が動き出したんだろ？ だってらまだそんなに時間は経ってねえ。行方不明って言ってもただ逸れただけかもしれないぜ」

「・・・でも」

励まそうとするポップにそれでも尚ダイの表情は曇ったままだ。

「お前の話じゃ今のお前よりもトーヤって人の方が強いんだろ？ だったら軍団長が直接相手にならない限りやられっこないさ」

「そうじゃのう！ 易々とトーヤ殿がやられるとは思えんわい」

「・・・そう、だよな。もしかしたらトーヤのことだから一人で魔王軍と戦ってるかもっ」

ダイはムリヤリ笑顔を作って明るく振る舞った。

「島が見えたぞっ」

一緒に気球船に乗り込んでいるパプニカの兵士の一人が声を上げた。

「あれがバルジ島。あの島の真ん中にある塔を拠点に我々は反撃の機会をうかがっていたのよ」

エイミがバルジの塔を指さし説明する。しかしそこから立ち上る煙に皆は直ぐに気がついた。

「何か様子が変わっちゃぞつ。まさか姫の身になにか!？」

「・・・レオナ」

ダイは気を引き締めながらバルジの塔から立ち上る煙をみつめるのだった。

## 40 氷炎將軍

「は、はなせっ！ この野郎!!!」

「うるせえっ！」

バルジの塔にて兵士の一人が別の兵士とつかみ合いの喧嘩を始めた。あわてて別の兵士も止めに入るがまるで収まる様子がない。

「どうした!? なにごとだっ」

騒ぎを聞きつけたアポロとマリリンが階下から駆け上がってきた。

「こ、こいつらがさっきまで話してたかと思っただけに……」

仲裁に入っていた兵士が収まらない二人にどうしたものかと困った様子だ。

「やめないかつ、見苦しい」

業を煮やしたアポロが止めに入るも、それでも二人の喧嘩は続く。

「こいつが悪いんだ！ ムカつくことばっか言いやがってっ」

「本当のことだろうがっ。どうせ俺たちは魔王軍に殺されるんだ!! こんなことムダなんだよっ」

「うるせえっ。なら貴様だけさっさとこの島から出て行けっ」



まるで収まる様子のない二人に周りの者達は見ていることしかできない。

「おやめなさい」

「うるせえ、黙ってーっ姫!!」

いつの間にか現れたレオナが兵士を仲裁する。頭に血が上った二人も、レオナの姿をみると大人しくなった。

「・・・あたし達が身を隠し、反撃の準備をしているのは魔王軍の悪事を挫くためなのよ。それなのにあたし達が自分本位に他人を傷つけたりしてどうするの!？」

「ーっですがこいつがそんな俺達のやってることがムダだなんて言うからッ」

「だからって島から出て行けなんて言い過ぎよ。気に食わないからって追いだしてたんじゃないじゃやない」

「尚も食って掛かる兵士にレオナは続ける。」

「あたし達は人間らしく優しさと正義の心をもって生き続けるのよ。最後までね。それができないなら死んだ方がマシだわ」

「め、面目ない。気が立ってたとはいえ決して言っではいけないことを・・・。申し訳ありません」

「わ、私こそ・・・みんな恐いのを我慢して戦っているのに。八つ当たりなんてして・・・お許し下さい」

叱責により反省する二人の兵士に優しく励ましの言葉をかけようとするレオナ。その声を遮るように嘲るように残酷な笑い声が響き渡った。

「クツハツハツハツハ。ならオレが人間らしい最後つてやつをくれてやるぜつ。脆弱で薄汚え人間らしい惨めな最後をなあッ!!」

「き、貴様つ。何者だつ!!」

突然現れた声の主を誰何するアポロ。既にマリンはレオナを後方へ下がらせている。

「氷炎將軍フレイザード! 今日限りパプニカ王国はお家断絶お取り潰し。さあ、死んでもらうぜお姫さんよ。ーカアツ」

手近にいる兵士に火炎や冷気を浴びせて蹂躪を始めるフレイザード。その勢いは凄まじく、状況に呑まれて怯んでいた兵士たちは次々と焼け死に、氷漬けにされていった。仲間がやられたことにより闘志を燃やした兵士たちはフレイザードへと果敢に挑んでいく。

向かってくる兵士たちにまたもや火炎と冷気を浴びせたフレイザードは兵士へ突進して次々と弾き飛ばしていった。

「そ、そんな。兵士たちがあの程度の攻撃でつ。それ程強力なのか奴の攻撃は」  
弾き飛ばされたまま動かない兵士をみて、別の兵士が慄く。

「いや、温度差だ。やつの火炎や吹雪の温度差により、鎧を脆くされたから奴の攻撃を

まともに受けてしまったのだ」

レオナを庇いながらも冷静に戦いをみていたアポロ。これでは兵士たちを無駄死にさせるだけだと悟り、レオナを兵士に任せてマリンとアポロはフレイザードと対峙する。

「ほお。ちったあ冴えてる奴がいるじゃねえか」

「私はパプニカ三賢者の一人アポロ！」

「同じくマリン！」

「命に代えても姫様をお守りする！」

「ああ、そうかいそうかい。立派なことだ」

フレイザードは前に立つ二人などまるで歯牙にもかけずに嘲るように笑った。

「マリン。奴の炎の身体をヒヤドで攻撃してくれ。私は逆で攻める」

「わかったわ」

小声で会話をすると二人は同時に動き出した。

「メラゾーマっ」

「ヒヤダイント」

迫る呪文をみてフレイザードは尚も嘲るように笑う。この程度の稚拙な作戦ならばオーザムを攻めた際にフレイザードは何度も見ていた。

「おっと！ こいつはいいや。歓迎でございそうしてくれるつてのか」

余裕を持って両の手でそれぞれ呪文を受け止めると、呪文のエネルギーを吸収した。それを見たレオナは二人に向かって叫ぶ。

「ダメよ！ 奴は呪文のエネルギーを吸い取っている。攻撃するならギラカイオを使わないとっ」

その言葉が聞こえている筈だがアポロはそれを無視してマリリンを見る。

「マリリン。メラで攻めるぞ」

アポロは先ほどと違いフレイザードのことを気にせずにマリリンへ合図を送った。

マリリンはそれに頷くと直ぐに呪文の準備を始めた。

「メラゾーマッ」

「なっ!？」

驚いたのはレオナだった。忠告を無視し、尚且つ相手にムダに力を与えてしまうの彼らの行動をレオナは理解することができなかつた。

「ふっ、そらよ!!」

炎の腕で二人分のメラゾーマを受け止めたフレイザードは呪文を吸収することで無力化する。

火炎放射の様に強力な二人の炎を吸収しながらフレイザードは冷静に二人を見る。

「カツハツハハハ。バカな奴らだ、ムダだつてことが分かんねえのかねえ」  
「笑つていられるのも今のうちだ。すぐに後悔することになるぞっ」

呪文により大きな魔力を込めながら二人はメラゾーマを浴びせ続ける。

余裕の笑みを浮かべるフレイザード。そんなフレイザードを見てレオナと周りの兵士たちも不安を募らせる。

フレイザードは一見残酷なだけの狂戦士に見えるが実際は違つた。その残酷な攻撃性の裏に氷の様な冷静さを兼ね備えた優れた戦士である。

勝利と栄光に対する執念は魔王軍の中でも抜きん出て強く、他の者からも一目置かれる程だつた。

そんなフレイザードにとって、敵の繰り出す攻撃や自身の弱点などは真つ先に警戒しておくべき事柄であつた。

炎の身体は冷気に弱く。氷の身体は炎に弱い。当たり前前の弱点だからこそ、あらゆる敵がそこにつけ込んでくる。

オーザムでの戦いでは殆どの者がそれを実践し、そしてムダだと分かるとレオナの言つたような別系統の呪文を放つてきた。

もちろん付け焼刃のギラヤイオでやられる程フレイザードは甘くない。そんな魔法使いや賢者たちをフレイザードは何人も屠つてきた。

その中には変わった戦術を取るものも当然存在した。すなわち——

「バカがッ。魔力の吸収により自滅するのを狙ってるんだろが……見え透いてんだよ!! 精々足掻いてみやろッ! ケケケケ」

呪文を吸収するといっても限界がある。どんなものであろうと必ず許容量というものが存在するのだ。

フレイザードが戦ってきた者の中には自滅を狙って呪文を放ち続けた者がいた。しかし人間の魔力量でフレイザードの魔力許容量を超えることは無謀であった。

禁呪法により生みだされて1年と経っていないフレイザードだったが、戦いの経験では既に一流と呼べる域にいる。

経験に裏付けされた自信によりフレイザードは彼らの行為がムダなものだと確信していた。あとは魔力が尽きるのを待つばかり。

彼らの魔力が尽きたとき、この場の人間に為す術はないだろう。

——彼らが呪文を放ってから数分が経過した。

フレイザードは異変に気がついた。

## 4 1 禁呪法

フレイザードが自身の異変に気づいたとき、それは加速度的に進んでいった。

「み、みてっ！ フレイザードの氷の半身が溶けていくわっ」

レオナの声に周りの兵士もフレイザードを注視する。するとレオナの言葉通り、フレイザードの半身は少しづつ溶け出し始めていた。

「く、クソツタレがあッ!!! こ、こんなことがッ・・・こんなことがあつてたまるかあ

!!!」

アポロとマリンのメラゾーマを吸収しながら口汚く罵るも、フレイザードに為す術はない。

このままでは氷の半身は消滅してしまうだろう。それを回避するべく、フレイザードは決死の覚悟で呪文を放った。

「フィンガー・フレア・ボムズッ!!!」

狙いも定まらない巨大な5つの炎は激しい爆発音と共にその場にいる全員を襲う。

爆発と熱風にある兵士は焼かれ、ある兵士は塔から落下していった。

至近距離いたアポロとマリン。そして守るべきレオナが無事だったのはただの偶然

としか言いようがない。

「な、なんて奴だ。メラゾーマを同時に5発も放つとはー」

辛うじて起き上がったアポロはなんとか視認できたフィンガー・フレア・ボムズに驚愕する。

マリンも起き上がると直ぐにフレイザードの姿を探したが、意外なことにフレイザードは地に伏したまま息も絶え絶えの状態だった。

「どうやら貴様にとつても今のは賭けに出たようだな。その様子ではもう戦うことなどできまい」

「ち、ちくしょう・・・どうなってやがんだ一体ツ!? どうしてオレの身体がこの程度でツ!!」

自身の身体に何が起きたのか分からず、フレイザードは怒鳴り二人を睨みつける。

二人の呪文を受け止めたとき、フレイザードは彼らが自身の魔力許容量の限界を突破させ自滅することを目論んでいると考えた。

今までに戦った者たちの中にはそれを狙ってきたものはいるし、事実二人は自滅を狙っていた。

「人間を侮ったわね、フレイザード。アポロとマリンの魔法力は並じゃない。いくらあなたでも吸収しきれなかったのよ」



後方で戦いを見ていたレオナはフレイザードに敗因を告げる。

「ふざけるんじゃないねえッ!! 人間ごときの魔法力がオレを上回るわけがねえッ」  
激高して怒鳴るフレイザードだが、内心では冷静に自身を分析していた。

魔力許容量にはかなりの余裕があった。確かに人間にしては高い魔法力を有していたようだが、少なくとも身体が溶け始めた時点では限界には程遠かった。

つまり身体が溶けた原因は別にあるということ。そもそも許容量を超えたのなら氷の半身にのみ異変が訪れるのは可怪しい。

二人分のメラゾーマを近距離で受けたことが影響したのか？ 否、その程度で溶けていては普段から自身の繰り出す炎で自滅している筈だ。

崩れかけの半身に力を入れて起き上がりながらフレイザードは考えを巡らせ続ける。しかしどんなに考えても答えに辿り着かない。一体何故氷の半身は崩れたのか……。

「――解せないという面持ちだな。黄泉の手向けに教えてやろう」  
じりじりと間合いを詰めながらアポロはフレイザードに語りかける。

一見隙だらけに見える行動であるがそこに油断はなく、隙あらば呪文を打ち込むつもりだった。手負いとはいって未だフレイザードには先程の様な爆発力があるのだ。安易に攻めることはできない。

フレイザードもそこは分かっているのか話に乗るふりをして対峙するアポロとマリ

ンの様子を伺った。

「あなた、禁呪法で生み出された呪法生命体よね」

「・・・それがどうしたッ」

「呪法生命体には力の源となる核がある。本来なら人間よりも丈夫な作りの呪法生命体だけど、あなたの場合は少し違う」

話しながらも隙を伺いつつマリンは続ける。

「炎と氷という相反する属性を持っているあなたは、その核の中に二種類の属性の魔力を持っているの」

その言葉にフレイザードは思案した。確かに自身の核には二種類の魔力がある。それは核本体を見ても分かることだった。

「その核は黄金比とも言えるほどに絶妙なバランスで魔力をコントロールして炎と氷の身体を維持している。だけど少量ならいざ知らず、あなたは私達の炎のエネルギーを多く吸収しすぎたのよ」

「・・・オレの強くなった炎の身体に氷の身体がついていけなくなったって訳か」

「その通りよ。今のあなたの炎のエネルギーは強すぎる。その結果最も弱い部分に影響が現れたのよ。もしも私達がヒヤドで攻撃していたら、反対に炎の身体がそうなっていたでしょうね」

自身に起こった現象を理解したフレイザードは目を瞑ると途端に静かになった。そんなフレイザードの挙動にアポロとマリンは困惑する。

「……どうした。勝ち目がないと見て降参するのか」

不審に思うも不可解な行動に二人は攻撃できずにいた。

「いや、なあに。ただ感心しただけのことよ。三賢者とか名乗るだけあつて博識じゃねえか、勉強になつたぜ。これからは気をつけねえとなあ」

「貴様にこれからなどないぞつ。ここぞで我らに倒させるのだからな」

「クククつ。調子に乗るなよツ!! この青二才がツ!!」

フレイザードは突如怒声を上げたかと思うと溶けていた半身を再生させた。

「みんなふせて!!」

只ならぬフレイザードの様子にマリンは叫ぶと自身も身構えた。

「氷炎爆花散!!!」

叫ぶフレイザードを中心に一抱え程もある石が四方八方へ飛散する。

石の直撃にアポロは腕を砕かれ、マリンも破片に裂傷を負わされながら吹き飛ばされた。た。

後ろに控えていたレオナ達も例外ではない。離れていたためにダメージこそ少いが、全身を石に強打されとても戦える状態にはなかつた。

「形勢逆転だなア!! クツカツカカカカ」

「ーま、まだだ。まだ戦えるぞっ」

笑うフレイザードを睨みつけ、自身に回復呪文をかけながら起き上がろうとするアポロとマリリン。しかし直ぐに異変に気づいた。

「じゅ、呪文が使えないーだど!?!」

折れた腕にホイミをかけるもほとんど効果が無い。薄く光るのみで遅々として回復しない自らの呪文にアポロは困惑する。

「ククククツ。ー氷炎結界呪法!!! これこそ我が氷炎魔団の不敗を支える究極の戦法!」

そう言ってフレイザードは塔の外を指さした。そこには先程まで無かったはずの巨大な炎と氷に柱が見えた。

「あの炎魔塔と氷魔塔がオレの核に作用して強力な結界陣をはっているのさ! この結界陣の中においてはオレ以外のやつは力も呪文も封じられてしまうんだ!!!」

フレイザードの語った事実には驚愕するアポロとマリリンだが、そんな暇も与えずにフレイザードが襲いかかってきた。

呪文が発動できないために両腕をクロスさせ防御するアポロだが、フレイザードの振るう腕に簡単になぎ倒されてしまう。

倒れたところを踏みつけられ、まったく為す術のないアポロ。そして全員の心を焦りと恐怖が支配していく。

「残念だったな、もう少しでオレを倒すことが出来たかもしれないアポロ。そして臆病な人間の性ってやつかねエ。命のかかった戦いで様子見なんざしてるからだ」

とどめを刺すつもりなのか、フレイザードの右手から氷柱を伸ばして振りかぶった。

「あばよッ！ 精々オレに傷をつけたことをあの世で自慢しなッーウッ!」

振り下ろされた氷柱がアポロを串刺しにするその直前、フレイザードの腕にナイフが突き刺さる。

「だ、誰だー。て、てめえッ・・・生きてやがったのか!」

「みんなから離れるフレイザードっ!!」

まさに間一髪。フレイザードの目線の先には勇者ダイの姿があった。

## 4 2 大魔導師

魔王軍の進軍によりパプニカから逃げ出したレオナ達はバルジ島で反撃の機会を伺っていた。

しかし反撃の狼煙を上げる前に氷炎將軍フレイザードに見つかってしまった。

襲い来る強敵に立ち向かうパプニカ三賢者のアポロとマリンだったが、フレイザードの氷炎結界呪法により力を封じられてしまう。

間一髪のところでも助けに入ったダイとフレイザードの戦いが始まった。氷炎結界呪法の中では力を出すことも呪文を唱えることもできない。

マアムの判断により退却することにしたダイ達だったが、ダイを逃すまいとするフレイザードは伝説の禁呪法によりレオナを凍りづけにした。

残ろうとするダイを抑えこみバルジ島から気球船で脱出するも、氷炎魔団の追手によりバルジの大渦の上に墜落しそうになる。

その危機を救ったのはかつてアバンの仲間の大魔道士マトリフだった。ダイ達はレオナを救うためマトリフの協力を仰ぐのだった。

「ダイくん達だけに負担はかけられない。私も姫を救出に向かわねば」  
洞窟の奥で兵士たちの治療を終え、アポロはフレイザードを倒すため訓練をするダイをみる。

「だけどあの結界がある限り私達は呪文が使えないのよ？ 闇雲にぶつかって倒せる相手じゃないのはあなたも分かっているはずよ」

直接戦ったわけではないエイミだが、呪文を使えないという状況で戦うのは無謀だといふのは分かりきっていた。

「魔法使いのポップくんだって島へ向かうんだ。ならば私だって」

「ちよ、ちよつと、冷静になりなさいよアポロ。姉さんからも言っておいてよーってどうかしたの？」

変わった様子の子のマリンにエイミが問いかける。

「・・・さつきマトリフ様が言っていたことを考えていたのよ」

「ヤッつき。」

「人間は自分の都合しか考えない。危機がさつたら平気で恩を忘れてしまっつて・・・彼も、同じことを言っていたなって思ったのよ」

アポロとエイミはその言葉にある男のことを思い出していた。

「・・・ダイくんが言っていたじゃない。自分のことばかり考えてる人間がすべてじゃ

ないって。私達も……」

マリンを元気づけるために口を開いたエイミだったが続く言葉が出てこない。平気で恩を忘れてしまう。自分の都合しか考えない。どちらも自分たちが彼にした行いのだから。

それ以上何も言えずに三人の間には沈黙が訪れた。

そんな時だった。何やら入口の方が騒がしい。今の状況に似つかわしくない明るい声が洞窟内を響かせた。

ダイの特訓が成功したのだろうか？ そんなことを思いながら声のする方へ視線を送る。その先に立っていた人物をみて、彼らは呆けたように動けなくなるのだった。



海岸沿いに延々と歩きまわった俺は、ようやく目当ての洞窟見つけることができた。こんなことならバルジ島で色々やってたときに見当くらいつけておけばよかったよ。



思った以上に時間をかけてしまったため、少し焦りながらも急いで洞窟の中へ入る。「おじやましませーす！」

洞窟へ入るとすぐに目隠しをしてマアムと特訓しているダイいた。

「え？ そ、その声は……やっぱり、トーヤっ!!」

目隠しを外したダイは俺の姿をみると笑顔で駆け寄り飛びついてきた。かわいいヤツめ。

「ダイっ！ 元気そうだな。ちよつと見ない間に大きくなつて」

ホントは全然変わってないけど一応そう言っておく。社交辞令ですね。

「トーヤっ。やっぱり生きてたんだね！ てつきり死んじやつたんじやないかって心配したよ」

笑いながら恐いことを言うダイ。子供って歯に衣着せないから凄い。

ダイの頭を撫でながら再開を喜んでいると、マアムもこちらへと近づいてくる。

「あの、はじめまして。私はマアムです。ダイの仲間で、一緒に旅をしています」

「ああ、よろしく。俺はトーヤだ。あと敬語はやめてくれよ」

互いに自己紹介を軽く済ませると、洞窟の奥の方から何人かやってきた。

そこには数カ月ぶりにみる友人たちの顔があった。

「よおっ！ 久しぶり、元気だったか？」

まるで幽霊を見るかのような呆けた表情。どうやらダイがさつき言っていたように死んだと思つてたみたいだな。・・・無理もないか、行方不明状態だったしね。

「おーい、聞こえてる？ーって、お、おい」

今度は俺が呆ける番だった。マリリンがゆっくり歩み寄つてきたかと思うと、急に抱きしめてきたのだ。

ダイとママムなんて顔を赤くして見ている始末だ。っていうかこれどうすりゃいいんだ。

仕方ないので俺も抱きしめ返して宥めることにする。

ーにしてもちよつと長い気がする。いや俺が緊張してるから長く感じてるだけかもしれないが・・・。

「再会が嬉しいのは俺も同じだけど、ちよつと大げさじゃないか？ 何も泣かなくても良いのに」

恥ずかしいのでおちやらけてアポロ達に話を振る。

「仕方ないだろう。君がいなくなつてからマリリンはずつと心配していたんだぞ」  
アポロに同調するようにエイミも頷く。・・・なんか勘違いしているこいつら。

「お前たちに言ってるんだよ」

言われてアポロたちは頬に手を当てて涙を流していることに気がついた。

彼らも恥ずかしかったのかしどろもどろになって何か言い訳をはじめた。  
・・・まあいつか。泣くほど心配してくれるなんて嬉しい限りだ。

「ふーん、お前もダイの仲間ねえ。どうしてここが分かったんだ？」

ポップの修行から帰ってきたマトリフに挨拶をすると、マトリフからそんな疑問が飛び出してきた。

やっぱりそうくるよね。ダイ達は気づかなかったみたいだけど、事情も知らない筈のヤツが突然やってきたのだ。普通は可怪しいと思うだろう。

「パプニカの気球船が見えたんですよ。向かっていく方向からバルジ島へ行こうとしてるんだと思って・・・緊急避難先として調査したこともありますし」

だからこそ俺はここに来る途中に言い訳を考えていた。なので答えに詰まることもない。

「それで島へ向かう途中で気球船が海岸に浮かんでたのを見つけて。死体も荷物もなかったんでこの近辺を探してたんですよ」

淀みなく答える俺。いつぞやの時のように話に齟齬が出ないように注意する。つていうかまるで興味無さそうだなマトリフは。自分で質問しておいて鼻ほじるのはどう

かと思う。

「今の状況は聞いたのか？　今夜お姫を助けにバルジ島へ行く。お前さんはどうするんだ？」

「状況はさつき聞きました。俺も戦います。レオナ姫とは知らない仲じゃないし、何よりダイがいくなら放おっけておけませんしね」

俺が協力すると聞いて、後ろにいたダイが喜んで飛び跳ねていた。

「やったー！　トーヤがいるなら凄く心強いよっ」

「ダイ、特訓はどうした。もう時間がないんだぞ。無駄口叩いてないでさっさと特訓に戻りな」

マトリフに追い払われるようにして特訓を再開するダイ。・・・目隠しして特訓ってことは空裂斬の修行だよな。

まだ修めてなかったのか。アバンは7割は終わったって言うたのに。

どれ、俺が修行を手伝ってやるか。ーとその前に作戦タイムだ。

俺はマトリフにフレイザードが使った禁呪法の特徴や効果、弱点なんかを事細かく聞きながらどの程度ダイを助けるか頭を悩ませるのだった。

## 43 出陣

「どうだ？ 俺のいる位置がわかるか？」

『☒』をしながらダイの周囲をゆつくりと歩く。

空裂斬は見えないものを斬る剣。その習得には相手の闘気を感じる必要がある。ならばその練習相手は闘気を操ることができないマームよりも俺の方が適任だろう。

巨大なオーラを纏えば戦士じゃなくてもその気配に気づくことができる。今は常人では気づくかどうかの微妙な強さでオーラを纏っている。

これに慣れたら徐々にオーラを少なくしていけば格段に上達するだろう。

現に今はこの状態での俺を目隠しながらも正確に追って来ている。

「ーうん、感じるよ。トーヤの闘気。大きくて静かで力強い気だ」

「よし、なら今度はこの耳栓をして一分たったら俺にタッチしてみる。音で場所探るなよ？」

・・・

「んっだー！」

「ーきやつ!? ダ、ダイ・・私よっ」

勢い良くマアムの胸を掴むダイ。目隠しを外して盛大に平謝りしている。ダイがわざとそんなことをする筈もないからマアムもまるで怒っていない。・・・羨ましい。

そんなこんなで俺達は空裂斬を覚えるべく特訓を続けた。

「ホイミの効果が殆どなかったって？」

マトリフから話を聞いた俺はダイ達やアポロ達も交えて作戦を考えるべく話し合っていた。

「ええ、それどころか力も5分の1程度に落ちてしまうとフレイザードが言っていたわ」

マアムは悔しそうにしながら拳を握る。

「よくそんな状態で逃げ出せたな。フレイザードも必死で追ってくるだろうに」

「これをヤツにぶつけたのよ」

俺の間にマアムは腰のホルスターから魔弾銃を取り出した。

「これは魔弾銃といって、あらかじめこの弾に込めておいた呪文を撃ち出すことができるの。銃自体は境界内じゃ使えなかったけど、呪文の込められた弾をフレイザードの

呪文にぶつけて誘爆させたのよ。その隙に逃げ出すことができたわ」

「・・・なるほどね」

あたかも今知りましただという感じで頷いてみる。いきなり事情通だったら可怪しいからね。これで俺も作戦を思いついた体で動くことができる。

「みんなの話を聞いて気づいたことがある。ーどうやら結界の中では呪文が使えないんじゃないくて、弱くなるだけみたいだな」

「どういうこと？」

ダイが首を傾げて俺をみる。

「もし呪文が使えないんだったら効果が弱いなりにもホイミが発動するはずがない。魔弾丸もトリガーを引いても発動しなかったのに相手の呪文で誘爆するなんて可怪しいじゃないか。あの結界内では呪文が使えないんじゃない、弱くなってるだけなんだ」

「それって同じことなんじゃないかねえのかよ？ 結局呪文は使えないんだから」

特訓から戻ってきたポップがマームにベホイミをかけてもらいながら聞いてくる。

「いや、使えるのなら話は変わってくる。発動さえするのならあとは魔法力を上げればなんとか形にはなるだろう」

「でもよお、そんな半端な呪文じゃフレイザードには太刀打ち出来ないだろう」

「ああ、そうだろうな。でも俺の考えは別にある。ーレオナ姫の生命力は明日の日

没までとか言ってたよな？」

ダイは俺の問いかけに無言で頷いて答えた。

「ヤツの言っていることが正確かどうか分からない。だからもしもの時を考えて俺は回復呪文を使える誰かと一緒に先に塔へ乗り込もうと思う。回復呪文で少しでもレオナ姫の生命力を回復しておかないとな」

「ま、待つて。塔にはフレイザードがいるのよつ。危険すぎるわ」

無謀とも言える俺の考えをマアムが止めようとする。

「かもな。でも俺はあくまでお前たちが結界を破るまでの時間稼ぎだ。それなりに腕には自信がある。引きつけておくだけならまず大丈夫だろう」

「だけどー」

「なあに、心配いらないうて。俺一人で乗り込もうってんならともかく、もう一人仲間を連れてくつて言ってるだろ？ なら勝算のないことは絶対しないっての」

何より俺自身死にたくないからね。当然考えあつての行動だ。

それより俺がこの世界にいることによって物語にどんな変化が起きるのか予想がでない。今のところ大した変化は無さそうだけど、安心することはできない。

原作ではフレイザードを倒した後、レオナは氷を自力で溶かすことができなかつた。元々ギリギリだったんだから十分気をつけないと助けられないなんてこともありうる。



俺はダイ達をムリヤリ納得させると頭の中でこれからのことをシミュレートして準備をするのだった。

ダイ達4人とゴメちゃんはマトリフの力でバルジ島へと飛んだ。

今度はタイミングを図って俺と回復呪文を使えるマリんと『同行』で島へ向かうだけだ。ー向かうだけなのだが。

「私も行く。回復呪文だったら私だって使えるぞ」

「私もよ。それにフレイザードの足止めなら少しでも戦力は多い方が良いと思うわ」

回復呪文を使える誰か一人と言ったのに選ばれなかった他二人が喧しい。ちなみにマリンは俺と一緒にいくと言って梃子でも動かない様子だったため二人は渋々認めざるを得なかったようだ。

「ダメ。フレイザードの足止めは近接戦闘が得意な俺一人でやるつもりだ。人数は少ない方が都合がいいんだよ。マリンには俺がフレイザードと戦っているところをすり抜けてレオナ姫の回復をしてもらう予定だ」

「・・・あなた一人で足止めできるの？」

「さっきも言ったけど、マリンも連れて行くんだ。仲間まで巻き込んで無謀なことは

しないよ」

自信満々に答える俺をどう思ってたか、アポロ達はようやく少し落ち着いた様子だ。

「つていうかお前たちには気球船の修理を頼みたいんだけど」

「何故だ？」

「きつと激しい戦いになるからポップも俺もみんなを連れて戻るだけの余裕が無いだろうし」

「・・・そういうことなら任せられた。君たちを見送ったら直ぐに修理に取り掛かろう」  
見送りなんていいからさっさと取りかかれば？ とは思ったけど言わない。早く着きすぎても困るからね。

というか舟でバルジ島へ飛んだダイ達だつてポップ一人だけ行かせてルーラで戻ってきてもらえば全員で島へ行けたしね。

あくまでダイのレベルアップイベントということを忘れてはいけない。俺はまだサポートに徹するんだ。

出すぎたマネをしないよう自制しつつ、俺はマリンと共にバルジ島へと飛ぶのだった。

## 44 挑発

「ーっ!? こ、これは．．．爆弾岩．．．数が多すぎるわ」

バルジの塔への入口を塞ぐモンスタの大群にマリンは息を呑む。

その数は軽く100を超えらるだろう。もしもこれらすべての爆弾岩が一気に爆発したら俺達は骨も残らず吹き飛ばさるだろう。

「本陣だからな。敵さんもここを薄くはしないだろう」

少し離れた森の中。俺たちは遠目で塔の様子を確認していた。

見た感じ他の軍団長やモンスタは出払っているようだ。きっと塔の中にはフレイザードしかないだろう。

「じゃ、時間もないし行くか」

「ちよ、ちよつとつ。ど、どうするつもり? 危ないわよつ」

「いや、大丈夫だって。結界の中じゃメガンテ唱えられないだろ」

「あつ。そ、そういえばそうよね」

俺の服の袖を引きながらマリンが後ろをついて歩く。．．．お化け屋敷じゃないんだから。

ギョロギョロと俺達の動きを目で追う爆弾岩の間を通り抜けて歩く。

呪文が使えないと分かかっていても恐いのか、マリンはさつきよりも少し強めに俺の袖を引いた。

そんな不安を払拭させるために早足で歩く。あと少しで塔の入口だ。塔へ入ったらどうやってフレイザードを惹きつけようかな。マリリンが姫を回復させる時間をヤツが与えるとは思えないし。

「きゃっ!!」

そんなときだった。マリリンの小さな悲鳴を聞いた俺は、すぐさま振り返った。

そこには足を掴まれて動けずにいるマリリンと、地中から腕を伸ばし這い出てくるフレイザードの姿があった。

「クハハハハッハハッハッ!!」 雑魚だけノコノコやって来るとはなッ。ーそおら!

これで一人殺したあ!!」

地中から出たフレイザードはマリリンの足を掴むと宙吊りにして地面に叩きつけようと振り回した。その先にはいつの間にかできていた氷柱があった。

「せいッ!」

投げのスピードが乗る前に俺はフレイザードに近づくと右足でフレイザードの腕を蹴り碎き、落ちるマリリンをお姫様だっこでキャッチした。

「ぐあつ．．．．て、てめえ」

砕かれた腕を抑えて呻き声を上げるフレイザード。しかしあの程度ならば直ぐに再生して襲い掛かってくることだろう。

「マリリン。コイツが出てきたならちようど良い。俺が相手をするからお前はレオナ姫のところへ」

俺が促すとマリリンは領き入口へと駆ける。それを黙ってみているわけもなく、フレイザードは追おうとするがー。

「おっと。話し聞いてなかったのか？ お前の相手は俺だつての」

俺は行く手を阻むようにフレイザードの前に立つ。するとフレイザードはあっさりともマリリンを追うのを止めて俺へと向き直った。

「．．．まあいい。あの女を行かせたところで水を溶かすことはできねえ．．．それよりもテメエ、この結界内でオレの腕を砕くとはやるじゃねえか」

どうやら俺を完全に敵と認めたようだ。砕かれた右腕を再生させながら隙を伺っているようだ。

「ダイがオレの結界を破つてここまで辿り着けるとは思えねえが、万が一ということもある。そうなったときテメエと徒党を組まれたら面倒だ。先に片付けてやるぜッ！」  
凄まじい殺気を放ち、フレイザードは俺との距離を詰めてくる。

薙ぎ払うかのように豪腕を振るい攻撃を繰り返すフレイザード。俺はそれを後退、あるいは前進して一定の間合いを維持する。

躲しては距離をとり、フレイザードが距離を詰めては交錯するようにして躲す。まるで鬼ごっこだ。

「クッーちよろちよろと鬱陶しいッ・・・カアッ!!」

近接では埒が明かないと思ったのか、フレイザードは口から燃え盛る火炎は吐き出した。

「ー危ねっ」

火炎を跳躍して躲し爆弾岩の上に着地する。俺が元いた場所を見ると別の爆弾岩が炎に熱せられて仄かに赤くなっていた。

「どうした、逃げるだけかッ!? もっとも人間のテメエにはオレを殺すことはできねえだろうがなッ!! カハハハハ」

防戦一方。俺とフレイザードの戦いを傍から見た場合そう表現するのが正しいだろう。

しかし俺の目的は時間稼ぎだ。マリンがレオナ姫の体力を回復する間、適当にフレイザードの相手をしていればいい。無理に攻勢に出る必要はない。

・・・とはいえこのまま躲し続けるのは普通に戦うより遥かに危険だ。それにあんま

り露骨だとフレイザードがマリンの方へ行くかもしれないし。

フレイザードの体力を削っておく意味でもしつかりと戦っておくか。そうすればダイの戦闘も少しは楽になるだろう。

そうと決まればー。

ダイ達は結界陣を破壊する前に戦いを挑むのは無謀だと口を揃えて言っていたが、俺から言わせればそんなことは断じてない。

事前情報とある程度の技術があれば打開策の一つや二つは容易に思いつく。

この世界の呪文にいわゆる概念系の能力は存在しない。魔力や闘気なんてものは存在するがそれも物理法則に準拠したものばかりだ。

この結界陣もそれは変わらない。呪文を封じるから呪文が使えない訳じゃない。魔力を体外に出すことが困難だから呪文が使えないのだ。

マリン達から聞いた話じゃホイミは効果は薄いだけで発動していたようだったからな。

要はこの場で呪文を使いたければ通常よりも多い魔力を時間をかけて溜めてから唱えれば良いということだ。

俺は魔力をコントロールして周囲にメラを放った。それを見たフレイザードは驚いた様に目を見開く。

「ど、どうして結界の中で呪文をー!?」

そんなフレイザードは無視して立て続けにメラを周囲に放ち続ける。10発を放ち終える頃には周囲は炎に包まれていた。

「テメエ・・・パプニカ三賢者とかいうヤツの最後の一人か。さっきの女も前に戦った時に奇妙なことをしやがったからなあ。確実にここで殺しておくぜ」

結界に余程自身があつたのだろう。それが効いていないと分かるとフレイザードは神妙な面持ちで俺を睨む。

「俺が賢者にみえるつてののか? 残念だけど違うぜ。俺はー別にもいいか。お前はくたばるんだからな」

答えるのも面倒なので俺は口を閉ざした。

「ーっ呪文が使えるくらいで調子に乗りやがって!! テメエの狙いは読めてんだ。どうせ前にあの女どもがやったみたいに俺に炎を吸収させて自滅させようって魂胆だろう。同じ手を使おうなんざバカなヤツだツ!! クカカカカカ」

「忠告ありがとう、だけど見当違いだぜ。ほらっ、周りをよく見てみるよ」

俺に促されるように周囲を見回すフレイザード。どうやら俺の狙いに気づいたよう



だ。

「ま・・まさか・・・テメエ・・・イかれてやがんのかッ?!」

俺の狙いは爆弾岩。その全てを炎で包むことだった。

「賭けをしようぜフレイザード。ダイ達が炎魔塔と氷魔塔を壊して結界が解けたら爆弾岩が『ボンッ』だ。お前は魔王軍が守りきる方に賭けるよ。俺はダイ達が結界をぶち壊す方に賭けるから。賭けるのは当然互いの『命』だ。ーまさか、逃げねえよな?」

「・・面白えッー乗ってやろうじゃねえかッ!! 向こうの決着がつく前にテメエが死なねえ様に気をつけなッ!!」

炎に焼かれ、結界が破られれば即座に爆発する爆弾岩の恐怖に震えるデスマッチ。余程お気に召したのかフレイザードは狂笑する。

いくらフレイザードが禁呪法で生み出されたバケモノだとしても100を超える爆弾岩の爆発をまともに喰らえば死を免れない。

こうして俺とフレイザードの文字通り命を賭けた戦いが始まった。

## 45 自爆

トーヤとフレイザードの戦闘は、一方的な様相を呈していた。

「っ、ーぐうッ！」

呻き声と共に地面に転がっては即座に体勢を立て直す。直後、間断なく放たれる呪文も誰もいない地を焼き払うのみ。

延々と繰り返される攻防。

しかしそれも時間の問題。付け焼刃に放たれる呪文ではまるで反撃にならない。

戦闘が開始されてからの攻撃回数は優に100を超えている。しかしフレイザードの攻撃は只の一度も当たっていない。

霞むようなスピードで地を駆けるトーヤをフレイザードはまるで捉えることができない。

「ーそこかアッ!!」

トーヤが方向転換する瞬間。一瞬の停滞を狙って呪文を打ち込むもうとするがー。

「っ!?!」

魔性の勢いで迫り来る爆弾岩を辛うじてフレイザードは回避する。

トーヤの膂力により投擲され、必殺の一撃と化した爆弾岩。これがフレイザードを先程から苦しめている攻撃だった。

禁呪法で生み出した生物は、その生命の源となる核を破壊されなければ死ぬことはない。

急所を敵に悟られずに戦うことができるフレイザードは、人間との戦いに絶対的な優位を感じていた。

しかしその優位は完全に消し去られた。何故なら、トーヤはフレイザードの核などではなく身体全体を叩き潰すよう攻撃してくるのだから。

これでは如何に巧妙に核を隠しても意味が無い。

何とか爆弾岩を回避したフレイザードは狙いもつけずに呪文を全方位へ乱発する。そのうちの一発が偶然にも正確にトーヤへと向かっていく。

「はあッ!!」

トーヤは即座に手近にいる爆弾岩を投げつける。その巨岩は呪文を簡単に霧散させ、まるで速度を緩めずにフレイザードへと突き進む。

フレイザードにとつて何より厄介なのが呪文や火炎、吹雪。そのすべてを爆弾岩の投擲により弾かれてしまうことだった。

元々氷炎の呪文は物理的破壊力は高くない。巨大な岩石そのものである爆弾岩を即

座に粉々にするなど不可能だった。

「オーづッ」

直撃を免れるも右腕を砕かれたフレイザードは片膝をついて呻く。

攻撃は動きが速すぎて当たらない。無差別に呪文を放つても爆弾岩により弾かれてしまう。フレイザードは未だかつてない程に追い詰められていた。

「クツソオオオツ!!」

失った腕を瞬時に再生させると、フレイザードは立ち上がり両手を広げて力を溜める。

「氷炎爆花散ッ!!!」

激情と共に放たれた岩の雨。

それは先程の全方位攻撃の比ではなく、逃げ場も躲す隙も一切存在しない。更にはその飛来速度は如何にトーヤのスピードを以ってしても反撃や回避を許すものではなかった。オーはずなのに。

必中を確認する一撃を放ったフレイザードは、自らの放った岩の雨の先にそれを見た。

『円』により周囲への感知能力が激的に向上しているトーヤには飛来するすべての岩が見えていた。

すべての配置を把握したトーヤにとつてそこから活路を見出すことは簡単だった。まるでビリヤードの様に弾いた岩を別に岩へぶつけて弾く。

生じた隙間へ身を動かしては同じことを繰り返す。

神業のような悪魔の所業。

それは自らの身を守るだけでなく、意図せずフレイザードの戦意まで大きく削ることとなる。

斯くして無傷で岩の雨を抜けたトーヤは、追い打ちをかけるかのように大きく跳躍する。ちょうどフレイザードの頭上へと差し掛かる頃、トーヤの人差し指が輝き出した。

その光を見た直後に反応したフレイザードは流星というべきか。

即座に氷を吐き、空中に無数の氷の粒を生み出した。その氷は光を乱反射させトーヤの狙いを妨げる。

思わず舌打ちしながらも構わず人差し指から霊丸を放つ。しかしそれはフレイザードを捉えることはなく、地面に底の見えない程の深い穴を空けるのみとなった。

着地したトーヤは、自身の渾身の一撃が外れたにも関わらず何故かまるで気にした様子はない。

そして防戦一方なうえ、今この瞬間に殺されても可怪しくないフレイザードも何故か不敵な笑みを浮かべている。

自身の置かれた状況に不釣合いな様子 of 二人。相互に奇妙なものを感じつつも戦闘は仕切り直しとなつて再開される。

岩を投擲しては回避されての繰り返し。

都合何度目か分からない程に繰り返される戦闘に暇はまるで存在しない。

いつまでも続くかと思われるその攻防は、しかしある者達の声により唐突に終わりを告げた。

ーメガンテー

死の宣告の様な低い声がそこかしこから響き渡る。

大地を揺する轟音と大気を焦がす程の熱量、そして白い光が二人の戦士を覆い尽くす。

最後に見たのはニヤリと笑う敵の姿だった。

## 46 勝者は

「ーハア、ハア」

荒い息を吐きながら地中から這い出る男の姿。

爆弾岩の爆発により焦土と化し、未だ焦げた臭いと熱気が辺りを包んでいる。

この惨状では確認するまでもなく、他に生きているものはいないだろう。

地中へ逃れ爆発から身を隠した彼一人を除いて。

爆発前に決着をつけるつもりだったが、想定通りにはいかなかった。

そのことに苛立ち舌打ちをするも、余計に苛立つだけだった。

「ハア、ハア」

息を整えるように静かに佇み、物思いに耽る。

ダイ達に来るまでにはまだ時間が掛かるだろう。その間に傷ついた身体を癒やす。

予定通りとはいかなかったが、大した問題でもない。

結局結果は同じことなのだから。

ほくそ笑みながら彼はダイ達を待つ。

人間どもを根絶やしにして、栄光を手に入れるために。



ポップとマアムと合流したダイは塔へと向かって走っていた。

「急がなきゃ、きつとトーヤ達はフレイザードと戦っているはず」

「ちよ、ちよつと待ってくれよお。そんなに思いつきり走られたんじゃ向こうに着く頃にはへばっちまうよお」

「なに呑気なこと言ってるのよ。こうしている内にもトーヤやマリンさんは戦っているのよ」

「そ、そりや、そうだけーのわああああ!!」

ポップが反論しかけたそのとき、塔の方から耳を覆いたくなるほどの轟音が彼らを襲った。

「な、なんだ!?!」

ダイが音のする方を見ると、そこからは大量の煙があがっていた。



「バルジ塔のあたりよ。ということはやっぱり戦っているんだわっ」  
「ー急ごうっ！」

尋常ならざる音と煙にダイは更に急ぎ塔へ向かう。

ポップとマアムも顔を見合わせ頷き合おうとダイの後を追い走った。

.....

森を抜けると焼け野原だった。

ひと目見ただけで凄絶な戦いがあつたのだと分かるほどの惨状。

ダイ達はその光景に息を呑み、そして入口の前に佇む人影を見た。

「フ、フレイザード・・・か？」

そこには赤い岩の半身と青い岩の半身を携えたフレイザードの姿があつた。

すぐに襲い掛かってくるかと思いきや、不気味なほど冷静にこちらを眺めるフレイザード。その姿にダイ達は少なからず恐怖を覚えた。

「や、やいつ、てめえフレイザード。二人をどうしやがったっ」

威勢よく言い放つポップだが、直後にフレイザードに睨まれダイの後ろへ隠れる。

「・・・見ての通りよ。ーオレもかなりの手傷を負わされたがなあ」

周囲を顎で示し答えるフレイザード。その言葉の秘める答えは至極明快だった。

「な、なんだって!？」

トーヤ達の姿を求めて周囲をみるが、見渡す限り焼けた大地があるのみ。他に誰もいるはずがなかった。

「……二人は下がっててくれ。……コイツは……俺が倒すッ」

怒りに声を震わせながら、ダイはようやく言葉を紡ぎだしポップとマアムに告げる。

「だ、ダイ……」

ダイの気持を汲んでか大人しく下がる二人だったが、それでも不安そうにマアムはダイの名を呟く。

「お前が俺を倒すだどッ!!! 結界を消したくらいで良い気になってんじやねえぞクソ

ガキッ!!!」

ダイが戦闘態勢に入ると、途端に火が点いたかのように叫び自らの胸のメダルを引きちぎる。

「バーン様ツオレに更なる勝利と栄光をツ!! ー死ねええ、ダイツ、弾岩爆花散!!!」

フレイザードの身体が弾け飛び、その岩がダイのみならず後方へ下がったポップやマアムをも巻き込み襲いかかる。

「ついたッ!？」

「きゃっ!?!」

不意打ちの様な攻撃に二人は痛みの声を上げて地へ転がる。

尚も容赦なく降り注ぐ岩の嵐。

「これがオレの最終闘法、弾岩爆花散だッ!! この技の前にはどんな力も呪文も意味はねえッ!! クハハハハッッハハハッ」

あざ笑いながらも攻撃の手を緩めずにフレイザードはダイ達を襲い続ける。

あまりの猛攻に為す術もなくポップとマームは只の一度も反撃することもなく地に伏すこととなった。

二人はもう動けない。トドメはダイを仕留めてからで良い。

ダイへの攻撃のに集中するフレイザードだったが、そのしぶとさに苛立っていた。

何度繰攻撃しても、ダイはすぐ立ち上がるのだ。

弾岩爆花散を受けてダメージを負わない人間などいない。ならば躲しているのか? いやそれこそ不可能だ。

そう思うフレイザードだったが、先の戦いでのことを思い出していた。

すべての岩を躲してみせたあの男。その姿がどうしてもチラついて仕方ない。

何故あの男は爆発の直前笑っていた。何故あの男は無意味な賭けを仕掛けてきた。

何故あの男は結界を破壊する前に挑んできた。

すべてが不可解だ。敵を殺してこんな不快になったのは初めてだった。

訳も分からず苛立つフレイザード。

それも束の間、今は戦闘中だ。考えるならすべては事が済んでからだ。

意識をダイへと戻すフレイザードだったが、そこには目を瞑り剣を鞘に納めたまま静かに立つダイの姿。

その姿を見た次の瞬間。フレイザードの意識は消し飛んだ。

## 47 解呪

塔から地上を見下ろすと、地中から這い出てくるフレイザードが見えた。

「お、生きてた」

恐らく大丈夫だろうと思っていたけど、一応フレイザードが生きていたことに安堵する。

狙い通り爆弾岩の爆発を穴に飛び込むことで回避したようだ。

気づいてくれたようで何よりだ。そのために態々あんな深い穴空けてやったんだからな。

俺はといえば、爆発の直前に全力でジャンプ。塔の4階へ飛び込み難を逃れたのだつた。

なんとなく眺めていると、ダイ達がやってきた。これでフレイザードが塔へ入ってくることもないだろう。

フレイザードはダイ達に任せることにして、俺はマリンの様子でも見に行くか。

.....

「どう？ レオナ姫の様子は」

レオナの氷の彫刻が置いてある階まで登り、マリンへ声をかける。

「ト、トーヤ……ぶ、無事だったのね。下ですごい爆発音が聞こえたから心配してたのよ」

「わるいわるい。でもそういう作戦だつて言つてあつただろ？」

俺はこの島へ入つてすぐにマリンへと言付けてあつた。フレイザードをなるべく派手に惹きつける。だから何があつても俺には構うな、と。

「そ、それはそうだけど。でもあんな爆発は想定外よっ」

「そう言うなつて。それでレオナ姫は？」

話が進まないので強引に話題転換し、姫の容態を聞く。

するとマリンは若干表情を曇らせた。

「どうした？ もしかしてかなり悪いのか？」

「い、いえ。そうじゃないんだけどー」

マリンはレオナの氷へ近づくと回復呪文をかけた。

呪文の光が輝きレオナを癒やし……てるのか？

「こういうわけなのよ」

「な、なるほど」

つまり回復できてるのかできてないのか判断がつかないってことか。

禁呪法とか訳の分からん呪文でできた氷だ。普段は衣服の上からでも問題なくても、この氷のせいで回復呪文を受け付けられない可能性は大いにある。

「ど、どうしましょう……このままでは姫が」

そんな縋るような表情で俺を見ないでくれ。

「お、落ち着けて。もしかしたら回復できてるかもしれないだろ。．．それにフレイザードはもって日没までと言ってたし、まだ時間はある」

問題は原作だと自力で氷を溶かせなかったことにあるわけだが。最悪レオナ死ぬし。元々それを回避するために先に乗り込んだんだから、このまま何もしないのは憚られる。

しかしどうするか。マリンにはああ言ったものの、回復呪文が効いてるとはとても思えない。

俺の錬金アイテムの中には状態異常や呪いを解くものもあるにはあるが、直接本人に飲ませたり振り掛けたりできないのでは効果が無い。

ダイ達がフレイザードを倒して禁呪法が溶けるのを大人しく待つしかないのか．．．  
「本当にフレイザードを倒せば術は解けるのかしら」

俺が考えを巡らせているとマリリンが呟いた。

「それは大丈夫だって。この手の呪文は術者が死ぬと解けるように出来てーあつ」  
自分で言っていて気がついた。

「もしかしたらフレイザードを倒さなくても氷を溶かせるかもしれない」

俺はマリリンに塔の屋上で待機するようにお願いをして、レオナの氷とともに『同行』である場所へと向かった。

「あ、そうだ。あと指輪しばらく貸してくれ」

『同行』って便利だな、とつくづく思う。

ほとんど一瞬で好きな場所へ飛んだり、または洞窟の外へ離脱したり。

でもたまに不思議に思うんだ。もしも『同行』で登録されている場所が太陽系の外だったら、『同行』は発動するのだろうか。

太陽系の外が問題ないとして、じゃあ別の銀河は？ 銀河団は？ 銀河群は？

どれだけ距離が離れていても一様に効果を発揮するとは思えない。何故なら、距離が開けば開くほどタイムラグは発生するし、必要なエネルギーが変わってくるからだ。

携帯電話やTVだってそうだろう？ 離れすぎていると音声は聞き取りづらくなる



し、時間差が発生する。それと同じだ。

『念』も『呪文』も変わらない。有効範囲というものはあらゆる技術に於いて必ず存在するのだ。

ならばこそ、フレイザードの掛けた禁呪法も必ず有効範囲というものが存在する。

元々術者が死んだら解けるってのは魔力が途絶えるから解けるっていうことだ。ということとはフレイザードの魔力から遮断してやればいい。

この星全体を覆うくらいの有効範囲だとしたら逃げ場はないが、俺はそれが届かなそうな場所に心当たりがある。

それがここ「破邪の洞窟」だ。

この洞窟はここに棲むモンスターの放つ邪気によりリリミトが使えない。つまり魔力の波長を乱す効果があるようなのだ。

ここならばフレイザードから送られているであろう魔力を妨害できるかもしれない。単純に距離も離れてるしな。

そして極めつけはこれだ。マリンから貸してもらった『法力の指輪』。

この指輪は周囲に漂う魔力を吸収し蓄える特性がある。これがあるだけで大気中の魔力はこの指輪へと向かう。

距離と洞窟&指輪による魔力妨害。これだけ邪魔が入れば禁呪法を破れるかもしれない

ない。

「んしょっと」

レオナ姫の氷を担ぎ洞窟へ入るとすぐに氷に変化がおきた。

「おいおい、天才かよ」

凄まじい勢いで溶けていく。それはいいんだけど水半端ねえな。服ビショビショじゃねえかよ。

担いだレオナを下ろそうにも氷はどんどん小さくなっていくため落とさないようにするので精一杯だ。まるで鰻のよう。

「あ、あ．．．ああ．．．あーあ」

同じくレオナがびしょ濡れ状態のせいで手が滑り、地面に落としてしまった。

大丈夫。脚で何とか頭部は守ったから打ちどころは悪くない。だから心配いらないんだけど．．．。

どうしよう。レオナが泥だらけだ。

## 48 決着

どうしてこうなった。

粉々になった鎧を眺めてオレはそう考えていた。

核を壊され、体を維持できなくなったオレは追い詰められていた。

せめて誰か一人でも道連れにしなけりや死んでも死にきれねえ。

そう思ったオレの前に現れたのはミストバーンだった。

ミストバーン。癖の多い魔王軍の中でも一際謎に包まれた男だ。

オレは必死で助けを求めた。その場のぎで良い。犬死になんてまっぴら御免だ。

ヤツはオレに炎の暗黒鬨気、すなわち魔炎気になるなら助けてやると言ってきた。

それはオレにヤツの部下になれということ。オレはそれを受け入れた。

・・・気に食わない、手段だったがな。

オレには歴史がねえ。ハドラー様がオレを作ってから1年足らずしか経ってねえ。

だからオレには手柄があるんだ。百年経っても千年経っても手に入らねえ程の手柄が。

そのためならオレは何だってする・・・何だってな。

ミストバーンに貫った鎧の体は最高だった。力が溢れる、漲ってくる。

あんな体を貫つちまったらミストバーン、テメエはもう用済みだ。ダイを殺した後、いずれテメエも殺してやるーそう思っていた。

なのに何故、オレは今こうなっているんだ。

たったの一撃で最強のはずの鎧は粉々だ。もう身動き一つとれやしねえ。

ちくしょう。ふざけやがって。何が最強の鎧だ。騙しやがって。こんなところで死んで堪るか。

こうなったらもう一度ミストバーンのヤロウから体を貫い、今度こそダイの小僧の息の根を止めてみせる。

「賭けは俺の勝ちってことで良いよな、フレイザード」

「——ッ!？」

もう一度ミストバーンへ助けを求めようとした矢先、突如現れたその男にオレは驚き言葉を失った。

その男は、ダイが来る直前まで戦っていたイカれたヤロウだった。

腹の立つ顔を見たいので、自分が今死にかけていることさえ忘れそうになる。

「……ずいぶんポロポロじゃねえか。そんな姿でお仲間の助っ人つてえ訳かい」

「お互い様……っ！かお前の方が酷えだろうが、目玉一つのくせ。お前の仲間も呆れて

帰っちゃったみたいだぜ」

ヤツの示す方向をみると、ミストバーンはいつの間にかいなくなっていた。

どうしようもねえ。オレにはもう何一つ手は残されていない。・・・命乞いをしたところで見逃しちやくれねえだろう。

だから最後にオレは精一杯の皮肉を言つてやることにした。コイツにオレという存在を刻み込んでやるために。

「っオレはダイに負けたが、テメエに負けたわけじゃねえ!! あのまま続けてればテメエには勝っていた!!!」

ああそうだ。オレはあの時全力で戦つちやいなかった。ダイを倒すために力を残していた。

ダイに負けたのもそうだ。コイツさえいなけりやオレはツー。

「・・・ああ。お前は強かったよ、フレイザード。もう二度と戦いたくないくらいにな」  
それみろツ。コイツはオレを恐れてやがる! クハハハハツ

いくら強かろうが所詮人間ナンテコンナモンヨ。

オレが全リヨクで戦うコトさエでキテいれバ、勝ツテイタンダヨ!!!

オレノカチだ! オレダケノシヨウリダツ。

スベテノシヨウリとエイコウハオレノモノダ。

カハハハハー。

\* \* \*

笑い声を上げて消えていくフレイザードを俺たちは黙って見送った。

「ちよつと、可愛そうだよな。最低な野郎だったけど・・・破片でも集めて墓でも作ってやるか」

ポップはフレイザードの最後に思うところがあつたのか、悲しい顔をしていた。

「・・・それは俺がやっておくさ。お前たちはレオナ姫のところへ行くといい」

レオナの名前を聞いて思い出したようにダイとマームは駆け出し、後ろ髪を引かれるようにしながらポップは少し遅れてその後を追った。

「まったく、文句言う前に死んじまいやがって。よくも丹精込めて作った俺のバルジ島をめちゃくちゃにしやがったな」

フレイザードの鎧の破片と後生大事にしたメダルを穴に埋めながら呟く。

原作のフレイザードはミストバーンに踏まれて死んだ。それが可愛そうだから思わず飛び出してしまったけど。

「しかもあのヤロウ、俺に勝ったつもりで死んでいきやがった。負けた癖に」

ま、フレイザードらしい最期って感じではあるか。

俺はフレイザードの墓を作り終えると、遅れて加勢にやってきたクロコダイインとヒュンケルと一緒にダイたちの元へと向かうのだった。

## 49 祝賀会

魔王軍の総攻撃を見事にはね除け、俺達はパプニカへと戻ってきた。

今は慰労会的なやつだな。飲んで食べて騒いで、次の戦いに備えて英気を養おうということだろう。

数カ月ぶりの再会となるレオナに挨拶に行ったところ、何故か指をさされて大笑いされた。

理由を聞いたら「あなたの姿があんまりボロボロなのでつい」と言われた。

確かにレオナの言う通り俺の服はボロボロだった。

といつても戦闘でそうなった訳ではなく、自分でやったのだが。

レオナを泥まみれにしてしまったがために「自分もボロボロになっておけば怒られないんじゃないか？」という俺の完璧な思考に基づいた作戦である。

しかしそんな事情を知るはずもないレオナが俺のボロボロな姿を笑うというのは如何なものか。

命を掛けて助けに行った人間に対して余りといえばあんまりな言葉だ。

これには俺もさすがに抗議をしようと口を開いたのだが、声を発する前に「あたしあ



の時起きてたのよ」と言われてしまい大人しく口を閉ざした。

そうか起きてたのか。なら目の前で泥水にダイブする俺の姿はさぞかし滑稽だっただろうな。

後悔すると共に、気絶しているのを良いことにいかがわしいことをしなくて良かったと心底安堵している自分がいる。

その時のことを思い出しているのか、未だレオナの笑いは収まらない。これ以上ここには分が悪いので早々に別のグループへ退散した。

足早に去る俺の後ろから聞こえてきた「ありがとう」という言葉が妙に印象的だった。

.....

「お前もそんなところにいないでコッチに来て一緒にご飯食おうぜ」

壁を背に佇むヒュンケルに声をかける。

これからはアバンの使徒として生きろとレオナから言われていたのだが、元魔王軍としてはそんなにすぐには打ち解けられないのだろう。

仕方ないので、俺は強引に手を引っ張ると空いているテーブルへと向かいご飯を食べることにした。

本当はクロコダイも誘いたかったのだが、バダックさん達と盛り上がりつつあるので止めておく。

しばらくヒュンケルと二人で話していると、アポロたちがやってきて俺達へグラスを差し出した。

「飲むか？」

「あ、酒はダメなんでオレンジジュースください」

「トーヤ、口調が変よ」

オレンジジュースをエイミから受け取る横で、マリリンが怪訝な表情で俺に言う。

「座れば？」

三人へ促すと、皆はそれぞれ適当に席についた。

するとヒュンケルがアポロの顔をみて何かを考えている様だ。

「おまえは・・・そうか、あの時の」

「どこかで会ったか？」

「ああ、全身に鎧を纏った男と戦ったことがあるだろう。それは俺だ」

「っ!?! そ、そうか・・・あの時の。確か軍団長だと言っていたな。道理で強いはずだ」

「ふふ、俺もあの時はしてやられた」

「どうやらヒュンケルとアポロは戦ったことがあるらしい。」

戦ったことで友情でも芽生えたのだろうか。二人はなんとなく仲良さげだ。

「笑い事じゃないわよアポロ。あの時の怪我は酷かったんだから」

「笑い話にできて良かったじゃないか。なあトーヤ」

何故俺に振る。

「あなたなんかずっと家に籠もってて魔王軍のことなんて知らなかったんですもんね」

ほらみろ。エイミの小言が俺に矛先を変えたじゃないか。

「それにしても突然洞窟へ現れた時は驚いたわ。死んだと思ってたから」  
マリンが俺のフォローのつもりなのか話を逸そうとする。

それにしてもヒュンケルはそれなりに上手く馴染めているようだ。

ま、そりやそうだよな。原作でも普通に問題なくやってたし。

心配して損したぜ。

「ふわあ〜」

気が抜けたせいaka段々眠くなってきた。少し早いけどもう寝るか。

そう思っつて移動しようとするのだが、あまりにも眠くてどうしようもない。

俺は机に突っ伏したまま意識の底へと沈んでいった。

\* \* \*

最初に会話を交わしたのは地底魔城での戦いの後だった。

ちようどクロコダインと共にダイ達の加勢に行くという話をしていた矢先のこと。隠れて話を聞いていたのか、その男―トーヤも協力したいと言ってきたのだ。

話している最中、廃墟となったパプニカで戦ったことを思い出した。俺のブラッディースクライドを受けても生き延びた男だ。相当な実力者に違いない。

当の本人は俺のことを覚えていないのか、まるで気にした様子はない。

魔王軍と戦うのなら、自分の正体がバレるのも時間の問題だ。だから俺は自ら魔王軍の軍団長だったことやパプニカで戦ったことをトーヤへ告げた。

その場で襲い掛かられても可怪しくなかった、にも関わらず―

「バーん」

あろうことかトーヤはそんな軽い一言で終わらせてしまった。

それだけではない。傷らだけの俺やクロコダインを見て、治療までしてくれた。―  
そして、仲間だと言った。

殺されかけたというのに、不思議なことを言うやつだと思った。

今にして思えば、ダイ達やクロコダインもそうだ。自分を殺そうとした相手に何故こ

うも心を開くことができるのか。

だからこそ、俺もみんなのために何かをしなければならぬ。

仲間だと言った、彼らの気持ちに応えるために。

トーヤと別れバルジ島へ向かっているとき、思い出したことがある。

最初にパプニカで戦った際にトーヤは俺の名を叫び俺に向かって呪文を放った。

あれは何だったのだろうか。呪文のことではない。何故トーヤが俺の名を知っていたのかということだ。

再び会う機会があれば聞いてみようと思った。そしてその機会は思いの外早く訪れた。

ハドラーを倒し塔へ向かうと、そこにはトーヤの姿があった。

どうやら墓を作っているらしい。

誰の墓かと尋ねると、短く一言フレイザードとだけ答えた。

その顔がひどく物悲しそうに映ったのでそれ以上言葉をかけるのは憚られた。

そして今、トーヤはそんなことがあったことなど嘘のように明るい表情で俺の手を引つ張り歩いている。

テーブルへ着くと呆れるほどの食欲で料理を食べ始めた。

「そんなに食べて大丈夫なのか？」

既に10人前は軽く超えるであろう量を食べているので少し心配になる。

「普段はもつと食べてるからヘーキ、ヘーキ」

なら普段は一体どれほど食べるのか、気になったが聞くのはやめておこう。

「ていうかお前もちゃんと食えよ。明日からまた一緒に魔王軍と戦うんだから」

「変わったヤツだな、お前は。いや、ダイやレオナ姫もそうだ。俺は数え切れない程の人を殺めているというのにー」

自分を卑下するなどと先ほどレオナ姫から言われたばかりだというのに思わず口をついて出てしまった。気づいた時にはもう遅かった。

こんなことを言っても相手を困らせるだけだろうに。

「・・・お前だけじゃない。俺もたくさんの人を消してしまった」

それはまるで懺悔のようだった。

先ほどまでの明るい雰囲気は消え、思いつめたような表情になる。

失敗したと思った。この男にもきつと俺のように何か後ろめたい事情があるのだから。

それを無理に聞き出すようなマネはしたくないし、するつもりもない。

続く言葉を失っていると、トーヤの知り合いがやってきた。

おかげでまたトーヤの調子が戻り、再び饒舌になり話し始めた。

と思つたら、どうやら酒に酔っているようだ。しばらくして机に突つ伏したかと思つたら、そのまま動く気配がない。

「先ほど酒はダメだと言つていたようだが・・・」

おそらく原因であろう飲み物を渡した女性に声をかける。

「大丈夫よ。姉さんに散々心配かけたんだからこれくらいやらないと。明日は二日酔いで苦しむといいわ」

「まったく、エイミつたら。それにしても本当にお酒に弱いよね、あれだけの量でこんなになつちやうなんて」

先ほどのからのやりとりからしてトーヤと仲がいいのが伺えた。

三人にトーヤを任せ俺は席を立った。

今日は楽しかった。俺のような人間を迎え入れてくれる場所があるなんて。

クロコダインと共に鬼岩城を目指して歩きながら、再びみんなと会うことを楽しみにするのだった。

## 50 本音

「じゃあ任せたわね」

そう言つてエイミはアポロを連れて私とトーヤを置いて行つてしまった。

机に突つ伏したまま動かないトーヤを何とか起こし、肩を貸して歩いた。

城の至るところは襲撃でダメになつていたけれど、幸い私の部屋は無事だった

だからこれは不可抗力。こんな状態の彼を森の奥にある家まで運ぶことはできないので、仕方なく私の部屋へ運ぶことにした。

そして部屋へ彼を連れてきた私は、彼をベッドへ寝かせようとして動きを止めた。

彼の服を見て考える。

泥は乾いていたため叩いて大部分は落とすことができたが、それでも汚れていることに変わりはない。

「着替えさせたほうが良いわよね」

城には兵士たちや街の人達用の簡易的な服が備蓄品として蓄えられている。

一時的に彼を椅子に座らせると、私は着替えを取りに行つた。

しかし問題はその後だった。



彼は酔いつぶれたまま動けない。なんとか着替えてもらおうと声をかけるも、小さく返事をするだけ。

私が着替えさせるしかない。人に見られたら誤解されそうなので部屋の鍵を掛けてカーテンを閉める。

そして着替えさせやすいようにベッドへと寝かせた。．．．なんだか悪いことをしている気分だわ。

私はなるべく身体を見ないようにして、手早く着替えさせることにした。

．．．．．

「よ、ようやく終わったわ」

他にも色々思うところはあったけど、なんとかやり終えた。

こんなこと本人に知られたら恥ずかしくて死んでしまう。彼が目覚ましたら自分で着替えていたと白を切ろう。

赤いであろう顔を隠しながら、私は彼の着ていた服を洗濯するために部屋を後にした。

洗濯した服を干してから部屋へ戻ると彼がベッドに腰かけて座っていた。

「あら、目を覚ましたのね」

「あ・・ああ。ヒュン・・ケルは？」

まだ酔っているのだろうか。焦点があまり定まっていないうような気がする。

「さつきマアムから聞いたんだけど、クロコダインと一緒に魔王軍の偵察へ行つたそうよ」

「・・・そう・か。やつぱり行つたのか」

やつぱりということとは、トーヤは彼らが出て行くことを分かっていたんだらうか。

まだ知り合つてほとんど時間も経っていないはずなのに、トーヤは彼らのことを随分理解しているみたいね。

「あなたも一緒に行きたかった？」

私はトーヤの横に腰を下ろして彼をみる。

「あなたつて怖いもの知らずなのかしら、普通は軍団長なんて聞いたら少しは怖がるものだと思うけど。いつの間にかそんなに仲良くなつてるなんて」

アポロもそうだけど、男つて結構単純なのかもしれない。殴り合いの友情なんてものも、物語の中では良く聞くし。

「あいつは、そ、そんなに悪いやつじゃない。俺の方が・・・ずっと」

何も無い空間を見つめながらトーヤは話す。

やはり酔っているのだろう。話に脈絡がない気がする。なので私は子供をあやすようにして会話を続けることにした。

「あなたの方がつて、なにが？」

「俺のせいで、たくさんの人が、消えていった」

私には彼の言っている意味が分からない。しかし、これは本当に酔っているだけなのだろうか。

「なあ、マリ・ン。死んで、行った人間は・・何処へ行くと思う？」

さっきの話と関係があるのだろうか。よく分からないけど、少し真剣に考えてみる。

「そうね、死後は天国とか地獄へ行くと信じている人もいるし、生まれ変わると信じている人もいるわね」

「・・・そうだな、よ・・・良く聞く話だ」

「それがどうかしたの？」

「じゃあ、死ななかつた人間はどうなるの、かな」

「死なない人間はいないわ。あなたも、私も。いずれはその時が来るのよ」

「ち、違う、死なないじゃない、そう、えっと。生まれなかつた人間だよ」

意外にも会話はしつかりと成立していた。ということはこれまでの会話は彼の本心？

「流行、病で・・・フェニクス薬剤を渡した時、のことを覚えているか？」

「え、ええ、勿論覚えてるわ。あの薬のお陰で病はすぐに収まって、みんな助かったのよ」

「あの時は、気付か・・・なかった。でも、今になって思うんだ、俺が余計なことをしたせいで、その人達の運命は大きく変わ、た。助かる・・・はずのな、い人間が助かってしまったんだ」

そう言つて彼は助けたことを後悔するように悲しい目をしていた。

「・・・あなたのお陰で助かったのよ。助かる見込みの無い人が、あなたのお陰で生き続けることができたのよ。――あなたは立派なことをしたわ」

「本来あるはずだった運命を、生まれるは・・・ずの命を変えてしまったとした、ら？  
死んだ人間が天国へ行くなら、生まれな、かった人間はどうなる？ 生まれなかった人間には何も無いんだ、何も・・・」

「運命なんてないわ。もしあつたとしても、それは私達にどうこうできる問題じゃないんじゃないかしら」

「う、運命は、あるよ。・・・運命は、俺が変えてしまったんだ、俺が」

消え入りそうな声で話すと、トーヤは再び眠たそうに鎌首をもたげだした。

彼に掛ける言葉を探すがうまい言葉が見つからない。

今語ったのは彼の本心なのだろうか。もしかしたら彼はずっと今のようなことを考えて生きてきたのだろうか。

事情は分からないけど、彼は彼にしか分からない苦しみを抱えている。けれど、私にはどうして良いか分からなかった。

私は彼の頭を抱えるようにだきしめて、ベッドに横になった。

「もう寝ましょう。きつと、疲れてるのよ」

そんな気休めを言っつて、私は彼と一緒に眠りに落ちた。

## 5 1 それぞれ

カーテン越しに溢れる日差しと、小鳥の鳴き声で目が覚めた。

今日のようないい天気の日には二度寝をしたい気分だった。

でも出来なかった。

何故ならマリンが同じベッドで寝ていたから。

「はあく」

大きなため息をついて廊下を歩いていると、アポロが向こう側から歩いてくるのが見えた。

「どうしたんだ？ 随分と疲れているように見えるが」

「いや、なんでもないよ。ただ、俺は間違ってしまったのかもしれない」

アポロは疑問符を浮かべて俺の前で歩みを止める。

別に間違いだなんて思っていないよ？ マリンは美人だし優しいし、おっぱいも大きいからね。むしろバッチコイって感じだよ。

でもね、個人的には酒の勢いとかそういうのは違うんですよ。ちゃんと恋愛したかったですよ。

それが間違いだという話なのです。

最初はただ一緒に寝ただけで、やましい事は何もしていないと思っただけ。だけどマリリンが、「き、昨日のこと、覚えてる？」なんて赤い顔して言うもんだから。

これはもう絶対そういうことだろうな、と。服も上下着替えてたしな、下着も含めて。どう考えても言い逃れができない。

ただ、気になるのがマリリンの言った「あんなことあなたが言うの初めてだったから驚いちやった。でも、すごく嬉しかったの」という言葉。

俺は一体マリリンをなんて言っただけで口説いたんだ？

何よりムカつくのが昨晚のアレヤコレヤを何一つとして覚えていないことだと思うのね。

まあ、つまり今の心境をあえて言葉にするとすれば――

「勃つ鳥後を濁す、て感じかな」

「なにを言ってるんだキミは」

訳がわからないという表情でアポロは俺をみるのだった。

マトリフの住んでいる辺りにある海岸。俺はダイやポップと一緒に特訓に来ていた。

「せりやツ！」

「ーうわつ。つげほ、げほ」

数十回の打ち合いの末、ダイは俺の横一文字の一撃で吹き飛ばされた。

「痛てて」

頭から砂浜へ吹き飛んだダイは頭をさすりながら起き上がる。

「情けねえなあ、ダイ。あつさり負けちまうんだから」

ダイに歩み寄り、ポップはからかうようにダイに軽口を叩く。

「ポップだつてさつきマトリフさんに負けたじゃないか」

「俺はまだ師匠に弟子入りしてから日が浅いから良いんです。お前はトーヤに弟子

入りしてから結構経つてるでしょうが」

「なんだよ、それ」

「・・・楽しそうだなこいつら。」

「それにしてもトーヤも人が悪いぜ。もうダイに教えることない、なんて言つて特訓

浴つてた癖にい」

「お前は本当にヒョッコだな。もう少し洞察力を身に付けろ」

話を聞いていたマトリフが珍しく俺達の会話に混じってくる。

「なあ、ダイ。お前さんはトーヤと戦つてどう思った？」



「え？ あ、えーつと・・・」

マトリフからの質問にダイは言いにくそうに頬をかく。

「俺のことは気にせずバシつと言ってくれ」

「あ、うん。えつと、それじゃあ言うけど。もちろん強かったけど、どっちかというとな戦いづらいつて感じ・・・かな？」

「まあ、そんなところだろう。わかったか？」

「ゼーんぜん。ーーツイテ」

マトリフにゲンコツをくらい涙目になるポップ。可哀想なので俺からフォローがてら話すことにする。

「俺の戦い方は我流だからね。素振りくらいは兵士に習ったけど、剣術に関してはかたつきしだ。剣術だけで考えるなら、ダイの方が数段上だ」

「ふーん。でもなんでそれならダイが負けるんだ？」

「トーヤの基礎能力がダイより遥かに高いからだ。どんな達人でも子供と大人程に開きがあったら勝てやせん。まあ、基礎を疎かにするなつてこつた」

マトリフに褒められた。なんか嬉しい。

「じゃあダイが言つた戦いづらいつてのは？」

「トーヤのように動きが素人同然だと逆に剣術を学んだダイからするとやり辛いもん

さ。それが自分より動きの早い相手なら尚更な」

俺の言いたいことを全て言われてしまった。

「ダイがトーヤに勝とうと思っただら基礎訓練をしつかり積むか、今以上の剣術でその差を埋めるしかねえな。後は呪文だがそんなもんは覚える必要がねえ」

「ええ!?! なんて、俺ももつと強い呪文覚えたいよお」

「勇者は強い呪文なんて要らねえ、そんなもんは魔法使いに任せときや良いんだ。お前はお前にしかできないことをしろ」

「俺にしかできないこと?」

「決まってるだろ、勇者にしかできないこと。それは『勇氣』を出すことさ。いかなる敵にも立ち向かえる勇氣があればそれでいい。後のことは仲間に任せておけ」

「――勇氣。．．．自分にだけは負けられない、か」

それは、いつか俺がダイへと向けて言った言葉だった。ダイはまるで嘯みしめるようにその言葉を呟いた。

「お? いい事言うじゃねえか。そうだな、自分に負ける奴は誰とやっても負けるもんさ。まあ、せいぜい頑張んな」

マトリフは話し終えると洞窟の方へと去っていった。

どうでも良いけど、なんか俺ってばダサくない?

なんかダイの師匠ポジだったのにマトリフに取られたような気がする。アバンの次に慕われてたと自負しているのに、このままではダイを取られてしまう。

「よーし！ これから必殺技を披露しまーす」

俺は海に向かって全力で霊丸を放ち、ダイとポップの心をわし掴みするのであった。

## 52 ドラゴン

俺はダイ達とベンガーナへ来ていた。

ヒュンケル達が偵察から戻るまでの間に魔王軍と戦うための力を蓄えるためだ。

冒険の基本はいい装備から。そんな訳でダイの装備を買いに来たのだ。

メンバーはダイとレオナとポツプ、あと俺ね。

マアムは武闘家になると言って旅に出た。魔弾銃が壊れたわけでもないのに不思議なこともあるもんだ。

S Fとかで良く耳にする修正力とか抑止力とかそういう類のものが働いているのだろうか。

まあ、本当にそんなものがあるのなら俺がこの世界に転生する時点でおかしいんですけどね。

そんなことはさておき、俺達は目的通り装備を買うことができた。ドラゴンキラーのオークションである。

レオナは手持ちの金が少なかったらしいので俺が競り落とした。

結果として22,000Gも払ってしまった。換算すると220万円ですよ？ 前世

での一番高い買い物でさえ200万だったというのに。

しかも買った後に思い出したんだけど、別にここで買わなくてもこの後の戦闘のどさくさに紛れてダイってドラゴンキラー使ってたよね。

完全なるムダ金である。・・・なんか考えてたら気分悪くなってきた。

「どうしたんだ？ 二日酔いのとときの師匠みたいになってるぞ」

ポップは俺の心情を知ってか知らずかそんな軽口を叩く。

この間の宴会の後の話かな。マトリフってば飲み過ぎた次の日は死にそうな顔してたから。薬飲ませたらケロっとしてたけど。

俺のこの鬱な気分も薬を飲めば少しは晴れるのだろうか。

まあいいだろう。ちゃんと占い師ナバラとメルルとの邂逅も無事果たし、イベントとしてはいい感じで順調だと言えるのだから。

「な、なんだあつ!？」

突然の地鳴りと地響きに、皆が驚き悲鳴を上げる。

「お、おいつ。アレをみる！ ドラゴンだつ!!」

その内の一人が窓から外を覗き、街を襲っているドラゴンの見て叫んだ。ヒドラー匹にドラゴンが5匹。普通なら街が壊滅しても可怪しくない。

途端に店の中はパニックになり、まるでこの世の終わりと云わんばかりの騒ぎになっ

ていた。

「どうする？ ドラゴンがあんなにいたんじゃ少々分が悪いぜ」

「ならポップとレオナはみんなを避難させてくれ。ダイはヒドラを頼む、ドラゴンキラーがあれば問題ないだろう」

適当に指示を出して俺は窓枠に足をかける。

「お、お前はどうするんだよ」

「ヒドラより弱いとはいえドラゴン5匹が街中へ散つたら面倒だ。一箇所におびき寄せてまとめて相手する」

こうしている間にも街の人々が殺されているかもしれないんだ、急がないと。

窓から飛び降り、俺はドラゴン達のいる方角へ向かって走り出した。

.....

街外れの荒野。

うまくドラゴンだけをおびき寄せた俺は、走る足を止めて後ろを振り返る。

目の前には5匹のドラゴン。俺は固唾を呑んで奴らが攻撃してくるのを待つ。

その内の1匹が炎を吐き出そうとしているのが分かった。

瞬間、俺はそのドラゴンへ向かって走った。

それを迎撃するかのような別のドラゴンの攻撃。

巨体を大きく回転させ、俺の身の丈の3倍以上の太さの尾を振り回した。

しかしその尾は俺よりも先に炎を吐こうとするドラゴンへと直撃する。

堪らず倒れるドラゴン。その顔面へ俺が跳び乗ると、仲間の上にもかかわらずドラゴ

ンたちはこぞつて追撃を仕掛けてきた。

回避、跳躍、回避、跳躍。何度も何度も同じ動作を繰り返し、ドラゴンたちにダメー

ジを蓄積させていく。

100を超える辺りでドラゴンたちの動きが目に見えて鈍ってきた。

既に残りのドラゴンは2匹。3匹は同士討ちで倒れている。

そろそろ良いだろう。

人差し指へとオーラを集め、残りの2匹が同一線上に並ぶ位置へと移動する。

響く轟音。眩い光。荒れ狂う暴風がその場を支配する。

巨体をもともせず、俺の放った霊丸は地面を深く抉りながらドラゴンと荒野の彼方

へと消えていった。

「なんだ、楽勝じゃん」

戦闘を無傷で終えた俺は、緊張で滲んだ額の汗を拭って安堵した。

デカくてパワーがあっても、知能がなければ大したことないな。円を使えば動きモロわかりだし。

どうやらこういう戦い方のほうが俺には向いているようだ。

1対1で相手の動きを先読みして戦うんじゃないやなくて、複数の動きを利用して相手を陥れるやり方。

前者は純粋な武人としての強さ。後者は立ち回りの上手さ。要は作戦勝ちみたいなものだ。

思い返せばフレイザードの時もそうだった。相手を自分の土俵に持ち込んで、最後は霊丸で作った巨大な穴へ誘導させた。

力が弱いのならば知恵で戦うしかないからな。今はまだ大丈夫だけど、いつか付いて行けなくなる筈だ。

今度からはこういった戦い方を意識してみるかな。

「ん？」

ダイたちの元へ向かうべく歩き出そうとしたとき、ふと気配を感じた。

その先へ視線を送る。そこには先ほど自滅させたドラゴンたちの姿があった。

その内の1匹が動き出そうとしている。どうやら気絶していただけらしい。

トドメを刺すべく霊丸の構えを取る。しかしオーラが集まらない。



「あ、まだムリか」

まだ一分経っていなかったようだ。

あと少しで一分経つけど・・・せっかくなので新技のテストでもするか。

コッチは使いどころが難しいため、まだモンスターに向けて放ったことがない。

瀕死のドラゴン相手なら、実験としては十分だろう。

荒野には俺とドラゴンのみ。

魔力を高めて準備する。

暴走しかける力の奔流を押さえつけ、ムリヤリ術を完成させた。

次の瞬間、ドラゴンは跡形もなく消え去った。

## 53 葛藤

キルバーンの引き連れた超竜軍団のドラゴンたちを俺達は見事撃退した。

ヒドラとダイの戦いを見ていた占い師ナバラにより、自らの正体が竜の騎士だと告げられたダイ。

その真実を確かめるべく、ナバラの導きにより俺たちは竜の騎士の伝説が眠る地テラ  
ンへやってきた。

今はちようど湖の祠でメルルから竜の騎士の伝説と湖の底にある神殿の話聞いた  
ところだ。

それは良いんだけど、さつきから空気が重い。なんかダイが妙に大人しいのだ。 . .  
まあ、仕方ないけど。

ベンガーナのやつらめ。うちの可愛いダイがせつかくヒドラを倒してやったとい  
うのに怖いとかぬかしやがって。

こいつはメチャゆるさんよなあ。

しかし今更そんなことを言っても意味が無い。今はダイの心のケアをすることにし  
よう。

「本当に一人で行くのか？」

神殿へは一人で行きたいと言うダイへ俺は声をかける。

「うん。俺、一人で行って確かめたいんだ。自分が何者なのか、紋章の力が何なのか」  
その表情からは何も読み取ることができない。悲しんでいるのだろうか、それとも……。

「お前、俺たちがお前の正体を知ったら、お前を怖がるんじゃないかって考えてるんじゃないだろうな」

「ーートーヤ、前に話してくれただろ？ 街でモンスター退治して怖がられたってやつ」

「あ・・ああ。そういうえば、そんなこともあったな」

「さつき街でみんなに怖がられた時、本当に怖かったんだ。街のみんなが俺のことをバケモノを見るような目で見ていたから」

ポップとレオナは何かを言おうと口を開いたが、やはり何も言わずにダイの続く言葉に耳を傾けていた。

「……だけどさ、トーヤの話の思い出したんだ。トーヤがそんなのは普通のことなんだって、怪我がなくてよかったって言ってたから。だから俺もそうなりたくなって、そう思った」

言葉とは裏腹にダイは辛そうに拳を握りしめる。

「ーそう、できたら良かったんだけど。まだ、まだほんの少し……ほんの少しだけど、そうじゃない気持ちがあるんだ。だから神殿へは一人で行くよ。自分で自分の正体を確かめて、それで……それで自分の口から話すよ、俺が何者なのか。そうしたいんだ、俺が」

「くだらねえこと気にしやがって！ ならちやつちやと行って、正体でもなんでも調べてくりやいいだろ！ そんなもって、ちゃんと説明してくれよな……待ってるからよ」

「ーポップ」

「どうせなら王族の血を引いてるとか勇者の末裔なんてありきたりなものじゃなくて、魔王の息子とか実は神様だとか盛大なのを頼むぜつ。あんまりシヨボかったら笑っちゃまうからな」

「悪かったわね、ありきたりでシヨボい王族の人間で」

「いや、姫さんのことじゃなくてだなー」

あえて明るく努めようとしているのだろう。あーでもない、こーでもないと言い合いを始めるポップとレオナ。

この場にそぐわない二人の声に、さっきまでの張り詰めていた空気が嘘のように軽く

なつた気がする。

「ぶっ、あはははっは」

そんな二人の様子をしばらく眺めていたダイは、緊張の糸が切れたようにいつもの調子で笑いだした。

その表情はとでも穏やかで、何処にでもいるような無邪気な少年の笑顔だった。

.....

「トーヤさん、とおっしやいましたか」

「ん?」

ダイが湖へ潜つてしばらく経つた頃、おもむろにメルルが俺に話しかけてきた。

「そうだけど、どうかした?」

「えっと、その.....」

自分から話しかけてきておいてどうしたんだ? もしかしてカッコつけて大岩に座っていたのが気に障つたのだろうか。

確かにちよつとキザだったかもしれないけど、そう思つても黙っておくのがマナーと  
言うものだろうに。

「恥ずかしくなったので俺はすつと立ち上がり居住まいを正す。

「――あなたは、その・・・不思議な感じがします」

「不思議な感じ？ それは・・・どういう・・・」

もしかしてナンパか？ 口説いてるのか？ いやいやダメだダメだ。俺にはもうー。

「気を悪くしないでくれ。メルルには占い師としての特別な能力があるんだよ。きつとあんたに何かを感じたんだろう」

「あー、なるほどね。それで、俺の未来でも視えた？」

「あの、視えたというよりも何となく感じただけなんですが・・・」

言い辛いことなのかメルルは口ごもる。自分から話しかけておいてそれは無いと思うよ。

「気にしないからズバつと言ってくれ」

「は、はい。あの、あなたは他の人にはない運命に縛られているように感じます。・・・何か心当たりはありませんか？」

「全然ない。・・・でも、俺ってこれでも占いの類は結構信じる方なんだ。もしよければもつと具体的に教えてくれないか」

転生のことにはさすがに分からないだろうけど、ここまでの確に言われたら気になる。

「すみません、本当に少しだけそう感じただけなんです。でも、それでもあえて例えるなら——」

「例えるなら？」

「あなたは運命に縛られているように感じますが、それはきつと——きやつ!」

「っ!?!」

突然湖に大渦ができたかと思うと辺りを地響きに似た衝撃が襲った。

それだけじゃない。近くに強力なオーラを感じた。恐らく……いや間違ひなくヤツだろう。

戦闘に巻き込まれないようにナバラとメルルを近くの森の奥まで遠ざけた後、湖へと戻る。

そこには地面に倒れるダイとそれを介抱するレオナ、そして竜騎将バランと対峙するポップの姿があつた。

彼らから少し遠いところで、俺は拳を握り心を落ち着ける。

老バーンとならほぼ互角にやりあえるであろうバラン。そんな相手とどこまで渡り合えるか。

今までの成果を確かめる最大のチャンスだ。せいぜい本番前の試金石となつてもらうとしよう。

ダイ達が目と鼻の先でやられていく中、俺は戦いに備えてオーラを研ぎ澄ませるのだった。



## 54 実力

「下がってろ」

「ッ!？」

俺はダイの襟を掴むと強引に後ろへと投げ飛ばした。

ダイと入れ替わる様にして木刀を構え、バルンのギガブレイクを受け止める。

「ーく、うう!!」

雷鳴が轟き、衝撃が辺り一帯を襲う。

俺とバルン以外の全員はその衝撃波に成すすべなく吹き飛ばされた。

「ーそこをどけ、人間。邪魔をするなら容赦はせんぞ」

「うるせえ、竜の騎士だか知らんが調子にのるなーオラッ!!」

鏑迫り合いの状態からバルンを力ずくで押し返し、木刀の鋒を相手の眉間に向ける。

「ちよつと強いくらいで偉そうにしゃがってーおいッ、お前たちは下がってろ!

こいつは俺が相手する」

「で、でもー」

「トーヤの言う通りだ。バルンの相手は今のお前たちには荷が重い」

「オーココロコダイン!？」

突如として現れたクロコダインは皆を守るように斧を構えて俺の隣に立つ。

「気をつけろトーヤ、ヤツの実力は恐らく魔王軍一と言っても過言ではない」

「・・・ヤツの強さは大体見て分かる。クロコダインは皆の盾になってやってくれ」  
クロコダインを後ろへ下がらせると、再び前に出て戦闘態勢に入る。

「バカめが、調子にのっているのは貴様の方だ。ギガブレイクを受け止めたことで勘違いしてしまったようだな。だが、先ほどは息子が相手で手加減しただけのこと。本来ならば消し炭になっておるわ」

額の紋章が輝き、静かな怒りと殺意が烈風となって吹き荒れる。

「そーかよ、安心したぜ。さっきのが全力ならどうしようかと思つてたところだ。ほれ、お前の大嫌いな人間様だぞ。遠慮しないでかかってこいよ」

言い終わると同時にバランは霞むようなスピードで突進してくる。

抜かりなく『円』でそれを感知した俺は、慌てることなくバランの振るつた剣戟を木刀で受け止めた。

微かに驚いた表情をみせるバラン。その隙を逃さずに、木刀の柄から右手を離してバランの顔面めがけて拳を放つ。

見えているにも関わらずバランはその拳を躲そうともしない。当然だ、竜鬨気に包ま

れた今の balan は鋼鉄の様に硬い。

しかも俺の拳は体重の乗っていないただのジャブだ。そんなものでは当て身程の意味も持たないーそう思っているんだろうな。

「つぐは!!」

殴り飛ばされ仰け反ったところに前蹴りで追撃を入れる。

たたらを踏んで後退し、balan は困惑の表情で口元を拭う。

「余裕ぶってその様か。息子が見てんだ、もっと気合入れろよ」

「・・・何者だ?」

質問に答えることなく、さっきの仕返しとばかりに今度は俺が地を駆ける。

さあ、ここからが正念場だ。

\* \* \*

戦いは膠着、すぐに決着はつきそうにない。

そして他の介入を一切許すものでは無かった。

地を砕き、雷鳴が迸り、暴風が吹き荒れる。

ただ見ることでさえも困難を極めた。それ程に激しい戦いが繰り広げられている。

突如として上がる金属音。それはバルンの剣戟をトーヤの木刀が弾き返す音だった。徐々にスピードを上げるバルンの剣戟、そのスピードは既にトーヤの動体視力を凌駕していた。

より一層強い踏み込みと襲いかかる凶刃。しかし、木刀の一閃によりそれは阻まれる。

「くッ」

必中の攻撃を叩き返されバルンは怪訝に思う。

その僅かな逡巡の隙をつくかのように放たれるトーヤの蹴り。

その蹴りを危なげなく躲して、バルンは大きく距離を取る。

バルンは目の前に立つ男を警戒していた。

トーヤの動きはド素人。多少戦いに慣れてる様に思えるが、それでも動きには隙が多くとても洗練されているとは言い難い。

対してバルンの動きは超がつく程の一流だ。流れるような動きと剣捌きは美しくすらある。

超一流とド素人。通常ならば戦いにすらならないそれを、かれこれ10分以上は続けている。

その秘密はトーヤの『念』にある。先ほどバルンを殴り飛ばしたとき、トーヤは『凝』

を使っていた。

無論それだけではない。この世界の者にはトーヤが使う『オーラ』を視認することが出来る。故に、ただ『凝』をするだけでは balan 程の相手なら当然警戒する。

しかし、トーヤは『流』と『隠』を巧みに利用しそれをさせなかった。結果、balan はオーラの込められた攻撃を無防備に受けてしまったのである。

この世界に存在しないはずの技術。四大行と応用技の特性を活かした戦い方は、強みであると同時に唯一の手段と言えるだろう。

「そろそろ本気で行かせてもらおうか」

トーヤの使う技の正体を見抜けずにいたはずの balan だが、ここに来て余裕を取り戻していた。

しかし余裕を持っているのは balan だけではない。今までほぼ互角の戦闘を繰り返していたトーヤもまた、自らの強さに自信と余裕を持ち始めていた。

「なら俺も」

「嘯くな、貴様は確かに人間としてはかなり出来る。しかしそれもここまで、お前の手の内はよくわかった」

「・・・へえ」

一瞬、自身の能力を見破られたかと考えたトーヤだが、すぐにそれを否定した。

バランスの両眼に闘気が集まっていなかったためだ。闘気でオーラの代わりに出来るのかは分からない。しかし仮に可能だとしてもその場合は『凝』の様に闘気が両眼に集まって然るべきである。

その考えは正しい。現にバランスはトーヤの能力を見破ってなどいない。手の内が分かると告げたただけだ。

「打撃を受ける際に何らかの手段で威力を高めているのだろうか？ ならばそれ以上の防御力を以って受けるのみ」

正体不明の攻撃に対する答えは実にシンプルだった。

故にトーヤの怒りを買った。如何に竜の騎士といえど、それは思い上がりも甚だし

い。  
ほとんど実力が拮抗している相手の、ましてや『凝』の一撃を防げるだなどは妄言もいいたころだ。

「ならやってみろよッ!!」

怒声とともに疾風と化したトーヤは一瞬の内に間合いを詰める。

もはや『隠』で隠すこともせず木刀に『凝』をかけて振りかぶる。

最大の威力と最高の速度で放たれた木刀は、いとも容易くバランスの首を打ち砕いた。トーヤに思えた。

「なん・・・だと・・・」

驚愕の声を漏らすも、目の前の事実が理解できない。

最大最高の攻撃は、バランに届くことすらなく竜闘気により阻まれていた。

## 55 敗北

「うゝっん、眠すぎる」

ベッドで身を振らせて大きく伸びをする。

窓から差し込む陽射しのせいで目が覚めてしまった。

もう少し寝てようかな。

気持ちの良さそうなふかふかベッドに負けた俺は、再び横になると二度寝に突入することにした。

ふう、いい気持ちだ。ここが何処だかわからない点に目を瞑れば最高に気分がいい。

「ちよつと、目が覚めたのなら起きなさい。ベホマをかけたから怪我はないはずよ」

「・・・あと5分」

「えいつ」

「ーぐはっ」

エルボーをくらい強制的に眠りから覚まされる。

「痛いよちよつと、姫様としてそういうのはどうかと思う」



肘のめり込んだ脇腹を抑えながら非難の声を上げる。

「お姫様に起こされるなんて男の子冥利に尽きるんじゃないかしら。――それよりあなた、随分悠長だけど状況は分かってるの？」

「状況？」

ぼんやりとする頭をフル回転させて考える。

・・・

「――っあ！ バランは？ ダイはどうなった？」

「ふう、ようやく思い出したのね。まあ、ムリもないわ。下手したら死んでいても可怪しくない大怪我だった訳だし」

「そうなのか？ 攻撃が効かなくて『なん・・・だと・・・』って言ったことまではなんとか覚えてるけど。」

「っていうカリアルにそのセリフを言う時が来るとは思わなかったよ。あれマジで自然に出てくるから。」

「俺のことは良いからダイはどうなった？ 連れてかれたのか？ それとも記憶喪失にでもなったか？」

「あら？ あなたあの時まだ意識があったのね。でも心配ないわ、ダイ君は無事。昨日の夜はあなたの看病してたわよ」

ダイが無事？ それは記憶を失ってないってことか……。それはつまりー

「あ、トーヤ。目が覚めたんだね」

「ダイ!? お前何ともないのか？」

部屋へやってきたダイへ詰めより、ダイの無事を確認する。

「うわっ、ー平気だよ。俺よりトーヤの方が心配だよ、口からドス黒い血を吐いて気絶しちゃうんだもん。レオナがベホマかけてくれなかつたらどうなってたことか」

記憶も身体も全然平気そうだ。そして俺はそんなヤバイことになってたのか。

血を吐くってマンガだとよくあるけど、内臓破裂とかでかなり危険だからな。普通に死ぬ。

「どうやってバランを追い返したんだ。絶対に諦めなさそうなタイプだろ」

俺が質問すると、ダイは親に100点満点のテストを自慢するような笑顔を見せる。

「へへっ、見ててよーうおおおお」

掛け声とともに気合を入れると、ダイからとてつもない量のオーラが吹き出しー右の拳に竜の紋章が輝いた。

俺が気絶した後、バランは紋章の力を使ってダイの記憶を奪おうとしたらしい。

しかしダイは額にある紋章を強靱な意志の力を以ってコントロールし、右の拳へと移動させた。

その結果ダイの記憶は無事。しかも balan は力を使い過ぎたために一旦退却したと  
のことだ。

捨て台詞に必ずダイを連れ戻しに来ると言っていたことから、ここテラン城を間借りして迎え撃とうと画策中らしい。

「それにしても驚いた。まさか紋章の力を使いこなすなんてなあ」

「へへへ」

外の森を散歩しながらダイに今までのことを聞いて歩く。

「トーヤが戦ってるのを見てたからさ。闘気を蹴りとか拳に集めて戦ってるのを見て、俺にも出来るんじゃないかって」

なるほど、どうやら思惑通りにいった様で何よりだ。元々 balan と戦ったのは力試しもあつたが、ダイに紋章を使うお手本としての意味合いが強かった。

まさか balan との初戦でいきなり使いこなすとは思わなかったけど。

原作通りに進むか不安だったからこそ戦ってみせたのだが、こうなつてはむしろ困つてしまうというものだ。

ここから先の展開をどうすれば良いか、結構深刻な問題かもしれない。

まあそれは後で考えるとして、気になることがもう一つある。

「バランスはどうしてお前と戦わずに帰ったんだ？　いくら紋章が使えるって言っても、あいつが本気なら力づくで連れ戻すことも出来たと思うんだけど」

「クロコダインが言うにはトーヤとの戦いでかなり消耗したからじゃないか、だって」  
消耗してたのか？　竜鬪気全開になった途端に即気絶したからとてもそうは思えないんだけど。

ダイの記憶消せなかったのも竜鬪気を消耗してたからだっただけで。記憶消去に使う力が甘いからダイに隙を突かれたのかもしれないな。

・・・

いつの間にか、竜の伝説が眠る湖にやってきていた。

この間の戦いで辺りはボコボコ。静かで綺麗な湖だっただけに、申し訳ない気持ちになる。

そんなことを考えていたからだろうか、ダイは心配そうに俺の顔を覗きこんだ。

「もしかして、落ち込んでる？」

「え？　別に落ち込んでないけど」

「だって、さつきから妙に口数少ないから。．．．それとも俺のコトが怖い．．．とか？」

視線を逸してダイは小さな声でそっぽを向く。

俺はそんなダイの頭をガシガシと撫で、笑って答える。

「怖い相手と散歩なんざするかつ。俺が考えてたのはこれからのことだよ、バランとか大魔王とか．．．あと色々。大体紋章をあんなにいい笑顔で見せといて今更何言ってるんだよ」

「だ、だって．．．あれは強くなったのが嬉しくて。それにバランのことだって．．．ごめん」

「なんで謝るんだよ」

「だって、バランは俺の父親だから．．．。それに今度も俺を狙って襲ってくるんだ、みんなを危険に巻き込んでる」

「そうだな。竜の騎士とか、父親が魔王軍だとか。酷い話だよな」

「．．．うん」

俺の言葉にダイは傷ついたように俯いてしまう。ちよつと言葉が悪かったかな。だから努めて明るい口調で俺は言う。

「よくある話さ」

「え？」

その言葉の意味がわからないのか、ダイは目を丸くして俺を見る。

「よくある話だと言ったんだ。貧乏とか田舎者とか、家柄でバカにされるなんてザラにあるし、親のせいで苦労してる子供なんて山程いる。そんな悩みは普通で良くある話なんだよ。だから、気にすんな」

「ーうん」

それからしばらく談笑して、静かな場所を適当に散歩してから俺達は城へと帰った。

その日の夜。

俺は誰にも知られないように城から抜け出し、皆の前から姿を消した。

## 55. 5 地上最強の戦い

テランの城門前。ダイ、ポップ、レオナ、クロコダインの四人はバランを迎え撃つため待ち構えていた。

紋章を自在に操れるようになったダイだが、しかしその表情は優れない。

本気を出したバランの力は未知数。そして占い師ナバラの水晶には竜騎衆と呼ばれる精鋭たちが映しだされたのだ。

バランのみでも危うい状況であるはずなのに、これではどうしようもない。

「つたく、こんな時にトーヤはどこ行っちゃまったんだよお」

「よもや逃げ出してしまおうとは……」

「彼を責めることはできないわ……。先の戦いで手も足も出なかつたんですもの、逃げても……おかしくないわ」

ポップとクロコダインは苦言を呈し、レオナもまたトーヤのいない事実には歯噛みする。

ダイはそんな皆を無言で見つめるのみ。

トーヤのことだ、きつと何か考えがあるんだ。そう思う自分と、逃げ出したのならそ

れでも構わないと思う自分がいた。

これが信頼なのか、あるいは諦観なのかはダイ自身にもわからないことだった。テランの静かな空を仰ぎ、ダイはバランを待つ。

\* \* \*

「待てよ、てめえら。ここから先は通さねえぜっ」

バラン＋竜騎衆の前に立ちふさがり、叫ぶように俺は言う。

「ケツ、誰が来たのかと思えば見るからに貧弱そうな野郎一人っ!! クワーツクワーツクワーツ!!」

竜騎衆の内の一人のトリが俺を嘲笑し、高笑い？をする。

このクソニワトリ野郎が、テメーだけなら瞬殺だつての。

「ガルダンデイー、あなどるな。そいつは見かけによらず出来る。私が相手をしよう」  
ドラゴンから飛び降り、バランが近づいてくる。それを諫めるようにラーハルトが間に立った。

「バラン様、この場は我々におまかせを。ルーラで一刻も早くデイーノ様の元へお向かい下さい。我々もすぐに向かいます」



「・・・わかった、だが舐めてかかってはならんぞ。先も言ったがその男はかなり出来るー」ルーラ」

ルーラで空の彼方へ飛んで行く balan を見送ると、ラーハルトはゆつくりと俺の方を見た。

「意外だな、黙って行かせるとは。おまえは balan 様を止めに来たのではないのか？」

「俺が止めに来たのはお前たちだよ。感動の親子対面には邪魔なんでね」

やおら木刀の鋒を向け、オーラを練る。

「身の程をわきまえぬ愚か者がッ。この竜騎衆を貴様ごときが止められると思うかッ!!」

怒声と共に投げつけられた錨を弾き、距離をとる。あっさりと弾かれてトドみたいなのやつは悔し気に声を漏らす。

「ボラホーン、先ほどの balan 様のお言葉を忘れたのか。油断してはならん」

「・・・そうだったな。ならば我ら全員でかかるとしよう」

「クククッ、我ら誇り高き竜騎衆を相手にどれだけ持つかな」

三者三様に武器を構える。

3対1か、ラーハルトが厄介だな。なんて考えていると、突如竜騎衆のドラゴンたちが悲鳴をあげて倒れていった。

「な、なんだっ!？」

剣の血糊を振り払い、見知った男が悠然と表れる。

「寄つてたかつて誇り高いとは笑わせる。その体たらくでは竜騎衆とやらも底が知れるというものだ」

「おおつ、意外に来るの早かったな。そもそもちゃんと来るかも不安だったのだが：：「ヒュンケルっ！ ナイスタイミングだ。その槍のやつは任せた。残りの雑魚は俺がやる」

有無を言わず勢いで告げ、ボラホーンとガルダンデーをぶん殴り離れた場所へと引きずっていく。

上手くいったぜ、これぞ予定調和だ。

チラリと後方を見ると、呆気にとられたヒュンケルとラーハルトの姿。

・・・ちよつと露骨だったかな？

\* \* \*

「ふ、不死身かおまえはっ!?! ギガブレイクを2発もうけて生きている奴など今まで誰もいなかった・・・!!」

「フフフツ、オレごとときがこんな攻撃をくらい続けていたら確実に死ぬさ。オレの命とお前の力の交換なら悪い条件じゃない」

「お、おまえ……さては勝つことが目的ではないな！ 天下の獣王クロコダインが私を消耗させるための捨て石になろうというのか！」

よろけるクロコダイン。そんなクロコダインを支え、レオナはベホマをかける。

「やつぱりムチャだよ、クロコダイン。皆で戦えばきつとー」

「ダイ、いくらお前が紋章の力を使えると言っても、正攻法で戦えばオレ達に勝機はない。これしかないのだ」

「お、おっさん……」

止めようとするダイとポップだが、クロコダインは頑として譲ろうとしない

「それに……勝たなければならぬのだ。でなければ自らを犠牲にしたトーヤに顔向けできない」

再び闘気を高め、クロコダインはバランの前に立つ。しかし決死の覚悟のクロコダインと反対に、バランは静かに佇むのみ。

「クロコダインよ。おまえの覚悟はよくわかった。ーしかし目論見が分かっている。敢えて乗ってやるほど、私は甘くはないッ！」

バランから竜闘気が噴き出し、周囲を暴風が襲う。

「ディーンが戦えなければその作戦も水泡となろうツ。我が息子を傷つけるのは本意ではないが、やむを得んツ―」

バランの額の紋章が一際強い輝きを見せる。

“紋章閃”。竜の紋章から放たれる一閃は脅威の威力をもつてダイの肩口へ向かっていく。

バランと戦うことができるのは同じ竜の騎士であるダイのみ。であれば先にダイを戦闘不能にしておけば良い。

不意を突かれ、無防備に佇むダイ。凶悪な閃光がまさにダイを貫こうと迫る。しかし―

「うわっ！ー！ーえ？」

小さな衝撃に尻もちをつく。顔をあげるとそこには信じられない光景が広がっていた。

「ーポ、ポップ・・・？」

誰よりも早く動いたポップはダイを突き飛ばし、光に貫かれた。

胸からは血が噴き出し、ゆっくりと倒れこむ。

ダイたちは驚いた表情で固まったまま動かない。

「愚かな。バカな真似さえしなければ、命までは取らずにおいたものを・・・」

その言葉を理解するのに時間はかからなかった。

そう、ポップは死んだのだ。あまりにも呆気なく、あまりにも無慈悲に。クロコダインの咆哮とダイの慟哭が響く。

二人はその叫びですべてを消し飛ばすようにしてバランへと飛びかかる。

策はなく、勝算などない。しかし恐怖や畏怖もなかった。

あるのはただ、友を失った悲しみと怒りのみ。

\* \* \*

信じられないことに竜騎将バランは押されていた。それも竜魔人になったにもかかわらずだ。

悔っていた、それは認めよう。たかが10歳程度の少年に負けるはずがないのだと、確かにそう思っていた。

しかし原因はそれだけではない。ダイ達の心の力、それがバランの計算を大きく狂わせる結果となった。

何度やられても立ち向かってくる不屈の精神。何が彼らを突き動かすのか、バランには分からない。否、分かろうとしなかった。

ギガブレイク2発、ドルオーラ2発。そして竜闘気を使い続けている。体力の限界は近い。

満身創痕とはいえダイ達の闘志は未だに衰えを見せない。

ポツプを失った彼らは死ぬまで戦い続けるだろう。

クロコダイーンと加勢に現れたヒュンケルは死に物狂いで balan へしがみつ き、羽交い締めにした。

「ダ、ダイい!!! 今だッ、俺達ごとやれええ!!」

最後の力を振り絞り両腕を抑えるクロコダイーンとヒュンケル、さしもの balan でさえも身動きひとつ出来ない。

その機を逃すまいと、ダイはヒュンケルの魔剣を手にアバンストラッシュの構えをとる。

「ライディンツッ! うおおおお」

目前へと迫るダイ。しかし黙ってそれを受けるほど balan は甘い相手ではない。

「ええいッ! 鬱陶しいわッ」

自らに雷を落とす balan。迸る電撃にクロコダイーンとヒュンケルの力が一瞬緩む。

その僅かな隙に balan は二人を弾き飛ばし、再び雷を落とし真魔剛竜剣を振りかぶった。

鎧の魔剣では真魔剛竜剣には押し負ける。

一瞬の逡巡、しかしダイは止まらない。最後の一撃を繰り出すべく残されたすべての力で込める。

「これで最後だッ、ギガブレイクで散れッ!!! ー何ッ!?!」

ギガブレイクとライデインストラッシュが交錯する刹那。ダイを横切りバランへ呪文が炸裂する。

「バ、バカなッ!? 死人が呪文をおおお」

「アバンツストラアッシュ!!!」

たじろぐバランに間断なくダイの必殺の一撃が繰り出される。

爆発音が轟、まばゆい光が照らす。

ここに、地上最強の戦いが幕を閉じた。

## 56 心情

傷ついた身体を引きずるようにして私は荒野を目指して歩いていった。

そこには彼らの亡骸があるはずだ。

共に戦ってくれた彼らを弔わなければならぬ。

「ディーノ……、まさかあれ程までに強くなっていたとは」

親がいなくとも子は育つものなのだ。

竜魔人となつてからは手加減などほとんどしていなかった。にも関わらずそれを

ね除けてしまうとは。

流石は私の息子と言つたところか……否、ディーノの力だけではない。

魔法使いのポップという少年を始めとする仲間の助力があつてこそその力だ。

人の心などくだらぬと思つていたが、その人の心に負けるとは……皮肉な話だ。

私は竜の騎士としての使命よりも自分の感情を優先した。結果として私自身が世界

のバランスを崩そうとしていたとはな。

今の私にできるのは、過去の清算をするのみだ。

……。



・・・。

何も無い荒野。その岩に腰をかけて遠くを眺める男の姿があった。

「お前は・・・、生きていたのか。助勢に来たのがヒュンケルだけだったので死んだものと思っていたが」

私の声に反応し、その男はこちらにゆっくりと視線を向けた。

「その様子だとダイ達は勝つたみたいだな」

「・・・何故加勢に来なかった。捨て石として足止めに来る程に命を賭けていたのだろう？ あと一步のところまでディーノに敗れたが、状況次第ではどう転んでいたか分からなかったというのに」

見たところそれ程ダメージを負っているようには思えない。竜騎衆を破ったならばダイたちに加勢することも十分出来たはず。

そしてこの男と戦うには竜鬪気を全開にし続けなければならない。そんな状態で立続けにディーノと戦えばおそらく、いや確実に勝つことは出来なかっただろう。

「そりゃ、分かってたからな。ダイ達は絶対に勝つて」

そう言った男の表情は自身に満ち溢れ、まるで迷いというものが感じられなかった。

何故それ程までに他人を信じることができるのか・・・。信じる心、仲間を思いやる

心。それが人間の強さか。

「強いな、人の心というものは。あのポップという少年も強かった。死して尚、友のためには戦っていた」

「・・・死んだのか？」

「案ずることはない、今頃は息を吹き返しているだろう」

「そうか」

簡素にそう呟くと、再び遠くを眺めながら何をするでもなく宙を仰いで某として口を閉ざした。

度し難いやつだ。仲間が命を落としたと聞いても、この男には僅かな動揺も憤りさえもみられない。いや、それよりも――

「ここは何をしていた？」

「――見りや分かるだろ、墓を作ってたんだ」

男の指し示す先には3つの穴があり、それぞれの穴の中には棺が見えた。

「どういうつもりだ、何故お前が墓を作る。我々はお前たちの敵だ、そんなことをする義理など無いだろう」

「ラーハルトは仲間みたいなものだからな。・・・それに敵だとしても死んだやつをそのままつてのもの、ちよつとな」

・・・ラーハルト。ヒュンケルに魔槍を託し死んでいった、私のもう一人の息子。せめて私の手で弔おうとやってきた訳だが・・・まさか私の他に彼を弔うものがあるとはな。

「でも、部下の賤くらいはちゃんとやつとけ。鳥とトドみたいな奴はムカつき過ぎて原型留めてないから、棺に収めるのに苦労した」

「ならば捨て置けば良いものを、甘い奴だ」

私は彼らの棺の前へ行き、黙禱をささげた。

黙禱を終えた後、振り返り私のことを見ていた男に向かって口を開こうとした。しかし――

「これからどうすんの?」

続く言葉は男の声により遮られた。

「――どう、とは? 私は今までと変わらん。人間を滅ぼし、竜の騎士としての責務を全うするのみだ」

てつきり激怒するか説得を試みるのかと思いきや、男の反応は私の予想するものとは違っていた。

男は困ったような、あるいは呆れたような笑みを浮かべていた。

「あんたも親なら、息子のことを一番に考えてやってくれ。ダイにはあんたが必要な

んだ。贖いなんかで死んでくれるなよ」

どうやら私の考えはお見通しらしい。既に私が人間を滅ぼすつもりはなく、ディーノか別の人間の手で討たれようとしていることを分かっているようだ。

その証拠に、人間を滅ぼすと言った私を前にまるで殺気を纏っていない。

「しばらく休んでじっくり考えてみるよ。ーほれつ。回復アイテムだ、それ飲んで1日寝てりや大抵の怪我はすぐに治る」

男が投げた小瓶を受け取り困惑する。

「どういうつもりだ？ 何故こんなマネをする」

「俺も結構長く生きてるからな、その中で分かったことがある。話して分かる連中と、大魔王バーンみたいな連中だ。だから、ダイのことを抜きにしてもあんたには生きてて欲しいのさ」

用事は済んだとばかりに、男は岩から下ろしていた腰を上げるとその身を翻した。

「あ、そうだ。俺の名前はトーヤな、ちゃんと覚えとけよな。ーじゃあ、またな」

名を告げた後、まるで友人と別れるときのような笑顔を向けて夕焼けの空の彼方へと消えていった。

もしかしてあの男は私にこの薬を渡すためにここに居たのだろうか？ …いや、それは考え過ぎか。

・・・トリーヤ、か。変わった人間だ。

荒野に一人佇み、掌にある小瓶に視線を落とす。小瓶の中に揺れる液体を見て、何かソアラのことを思い出した。

ソアラは優しく、心の強い女性だった。そしてあの男の行動もその優しさから来るものだったのだろう。

デイーノの周りには心根の優しい者たちが集まる。否、デイーノがそうさせているのかもしれない。

私の息子はソアラに似て、綺麗な瞳と真っ直ぐな心をしていたから。

沈む夕日を眺めてソアラと息子のデイーノのことを考える。

## 57 ロモスへ

辛くもバラン達の猛攻を退けたダイ達はテランの山奥にある小屋で身体を休めていた。

誰もが疲弊しし息をとる中、バランの血によりパワーアップしたポップは魔王軍の襲撃に備えて見張りをする。

そのチャンス逃すまいとマアムの姿へと化けたザボエラと魔軍司令ハドラーがダイ達に奇襲を仕掛けた。

仲間の姿に惑わされたポップは、ザボエラの奸計に陥り窮地に立たされてしまう。

そのピンチを救ったのはポップの師——マトリフだった。

マトリフの壮大な魔法力に成すすべなく、ハドラーとザボエラは敗れたのだった。

「しっかし流石つすよ師匠お、あの二人を相手に余裕で勝っちゃうなんて」

小屋の椅子に座るマトリフにゴマを擦るように手を合わせて褒めちぎるポップ。

「ポップの言う通りだ。魔王軍でも奴らの強力な魔法に皆恐れ慄いていた。それを纏めて倒してしまうとは」

ヒュンケルも感心するよう頷いた。それを機に誰もが口々にマトリフの強さを湛えだす。

「ふんつ、俺みたいなおいばれに頼るようじゃ先が思いやられるつてもんだ。それにさつきのはかなり危なかった。もう少し粘られてたら負けてただろう」

「し、師匠。謙遜なんてらしくなー」

そこまで言つてポップは気がついた。ひどく疲れた表情と額に滲む汗、マトリフは謙遜でも何でもなく事実を告げただけなのだ。

「それに安心するのはまだ早え。あの手の奴らはしぶといからな、恐らく逃げ延びているだろう。……ところで、トーヤは何処にいる？」

「え？ あ、ああ。あいつなら、確か手持ちの薬が無くなったから取りに行くとか言つて出て行つたぜ」

突然話題を変えられ、戸惑いながらもポップは答えた。

「……そうか」

「それがどうかしたのか、師匠？」

「何でもねえ、ただ姿が見えないんで気になつただけだ」

「ところでマトリフさん、今まで何処にいたの？ バランと戦う前に相談に行つたのにもぬけの殻だったし」

ベッドの上であぐらをかきながら、ダイがマトリフに問いかける。

「ああ、これを探しに行つてたんだ。今のお前たちには必要だろうと思つてな」  
マトリフは懐から一冊の本を取り出すとダイへと手渡した。

「……このマークは!？」

「これが有名な『アバンの書』だ。ヤツの母国のカール王国へ行つて取つてきた。本来はカール王国の所有物だが、滅びちまつた今ではお前たちが持つていた方がいいと思つてな」

こうしてアバンの書を手に入れたダイ達。本に記されているアバンの教えはまるで本物のアバンが側にいるかの様に暖かく希望に溢れるものだった。

その教えを胸に刻んだ彼らは、これからの戦いに向け決意を新たに準備を始めるのだった。

\* \* \*

「……弱点はそれだけじゃない。使える武器がない……。並の敵なら拳だけでカタがつくが、真の強敵が相手となると素手では渡り合えん」

部屋へ入ると本を片手に語るイケメンの姿が目に入った。



ここはパプニカの城の一室。 balan との戦いの後、回復アイテムが無いと嘘を吐いてパーティーから離脱した俺は、頃合いを見計らって帰ってきた次第である。

戻ってきてみれば、どうやら皆はダイの新しい武器をどうするか作戦会議中だったようだ。

「ただいま」

「トーヤつ、お帰りつ」

ハイタッチで挨拶を交わしつつ、俺は何も知らないフリをして会話に参加する。 つて  
うかテンション高いな。

「ダイの武器がどうしたって?」

「ああ、ダイの紋章の力に武器が耐えられないんだよ。 だから竜の騎士の力に耐えられるような強力な武器がねえかなってさ」

ポップが要点を纏めて説明してくれる。

「どうしたもんかねえ、真魔剛竜剣みたいな刀がありやあ良いのに」

「・・・本当に竜の騎士が使える武器はあれだけなのかなあ」

俺は若干上の空でこの会話を聞いていた。

このあとロモスの武術大会に行くことになるんだろうけど、俺はその間どうしよう、別に行く必要性を感じられない。

ヒュンケルは槍の修行でしばらく居なくなるだろうし。・・・クロコダイーンと特訓でもしようかな。

などと考え事をしていたら突然手を引つ張られた。

「はやくつはやくつ、エイミさんが武術大会のチラシもってるってさー！」

「え？ あ、お、おう」

どうやら俺もロモスへ行くことになりそうだ。本当は特訓したかったんだけどな。

まあ、いつか。子供のおもりも大人の勤めだしな。

・・・

・・・

「え？ 覇者の剣？」

「ああ、バダックさんから聞いたんだけど、ロモスの武術大会の賞品なんだって？」

パプニカ上の屋上。そこでエイミを見つけた俺達は覇者の剣のことを聞いていた。

「ああ、あれね」

服の胸の部分からチラシを取り出し、俺達へと差し出す。何処に入れとんねん！

「魔王軍と戦える腕自慢を集めるために武術大会を開くそうよ。優勝者には覇者の剣が与えられるんですって」



「えええ、行つても意味ねえつて。どうせ参加できないなら行つてもしょうがないだろお」

「優勝したやつをその場でぶっ飛ばせば良い。そしたら周りのやつらも文句言えないだろう」

「それが勇者一行のやることか!!」

即座に却下するポップ。心なしかエイミも蔑んだ目で俺を見ている気がする。いい案だと思っただけだな。

「それに大会で優勝するくらいの実力者だぞ。万が一仲間になつてくれたら戦力アツブだ」

「ロモスなんて田舎の武術大会じゃ碌なやついるわけないつて」

「あとはほら、優勝者が剣で戦うとは限らないだろ。大会は職業不問らしいし、もし魔法使いとかが優勝したら交渉の余地はあるだろう」

「まあ、そう言われてみればそうかもしれないねえけどよ」

「可愛い女の子がいるかもしれない(ボソ)」

小声でポップに耳打ちする。

「あ、諦めるには早すぎるよなつ。やるだけやつてみなきやな」

緩みきつた表情を隠すことなくポップはそれっぽいことを言つて立ち上がった。

ダイはその横でため息をついている。

やれやれ、なんとか軌道修正できたな。危なかったぜ。

視界の隅でエイミが俺のことをメチャクチャ睨んでいるのが見える。どうやらバツチリ聞こえていたみたいだ。

俺ってそんなに信用しないの？

ポップのルーラでロモスへ飛びながら、次に帰ってくる時まで忘れてれば良いのになと思うのであった。

## 58 武術大会

「ハアハア、オーっうわ」

巨大なハサミの一撃を辛うじて横つ飛びで躲して体勢を立て直す。

しかしそんなに相手も甘くない。ザムザは距離を詰めると再びハサミの腕を振り下ろし追い打ちを仕掛けてきた。

足元には倒れ伏したダイがいる。避けることは出来ない。

「っクソがッ」

木刀で受け止めるも、その威力に全身がしびれ地面には大きなヒビが入った。

バケモノ野郎が、バカ力出しやがって。

心の中で悪態をつきながら、俺はマアムが早く罟から脱出し加勢に来ることを祈っていた。

今から少し前のこと。

ロモスの武術大会を観戦していた俺達は、大会に参加していたマアムと出会った。

予選を勝ち抜き、決勝進出選手へと選ばれたマアム。

しかし、そこで予想外なことが起こった（俺は知ってる）。

いざ決勝が始まるうかというその矢先。この大会の主催者であるザムザの罠により、決勝進出メンバー8名が閉じ込められてしまったのだ！

むしろこつちがメインの俺からすれば予選なげえよとしか思わなかったが・・・。

ついでとばかりにロモス国王を殺そうとするザムザの呪文を間一髪でダイが防ぎ、そのまま戦闘へと突入した。

紋章の力を使ったダイは圧倒的までに強かった。

しかしやはりというか、ダイの竜闘気はエネルギー切れを起こした。

このままではダイがザムザ（変身後）に喰われてしまうので、俺とポップとチウの三人で止めに入ったのである。

ポップの呪文やチウの体当たりとかで奮闘した次第である。

しかしここで誤算があった。ザムザが普通に強い。

っていうかダメージがすぐに回復するのが厄介すぎる。攻撃してもキリがない。

あんまりザムザに強いイメージが無かっただけに驚いた。原作だとマアムが普通に戦ってたので気にならなかった。

だけどそれはマアムが閃華裂光拳とかいうメタい技を持っていたからだっただ。

今はまだ対等に戦っている風に見えるが、まともに一撃喰らってしまえば俺とてタダでは済まない筈だ。

ダイは現在足元で絶賛気絶中だ。ポップとチウもザムザにやられて満身創痕、助勢は期待できないだろう。

今現在俺はザムザのハサミを木刀で受けて踏ん張っているが、防戦一方で時間を稼げるほどザムザは甘い相手ではない。

木刀を持つ腕に力を込める。全力でハサミを押し返し、ザムザの顔面目掛けて木刀を一閃する。

「ぐあッ」

両眼を抑えて蹲るザムザ。しかしこの程度では簡単に回復してしまふ。

それでも俺はこの機を逃すまいと木刀での攻撃を繰り返した。

息つく暇もなく連続で攻撃を繰り返すと、さしものザムザも何も出来ずに翻弄され続けるのだった。

攻撃を避け続けるよりも、攻撃を続けて完封している方が安全だ。

トドメさして良いなら霊丸で瞬殺してやるのに・・・。

そんなジレンマを抱えつつ戦っていると、視界の隅で気絶しているダイを退避させるポップとチウの姿が見えた。



これで一安心か。しかしマアムはまだか、早くしてくれよ。

そんな俺の思いがようやく届いたのか、マアムたちを捉えていた檻が突如として砕け散った。

ザムザは俺にやられながらも目の端でその様子を捉え、驚愕の表情を浮かべていた。砕けた檻の中から姿を現したマアムは、ザムザと戦う俺をみるとすぐに駆け寄ってくる。

「今度は私が戦うわ。あなたは下がっていて」

ザムザを正面に捉えて構えるマアム。その姿は凛々しく、そして静かな怒りに包まれていた。

俺の攻撃の手が止んだことで、ザムザは再び俺達へと向かってくる。

マアムは迫り来るザムザの巨体にまるで怯むことなく、華麗に躲して光る拳を繰り出した。

「はああああ、武神流閃華裂光拳!!」

「ぐはあああつ」

まともにボディに受けたザムザは叫び声を上げて数歩後退する。

そして自身の体の異変に気が付き慄いた。

「な、なぜだ・・・オレの不滅の肉体がっ!？」

そんな疑問に答えるべくもなく、マアムは怒涛の追撃をかける。

その様子は鬼気迫るものがある。どうやら生体実験を繰り返していたと語るザムザにお冠のご様子だ。

さて、そんなことは措いとして。閃華裂光拳を見せたのならもう良いや、このままあつさりと倒してやる。

木刀を握り直し、俺も追撃しようとしたその時――

「うっ!!」

「ええ?」

俺とマアムの手にヌルヌルした粘液附着した。――汚っ!!

俺の反応をみて何を思ったのか、ザムザは勝ち誇ったように破顔する。

「ぐっぐっ、その光る拳は素手でなければ使えない。そして貴様もその武器がなければ戦えないであろう。その粘液はちよつとやそつとじゃとれん、覚悟するがいいわッ!!」

ザムザの攻撃をマアムはギリギリで躲してはカウンターでケリを入れる。

しかし、ザムザはそれを避けようともせず、マアムに相打ち覚悟で攻撃を繰り返す。

・・・ザムザはちよつとのダメージはすぐ回復するからな。あいつにとつての捨て身はノーリスク・ハイリターンの最高の戦法だろう。

俺も木刀なしじゃマアムの二の舞いだ。まあ粘液なんて全然問題ないんですけどね。メラの炎で粘液を溶かして木刀を掴みなおす。

「な、なんだとつ。ーさせるかッ!」

続けてマアムの粘液も溶かすべく、メラを放った。しかしそれはザムザの巨体により阻まれてしまう。

「ぐふふ、そうはさせんぞ。あの光る拳さえなければ貴様らにはどうしようもあるまい」

小癩なやつめ。ダイの方をチラリと伺うと、意識は戻ったようだがまだ戦える状態ではなさそうだ。

本来ならチウの回復アイテムの後にアバンストラッシュを決めるのだが……。逡巡している俺を余所に、先に動いたのはマアムだった。

何処に隠していたのか魔弾銃を取り出すと、ダイに向かって弾丸を放つ。

見事にその弾はダイへ命中し、ベホイミの光がダイを包み込んだ。

「き、貴様何を!」

素早く弾倉を入れ替え、今度は自身の手に向かって弾丸を放つ。

着弾した途端に炎が燃え盛り、ザムザの粘液を溶かしていく。

「ーし、しまった!!」

「閃華裂光拳ッ!!」

マアムの拳がザムザの腕を砕き落とす。もちろんその腕が再生することはない。

「ザムザアア!!! ーうおおおおおおお」

間髪入れずにダイが雄叫びをあげてザムザへ迫る。

すべての力を集中させた拳の一撃。それはザムザの強靱な肉体を容易に穿ち、その巨体の胸を大きな風穴を空けた。

「ど、どうだっ」

突き抜けた後にダイは地面を転がり、動かなくなったザムザを睨む。

一瞬の空白。そしてザムザの体は軋むような不快な音をたてて崩れ落ちた。

## 59 覇者の剣

「これが覇者の剣かあ」

剣をしげしげと見つめながらダイは声を漏らす。

「ほっほっほ、如何にもそれが伝説の剣——覇者の剣——である」

そんなダイに満面の笑みを浮かべながらロモス王は答えた。

ザムザを倒した俺達は、その褒美としてロモス王から「覇者の剣」を貰うこととなった。

元々大会の賞品だったし、他の大会出場者が手も足も出ないバケモノを倒したのだ。実質優勝みたいなものだろう。

それは誰もが分かっていたため、異を唱える者はいなかった。というよりも是非貰ってくれという感じだった。

「覇者の剣」は以前ダイに授けた「覇者の冠」と同じくオリハルコンで出来ておるんじやよ。そしてオリハルコンは永久不滅の金属と言ひ伝えられておる。きつとこれからの戦いに大いに力を発揮することじやろう」

その説明を聞き、誰もが『へえ〜』だの『ほお〜』だのと感嘆の声を漏らしている。

いや、偽物なんですけどね。

本来なら紋章アバンストラッシュの威力に耐えられずにボロボロになり、本物の“覇者の剣”がないことをザムザから告げられるわけだが、使っていない以上ザムザは何も言わずに塵となって消えた。

その時は深く考えず“覇者の剣（偽）”を手にすればダイが偽物だと気付くだろうと高をくくっていたわけだが……。

中々気付く様子のないダイに若干の不安を覚える。

「ど、どうだ、ダイ。“覇者の剣”を手にした感想は」

早く気づいてくれと言わんばかりに俺はダイに剣のことを尋ねる。

「うん、よく分からないけど凄いパワーを感じるよ。もしかしたら紋章の力にも耐えられるかも知れない」

ダメだわこれ、全然疑ってないわ。

何故だ、何故気づかない。キミは原作だとポップの実家で武器の良し悪しについて語ってたよね。なら気づいてくれ。

もしかしてザムザのやつすり替えていないのか？

いやいや、そんな筈ないよな。ザムザがロモスへ潜入してた理由としてはきつと“覇者の剣”が大きなウエイトを占めているに違いない。

もちろん大会出場者を生体実験の材料にするのもあっただろうが、そんなもんはその辺のやつとつ捕まえれば良いだけだ。わざわざ潜入なんて面倒なことをする必要はない。

ならばやはり“覇者の剣”は偽物だと考えていいだろう。

あー、そうか。そういうことか。わかったぞ、ダイが気づかない理由が。

原作でザムザにアバンストラッシュ使った後、確かに剣はボロボロになった。

しかしよく考えて見れば、結構頑丈なパプニカのナイフはストラッシュを放つ前に消滅。ヒュンケルの魔剣でさえも一発放った後に消滅したのだ。

ボロボロになりながらも形を保っていた“覇者の剣（偽）”が異常なのだ。

きつと偽物であってもかなりの業物に違いない。それこそ“鎧の魔剣”に匹敵するくらいの。

この仮定が正しければダイが見抜けないのも仕方のない事だ。なにしろ一流の剣には違いのないのだから。

ならばどうやってそれを気づかせる？

さすがに直接『それ偽物じゃね？』とは言いき辛い。少なくともロモス王の居るこの場で言う勇氣は俺にはない。

・・・どうしよ。

剣の話題で盛り上がるみんなを尻目に、俺は一人頭を悩ませるのだった。

.....

「そういやあ、トーヤの木刀ってスゲェ頑丈だよな」

「そういえばそうだね。バランと戦った時も木刀で真魔剛竜剣と打ち合ってたっけ」  
両手を頭の後ろで組みながら何とはなしに疑問を口にするポップと、それに乗っかるダイ。

その戦いを見ていないマームは静かに目線だけこちらに向けた。

「あー、そうだな。木刀に闘気を流してるから、普通の武器よりは相当頑丈なはずだよ」

“覇者の剣”をどうするか悩んでいるので、あまり会話に参加したくないのだが、水を向けられてしまっただけは仕方ないので適当に会話をする。

「真魔剛竜剣って伝説の武器なんですよ？ 闘気を込めたからって木刀で戦えるなんて凄いわよね。それに闘気ので武器が壊れたりもしてないみたいだし」

「ダイだって元々普通に紋章使ってる時は剣がダメになつたりしなかつたんだろ？ なら俺程度の闘気なら込めても別に問題ないって」



「そうかな？ 闘気の強さなら俺とそこまで変わらないと思うけど」

「うーん、確かに“凝”を使えばかなりダイに近い力は出せー」

そこまで話して俺はムリヤリ続く言葉を飲み込んだ。

「「ぎょう？」」

しかし時既に遅し。三人揃って同じ言葉を口にした。

・・・まあいいか。別に隠すほどのことでもないし、そもそも他の奴らじゃマネできないだろうし。

「仕方ない、これは俺の使う技術でな。教えてやるけど他言は控えてくれよー」  
こうして、俺は自身の“念”のことをダイ達に話した。

もつとも、系統や習得率などは話していない。あくまで“念”とは闘気を自在に操る技術であるということにして “纏” “練” “絶” “発” の四大行と応用技の存在を話しただけだ。

知識としてだけでも知っていれば、彼らならそれを自分流でアレンジして使ってくれるかもしれないな。

そして、俺の思惑とは裏腹に“念”の存在を話したことにより、思いがけず“覇者の剣”が偽物だと気づかせる千載一遇のチャンスが転がり込んでくるのであった。

## 60 闘気

ロモス城の一室。俺はそこでダイ達へ“絶”を実演して見せる。もつとも、俺の場合は指輪で強制的に“堅”になるので“隠”だけどね。

「す、すごいわ。目の前にいるのに、まるで気配を感じないっ」「すっげえ。ねえねえ、それどうやるのっ!？」

目を輝かせて教えを乞うダイ。

「まあ待て、教えるのは全部終わってからだ」

興奮するダイを抑えて、続けて“纏”と“練”を見せる。

しかし気のせいか“絶”よりも感動は薄く感じた。理由を聞いたら“纏”と“練”は達人であればある程度は可能だからだとマアムは言う。

驚く姿を期待していただけに少しがっかりだ。

「でも、こんなに綺麗で穏やかな闘気を操る人は他にいないわよ」

そんな俺に気を使ってフォローする心優しいマアム。・・・俺って顔に出るタイプなんだな。

「さて、残りの基本は“発”だけど……。これは別に良いよな？ アバンストラッシュ

とかと原理は一緒だし」

まさか水見式を見せる訳にはいかないため、適当にはぐらかす。

「ならば応用技っていうのみせてっ」

「はいはい」

続けざまに“周” “凝” “堅” “円” “流”を見せる。例によつて“硬”

は俺の能力によりできないのでスルーだ。

「すげえのな、あんたつて。こんなのどこで覚えたんだ？」

すべての技を見せ終わるとポップは感心したように言う。

「むかし住んでた所にそういうのが詳しく書いてある本があったんだよ。俺はそれを

マネただけだ」

「ふうん、本ねえ。でもそれだつて一朝一夕で出来るもんでもないんだろ？」

「ああ、もちろんだ。ここまでするのにメチャクチャ苦労したぜ。なにしろ20年

近く特訓しているからな」

「ふふ、あなたつて見かけによらず努力家なのね」

そりゃあ命がかかってますからね！

俺は口を噤んで微笑むマアムを見るに留める。

「でも、なんだか不思議だね。“練”とか“周”とか、“発”つてやつも知らないうち

に使ってたなんて」

何だか感慨に耽るダイだが、俺はそれに構わず予てからの作戦を実行に移すことにした。

わざわざ口頭で済む話を実演までして見せたのはこの作戦を遂行するためである。

「よし！　じゃあ今度はダイもやってみようぜ。外で特訓だつ。新しい剣にもなれないとな」

「うん、わかったつ！　よし、頑張るぞつ」

「「おーっ!!」」

気合を入れると、ダイは四大行の特訓に励むべく剣を掲げて町外れへと駆けていくのであった。

剣はしまえ、剣は。

闘気と念は似て非なる能力だ。

どちらも生命エネルギーを源としているという点は共通しているが、そのあり方が違うのだ。

念のオーラは使用者の思念に作用する。その効果は多種多様。物や人を破壊する場

合や、癒やす場合もある。あるいは存在するだけで無害なものさえある。ゼパイルさんの贗作の壺に込められたやつとかな。

具現化や変化、操作なんてのはそれがより顕著だ。汎用性が高くあらゆる方面への応用が可能な能力、それが念だ。

そして“オーラ”は意識、無意識に関わらず使用者の思念によってその力の方向性が決まる。

それに比べると闘気は指向性が高く、用途は限定されている。

闘気力の源は“攻撃的生命エネルギー”。この“攻撃的”というのが闘気の特徴である。

同じ生命エネルギーではあるが、その性質は他を害するもの。それは時に使用者さえも蝕むことになる。

竜闘気に耐えられずに武器が砕けたのはその性質によるところが大きい。仮に念で同じことをやったとしても武器が砕けることはないだろう。

もつとも、闘気と比べて威力も相応に落ちるだろうが……。

実際俺のオーラ量はかなり多い。それこそ紋章を使ったダイに匹敵するほどに。

しかし攻撃力では敵わない。単純な戦闘では闘気の方が性能が上なのは認めざるを得ない。

まあ、それでも俺はあらゆる面に対応可能な念の方が上だと思っただけなんだ！  
などとロモスの外れの地面にあぐらをかきながら考える。

少し離れたところではダイとマームが四大行の練習に励んでいる。ポップはそんな二人の近くで闘気ではなく魔法力で試しているみたいだ。

「まだかなあ。はやくあの剣ぶち折りたいなあ」

ヒソカのようにオーラでドクロやハートを作りながら皆を見守るのであった。

「トーヤア！ 見てよつ、結構様になってるでしょつ！」

日が傾き始め、辺りがオレンジ色に染まる頃。ダイは手をぶんぶんと振り回して大声をだして俺を呼んだ。

近づいて見てみると、ダイは竜闘気を右手から左手、左足から右足へと移動させていた。

「どうやら『流』の練習をしていたらしい。また難しいやつに挑戦したもんだ。

「おおつ！ 凄いぞダイ、たった数時間でこんな形になるなんて驚いたぞ」

かなり雑なオーラの動きをしているけど、闘気であるということと初めてだということを考えれば十分凄い。

マームとポップは『纏』と『練』をやっているようだ。しかしこの辺りは普通に普

段からやっていることなので目新しきは感じないな。

さて、そろそろ皆の気も済んだことだろう。ここらで作戦を実行に移そうと思う。

「なあ、せつかくだから少し試してみないか？」

木刀にオーラを込めて構える。

「“凝”と“周”を上手く使えば、この木刀を斬れるだろうな」

「へへっ、トーヤ。あとで文句言わないでよっ」

「ずいぶん自信があるみたいだな。これでも真魔剛竜剣と打ち合えたんだ、全力で来なくちゃ折れないぜっ」

ダイは紋章を出すと竜闘気を全開にした。ポップとマアムは小走りで遠くに避難する。

「よし、まずは様子見だっ。“凝”で打ち込んでこい！」

二人が十分に離れたことを確認してから、俺はダイに声を掛けた。

「うんっ。ーはああああ、大地斬っ！」

放出しているすべての竜闘気を剣へ集中するダイ。ーちよ、ちよつと!?

「ーうおりやあ!!」

ただ受けるのではヤバイと瞬間的に判断し、こちらもとつきに攻撃に移る。

ーパキイイー

甲高い金属音。少し遅れて宙に舞った刀身が落ちる。

「う・うそおおお・お・折れちゃった・」

剣を振りぬいた姿勢のまま固まるダイと遠巻きに目を丸くして驚くポップとマアム。

っしやおらあああっ!!! 思い通り思い通り思い通り!

少し予想とは違ったがなんとか“覇者の剣(偽)”を折ることに成功したぞ。

そんな心情をおくびにも出さず、俺は何食わぬ顔で驚いた表情でその場に佇む。

それにしてもダイめ、いきなり大地斬でくるとは恐ろしいやつ。死ぬかと思つたわ。

未だ衝撃にしびれる両手を擦りながら俺は冷や汗を流すのだった。



## 61 故郷

「あ……痛つつつ……」

「あ、相変わらずへタねえ」

「しようがねえだろこの大人数じゃ……」

ポップのルーラで移動してきた俺たちは、重なりあうようにして地面に転がっていた。

「おい！ いつまでマアムさんにしがみついとるんだっ！」

蹴り飛ばされたポップとチウが言い争いをして喚いている。

そんな二人を横目に、服の土を払って落として周囲を見渡す。

ここは「ランカークス」、テランやベンガーナの東方にある小さな村、その外れの小道だ。

のどかな田舎の風景をみていると魔王軍のことなんて忘れてしまいそうになる。

「それにしても本当に伝説の武器なんてあるのかね、こんな田舎の村に」

チウはいつの間言に言い争いを終わらせたのか、小さな村をみて言う。

かなり失礼な物言いだ、ここへ来ることとなった理由が占いということを考えれば

仕方ないとも思う。

「正確には古い結果はダイの探しものがこの村にある、だけだな」

「むむ。なんだねキミは、どっちでも同じことじゃないか」

「武器そのものとは限らないってことだよ。例えば武器の材料とか、あとは伝承とか呪文とか。とにかく武器だけじゃなくて色々見てみようってこと」

「ふうむ、なるほど。聞き込み調査をするときは言葉に気をつけなければ見逃してしまふこともあるということか……。キミ、なかなか良いアドバイスだ。その調子で頼むぞ」

「ど、どうも」

なぜか上から目線で褒められる。はは、笑うしかねえや。

こうして俺たちはダイの力に耐えられる武器を求め、ポップの故郷“ランカークス”へ足を踏み入れた。

.....

「ちつちえく村だぜ……。何も変わってねえ。ーおつと！ そこ右だ」

「そこそと歩きながらポップが実家の武器屋までの道を案内する。」

ここへ来るまでずっと泣いていたポップだが、やはり故郷が懐かしいのだろう。普段よりも口数が多く感じる。

しばらく歩くとポップの実家であろう武器屋まで辿り着いた。

店の前には椅子に乗り看板をかけようとしている女性の姿。

「か、母さんっ!」

椅子から転倒して落ちそうになる女性に駆け寄り、ポップが下敷きになる。

その女性——ポップの母親は息子との再会に涙し抱きしめた。

「本当は会いたくてしょうがなかったのね」

そんな二人を遠くで見つめながらマアムがつぶやく。

——バタン——

「お、親父……」

騒ぎを聞きつけたのか、ポップの父親らしき男性が店から出てきた。

このまま母親と同じく感動の再会を果たすのかと見ていると、父親はポップの肩と股ぐらを掴んで抱え上げる。

「このクソガキがああああっ!!」

す、すごい! なんて荒業を! 抱えたポップを地面に叩きつけるだけでは飽きたら

ず、そのまま殴るわ蹴るわ。

「親に心配ばかりかけよって、このロクデナシがあつ」

「お、おじさんおちついてっ」

さすがにマズイと思ったのでダイ達と一緒に仲裁に入った。

「この村はたいした伝説などない平凡な村だよ」

ポップの父親——ジャンクに事情を説明するも、返ってくるのは案の定といったものだった。

それでもこのまま帰るわけには行かず、一応店の中を見せてもらう。

「思ったよりずつといい武器がそろっているけど……」

それでもダイの力には耐えられないだろう、とメルルは言外に語る。

周りのみんなも同じ感想をもったようで、少しがっかりしているように感じる。

それにしても何なのこいつら、目利きでも出来るんか。俺にはどの武器見ても違いなんか分からんぞ。

俺は手にとった武器をそのまま元に戻す作業を繰り返して心の中で嘆く。

「ん？」

ダイが店の隅に立て掛けてある剣に気づいて手に取る。

「この剣にはなにか不思議な力を感じる．．．他の剣にはない凄みがある．．．でもこれでも多分ダメだと思う」

「ふむ、さすがだな。そいつは確かに特別製だ。最近知り合ったロンっていう魔族が作った剣だよ」

「なんだってっ．．．親父、まさかそのロンって、ロン・ベルクって名前じゃないのか？」

「あ、ああ。そうだが」

その後、ポップはヒュンケルの魔剣や魔槍を作った魔族の名工のことを説明し、ジャンクに案内を頼んだ。

ついにダイの武器作りか．．．はあ、会うの嫌だなあ。

俺は数年前にロン・ベルクと会った時のことを思い出し、深い溜息を吐いた。

「ええ！ ロン・ベルクを知ってる!？」

ロン・ベルクの元へ向かう道すがら、俺がロン・ベルクに会ったことがあると伝えると、みんな驚いて目を丸くした。

「ああ、何年か前にね」

「じゃあなんで今まで黙ってたんだよっ！ 分かっけてりやもつと話は早かったっての

に」

「だつてえ、魔剣とか魔槍のこと知らなかったし。それに魔族が鍛冶屋やつてるだけでいちいち話すわけないじゃん」

ポップが声を荒げるが、そこは以前から考えていた言い訳で乗り切ることにする。

低く呻きながら反論を飲み込んだポップは、何かに気づいたかのように俺の木刀を指さした。

「何か作ってもらったのか？ あ、もしかしてその木刀はロン・ベルクが作ったのか？」

「いや、違う。この間も言ったけど、気を流してるから頑丈なだけで普通の木刀だよ。っていうか名工って木刀作るのか？」

「あー、もうっ、じゃあお前は何を作って貰ったんだよっ」

焦れるようにポップが叫ぶと、みんなも気になるのかこちらを伺っていた。

「親父さんなら分かると思うけど、そのロン・ベルクって人は変わり者らしくてね。俺は気に入られなかったから何にも作ってもらえなかったよ」

俺の言葉に同意するようにジャンクは目を閉じて頷いていた。

「そんなあ、じゃあ俺たちが行ってもダメなのかなあ」

俺とジャンクの様子に、ダイは不安そうな表情をする。

「俺と違ってダイなら気に入られるって、きつと」  
それに俺の場合は気に入られなかった理由が凄くシンプルだったし……。

森の奥にある小さな小屋。ここにロン・ベルクがいるという。

しかしどうやら留守のようでノックをしても中から返事がない。

どうしたものかと立ち往生していると、後ろから足音が聞こえた。振り返るとそこには男の姿。

「困るなジャンク。お前以外の人間をここに連れて来られちや……む？」

その男——ロン・ベルクは俺の顔を見ると心底嫌そうな顔をして酒瓶を傾けるのだつた。

めっちゃ嫌われてるっ！

## 6 2 錬金術士？

「帰れ」

短く一言、ロン・ベルクはそう告げた。

「お、お願いしますっ。俺たちが魔王軍と戦うにはどうしてもあなたの作る最強の剣が必要なんです」

「そんなことは知らん」

「なんだとっ、あんたは魔族だから魔王軍の味方ってわけか！」

ポップが責めるように言うと、ロン・ベルクは酒瓶をおいて睨むような視線を向ける。

「・・・武器屋に善も悪もない、強い武器を作るだけだ。ところがどうだ！ 最近は碌な連中がいらない・・・宝の持ち腐れだ。だから俺はアホらしくなって武器を作るのをやめたのさ」

そういつてロン・ベルクは俺を睨む・・・さすがにここまで露骨に嫌われると傷つくな。

「そのバカもだ。名刀も丸太も変わらん、その辺の棒きれで十分だろう」

皆にもそれは十分に伝わっているようで、説明を求めるかのようにメルルが小声で耳



打ちしてきた。

「何かあったんですか？」

「3年くらい前に偶然山奥に住んでる魔族を見つけてね、話してみたたら刀鍛冶だって言うからさ……俺に強い剣を作ってくれって言ったんだよ」

一応俺も小声で話す。しかし普通に筒抜けみたいだ。みんな静かに俺の声に耳を傾けているようだ。

「でき、嫌だつて言うから勝負で俺が勝ったら作ってくれってお願いしたんだけど……」

「だけど……なんです？」

「あれはそんな生ぬるいもんじゃない。本気で殺してやろうかと思っただけだ」

やはりというか、当然というか……会話を聞いていたロン・ベルクは俺の続く言葉を遮るように鼻を鳴らした。

「今思い出しても胸くそが悪くなるー」

そして何故か3年前の出来事を憎々しげに語りだしたのだった。

3年前、偶然にもロン・ベルクに出会った俺は武器を作ってくれと懇願した。

土下座までして頼み込んだ俺であったが、にべもなく断られた。

しかしそう簡単に引き下がる俺ではなかった。ロン・ベルクの家の前で座り込みを開始した。首を縦に振るまでテコでも動かない所存だった。

座り込むこと一週間。ついにロン・ベルクが動きをみせた。

「……いい加減にしろよ小僧。でないと地獄をみることになる」

俺は心のなかで思ったね、"かかったぞ"と。

そして怒りに震えるロン・ベルクに俺は言った。

「なら、勝負をして下さい。剣の勝負で俺が勝ったら武器を作ると約束して下さい」

ロン・ベルクは魔界最高の鍛冶師の前に、一流の剣士である。今は飲んだくれても、こんな若造が自分に剣で勝つつもりでいるなんて頭にくるだろう。

更には一週間もストーキングされて苛立っているところへ、そんな戯けたことを抜かす奴が現れたとなれば尚の事。

結果、ロン・ベルクは怒りが決壊したかのような勢いで勝負を承諾し、自前の剣を取り出すと襲いかかってきたのであった。

そして俺は負けた(笑)

「ーというわけだ。だからコイツには武器は作らん」

昔のことを思い出し出していると、いつの間にかロン・ベルクの過去回想も終わったようだ。

話を聞き終えた皆は、それぞれ思い思いの反応をしている。・・・まあ、十中八九呆れてるんだろうけども。

すまん、ダイ。俺がムダに嫌われてしまったばかりにロン・ベルクを必要以上に意固地にさせてしまったかもしれない。

「お、願います。どうしても俺には強い剣が必要なんです」

だからこれ以上このヒトを刺激しない様に、俺は部屋の隅に移動するのだった。

だけど安心してくれ。このヒト説得するのは至極簡単なはずだから。

「あなたの作った鎧の魔剣でさえも一撃で消滅してしまっただけです。もつと強い剣がないと、真魔剛竜剣に勝つことができない」

「真魔剛竜剣だとおっ!!!」

ほらね。

その後、ダイはロン・ベルクに balan との戦いを説明した。

「ふははは、面白いつ！ できるぞボウズ。地上最強の剣がっ」

「本当ですかっ、願います！ 今すぐにもっ」

「あわてるな。真魔剛竜剣に勝つには同じオリハルコンを使わなければならぬ。そうでなければ結果は同じだ。．．．あいにく俺は錬金術士じゃないんでね、材料がなけりや剣は作れんよ」

「な、なんでえ。ふりだしに戻っちゃった」

ポップが嘆くようにつぶやくと、しんと静まり返ってしまった。

トントン拍子で話が進んでいただけに、そのショックも大きいようだ。

だからこそ俺の活躍も一潮というやつになるだろう。

最近全然活躍してなかったかしね。それでころかロン・ベルク説得という意味では足を引っ張ってすらいるんじゃないかなろうか。

ここらで汚名返上の意味も込めて皆の役に立たないと。

「あ、あーっと。ゴホンっ」

「ん？ どうかしたの、トーヤ」

「ああ、オリハルコンが必要なんだろう？ 俺の家にあるぞ」

そうやって俺は「同行」を使って素早く家に帰り、オリハルコンのインゴットを持ってきた。

「ハルモニウム」

・伝説に語られる神々の金属、オリハルコンの塊。

剣の一本は余裕で作れるであろう大きさのそれを目にしてダイ達は大喜び。

ふふ、きつとロン・ベルクも大いに喜んでいるに違いない。そう思つて視線を向けたのだが……。

しかし何故かロン・ベルクは射殺さんばかりの視線で俺を睨むのだった。

なんでさっ！

## 63 詰問

工房つて暑いよな。窓開けちやダメかな？

暇だし、さっさと終わらせてくれないかなあ。つていうか暇。

ロン・ベルクがダイの手を見つめること数時間。何故かダイと共に小屋に残された俺は、やることもなくじつとイスに座つて待つていた。

「おい、お前」

さらに数十分が経つた頃、気の抜けた状態で待つていると突然話しかけられた。

「あ、あのトーヤです。俺の名前は、トーヤ」

「・・・お前は一体何だ？」

意図のわからない質問に俺だけでなくダイやジャンクも首を傾げている。

「何だ、と言われても・・・」

答えようがないので尻すぼみになりながら返事をする。

すると今までダイの掌を見つめていただけのロン・ベルクは顔をあげた。

「・・・何故オリハルコンを持つている」

「そ、それは偶然手に入れて・・・」

みんなは偶然手に入れたで納得してくれただけだな。ロン・ベルクはオリハルコンの出処が気になって仕方ないらしい。

「オリハルコンとは神々が作ったもの。世界中探しても極僅かしか存在しない伝説の金属だ。その希少性もあって地上にあるオリハルコンの場所は大体判明している。つまりお前さんが持っていることなどあり得ない話なんだよ」

「そういえばロモスの王様もそんなこと言ってたっけ。地上に残された僅かなオリハルコンで覇者の剣と冠を作ったって」

「地上だけじゃない、魔界でさえも滅多にお目にかかることのない代物だ」

「へえ、神様が……。そんなに凄いものをトーヤが持つてるなんて」

オリハルコンの名前は知っていても、いまいちピンときていなかったのだろう。ダイはその話をきいて興味をもったのか、答えを求めるように俺をみる。

いくら伝説の金属とはいえそこまで貴重品だったなんて、とんだ失敗だったな。現代知識の弊害とでも言うべきか、伝説って言葉が俺の中で安っぽいものになっていたみたいだ。

俺はため息を吐いて、仕方なく事情を説明することにした。

「それ、俺が作ったんですよ」

「なにっ!? お前が作った……。だと」

「神様が作った金属をトーヤが!？」

「ああ。まあ、俗に言う錬金術士ってやつでさ。素材さえあれば作れるんだよ・・・もちろん物凄く難しいけどさ」

あーあ、なんかここ最近自分の能力喋りまくってる気がするなあ。

「そっか、だからトーヤは不思議なアイテムをいくつも持つてるんだね。普段から使ってたカードみたいなやつも錬金術で作ったアイテムだったんだ」

「ええっ、気づいてたのか!？」

「うん。だってトーヤはいつもルーラ使うときに背中向けて何かやってたし、気にはなってたけど話したくないことなのかなって・・・みんなも気づいてると思うけど」

「・・・マジか」

うっわ、恥ずかしい。ちゃんと隠し通せてると思ってたからいちいち『ルーラ』とか声に出してやってたのに。

バレてたんなら道化以外の何者でもないじゃないっすか。

こうして俺は、自分の作ったアイテムやカードを取り出して説明することとなった。説明している間、ずっと表情の緩むことがないロン・ベルクが気になった。

\* \* \*



「余計な世話かもしれないが、あの男には気をつけろ」

俺は目の前に座るボウズーダイの掌を見つめながら忠告をする。

今この小屋にトーヤはいない。話を聞いた後、準備に邪魔だからと追いだしたからだ。

「あの男って、トーヤのことですか？」

「そうだ」

「・・・どうして」

今日あったばかりのやつに仲間を貶されて気分を害したのか、ダイの表情は若干こわばる。

「ヤツは何かを隠している。もしかしたら魔王軍か、あるいは別の魔界の勢力の人間かもしれない」

「そ、そんなことありません。トーヤは俺達の大切な仲間です。そんなこと絶対になり！」

俺の言葉を否定するように頭を振るダイ。そしてそんなやりとりをする俺たちを部屋の隅で何うジャンクの視線を感じた。

「ヤツはオリハルコンを作ったと言っていただろう、ありえん話だ」

「ありえないって……さつきロン・ベルクさんも言ってたじゃないですか。俺は錬金術士じゃないんだ、剣を作って欲しければまずオリハルコンを準備しろって」

確かに言った。そしてその言葉は錬金術士ならばオリハルコンを用意できると言っていることと同義だ。しかし――

「あれは言葉の綾というやつだ。神々の作ったものだぞ、只の人間――いや、魔族であろうと作り出すなんて不可能だ」

「え？ でも素材さえあればできるってトーヤは……」

「その素材だが、あの男はなんと言ってた？」

「えっと、〃 竜のつもの〃 と〃 油〃 と〃 金属〃 ……だったかな」

先ほどトーヤから聞いた話を思い出し、ダイは指折りしながらトーヤの語ったオリハルコンの素材を答えた。

「おかしいと思わんか？」

俺の質問にダイは少し頭をひねる。そして何かに気づいたのか取り繕うように声をあげた。

「りゅ、〃 竜のつもの〃 だったら別におかしなことなんてないですよ。つい最近ドラゴンと戦ったもん、その時に手に入れたんだよっ」

「確かに〃 竜のつもの〃 も十分貴重なものはあるが、そのことじゃない。――どうし

てヤツはそんな大切なことを俺たちに話したんだ？」

「大切なこと？」

「材料だよ。錬金術士に限らず、俺たちのような仕事をしている者はその技術や技法を何より大切にしている。本来ならオリハルコンの生成の材料などは命の次に大切な情報だったはず」

「それは・・・俺たちじゃ材料があつても作れない訳だし、そんなに気にすることじゃ・・・」

仲間だからだろうか。ここまで説明してもダイは話の本質から目を逸らすように、トーヤのことをかばう。

いや、俺自身なぜあの男のことでここまでムキになっているのかよく分からない。放っておけばいい。俺は地上最強の剣を作り、それを地上最強の少年に託すだけ。

それだけで満足なはずなのに・・・。

「良いか、よく聞け。トーヤは錬金術士だということをお前たちに隠していた。お前の反応を見る限りでは不思議なアイテムとやらのこともさつき知ったんだろう」

俺はいつになく真剣な眼差しでダイを正面から見つめていた。

ダイも、俺の只ならぬ様子を感じてか真剣に聞いている。

「だから尚更おかしいんだ。自分やアイテムのことさえ隠している人間が、なぜ重大

な秘密であるはずのオリハルコンの材料を明かしたのか」

ハッキリとした声でダイへ告げる。お前の仲間は危険だ、手を切ったほうが良いと、言外に告げるように。

「あいつの行動には一貫性がない。正体を隠したり、あるいは自ら話したりと不可解な点が多い。材料の件だつて作るところを直接見た訳じゃない。すべてがデタラメで、錬金術士と言うのも俺が偶々その言葉を使ったから出てきたウソかもしれない」

「ロン・ベルクさん。確かにあなたの言う通りかもしれない・・・それでも俺はトーヤを信じることにするよ」

忠告も虚しく、ダイはまったく迷いのない瞳で俺を見つめた。

「確かにトーヤは何か俺たちに隠してるし、錬金術士なんてのもウソかもしれない。だけど、トーヤが俺の大切な仲間だつてことはウソじゃないから」

「・・・そうか、ならば俺からはもう何も言うまい」

なぜあんな奴を信用するのか、俺には到底理解できない。

「よし、そろそろ鍛冶に取り掛かる。ジャンク、手を貸してくれ」

「おお、こいつは大仕事になる」

元々ただのお節介。ダイが良いというのならそれまでのこと。

俺は俺の仕事をするまでだ。

炬から取り出したオリハルコンを叩く。

鎚から響く音や手応え。それだけでこのオリハルコンが最高の材料だとわかる。

オリハルコンだからなのか、あるいはあの男が用意したからなのか。ふとそんな考えが頭をよぎった。

剣を打つときに雑念が入るのは初めての事だった。

## 64 ロン・ベルク

いつも通り酒を買い、小屋へ戻ろうとすると一人の青年がいた。何処にでもいる普通の青年だ。．．．まあ、服装は変わってるが。

「どうしてこんな森の奥にいる、遭難者か？」

親切心ってわけでもないが、気がついた時にはそう尋ねていた。

どうやら青年は人を探しているらしい。

嫌な予感がした。きっとコイツも俺に武器が作って欲しくてやってきた口だろう。

「そうか、見つかるといいな」

だから俺は白を切ってこの場を去ろうとした。だというのにー

「それには及びません。たった今、見つかりましたから。魔界の名工、ロン・ベルクさん」

一癖ありそうな野郎だな、と俺は思った。

．．．．．

「帰れ」

短く告げると、俺は青年を追い返した。

思いの外あっさり和小屋から出て行つた。家までついてきたからもつと粘着質なやつかと思つたので安心した。

次の日何気なく外へ出ると、そいつは小屋の前にいた。

どうやら座り込みをしているらしい。俺が剣を作つてくれるまではここを離れないそうだ。

「そうか」

そつげなく一言返すと、俺は小屋に戻る。

別段驚きはしなかつた。噂を聞きつけて似たようなことをする輩はごまんという。

そしてこういう奴は放っておけばいい。相手にするだけ時間の無駄だ。

・・・

数日後。

外は雨が降っていた。あの青年はまだ小屋の前にいる。

何をするでもなく雨に打たれて座り続ける青年の姿。

その姿を見て、何故か無性に腹が立つた。

「――いい加減にしろよ小僧。でないど地獄をみることになる」

追い返すために凄んでみせると、青年は顔をほころばせた。

「なら、勝負をして下さい。剣の勝負で俺が勝ったら武器を作ると約束して下さい」その言葉に違和感を覚えた。

剣で勝負？ 俺が剣士だということを知る者は少ない。それが地上となれば皆無と  
いつていいだろう。

だが、俺はその違和感をすぐに払拭した。深い理由などない、単に腕っ節で解決しようという短絡的な思考の持ち主なのだろう。

それにコイツ自身が出した条件だ。さっさと負かして追い返してやろう。

勝負が始まると、青年は腰にぶら下げていた木刀を構えた。

こちらは真剣を構えているのだが、青年は怯む様子がない。．．．案外肝が座っているのかもしれないな。

あるいは舐めているのか。どちらにしる俺は少し脅かしてやろうと剣を振りかぶると、青年の眉間めがけて振り下ろす。

俺の放った鈍い太刀筋は、ゆっくりとした速度で青年に向かって落ちていく。しかしそれでも並みの人間では対応できるものではない。

慌てふためく青年の姿を予想するも、俺は舐めていたのが自分の方だと思い知らされた。



「ーッ!?!」

あろうことか木刀で俺の刀身を受け止め、力任せに俺の体ごと振りぬき押し返した。後方へ数メートル程飛ばされた俺は、雨水をはじきながら地面を踏みしめる。

信じられなかった。鬨気を流しているとはいえ、たかが木刀が俺の剣の一撃を防ぐなんて。

だから俺は勝負のことなど忘れて木刀を斬ることに執心した。

その後何度か打ち合うと、俺の意図を察したのか青年も木刀で受けの体勢をとった。構わず何度も何度も剣を振り下ろした。

がむしやらになつて剣を振る。しかし木刀は斬れなかった。

どれくらいそうしていただろう。俺が力任せに剣を振りぬくと、木刀が青年の手から飛ばされていった。

飛んでいく木刀を呆けたように視線で追うと、青年が言葉を発した。

「剣を手放してしまつては負けを認めざるを得ませんね」

青年は木刀を拾うと、雨に濡れた両手を服で拭った。

そして一週間も粘つて剣を作つて欲しいと懇願したくせに、負けを認めてあっさりと帰つていった。

.....

・  
・  
・

ダイの剣を作り終えた俺は、酒瓶を片手に昔のことを思い出していた。

最高の気分だったのに、台無しだな。

トーヤ、か。奇妙な男だ。

何を目的にしているのかまるで理解できない。

今回はダイの剣が目的だったとはつきり分かる。しかし3年前のあれはなんだ？

結果だけ見れば負けたから引き下がっただけだが……。

あの日以来、俺の心境に変化があった。

酒を飲んでいても剣のことを考えていた。

知り合ったばかりのジャンクから仕事の依頼を請けていたのは剣を作りたかったか

らかもしれない。

頭の片隅ではいつも最強の剣を思い描いていた。

心の奥底で、かつての夢を追い求め始めたのだ。

……認めよう、俺は嫉妬していた。

3年前、俺は鍛冶師としてヤツに負けた。それが尾を引いているんだ。

俺の剣ではヤツの鬨気剣を斬れなかった。だが、次は必ず斬ってみせる。

ダイの剣を作り終えたばかりだというのに、俺の心はまるで満たされていない。飲みかけの酒瓶を投げ出し、俺は再び小屋へと戻るのだった。

## 65 ダイの剣

さまよう鎧の軍勢を前に俺たちは思わずその足を止めた。

ポップが悔し気に歯噛みする。

こうして立ち止まっている間にも、敵は鬼岩城の内部から次々と雪崩出てくるのだ。

「我が魔影軍団は不死の軍団。暗黒闘気のある限り何度でも蘇る」

悪魔のような声。魔影軍団、軍団長ミストバーンが心までも挫こうとするかのような冷たく告げた。

「じゃあ奴らの軍勢は……無限、なのか……」

「く、くそ……。いくらやつつけても減らねえなんて」

迫り来る軍勢に怯むポップとチウにバダック。

共に戦うマアムやクロコダインも僅かに顔色が悪い。

しかし俺は皆と違い余裕である。

それは何故か。

「みんな、諦めちやダメだつ。あの鬼岩城とミストバーンさえ倒してしまえば、俺たちの勝ちなんだから！」

“ダイの剣”を背負い、みんなを励ます我らが勇者ダイがここにいるからだ。やっぱり勇者は頼りになるわあ。

メルルが敵の危険を察知。作戦会議のために小屋に入ると、剣はほとんど形になつていた。

本来ならば“覇者の冠”を取りに行き、その後ロモス王の許可をとる。その行程を飛ばしたから“ダイの剣”完成までの時間が短縮されたのだ。

そのお陰で鬼岩城がパプニカへ上陸する前に駆けつけることが出来た。

“ダイの剣”さえあれば、巨大ロボットもかくやと言わんばかりの鬼岩城も容易く撃退してくれることだろう。

なんて考えていると、いつの間にか合流を果たしたヒュンケルがいつになく真剣な表情をしていることに気がついた。

「どうしたんだ、難しい顔して。何か気になることでもあるの？」

「・・・ミストバーンは俺が倒す、一人だな」

「お、おい。何バカなこと言ってるんだよっ」

会話を聞いていたポップが声を荒らげてヒュンケルに抗議する。

同じく聞いていた皆も不安気な様子だ。

「すまんがこればかりは譲るつもりはない。お前たちは鬼岩城を頼む」

「な、なんだとつ。こら、ヒュンケルつ！　こんなときに勝手言つてんじゃねえぞ」  
尚も続けるポップだが、ヒュンケル無言のまま答えない。

頑として譲る気配のないヒュンケルに、クロコダインを除く皆は困った様子だ。

「ど、どうするよお」

助けを求めポップは俺とクロコダインに視線を送った。

これでも年長者ですからね。ここは見事に仕切らせていたただこうか。

「ミストバーンと鬼岩城の両方を相手にするのは骨が折れる。ミストバーン組と鬼岩城組の二手に分かれて戦おう」

「なら俺は鬼岩城の方へ行くよ、レオナも心配だし。みんなはどうする？」

ダイがそう言うのと、各々どちらに行くか悩みだす。しかし俺はそんなみんなの思考を断ち切るように口を開いた。

「二手に分かれるからといって必ず人数を半分にする必要はない。鬼岩城はダイ一人で十分だろう。残りはミストバーンだ」

「え、ダイを一人で行かせるつもり？」

心配そうにするマアムに、ダイは自信満々に笑って返す。

「へへ、大丈夫だよ。この剣さえあれば負ける気がしないんだ」

「よし、決まりだな。まずはミストバーンと鬼岩城を引き離すぞ。ー安心しろ、お前がやられない限り手は出さないって」

不満そうなヒュンケルに言い訳をするようにして肩を叩くと、有無を言わず先を急ぐ。

そう、ミストバーンを刺激してはいけない。

鬼岩城を倒すことだけを考えればそれでいいんだ。俺たちはあくまで時間稼ぎだ。

ダイがいる安心感と裏腹に、一抹の不安が過ぎる。

しかしこれ以上悩んでいる時間はない。それらの不安を頭の片隅に追いやり、鬼岩城へ向けてひた走った。

．．．．．

崩れ去った鬼岩城の残骸の山。そこに腰を下ろして水平線を眺める。

ミストバーンとキルバーンを追ってポップが行ってしまったのだ。

あの二人を相手にポップ一人で追跡するなど無謀もいいところ。すぐにダイはポップを連れ戻すためにトベルーラで後を追っていった。

空を飛ぶことができない俺たちは無事戻ることを祈るばかりだ。

それはそれとして、俺は今後のことを考えていた。

先ほどまでの俺の不安は杞憂だったらしく、鬼岩城は原作と同じで簡単に撃退することが出来た。

ミストバーンもヒュンケルが光の闘気で押し返しつつ何とかなった。これでほとんど原作通り。

えーつと、次は超魔生物と化したハドラーと戦って：：オリハルコン軍団と戦って：：その後はー。

うーん、こうして考えてみるとまだまだ危険がいっぱいだな。

でも、いい調子だな。まさに理想と言ってもいい。

俺の存在のせいで原作とは微妙な変化はあるけど、それもたいした影響を与えているわけじゃない。

今回だって“ダイの剣”完成は早まったけど、ストーリーの根幹をなす部分には何も影響がなかった。

パプニカの街も思ったより被害が少ない。これなら復旧にそれほど時間はかからないだろう。

ストーリーには変化を与えず、被害は抑える。それが俺の考えられるベストなのだ。ついさつきダイにも飛び立つ前に回復薬を飲ませた。これならハドラーに殺される



危険も軽減されたはずだし、氷海に投げ出されても原作よりはマシンはずだ。

あとはクロコダインがポップを迎えに行行って返ってくるから、その後と一緒に敵地に取り残されるダイを助けに行こう。

今後の予定が纏まり、イメーヅトレーニングをしていると遠慮がちにマアムが俺の元へやってきた。

「ねえ、トーヤ。あなたの力で何とかならないの？」

「ん？」

「あなた、不思議なアイテムをいくつも持ってたわよね。それでダイ達を助けに行けないのかなって」

ムリ。そう即答しなかった。しかしその言葉を口にした途端、脳裏に電流が走った。

やっべー、ダイに“同行”のこと話したばかりじゃん。

まだマアムや他の連中には話してないけど、この後ダイが戻ってきてから話す可能性は極めて高い。っていうか絶対話すだろう。

「同行（アカンパニー）」

・カード名を読み上げ、起動（オン）と唱える。その後、場所か人の名称を宣言する

と発動する。

・呪文の使用者を行ったことのある場所か会ったことのある人の元へ飛ばす。

“同行”の能力は嘘偽りなくダイに伝えてしまった。つまり俺はダイかポップ、それどころかミストバーンかキルバーンの元にさえ飛ぶことが出来てしまうのだ。

ならば今ここで助けに行かないと、ダイからカードの秘密を聞いた皆は俺を不審に思ってしまうだろう。

それはマズイ。俺は瞬時に言い訳を考えると、マアムに向かって笑顔で答えた。

「安心しろ。これを使ってすぐ連れ戻してくる」

仕方なく皆にカードの効果の説明し、渋々迎えに行くと言えさる。

「こんな便利なものがあるなら、どうしてすぐに迎えに行かなかったのよっ」

説明を聞き終えたマアムは珍しく俺に対してむっとした様子である。・・・エイミもいつもこんな感じで怒ってたな。

「まあ落ち着け。カードでポップやダイの元へとんでも、そこが空なら落ちるだけだ。連れ戻すにしてもタイムリングを図らないと」

「あつ。そ、そうよね・・・ごめんなさい、私ったら。何も考えずに・・・」  
とつさに考えたにしては良い言い訳だった。

そして連れ戻すだけだから一人で行くと伝えて静かに待つ。  
それからしばらく経った頃、俺はカードを手に立ち上がった。

「じゃあ、行ってくる。アカン。パニー、オン。ダイ」

カードの光と浮遊感が身を包む。

視界が開けると、目の前にはダイ。そして炎の闘気を纏ったハドラーがすぐそこまで迫っていた。

どうやら戦っているちようど真ん中に割って入ってしまったようだ。  
あ、これアカンやつや。

## 6 6 孤立

ヤバイと思った時には体が勝手に動いていた。

あと数歩のところまで肉薄するハドラーへ反射的にメラを放ち後ろへ飛び退る。

視界を覆うように炎が広がるが、しかしこれだけではハドラーにとっては目眩ましにもなりはしない。

木刀をなんとか逆手で抜き盾代わりにする。

大怪我を覚悟し衝撃に備えるーが、その直前にハドラーと俺の間で予想外の呪文の爆発が起こった。

「ぐあ、つつ!？」

突然の爆発に、跳んでいた俺の体は踏ん張りもきかずに飛ばされる。

背後にいたダイが俺の体を受け止めようとするが、それは敵わず二人揃って地面を転がった。

「イテテ．．．だ、大丈夫？」

痛みに耐え、上体を起こしながらダイは尋ねる。

どうやら先程の爆発はダイがイオラを放ったようだ。お陰でハドラーの攻撃を受け

ずに済んだ。

「かなり乱暴だが助かったぜ、ダイ」

痛みを我慢し軽口を叩きながら身体をチエックする。大丈夫、痛みこそあるが怪我自体は大したことなさそうだ。

「お、おいつ大丈夫か?! ダイ、トーヤつ。ーあんたも助けに来てくれたんだな：俺のせいで・・すまねえ」

自分の軽率な行動を反省しているのだろう。ポップは駆け寄り、俺の姿を見るやバツが悪そうに謝罪を述べた。

「気にすんな。ーそれより、こいつら倒して皆で帰るぞっ！」

尚も暗い表情のポップに言いたいことは色々あるが、それは後だ。

今は戦闘中。いつ攻撃されてもおかしくない。俺はハドラー達を視界に収めたまま、ポップを背後にして守る形で木刀を構える。

視線の先には超魔生物と化したハドラーにミストバーンとキルバーン。

どいつもこいつもバケモノばかり。3対3と言えば聞こえはいいが、そんな生易しい相手ではない。

「ポップ、呪文はあとのくらい使える?」

「中級の呪文なら3、4発つてところか・・とてもあいつらとは戦えねえ、ちくしょう

め

「いや、それだけ使えれば十分だ。だけど念の為にこれ飲んどけ」

魔法力を回復させる。メンタルウォーター。を手早くポップに手渡す。

「トーヤ、あいつら半端じゃない。特に今のハドラーは剣があつても一筋縄じゃいかないよ」

オーラを高める俺を見て戦うつもりだと思つたのだろう、ダイが俺の隣に並んで忠告する。

だけど心配は無用だ。こいつらバケモノ三人と戦うつもりなどさらさらない。さつきは敢えてあいつらに聞こえるように大声で啖呵切つただけだ。

「逃げるぞ。幸いみんな脱出手段を持っているーお前もルーラくらいならまだ唱えられるだろう?」

今度は二人にだけ聞こえるように小声で話す。

「うん、わかつた」

「でも普通にルーラ唱えても捕まっちゃまうぜ……相手は三人だ、隙を作るにしても分が悪いぜ」

頷くダイに対してポップが疑問を口にする。ポップの言う通り、ルーラを使ったからといってそう簡単に逃げられる訳じゃない。

ルーラは瞬間移動といってもワープではない。魔法力をつかって高速移動をしているだけに過ぎないのだ。

そのため、相手にその速度に対応できるだけの力があれば通用しない。でなければここに誘い出されたと気がついたときにポップがとづくにやっっているだろう。

だからある程度隙を作る必要がある。

しかし、ダイはまだ余力がありそうだが満身創痍だ。ポップも魔法力を回復させたいえ、ハドラー達を相手に戦うのは厳しいだろう。

つまり今あいつらとまともに戦えるのは俺一人ということだ。

本当は原作通りにダイだけ残して行きたいところなんだけど……この状況で残したらマジで死んでしまいそうだ。

そしたら元も子もない。原作とは変わってしまうが、ここは逃げの一手だ。

「フフフ、作戦は決まったのかな？」

「ん？」

浮いていたはずのキルバーンとミストバーンは、ゆつくりとハドラーの横に降り立った。

「わざわざ死にに来るなんて、人間って本当に変わってるよねえ。でも、ハドラー君とダイ君の対決を邪魔するなんてイケナイなあ」

「卑怯ものゝ、1対1の対決なんだぞっ！」

キルバーンの肩にのつた小さな子供が割って入った俺になにやら叫んでいる。

「今来たばかりなのに知るわけねえだろ、バカ」

「おやおや、口が悪いねえ。彼はハドラー君の邪魔だから殺しちやおうか。ねえ、ピロ  
口」

大鎌を両手で持ち攻撃の体勢をとるキルバーン。沸点低いなこいつ、本物は子供だからか？

しかしキルバーンだけでなくミストバーンも爪を構えてこちらを向いている。どうやら互いに総力戦になるみたいだ。

俺は一步前へでて再び小声で二人に話しかける。

「いいか、作戦はこうだ。俺が正面から突っ込むから、ダイは全体を見渡して牽制してくれ」

「わかった」

「ポップは呪文をひたすら打ってくれ、とにかくハデにだ。気を逸らせればそれでいい」

「よ、よしっ」

「あとはそれぞれ逃げられると思ったたらルーラで逃げる、わかったな」



「おう」

一際大きな声で気合を入れ、俺たちはハドラーたちへと向かっていった。

・  
・  
・  
・  
・

俺は一人でミストバーンとハドラーの二人を相手にしていた。

作戦通り見事隙をついて飛んでいったダイとポップだったが、俺は上手く脱出できずにいた。

キルバーンがいないのがせめてもの救いだ。キルバーンはダイとポップのルーラの光を追って飛んでいったのだ。

ヤツは最初からポップに狙いを定めていたからな。しかし、それでもあの調子ならきっとダイたちは逃げ切れることだろう。

問題は俺だ。二人のバケモノの猛攻に片膝をつきながら、必死に思考を巡らせる。

「意外だな、あんたはダイを追わなくていいのか？」

しかし何も思いつかない。仕方なく隙を突くため会話を試みる。

「ふん、邪魔をしておいて何を言うかと思えば・・・ダイはオレが必ず倒す。しかし、そのときにまた邪魔をされては敵わんからな。ここで先に邪魔者を始末することにし

たまでのこと」

ハドラーの言葉の最中、ミストバーンの高速の爪が飛来する。それを木刀で弾くも、ハドラーが追撃を仕掛けてきた。

“ 覇者の剣 ” の一閃を木刀で防ぐ。しかし勢いはまるで殺せずに岸壁へと押しやられた。

その威力に両手はしびれ、肩が悲鳴をあげている。

「ーっ痛、バカ力だしやがって」

しびれる両手に舌打ちしながら、それでも俺はここにチャンスを見出した。

ミストバーンの爪は伸びきったまま。ハドラーも一撃を放った直後で死に体となっている。そしてその一撃のお陰で距離も開いた。

今しかない！

俺は急いでしびれる手で懐から “ 同行 ” を取り出し使用した。しかしー

「な、なんだと!？」

“ 同行 ” はその効果を発動することなく、ミストバーンのもう片方の爪に貫かれた。

## 67 死闘

あまりの出来事に一瞬思考が停止する。

唯一の脱出手段といえる“同行”がオシャカになったのだ。絶望と言わざるを得ない。

「どうした？ 顔色が悪いぞ」

破れて半分になったカードを手放し、ハドラーとミストバーンを視界に収める。

「察するにキメラの翼のような効果を持ったアイテムだろう。もしも攻撃アイテムならば、ダイやポップと共に挑んできただろうからな」

「お見通しか。そこまで分かかってあいづらに逃げられるなんて、本当は見逃したんじゃないか？」

「オレはバーン様に忠誠を誓う身。であればバーン様に仇なす者は誰であろうと殺すのみよ。私情は挟まん」

「それにしては嬉しそうに見えるけどな」

「ふふふ、ダイと戦うためにこの身を魔獣へと変えたのだ。あっさりと決着がついてしまっただけその甲斐があるまい」

チツ。悠長に構えやがって、ムカつくぜ。

しかし好都合だ。今のうちにこの場を切り抜ける手段を考えないと。

そうだ、確かポーチの中には“フェニクス薬剤”がまだ数本入っていたはずだ。

これを使って持久戦に持ち込めばあるいは・・・ダメだ、ハドラーはともかくミストバーンは絶対にムリだ。

ミストバーンがいる限り持久戦も正攻法も得策じゃない。他の手を考えるんだ。

俺の考えを余所に、ハドラーが何かを思いついたように口を開く。

「どうだ、オレとー対一の勝負をせんか？」

「ーなんだと？」

疑問を持ったのは俺だけではない。ミストバーンもハドラーに視線を向けて、その真意を探ろうとしている。

「なに、簡単な話よ。ダイとは万全な状態で戦いたいからな、少しでも多く戦って慣らしておきたいのだ。それにお前もそれなりに腕が立つのだろう。このままオレたちに殺されたのでは死んでも死にきれまい」

ミストバーンは沈黙したまま動く気配がない。今一度超魔生物となったハドラーの戦いを観察するつもりなのだろうか。

ミストバーンから視線を外しチラリと海に目をやる。しかし目聡くそれを見ていた

ハドラーが嘲笑う。

「ふふふ、泳いで逃げるつもりか？ やめておけ、素直に戦ったほうがまだマシというもの。覚悟を決めたらどうだ」

「・・・なるほど、いいこと言うぜ。さすがは魔軍司令殿、できる男は違うな」

俺の雰囲気が変わったことに気がついたのが、ハドラーとミストバーンは僅かに身動ぐ。

「ハドラー、お前の言う通りだ。いい加減覚悟決めて全力でやってやるよ。だが、せつかく本気でやるのに手を抜かれちゃ困るぜ」

「無論だ、手加減などするつもりはない」

「はあ、分かってねえなあ」

俺はわざとらしく大きなため息をつき、木刀を地面に突き立てる。

「二人まとめてかかってこい」

息を呑むハドラーとミストバーン。一瞬の空白の後、凄まじいまでの殺気が俺を襲う。

「・・・いい度胸だ」

「身の程をわきまえろ虫ケラが」

二人の殺意を一身に受け、俺は左手の小指と右手の人差し指にはめてある指輪を外し

た。

\* \* \*

死の大地の一角。そこで今まさに悪夢の様な死闘が繰り広げられている。

衝突する殺意と殺気。それは熱気と衝撃波に変わり大気を炸裂させる。

その暴風の中を疾風となり駆け抜ける3つの影。

余人の介入を許さぬほどに激しい戦い。その激しさは時を追うごとに増すばかり、まだまだ決着はつきそうにない。

ハドラーとミストバーン。この世界でトップクラスのバケモノ二人を相手に、トーヤは互角の戦いを繰り広げていた。

二人の殺意にさらされる緊張感とプレッシャーは、未だかつてないほどに集中力を引き出させることとなった。

気配もなくトーヤの背後に回り込むミストバーンはトーヤに向けて暗黒闘気の気弾を放つ。

加減などない。我ら二人をまとめて相手をするなどという傲慢は万死に値する。

雨のごとく降り注ぐ無数の闘気弾。しかし一発たりとて命中しない。

ハドラーとの絶妙な間合いを維持しながら、トーヤは鬨気弾の雨を危なげなく躲していた。

「ぬううあぁッ！」

鬨気弾が巻き上げた煙を突き破るようにハドラーが肉薄する。

削岩機のように地面を抉りながら突進してくるハドラーの一撃を、僅かに下がり木刀で受け止め軸をずらす。

直後、ハドラーは空いた左手の“ヘルズクロウ”を伸ばし振るうがー

「ーおっと。当たらないな」

その一撃は何もない空間を削るのみ。

この戦いが始まってから何度あったことだろう。ハドラーやミストバーンが攻撃を仕掛けた瞬間、絶妙なタイミングでトーヤはその場から離脱する。

トーヤを中心に薄く張られたオーラは20メートルに及んだ。その内部で起こるすべての動作を感知できるトーヤに死角は存在しない。

「こつちからも行くぜッ！」

「こつクッ!？」

体勢を崩した状態で木刀を受けたハドラーは大きくよろめいた。

畳み掛けるように振るわれる木刀の予想外の威力にハドラーは防戦を強いられる。

トーヤは“隠”によりオーラの半分以上を隠している。“凝”を使うことができないハドラーにとつては厄介な戦闘スタイルであった。

また、指輪を外したトーヤのオーラ量は膨大だ。それこそ今のハドラーを僅かに上回るほどに。

そんな相手が搦め手を使つてきては苦戦を強いられるのは当然のことだった。

しかし、いくらトーヤが二人に匹敵するほどの実力を持つていたとしても所詮は一人。

一人では二人に敵わない。単純な足し算だ。

では何故トーヤはまだ生きているのか。その答えは二人の連携にあつた。

片方が攻撃する時、もう片方は沈黙する。これでは複数の利などありはしない。むしろ現状では互いに攻撃のペースを乱され実力を発揮できずにいる。

これこそがトーヤの狙いであり、彼の考え得る唯一の活路だった。しかし――  
「だいぶ息が上がってきたようだな」

まるで希望などないと言わんばかりに、ミストバーンはトーヤへ告げた。

トーヤは尋常でないほどの汗を滴らせてミストバーンを睨みつける。

そう、いくら実力を出せずとも相手は二人。体力が持つはずがない。

トーヤはポーチから“フェニクス薬剤”をとりだすと一気に飲み干し、木刀を強く握



り直した。

．．．．．  
．．．．．

「はあ、はあ、はあ．．．ちよつとは手加減とか．．．はっあ、はあ．．．ねえのかよ．．．」  
息を荒げ片膝をつき、トーヤは苦しげに口を開いた。

1時間にも及び繰り広げられた死闘は終焉を迎えようとしていた。

「オレたち二人を相手によくぞここまで戦った。敵ながら見事だ。トドメは苦しまな  
いようオレの最高の技で刺してやろう」

魔炎気を身にまとい、ハドラーは超魔爆炎覇の構えをとった。

ハドラーが攻勢に移る前に、トーヤは素早くポーチからアイテムを取り出すと口へ含  
む。

「っ!？」

突如、トーヤの身体の自由が奪われた。ミストバーンの闘魔傀儡掌だ。

ハドラーの横に降り立ったミストバーンはその掌をこちらへ向けたまま静かに告げ  
る。

「トドメを．．．ハドラー」

「うむ。ーートーヤと言ったか、何か言い残すことがあれば聞いてやろう」

「なら一つだけ・・・勝負つてのは、最後の最後まで分らないものなんだぜ」

「くつ、あつはつはは。その闘志、やはり見事。しかしこれで終いだッ」

剣を構え更に闘気を高めるハドラー。しかしトーヤは慄きもせず、僅かに口の端をつりあげる。

「甘いんだよ」

小さくつぶやき人差し指を向ける。

二人の足元へと向けて放たれた霊丸は着弾と同時に爆発し辺り一帯をさながら隕石衝突ように吹き飛ばす。

「オオオオオオオオオツ!!」

絶叫をあげ岩盤へと叩きつけられるハドラーと、反対に声もあげずに空気の奔流に飲み込まれるミストバーン。

粉塵が舞い、岩の破片が空から降り注ぐ。低く地鳴りとともに、この戦いは幕を下ろした。

「大丈夫かい、ミスト」

静寂の戻った大地を上空から眺めていると、いつの間にかあらわれたミストバーンは親しげに口を開いた。

「キルか。いつからいた？」

「結構前からかなあ、キミとハドラー君があつた男と戦つてゐるのを10分くらい見ていたよ」

「・・・ヤツはどうなつた？」

「自分の放つた技の爆発に巻き込まれて海に飛ばされていったよ。しばらく浮かんでこないから、死んだんじゃないかなあ」

軽い口調で話すキルバーンへミストバーンを無言で見つめる。

「心配しなくても大丈夫だよ。人間は水中じゃそんなに長く息をとめられないんだ。知らなかつたのかい？」

冗談めかして笑うキルバーンには取り合わず、ミストバーンは海をみた。

「あの男についてはボクに任せておいてよ。この辺り一帯をみておけば必ず水面に顔をだす。しばらく見張つておくよ。ダイくんと魔法使い君を逃しちやつたから頑張らないとねえ」

飛び去るキルバーンを見送ると、ミストバーンは倒れるハドラーの元へと降り立つた。

## 68 遭難

ちくしょう、しつこい野郎だ。

俺は海底の岩場に身を隠し、心の中で悪態をついた。

おっと、そろそろ新しいのなめないと。

ポーチからアイテムを取り出し、口の中へと入れる。

「エアドロップ」

・なめると中から空気が沸き出てくるアメ。なめている間は水の中でも呼吸ができる。

残り少なくなった“エアドロップ”に若干の不安を覚えながら、打開策を考える。

先の戦いでなんとかハドラーとミストバーンから逃げ延びた俺だったが、未だ窮地に立たされていた。

今は海底で“隠”を使っているからまだ良いが、ヤツは鼻が利く。いつまで隠れていられるか分からない。

それに“エアドロップ”も残り4つ。1つでいたい30分だから、俺が海底に潜っていられるのは残り2時間程度。

その間にできるだけ遠くへ逃げないといけないし、そもそも逃げ延びたとしてどうやって広大な大海原からパプニカへ帰ればいいのかなど、悩みはつきない。

しかし今は目の前のことを何とかしないとけない。

岩場から少しだけ顔をのぞかせ、追手の姿を確認しようとする――するのだが……何も見えねえ。

水中じゃ視界なんてぼやけて遠くなんて見えないし、何よりここは海底だからかなり暗い。

まだ浅い方だからなんとか光が届いているけど、ここから先はもつと深くなるはずだ。このまま海底を移動するのは不可能だろう。

“円”を広げると、すぐ近くにヤツの気配。

“隠”を使っていれば滅多なことでは見つからないが、ここまで迫っているのは時間の問題だろう。

……仕方ない。ここは多少ムチャでも一気に抜けるしかない。

俺は意を決して岩場から飛び出した。

“念”で強化した腕力と脚力に任せて水中をがむしやらに突き進む。

“円”の感覚をたどると、未だヤツは岩場の近くにとどまっている。

よし、そのまま動かすなよッ。

ヤツの動きに注意を払いながら、全力で水をかき分ける。——そのときだった。ヤツの動きが変わった。

ヤツは岩場から離れると信じられない速度で向かってきた。

速いッ、とても逃げきれない。

逃げ切るのとは不可能だと咄嗟に判断した俺は、身体を反転させると迫り来る巨大な顎を両手で抑えた。

水中では踏ん張りなどきかず、巨軀に押しやられて水圧が身体の自由を奪う。

なんとかその巨体から逃れるも、再び距離をとったヤツは何度も何度も体当たりのように俺を攻撃してくる。

いい加減にしろよッ、このクソ鮫があああ!!

心の中で罵声を浴びせ、本日2度目となる霊丸を放った。

・  
・  
・  
・  
・

大自然と野生の脅威にさらされること数時間。

俺はついに陸地へと辿り着いた。まあ、辿り着いたっていうか海流に飲まれて漂着しただけなんだけど……。

あんなバケモノとの戦いを生き抜いてもこんな風に死にかけるんだから世の中つてわからないよね。

とはいえ未だ状況はかなり絶望的だ。まず現在位置がわからない。ここはどこやねん。

ちなみに日に4発しか使えない霊丸もすでに使いきっている。

ハドラー達に1発、巨大なサメに1発、超巨大な海流に飲み込まれた時に1発、難破船の残骸を避けるために1発だ。

ハドラー達は別にしても酷い目に合いすぎだと思う。それとも海ではこれが普通なのだろうか？ だとしたら二度と海には潜りたくない。

などと色々と思うところは多々あるが、生きていたんだからよしとしよう。気持ち切り替え周辺探索へ意識を集中させる。

海岸へ流れ着いた俺は、岸から続く森へと入り高い場所を目指していた。

高い場所から周囲を見渡せば村や町が見つかるかもしれない。

道中で木の実を食べ、湧き水で喉を潤しながら先を急ぐのだった。

「何もねえな、くそ」

思わず声に出た。自分以外に誰もいないのは分かっていたが、声に出さずに入られなかった。

だが文句のひとつも言いたくなる。見渡す限り木と山と海、人里なんぞありはしない。

“同行”はないし、ここがどこかも分からない。どうしたもんかな……。  
「ん？」

途方に暮れていると、遠くに微かにだが煙が見えた。

かなり遠いな、目算だけど15キロくらい先だ。

煙はひとつ、集落ではない。考えられる可能性としては山火事か温泉とかの湯けむりか、あるいは旅人が野営をしているかだな。

正直ヒトがいる可能性は低い。集落がないのならこんな場所を旅する奇特な人間などいないだろうからな。

……うーん、でも一応行ってみるか。どうせ他にできることもないしな。

結論から言うと、来て正解だった。

人間考えるよりも行動した方が良いね、危うくスルーするところだったよ。



焚き火を5人で囲みながらお茶をぐちそうになる。いやあ、ほっとするなあ。

「こんな美味しいお茶を飲んだのは生まれて初めてですよ」

俺にお茶を手渡してくれた男へ礼の言葉を述べる。

「あつはは、そいつは良かったな。遭難してたんだろう？　今まで大変だったろ」

そう言つて笑顔で俺の肩を叩く男の名はでろりん。原作の最初でゴメちゃんを拐つたニセ勇者だ。

彼らは魔王軍の脅威から逃れるためにこの地へやつてきたそうだ。

一度滅ぼされた国、オーザムなら再び襲われることはないだろうと考えているらしい。

彼らのお陰で俺は現在地を知ることが出来た。ここはオーザムがあるマルノーラ大陸の最南端にある海岸だそうだ。

「ワシ等も助かったぞい、あんたのお陰でこうして食料にもありつけたからのう」

まぞつは、へろへろ、ずるぼんの三人は嬉しそうに焼き魚に齧りついている。

お茶こそぐちそうになっているが、今彼らが食べている食料はすべて俺が用意したものだ。

彼らを発見した時、彼らはニセクロハツという椎茸そつくりの毒きのことクサフグという毒魚を食べる寸前だった。

キアリーやどくけしそうがあるこの世界ではもしかしたら大丈夫だったかもしれないが、俺がここに来ていなければ間違いなく毒にあてられていただろう。

この世界で学んだサバイバル術がこんなところで役に立つなんて嬉しい限りだ。

とはいえ助かったのは俺も同じ。場所を把握することができたのもそうだが、なによりもー

「本当にありがとうございます。キメラのつばさ」まで頂いてしまつて」

この状況を打破できる最強のアイテムを譲ってもらえたのだ。感謝してもしきれない。

「良いつてことよ。これからも大変だと思ふけど、お互い頑張ろうぜ」

およそ一週間分の食料の袋を抱えて、でろりんはとてもいい笑顔をしていた。

せめてこつちを見てくれ。

こうして俺は「キメラのつばさ」を使って、無事にパプニカへ帰ることができたのだつた。

## 69 決戦に向けて

廊下から足音、そしてドアを開ける音が響く。

「……そんな……ヒュンケル……どこへ？」

空のベットを見てエイミは抱えていた花束を下ろし、残念そうに呟いた。

「みんな出て行つてしまったよ。5日後、ダイ君たちははじめとする強者たちが集まり死の大地へ乗り込むことが決まったんだ」

「それを伝えたらみんな修行をしたいつて飛び出して行つてしまったわ。すごい敵が現れたつて言つてたから、その対策でしようね」

ベッドの横にあるイスに座ったまま、アポロとマリンはエイミが出かけていた間の一連の流れを説明した。

「……そう、なのね」

「うふふ、お目当て人には逃げられちゃったわね」

マリンがからかうように言うエイミは顔を赤らめた。そしてすぐに暗い表情になると悲しそうに口を開く。

「……どうしてそこまでして戦おうとするのかしら、あの人は。まだ傷も完治してい

「ないのに・・・まるで戦いに呪われているみたい」

部屋の中を重い空気が流れる。なので――

「それはここで寝ている俺に対する当てつけだよ。お前も早く修行しに行けつてこ  
と？」

ここまで黙っていた俺であつたが、空気に耐えられずに思わず茶化すように言葉を発してしまった。

「べ、別にそういうわけじゃないわよ。私はただ、ヒュンケルがムチャばかりするから――はいこれっ、殺風景だから買ってきたわよ」

てつきり元気になったのなら出て行けと思うのかと思つたら、意外にもエイミは優しい。いや、怪我人への対応としては普通か。

エイミは花束を花瓶にさし、ベッドで寝ている俺の枕元へ飾る。

「あなたもまた死にかけてんだからもっと休んでいた方がいいわよ」

マリンは果物を剥きながら優しい口調で言う。つていうか「また」って・・・。

「そうも言つてられないよ。午後には俺も5日後に向けて準備しないと」

“同行”も新しく作り直す必要があるしな。

「でも――」

マリリンが何か言いかけたところで部屋の入口の方からノックの音が聞こえた。

みんなの視線が集中する。

「お取り込み中に悪いが、少しいいか？」

「ロ、ロン・ベルクさんっ!?!」

意外な人物の登場に驚いて声を荒らげてしまう。

どうしてここに？ 今はダイたちの武器の修理ーは必要なのか。原作と違いハ

ドラーとの戦いで「ダイの剣」は傷ついてないからな。

「トーヤ。あんたに折り入って頼みがあつてきた」

「な、なんです？」

頼みがあると言いつつも顔が怖い。マジで嫌われてるな俺。

「オリハルコン……いや、ハルモニウムと言ったか、あれを譲って欲しい」

ああ、そういうことね。確かに鍛冶師ならオリハルコンは喉から手が出る程欲しいだ

ろうな。それにこの人は確か自分の技に耐えられる剣を作るのが目的だったはず。

本当なら二つ返事で渡したいのだが……。

「すみません、ハルモニウムはあの時渡したので全部なんです」

「なにいつ?!? ーお前さんは錬金術士なんだろう。なくなってもまた作れるんじゃないのか」

「なにいつ?!?」

半信半疑といった様子でロン・ベルクは怖い顔で詰め寄ってくる。

「そ、素材があれば作れますが……」 竜のつの「はこの間渡したハルモニウムを作る時に使い切つてしまいましたし」

「……ドラゴン1頭から採れるツノはそんなに少ないのか？」

「いえ、それなりの量はありますけど……あのハルモニウムは通常のハルモニウムよりも品質を高めるために精錬してあつたんですよ」

ハルモニウムを作る材料は「竜のつの」と「油」と「金属」の3つ。俺はハルモニウムを作るのにハルモニウムを素材とすることでその品質を向上させていたのだ。それを数回繰り返し返したため「竜のつの」は使いきつてしまった。

そのことを説明するとロン・ベルクはすごく残念そうな表情をした。何故か悪くないのに罪悪感が半端ない。

「そ、そうだつ！」 プラティーン「なんてどうです？ ハルモニウムよりはかなり劣りますが、それでもかなりの強度がありますよ」

「プラティーン」

・高純度の白金の延べ棒。白金は高い硬度に加え、銀以上の退魔の力を備えている。

「プラティーン？ 白金のことか……確かにそれなら鎧の魔剣や魔槍を作った金属と

遜色ないが……」

「迷ってるなら一応持つてきましようか？ 今日一度家に帰るつもりなのでついでに持つてきますけど」

「そうだな、では頼もうか。……ところでお前さんの木刀を少し見せてくれないか？」

「え？ え、ええ。良いですけど」

困惑しながらもベッドの横に立て掛けてある木刀をロン・ベルクへ手渡す。

「この模様はなんだ？」

まじまじと木刀を眺め、片手で素振りなどをしたかと思うとロン・ベルクはそんなことを聞いてきた。

「それはオーラを流しやすくする細工みたいなものです。それのお陰で通常よりも強いオーラを纏わせる事ができるんですよ」

「やってみせてくれ」

言われるがままに木刀にオーラを流す。すると“旧文字”は微かに輝き、木刀を強いオーラが包み込んだ。

この後、何度も木刀の材質やら模様の意味とか質問攻めに合い、ようやく開放されたと思っただけで昼過ぎになっていた。

全然休息にならなかった。

洞窟へ戻りプラティーンをロン・ベルクへ渡した後、俺は再び洞窟へ戻ってきていた。ダイとヒュンケルは二人で剣の修行。ポップはマトリフから呪文の伝授。クロコダインはチウと必殺技の特訓。マームは川辺で体を鍛えていた。

みんなの様子を見てきたが原作との違いはほぼない。

原作と違い俺がハドラーたちと戦ったために不安があつたが、遭難した俺を捜索中にハドラー親衛騎団のヒムと出会つたと聞いて一安心だ。

キメラのつばさを錬金釜へ放り込み、鼻歌まじりにかき混ぜる。

「へえ、そうやってアイテムを作っていたのね」

マリンが横で釜を覗きこんで興味深そうに言う。

パプニカから帰る際、怪我人なんだからと喋ってついてきたのだ。怪我自体は回復呪文で治っているので何も問題がないのだけど……。

しかし能力やアイテムのことを話してしまっている今となってはついてこられても困ることはない。特に断る理由もなかったので一緒に洞窟へ戻ってきた次第である。

「ああ。簡単そうに見えるけど結構大変なんだよね」

「錬金術……だったかしら、いつの間になんか出来たようになっていたの？」



「物心ついた時からだよ、そういう家系なんだ。一応秘術だから詳しいことは話せないけど」

こう言っておけば大体なんとかなる。

案の定マリンはそれ以上鍊金術のことについては聞いてこなかった。

.....

どれくらい時間が経っただろう。外は見えないが恐らくもう深夜に近い時間だろう。その辺にあるもので適当に夕飯を済ませ調査を続ける。

調査しながら適当に世間話をできるのでいつもより退屈せずに作業ができた。しかし、マリンは帰らなくていいのだろうか。

恐らく外は真っ暗だ。もしかして泊まっていくつもりなのか？ ベッドはひとつしかないんだが。

頭の片隅でそんなことを考えていると、お茶を飲んで座っているマリンが思い出したかのように言った。

「あなたって改めて考えると凄いわよね」

「んー、何が？」

「魔王軍が攻めてくる前から色々とパプニカで事件を解決してたじゃない。今だってダイ君たちと一緒に最前線で戦っているし」

「経歴だけならそうかもしれないね。でもマリンドって三賢者だなんて言われてるし、フレイザードの時だっていい線いってたらしいじゃん。十分すごいよ」

取り留めのない会話をしながら釜をかき混ぜる。

「ありがとう。私じゃもう今の敵に太刀打ち出来ないけど、後ろでみんなを支えるわ」  
「ああ、俺もダイ達をちゃんと支えてみせるよ」

そう答えるとマリンドはそのまま口を閉ざし、若干の間が生じた。

「・・・あなたはダイ君たちを守るために一緒に行動している」

「ん？ ああ、まあそうだけど」

「だから5日後に向けて必要な準備をしている」

「そうだよ」

「そしてダイ君たちをうまくサポートしたいと思っている」

「もちろんそう思ってるよ」

「でも魔王を倒せるとは思っていない」

「もちろんーえ？」

思いもよらないマリンドの言葉に、俺は釜をかき混ぜる手をとめて、ゆっくり後ろを振

り返った。

## 70 迷い

「はああああ、どうすればいいんだろう……。ねえ、アバンさん」  
机に俺は机につつぷし、深いため息をついて項垂れる。

「ええ、そうかもしれないですね」

だというのにアバンは気のない返事をするのみ。冷たくない？

ここは破邪の洞窟の下層である。“同行”を使ってやってきたのだ。

何かいいアドバイスをくれるだろうと思つてやってきたのに、アバンは背を向けたまま何やら作業をしている。

「ちゃんと聞いてますかあ？」

「もちろんちゃんと聞いていましたとも。彼女とケンカしたんですよね」

「ちやいます。彼女じゃないしケンカなんてしてません」

顔をあげて抗議すると、ようやくアバンは作業の手を止めてこちらへ向き直つた。

「あの、地上での動向を教えていただけるのは大変嬉しいんですが、できればマジメに教えていただけませんか」

「めっちゃマジメですって。ハドラーのこととか竜の騎士のこととか死の大地のこと

とか、色々詳しく話してるじゃないですか」

「いえ、ほとんどがマリリンさんでしたっけ？　話の合間にすぐその方の話に戻るじゃないですか」

「しようがないじゃないですか。マリリンに“あなたは大魔王を倒せると思っていないなんて言われたんですよ”

「ふうむ。それでトーヤくんはマリリンさんに何と答えたんですか？」

「いや、別に・・・ちゃんと倒すよって言いましたけど」

「それで彼女はなんと？」

「えっと、“あなたのことが分からない”とか“信じていた”とかそんな感じのこと言っていましたね」

「それを聞いてあなたはどう感じましたか？」

「んー、おそらくマリリンは俺のことを疑っているんでしょう。魔王軍と俺がつかつてるとか考えてる可能性が高いですね」

そう考えればマリリンの発言にも説明がつく。

マリリン視点で考えてみれば不審な行動をいくつもとっている気がしないでもない。

魔王軍がパプニカへ襲撃した当初俺は行方不明になっていた。

それに“同行”とかのスペルカードもみんな薄々気づいていたのに黙っていたとい

うし、錬金術士だなんてウソもむしろ怪しさに拍車をかけているのかもしれない。

そしてトドメがハドラー達との一戦だったのだろう。あんな連中を相手にして逃げ延びるなんて普通に考えればあり得ないしな。怪しさ大爆発だ。

だから俺は可能性のひとつとしてそれを口にしただけなのだが、何故かアバンは微妙な表情。

「そうきましたか。あなたは少しーいえ、かなりの鈍感さんですねえ。そもそも質問の意味を履き違えています」

「はあ？」

俺は自分でもマヌケだなと思うくらい気の抜けた声を出して聞き返す。

「ところでトーヤ君。神託のことなんですが、そろそろ詳しい内容を教えていただけないでしょうか」

「え、ええ・・・良いですけど」

突然話を変えられて驚きながらも頷いて返事をした。

確かにアバンには神託の内容はかなりボカして伝えている。

魔界から大魔王が現れ、魔王ハドラーを蘇らせる。それに立ち向かえるのはアバンの弟子だけだ。とかその程度でしか話していないから、気になるのもムリないだろう。

破邪の洞窟へ潜ってしまえば最終決戦までアバンはストーリーに絡むようなことは

ない。

事ここに至っている以上、アバンに詳細を話したところで問題はないだろう。むしろ話しておいた方が良い気さえする。

なので俺はアバンにこれから起こるであろう未来のことを話すことにした。

.....

アバンには転生チート以外のこの世界の未来の話をした。

ハドラーと黒のコア。キルバーンの正体と黒のコア。ミストバーンの秘密。大魔王バーンが地上を黒のコアで消し飛ばそうとしていること。

なんか黒のコア多いな。

とにかく今度こそ包み隠さず未来のことを話した。そのせいでアバンは何事かを真剣に考えている様子。

「ダイ君はキルバーンの人形ごと空に消えたと言っていました、その後はどうなりましたか？」

「それはわかりません。＂ダイの剣＂を打った鍛冶師のロン・ベルクさんは生きてるって言っていました。しかし地上に帰ってきたのかどうかは.....」

原作はそこで終了している。もしかしたら数日で帰ってくるかもしれないし、数十年経つても戻ってこない可能性だってある。

「ですが安心して下さい。ダイがいなくなったら寂しいですからね。そうならないようにちゃんと最後はキメてやりますよ」

「そうですか、ならばあなたに任せましょう。帰ったら同じことをマリンさんーいえ、ダイ君たちにも打ち明けてみてはどうですか？」

「はあ？ そんなの出来るわけないでしょう」

一笑に付そうとするも、アバンの表情は真剣そのものだった。

「私は本気でそう思っていますよ。あなたは少々神託に囚われ過ぎている気がしてなりません」

「囚われてる?」

「ええ、神託の内容を変えまいと色々と動いているのでしようがそれは間違いです。何故ならあなたが神託を受けた瞬間から未来は多少なりとも変化しているのですから」

「いや、何をいつてるんですか。してないですよ・・・自分で言うのもなんですが、俺程度がちよつと動いたからって世界にはたいした変化なんてありませんよ」

そう。あるわけがない。いくら“念”をもらったからって所詮は一人の力に過ぎない。それくらいで歴史が変わったりはしないのだ。



そんなに世界というやつは簡単じゃない。実際にところどころ相違があるとはいえ原作と変わりなんてほとんどない。

「もし、あなたがいなければパプニカで病気で亡くなっていた方はたくさんいたでしょうね。あれは神託通りですか」

「……いいえ、違います」

それは、あまり触れられたくない話だった。

数年前に起こったパプニカでの流行病。街で何百人もの人々が病気で倒れ死んでいった。

俺はそれを見過ごすことができずに手を貸してしまった。本当は死ぬべきはずの人たちを助けてしまったんだ。

これは原作を知っている俺だからこそ抱える葛藤であり、決して消えることのない悩みだった。

誰かが生きるということとは、それだけで事象を大きく変化させる。所詮一人の力なんてと言っておきながら、心の底では罪悪感がひしめき合っているジレンマ。

最初のうちは小さな変化かもしれない。それこそ食料が僅かに少なくなったり、店の商品がちょうど品切れになったり。

だけどその変化は時間が立つごとに大きな波紋として広がっていく。

その誰かがいたせいで職を失うものがあるかもしれない。結ばれるはずの恋人をとられるかもしれない。

そうしたらもう波紋は止まることはない。生きるはずの人は死ぬことだつてあるし、そもそも生まれてくるはずの人の存在自体が消えてしまうことだつてある。だけどー。

「だけど、どうしても見捨てられなかったんです。ー俺にはその力があつたから」「ええ、もし私があなたの立場だつたら同じことをします。だからそんなに思いつめないで下さい。ずっと一人で頑張つてきたんでしよう。もう十分です。これからは私も頼つて下さい。きつとマリリンさんも同じことを言いたかつたのでしよう」

俺はずつと誰にも頼ろうとしてこなかつた。余計なことをされたら困るから？

違う。本当は誰かに頼りたかつた。でも出来なかつた。怖かつたんだ。ずつと怖くて仕方なかつた。

未来が変わることが。

俺の手に負えない大きなことが起こりそうで怖かつた。俺の身勝手に世界を巻き込んでしまうのが怖かつたんだ。

だからずつと一人で戦う決心をしていた。

しかしそんな俺の意志はアバンの“頼って下さい”の一言では簡単に折れてしまった。

何故かテランでメルルに言われた言葉を思い出した。

“あなたは運命に縛られているように感じますが、それはきつとー”

あのとき会話はそこで途切れてしまったが、彼女の言いたかったことがわかった気がした。

頬を涙がながれていく。悲しくなんてないし、辛くなんてない。なのに涙はとまらない。

俺はアバンに背をむけると、拭うこともせずに涙を流し続けた。

ありもしないはずの運命。

他でもない自分自身が縛り付けていたその運命から、俺は今解放された。

## 7 1 出発

「じゃあ、行ってきます」

短く別れのあいさつをすませると、ダイは笑顔で気球に乗り込んだ。

遠足みたいだなと思いつつ軽く手を振って応えて、空高く飛んで行く気球を見送った。

この4日前、俺はアバンと一緒にバーンを倒すため話し合った。

見落としやうっかりは許されない。

これでもかって程慎重に何度も何度も作戦を見直した。

原作の内容だけでなく、これまでの戦いの中での相違点も事細かに検証した。

その結果、俺は次に死の大地へ攻めこむまでは静観することになり、アバンは洞窟に残ることになった。

この案を出したのは俺ではなくアバンだ。

理由は2つ。

1つ目は、まだバーンを倒すにはダイ達の力が不足しているということ。

これに関してアバンの意見はとてもシビアだった。てっきりアバンも含めて総力戦

で死の大地に乗り込むことになると思ってたので意外だった。

アバンが言うには双竜紋のダイと覚醒したポップ。最低でもこの二人は必要だと言  
う。

ハドラーかバランを味方にするとという案も出したんだけど、アバンはそれを受け入れ  
なかった。

どちらも信念をもった男たちだ。バランはともかく、ハドラーは寿命が残り少ないと  
わかるや戦闘になる可能性があるからだそうだ。

まあ、ハドラーが体内の黒のコアの存在を知った時点でバーンが誘爆させてきそうだ  
しな。

2つ目は、なんとこれまた意外なことに、俺のオーラが格段に強くなったのである。  
突然オーラの質が変わったので最初はひどく動揺したものだ。

だけどそれは良いコトばかりではない。いきなりこんなに強くなったのでは格上相  
手に満足に戦うことはできない、らしい。

ダイ達がバランを連れて死の大地に乗り込むのは明日だ。それまでの間に少しでも  
オーラの具合を身体を慣らさない。

以上の2つの理由から、俺とアバンは自らの力の練磨に時間を割くことにしたのであ  
る。

なぜ唐突に急激なパワーアップを果たしたのか。  
心当たりはある。

“念”は心の動きが大きく作用し力を加減する。今までの俺は歴史の改変を恐れて力をセーブしていた。

しかし4日前、俺はバーンを倒すーいや、この世界の運命を狂わせても構わないと腹をくくった。

迷いを払拭したことが俺の“念”を研ぎ澄ませる結果になったのだ。

正直それらの思いを全て拭えたのかと問われれば自信はない。

誰かに何か言われた程度で解決する悩みなんてたかがしれているし、その誰かの言葉が正しいなんて保証だってない。

しかしそれでもこうして実際に力が増している以上、俺の中である程度の決着がついたということなんだろう。

まあ、それは措きといいて。時間もないし俺は俺でやるべきことをしないと。  
スコップを地面に突き立て地面を掘り返す。

オーラの流されたスコップは地面をプリンのように簡単に掘り進めることが出来る。  
この感覚も懐かしいな。指輪に任せて基本の修行なんて久しくやっていないからな。



「グッドですねえ。私も手伝ってあげたかったのですが、迂闊に地上に出て敵に見つかってはいけませんからねえ」

「せめてもつと早く言つて下さいよ。明日が決戦だつてのに今朝言うなんて」

「いやあ、寝て起きたら急にびびつときたんですよ。これはもう天啓とでも言うべきですか」

この野郎、いけしやあしやあと。

アバンに頼まれていたアイテムを全て袋にまとめて渡すと、中身を確認して満足そうに頷いていた。

夜が明けた。

身支度を整えるとアバンが口を開く。

「良いですか。打ち合わせ通りに行かなくともムリは禁物ですよ。そのために私は備えているんですから」

「ムリは百も承知ですよ。まあ死ぬつもりはないんで、それだけは安心して下さい」

軽口で応えるとスペルカードを片手に出立しようとしてーその動きを止めた。

「アバンさん。どうして総力戦ではなくコッチの作戦にしたんですか。これじゃあ神託



の通りじゃないですか」

アバンは運命に囚われるなど言っていた。しかしアバンはそれに反して原作通りに進めることを選んだ。その理由を聞いておきたかったんだ。

「結局、神託や運命なんてその程度のもですよ。それを知る責任とか使命とか、そんなものは関係ありません。笑って生きるために、ただ戦うだけです」

その言葉に自然に笑みがこぼれてきた。

気の利いたセリフでも返そうかと思っただが、何も思い浮かばなかった。

「じゃあ、行ってきます」

短く一言それだけを告げて、笑顔で洞窟を後にした。

## 7 2 残る者たち

アバンへ別れを告げた俺は、オーザムへ向かう前にパプニカへ戻ってきていた。

アポロとマリン、そしてロン・ベルクの三人には受け取って欲しい物があつたからだ。アポロへはすでに渡すものは渡した。

“俺が戻らなかつたら開けてくれ”と言って渡したためにかなり不安な表情をしていたが、思うところでもあつたのか詳しい事情は何も聞かずに受け取ってくれた。

つづいてマリンへ渡そうとしたのだが見つからない。

先に城の一室でロン・ベルクを見つけたので、アポロに渡したときと同じようにアイテムの入った袋を渡す。

「なんだこれは？」

ロン・ベルクはアイテム袋を訝しげに見つめると、ぞんざいに掲げた。

「もし俺が死の大地から戻らなかつたら開けて下さい」

「そうか」

「ウエイト、ウエイトツ―何、いきなり開けてるんですか!? 戻らなかつたらって言うてるじゃないですか」

袋を漁り始めたロン・ベルクを慌てて止めに入るが、まるで聞く耳持たない。そして中に入っている手紙に気づいて読み始めてしまった。

奪い返すために何度も飛びかかるが、あっさりとは躲かれてしまう。しかもその最中であつても目は手紙の文章を読み進めている。流石は達人というべきか。

何度やつてもムダなので俺は手紙を奪い返すことを諦め、大きなため息を吐いた。

手紙にはこの世界が辿るであろう未来と、アバンが考えた作戦が書いてある。

俺が死の大地でバーンを倒せなかった場合の保険だ。あくまで保険なので知られないに越したことはなかったのだが……。

「安心しろ、別に言いふらしたりはせん」

手紙を読み終えたロン・ベルクは袋の中にあるアイテムを手に取り弄り始める。

まあ、それなら別にいいけどさ。それよりもー

「よく信じますね。誇大妄想と笑われてもおかしくない内容ですよ」

「別に信じた訳じゃない。この手紙通りになったときはそう動けば良いだけのことだ。どちらにしる騒ぎ立てるようなことじゃない」

「そ、そうですか」

淡泊なのか、合理的なのか。あるいは興味が無いのか……よく分からない人だな。

「それにしてもなんだ、このオモチャみたいなのは。こんなもんで本当になんとかなる

のか？」

さつきまで弄くり回していたアイテムを見て、そんな失礼な感想の述べる。

「あんまり適当に扱わないでくださいね。それに世界の命運がかかっていると云っても過言じゃないんですから」

「ふん。そうならないようにお前さんが大魔王を倒すんだろが」

「まあ、そうなんですけど」

それつきりロン・ベルクは俺のことをそちのけでアイテムを再び弄りだす。

時折ぶつぶつとあーでもないこーでもないと呟いている姿は完全にヤバイ人だった。

……マリンを探そう。

このままここにいても不毛なので移動することにした。

部屋を出るとロン・ベルクの大きな笑い声が響いてきた。

「できるっ、できるぞ!! この方法なら確実にッ。うははははーっ!!!」

こわい。

「じゃあ、俺はもう行くよ」

城の屋上。そこでマリんに短く別れを告げる。

アポロとロン・ベルクの二人と同じようにアイテムの入った袋を渡すと、カードを取り出し出立しようした。

「……私は反対よ。あなたはここに残ってみんなのサポートにまわりましょう」  
しかし後ろからかかる声にその動きを止める。

その表情からはその言葉の真意をうかがい知ることはできなかつた。

「あなたのアイテムがあれば復興に大分貢献できると思うし、それに……そう、思いがけない敵が攻めてきたとしても十分に対処できるじゃない」

「大魔王を倒せば全てに片がつく。最優すべきは大魔王討伐だ」

そんなことはマリンドって分かっているはず。なのに何故いまさらそんなことを言い出すのだろうか。

「で、でも……あなたが行く必要はないじゃない」

「俺だって厳しいながらも戦えるだけの力はある。ダイ達のためにも少しでも協力したいと」

「だ、だけどー」

何度も行く必要がないと食い下がるマリンド。

それを聞く内に俺は気づいてしまった。いや、むしろ何故気づかなかつたのか。

簡単な話だった。

この間、マリンは俺が大魔王を倒せると思っていないと言った。

その言葉の意味を俺はつきり敵と内通しているか、あるいはやる気が無いと糾弾しているのではないかと考えた。

アバンも言っていたじゃないか。俺は鈍感だと。

我ながら本当にそう思う。マリンはそんなことを言いたかつたんじゃない。ただ――

「――俺のこと、心配してるのか？」

それだけの話だった。

「と、当然よ。だ、だってあなた、この間も殺されかけたのよつ。大魔王を倒せても、あなたが死んでしまつては意味が無いのよ」

ああ、そうか。考えてみれば当然のことだ。

誰だつて大切な何かを守るために戦おうとしている。

戦いには勝つたけど大切なモノは失いましたじゃ意味が無いんだ。

こういうことを自分で言うのは自惚れてるみたいで嫌なんだけど、これはそういう話だ。

つまり、なんていうか……その、あれだ……マリンは俺のことを失いたくないんだ。

もしもこれで勘違いだったら自殺級の大打撃。大魔王討伐どころの話ではなくなっ

てしまう。

本当にあつてるよな？

でも前に一晩明かしたけどあれについてもなんの言及もないし。

触れられたくない事実だから黙っているのか？ それとも俺からなにか言うのを待っているのか？

考えれば考えるほど、思考は袋小路となってしまう。

あー、もうわっかんねえ！

小賢しいことは考えるなっ、恋愛は心でするもんだっ。

「マリントー！」

突然大きな声で名前を呼ばれ、マリンはビクッと肩を震わせる。

俺は大きく息を吸い込むと、赤い顔を隠すようにして一気に思いの丈をぶちまけた。

「マリンのことが好きだっ、大魔王を倒したら結婚してくれ!!」

言い終わると同時に踵を返し、マリンの反応を見ることなく空の彼方へそそくさと飛び立った。

“同行”の光の中、浮かれているとも不安ともつかない感情に包まれ、いい年して女子中学生よりも恋愛脳だな。と自嘲するのだった。

## 7 3 死の大地

昨日気球船で出立したダイ達はまさに激動の一日を送っていた。

カールの作戦基地に到着したダイ達は、到着してまもなくカールの北方にある漁港サババにて敵の襲撃があったと知らされる。

死の大地へ乗り込むため、サババにて大型船を建造していたのだが、ハドラー親衛騎団の襲撃によって船は破壊されてしまった。

ポップの活躍により辛くも親衛騎団を退けたが、しかし親衛騎団の目的は人間たちへの奇襲ではなかった。

死の大地で待つとの挑戦を言い残し、親衛騎団は死の大地へと去っていった。作戦の中断を余儀なくされた一行は一旦カール城へ戻ることとなる。

一方、チウは敵のアジトを偵察するため死の大地へ乗り込んでいた。

海底にバーンの居城への入り口を見つけたチウは敵に見つかり絶体絶命の危機に陥った。

その窮地を救ったのは竜騎将バランだった。

チウ捜索のために死の大地へとやってきたポップ、クロコダイ、ヒュンケルの三人



は瀕死の状態で倒れるチウを見つける。

姿を隠したバランスの存在に逸早く気がついたヒュンケルはポップとチウを先に仲間の元へ帰らせ、バランスとの邂逅を果たした。

大魔王バーンを討つと語るバランスの助力を得るため、二人は説得を試みる。しかし説得は失敗し交戦状態になってしまう。

その決着となる最後の瞬間、突如姿を現した親衛騎団の女王アルピナス。

結果としてバランスとアルピナス双方の攻撃を受けたヒュンケルは再起不能の重症を負ってしまった。

その姿に心を動かされたバランスは自身の考えを改め、人間とともにバーンを倒すため共闘することになった。

チウの功績により発見した海底の門。その門を破壊する作戦を立てたダイ達はバランスを加えて再度死の大地へと乗り込むのだった。

「……なげえよ」

レオナからこの顛末を聞いた俺の感想はその一言で片付いた。

「なによ、せっかく説明してあげたのにその態度はっ」

怒ったように腕を組むレオナを余所に、俺はこれから行われる作戦について考えていた。

海底の門を破壊するダイ・バラン組と地上で敵を引きつけるその他組の二面作戦。どちららについて行ってもバーンと対面することはできるが、俺はダイとバランに付いて行きたい。

……行きたいんだけど、あいつらどこにいるんだ？

周囲を見回すがダイ達の姿が見えない。

「なあ、ダイ達は？」

そんな素朴な疑問に、レオナは呆れた表情をしてみせる。

「なに言ってるのよ。みんなとつくに出発したわよ」

「はあ!？」

よくよく考えて見ればベッドはもぬけの殻。重症のはずのヒュンケルが寝ていないのはどう考えても不自然だ。

ということはレオナの言う通り、みんな死の大地に向かったのだろう。

くそう、あいつらめ。なぜ俺を置いていくのか。

いや待てよ。昨日ダイ達を見送るとき、あとで行くって言ったっけ？

あつ言つてねえや。

だからかチクシヨウめ。

ダイ達の後を追うため、部屋から勢い良く飛び出す。すると後ろからレオナの叫ぶ声

が聞こえてきた。

「ヒュンケルが向かったばかりよ!! まだ近くにいると思うわっ!」

片手をあげてレオナに応えると、ヒュンケルの元へと向かった。

海岸へ行くとヒュンケルはすぐに見つかった。

なにやらエイミとラブロマンスじみたことをしているために合流するタイミングが掴めない。

しばらく見守っていると“鎧の魔槍”が飛んできた。どうやらそろそろ終わるようだ。

エイミを残して歩き去るヒュンケルの後を追って声をかける。

「トーヤか。お前はパプニカへ残ったのではなかったのか……なぜここにいる?」  
せつかく追いついた仲間の反応は心なしか冷たかった。

「いや、最初から来るつもりだったから。っていうかーまあいいや、べつに。それより、お前すごいな」

鎧を着ているとはいえ、ヒュンケルはとんでもない重傷なのが見て取れた。

市中引き回しのうえ獄門磔にでもあったのかっていうくらいボロボロの状態だ……

そんなやつ見たこと無いけど。

「とりあえず“エリキシル剤”を飲ませて怪我の回復を試みる。しかし予想に反してヒュンケルの怪我は治らなかつた。

レオナは手当をしてもほとんど効果が無いくらい重傷だと言っていた。如何に俺のアイテムの回復能力が高くてもすぐには治らないということだろうか。

「ふつ、どちらにしろこのまま戦うつもりだつた。お前が気にすることではない」

そう言つて再び歩みを始めるヒュンケルだが、さすがにこのまま見ているのは忍びなかつた。

こんな状態のやつが戦うなんてありえない。トラックにひかれて血だらけのヤツのほろがまだ元気にみえるぞ。

このままでと確実に死ぬ。原作では死んでなかつたから気にしなくてもいいのかもしれないけど、いくらなんでも見ていられない。

「ちよつとまで。オーゲイン」

3回しかつかえない“大天使の息吹”だけど、俺は惜しむことなくここで使用することにした。

「なっ—?!」

カードから現れる天使の姿。その天使をみてヒュンケルは目を見開いて声を失う。

ー妾に何を望むー

「ヒュンケルの身体を治してやってくれ」

ーお安い御用。ではその者の身体を治してしんぜようー

天使が一息吹きかけると、瞬く間に傷が癒えていく。癒えた確かめるようにヒュンケルは手を握っては開く。

「お、おどろいた。お前は天使か何かなのか」

「なにそれ口説いてんの？」

気持ちの悪いセリフに思わずツツコミを入れてしまう。

アイテムの延長だと説明し納得させると、俺たちは先を急いだ。

それにしても「大天使の息吹」が普通に機能してよかった。一回も使ったことなかったからあまり自信が無かったんだ。

でもこの様子なら大丈夫そうだ。もし俺の手が原作のゴンのように手が吹き飛ばされても治るのだろうか。

試してみたいと思う反面、そんな事態にはなりたくないと思う。

「お前は来ないと思っていた」

死の大地へ降り立つと、突然ヒュンケルがそんなことを言い出した。

「何の話だ？」

「魔王軍との戦いのことだ。今までの戦いでも薄々感じていた。お前は仕方なく戦いに身を投じていたのだろう」

「あー、そういう話ね。マリンにもそれっぽいことをついこの間言われたよ」

マリンとは付き合いが長いからいいとして、まさかヒュンケルにまでそう思われてるなんてな。もしかしてダイとか他のみんなもそう思ってるのか？

「フレイザードや竜騎衆の墓を作っていただろう。そういうやつは戦いには向かない。だからパプニカに残ると聞いた時、それでいいと思った」

「墓って……よく見てるな。でもあれはそういうんじゃないよ」

そう。あれは別に優しさとかそういうので作った訳じゃない。

ただ責任を負いたくなかったんだ。運命を変えてしまう責任を。死者を弔うことでその言い訳をしていたんだ。

とにかく、それに関しては俺の中で決着がついた。これからは俺は俺の好きなようにやらせてもらう。そのためにも――

「バーンは俺が倒してみせる。期待しとけ。我に秘策ありだ」

冗談めかして、しかしながら自信満々に言い放つ。

「ふふ、すごい自信だな。それが通じなかったらどうするんだ」

「そんなときは気合でなんとかする。世の中気合さえあればどうにでもなるもんだ」  
「ならば俺もそれに負けないように気合を入れて戦おう」

ニヒルに笑うヒュンケルと拳を軽くぶつけあつてから走った。

ヒュンケルはポップ達のいる方へ。

そして俺はダイ達がいるはずの門の方へ。

この辺かなー。

死の大地の海岸沿いを歩き、海を見渡す。

ダイとバランの向かったという門へ向かうには海に潜る必要がある。

しかし泳いだのでは時間がかかるので、可能な限り門の近くまで陸の上を移動しているのだ。

下手に“同行”を使うとこの間みたいになどと交戦中のところへ割り込むことになりかねない。

急いでいるとはいえ渦中へ飛び込むようなマネは控えたい。

エアドロップをポーチからとりだし、口に含む。

さて、そろそろ潜ってーッ!?

突然感じた気配に弾けるように振り返る。

つんざくような異音に耳を覆いたくなるのをこらえ、その気配のする方へと視線を送る。

そこには、巨大な鎌を優雅に回す死神の姿があつた。



## 74 死神

紫電一閃。

キルバーンの姿を視界に捉えた瞬間、常人では視認不可能な速度の一撃を放つ。

相手の不意をついた絶妙な攻撃に確かな手応えを確信するー

「残念、ハズレだよ」

ーがしかし、木刀の一撃を華麗に躲したキルバーンは大きく後退して不敵な笑いを浮かべる。

「この死神ヤロウ。なんでこんなところにいやがる」

独り言のように言葉を投げかけ、キルバーンの本体である子供の魔物を探す。

“円”の有効範囲は20メートル程。しかしその範囲内にそれらしき気配はない。

キルバーンの頭部には黒のコアが仕込まれている。倒すにしたって迂闊な攻撃はできない。

だが手をこまねいてはヤツの思う壺だ。

軽く舌打ちしてキルバーンへと向かい合う。

黒のコアも気になるが、とにかく攻撃しないことには始まらない。

「侵入者の排除も仕事の内だからね。ヒュンケル君はミストのお気に入りだから手を出すわけにはいかないし、ね」

話し終えると同時に地を踏み碎いて間合いを詰める。

キルバーンは棒立ちのまま、今度こそ絶対に捉えたつ。

袈裟斬りで木刀を振り下ろす。

だがまたしても木刀は空振り、地面を碎いて土煙を巻き上げるのみ。

今度は回避の瞬間を捉えることができなかつた。……マズイな。

それに焦りのせいか動きが単調になってしまっている。そんな隙を見過ごすはずもなく、キルバーンは大鎌を振るう。

「ー痛ッ!?!」

余裕をもつて躲したはずの攻撃は、しかし肩口を切り裂いた。

傷口を抑えて後ろへ飛び間合いを広げる。

追撃を仕掛けるでもなく、キルバーンは大鎌を回して悠長に構えている。

ヤツの笛の音を聞かされて、すでに感覚が狂わされてきたようだ。このままでは動くことさえできなくなってしまう。

「ふふふ、頑丈だね。今のは腕を切り落とすつもりだったのに、まだちゃんとついてるんだから」

肩口から手を放し怪我の具合を確認する。どうやら傷はかなり浅い。

“念”でオーラを纏っているから俺の身体は頑丈にできている。

キルバーンからしてみれば分厚いタイヤに斬りかかったような感触だったことだろう。

怪我の功名とは違うがヤツの攻撃は致命傷にはなりえない。ならば体力が削られる前にあの大鎌を叩き壊してぶちのめすのみ。

気持ちを切り替え全身に力を溜める。

単純な戦闘能力は恐らくこちらの方が上。絡め手さえなければ決して勝てない相手ではない。

なら取れる手段はひとつ。パワーで押し切るのみ！

「うおおおおッ」

暴風のようなオーラを身に纏いすべてを薙ぎ払うべく突撃する。

捨て身とも取れるような苛烈な突進はしかしー

「ーッぐ」

突如として襲いくる激痛。堪らず突進の勢いも殺せないまま、無様に地面に投げ出された。

上体を起こして左脚をみる。

傷口からまるで何かを伝わるようにして流れる血液。左大腿部を貫いて鈍い痛みを感じさせているそれは、しかし俺の目には映らない。

知っているぞ、これはー

「ファントムレイザー。キミの周囲には抜いたが最後、誰にも見えなくなる透明な刀身が隠されているのさ。ふふふ、気に入ってもらえたかな」

残忍な笑みを浮かべた死神は大鎌を携えてゆつくりと歩み寄ってくる。

\* \* \*

100を超える攻撃は全て空を切っていた。

攻撃を空振る度に間断なく反撃を受け傷は徐々に増えていく。

一撃一撃に威力がなくなるとも、それは無視できるものではなかった。

「おらあ!!」

幾度と無くキルバーンの幻影を振り払い、その度に反撃を喰らい傷ついていく。

それでもトーヤは攻撃の手を緩めることができなかった。

やおら大鎌を回すキルバーンからは、耳をつんざくような笛の音が響いてくる。

キルバーンの鎌から発せられる音は、トーヤの神経に作用し五感を狂わせ始めてい

る。

まだ完全にキルバーンの術中にはまっていないとはいえ、間合いや打点の僅かにずれのため躲かれてしまうのだ。

このまま笛の音を聞き続けられ、遠くない内に全身が麻痺して動けなくなるだろう。

故に一刻も早くキルバーンを倒さなければならぬのだが……。

「ーっつくそ。鬱陶しい」

脇腹を掠めそうになる透明な刃に舌打ちして悪態をつく。

キルバーンの使う見えざる刃「ー」フアントムレイザーがそれを許さない。

「どうしたんだい？ もう諦めたのかな」

「うるせえな、ちよつと待ってろ」

すでに四方は刃に囲まれ迂闊に動くことはできない。そして最初の左脚に受けた傷は深く、機動力を大きく低下させていた。

汗と血の混ざりあつた液体が頬を伝って滴り落ちる。その様子をみてキルバーンは楽しげに嗤う。

「いい表情だ。もつともつと苦しむ顔がみたい。死の間際に見せる戦士のそれに優るものはないよ、ふふふ」

「ちッ、罨でチマチマやるだけの能無しが偉そうにしやがって」

「フ…フフフッ…：…なめてもらっちゃ困る。ボクの特技は暗殺や呪法だけじゃない。普通に戦ったって十分な実力を持っている…：…だけどねー」

「ツぐあ」

一瞬で距離を詰めたキルバーンの鎌の柄が鳩尾を深く沈み込む。

「どんな才能がある奴もー」

「がはッ」

「どんなに努力を重ねた奴もー」

「げほッ」

「ボクの罨にはめると簡単に死んでいったー」

「つぐは」

「どんな強い奴も簡単に死ぬんだよッ」

刃の檻に囲まれ動けないトーヤを嘲笑うように縦横無尽に檻の中を移動し廻り続ける。

「こんなに気持ちのいい殺し方は他にないッ。一度味わってしまうと病み付きになるんだッ」

再び檻の外から凶刃を構え襲いかかろうとするキルバーン。

全身をズタズタにされ血を吹き出しながらも立ち上がるトーヤにトドメを刺すため迫る。

「だからどうしたー！クズヤロウ!!」

迫り来るキルバーン目掛け霊丸を放つ。

それは眩い輝きと共にキルバーンを呑み込み、周囲を土煙と静寂で包み込んだ。

「はあ、はあはあ……やったか……はあはあ」

土煙の向こうをみつめ、未だ笛の音のせいで満足に動かない身体を休める。

五感を狂わされたトーヤはキルバーンをまともに捉えることができなかつた。そして、どこにあるのかわからないファントムレイザーに四方を囲まれ動くこともできなかつた。

ではなぜ霊丸を当てることができたのか。その秘密は奇しくもファントムレイザーにあつた。

ファントムレイザーはトーヤにだけあたる刃ではない。当然仕掛けたキルバーンでさえも当たれば傷を負う。

であればその内部に足を踏み込んだキルバーンも動ける範囲は限定されてしまう。

故にトーヤはそのチャンスを待った。待ち続けた。

五感を奪われる前に決着をつけねばならない、非常に低い賭けだったが……。もう少しキルバーンが慎重に動いていれば結果は違っていただろう。

「よいしょっと」

トーヤは木刀を杖のようにして起き上がると、海へ潜るため歩き出す。

「ふう、思った以上に強かった。危うくこんなところで死ぬところだったぜ……。さすがは——え？」

そこまで口にして背中に受けた衝撃に再び地面に倒れこむ。

「ぐああああああ」

遅れてきた痛みに絶叫をあげ、自身を見下ろす影に視線を向ける。

「て、てめえ……」

「やれやれ、少し気が早いんじゃないかな。キミはここで死ぬんだよ」

大鎌から鮮血を滴らせ、死神キルバーンは佇んでいた。



## 75 連戦

「つぐ……ああ」

辛うじて立ちあがり、再び霊丸を放とうと構えをとる。

背中に負った傷は深い。すでにトーヤに残された攻撃手段はこれ以外になかった。

しかし指先にオーラは集まらず、そして蓄積したダメージに腕は震え、照準もまともに定まらない。

「やはりね。ふふふ、トドメをささずに用心していた甲斐があつた。これでもう〝レイガン〟とやらは怖くない」

そんなトーヤの様子に勝利を確信したのか、キルバーンは構えもせず ゆっくりと歩み寄った。

「……………やはり…?」

「キミはダイ君と魔法使い君の次に危険だと思つていたよ。だから絶対にボクの手で殺そうと思つていたんだ」

「……どういう意味だ?」

「おっとー」

「つぐえ!」

唐突に迫るキルバーンに首を捕まれ、岩壁へと押し付けられた。その拍子にトーヤの手元から何かが地面へ落ちる。

「キミのことはベンガーナの時からマークしてたんだ。どんな戦い方をするのかも、大体把握済みさ」

足元へ転がった小瓶をチラリとみた後、キルバーンはそれを踏み砕く。

トーヤは悔し気に砕かれたガラス片を一瞥し、そして思った。

先の霊丸は狙いもタイミングも完璧だった。なのに何故キルバーンはまだ動くことが出来るのか、と。

その答えは至極単純だった。霊丸は当たっていない。キルバーンの身体中に残る無数の裂傷がそれを物語っていた。

人形であるキルバーンは刃程度で再起不能などなるはずもない。従ってファントムレイザーの刃へ飛び込み霊丸を回避することはキルバーンからすれば当然のことだったのだ。

そのことに気がついたトーヤは先のキルバーンの言葉を思い出す。

『トドメをささずに用心していた甲斐があった』

確かに先ほどキルバーンはそう言った。そしてそれはある事実を示している。すな

わちー

「靈丸で迎撃することは予想済み……いや、仕向けられてたつてことか」

「ご明察。ふふふ、思い込みつてのは怖いよね。〃刃があるからそこへは動けない〃なんて人間の理屈はボクには通用しないのさ。そしてなにより〃待ち伏せされてる〃なんて思いもよらなかつただろう?」

「ーっ!? 道理で……刃の数が多過ぎると思つたぜ」

最初にフアントムレイザーを左脚に受けた時、トーヤにはいつ仕掛けたのか分からなかった。

だが、笛の音で感覚を狂わされ始めていたため、その瞬間を見逃しただけだと考えた。しかしそれすらもキルバーンの誘導に他ならない。

実際、笛の音で感覚を奪おうと思えばもつと早くに奪うことは出来た。しかしキルバーンはそれをしなかつた。

靈丸という切り札を見知っていたキルバーンはそれを使わせるためにあえて追い込んだー否、追い込まざるを得なかつた。

そうしなければトドメの瞬間に手痛い反撃を受ける恐れがあつたためだ。

結果として現在トーヤはキルバーンの思惑通りの結末を迎えつつある。

周到にして狡猾。これが死神と呼ばれるキルバーンの戦い方であつた。

「ボクにかかればこんなものさ。でもハドラー君やミストが相手ならそれなりに戦えたんじゃないかな。相手が悪かった。それだけのことだよ」

首を掴む手に力を込められる。トーヤにはもはや抜け出すだけの力はない。

「相手が悪い……ハハ、確かにそうだな。マジで強いぜお前。まさか心理的な死角まで狙って罨張ってくるとは思ってもよらなかったぜ」

できる事といえば、せいぜい自らの首を締めるその手を掴み逃さないことくらい。

「ん？ 何のマネだい？」

「お前の言う通りだ。怖いよな、思い込み……霊丸が1発しか撃てないなんて思い込むなんてなッー」

「何ッ!? ーしまッ」

気づくと同時に離脱しようとするキルバーンだったが、既に手遅れ。

至近距離で放たれた霊丸はキルバーンの首から下を呑み込んだまま海の彼方へと消えていった。

首だけになったキルバーンはトーヤの目の前に転がり落ちる。

「バ……バカな。あれだけの威力の技を連続して放てるなんて……バーン様並……だ……ねえ」

それだけ告げるとキルバーンは事切れるかのように動かなくなつた。

\* \* \*

目の前で動かなくなったキルバーンの生首をみて地面に腰を下ろす……つていうか崩れ落ちる。

あ、危なかった。キルバーンがなんか勝手に靈丸1発しか使えないと思い込んでたから助かったものの、そうじゃなければおっ死んでたぞ。

闘気基準だと何回も撃てないのが普通なのかな。

確かに靈丸は反則的に強い気もする。グランドクルス以上の威力だし（ラーハルト戦のとき横で見てた）。

そう考えれば日に4発とはいえグランドクルスを1分措きに使えるとかぶつ壊れだよな。俺が敵側ならキレる。

それに2発目の靈丸を最初に構えた時、1分経ってなくてオーラが集まらなかったのがヤツの予想の決め手になったのかもしれない。

まあいいか。お陰で助かったんだし。

首を掴んだまま固まっているキルバーンの腕を引き離し投げ捨てる。

「どつちにしろマヌケなやつだなーっ熱ッ!」

キルバーンの腕が落ちた拍子に跳ねた血液を払いのけ地面を転げまわる。

そういうえばコイツの血液は魔界のマグマ並とか言ってたっけな。

誰もいない荒野でアツアツおでん並のリアクションをってしまったぜ。恥ずかしい。つていうかまだ気を抜くのは早い。キルバーンは死んじやいない。

なんか死んだふりして目の前で転がっているけど、コイツはただの人形なんだ。本体がどこかに潜んでいるはず。

油断はできないぞ。

俺は素早くポーチから回復薬を取り出すと一気に喉に流し込み次の戦闘に備えた。

……来ないな。

てつきり畳み掛けるように襲ってくるかと思っただけだ。

なら移動するか。早くしないとハドラーが爆発しかねないし。

その前に目の前の生首なんとかしないと。これ黒のコア入ってるからね。

どうしよう、海に沈めるか？

だけど海の底で爆発したら津波とかヤバそうだな。

うーん。放つては置けないけど、コイツをもって戦うのはかなりデンジャラスだ。

「うわッ!? な、なんだ?」

生首をどうしようか悩んでいると、突然空から無数の金属の塊のようなものが降ってきた。

その様子に俺があたふたしている内に、金属の塊は人の形を成していった。

見覚えのあるその姿形によくやく理解が追いついた頃、一番奥から喚くような不快な笑い声が響いた。

「ガッハッハッハッハッ、我輩は大魔宮最大最強の守護神……キング!!! マキシマム!!!

おまえの命は今日ここまでよ!!」

あく今日絶対厄日だわ。

## 76 チェス

激しい戦闘が続いた死の大地の一角。焦土と化した黒い大地と硝煙のような臭いが、死の大地を更なる不毛の土地へと変化させていた。

そんな中、俺は自分を包囲するオリハルコンの軍団を一瞥してから口を開く。

「オレはね、レベルを最高まで上げてからボスキャラに戦いを挑むんだ」

呟くような独白。彼らの表情はあまりにも無機質で、俺の言葉は馬耳東風とばかりに流れていく。

言葉は届いていてもその意図も意志も届くことはないのだろう。

そんな彼らの代弁をするように、彼らの司令塔であるマキシマムは困惑の表情を浮かべた。

「キサマ……何の話をしている？」

その問には答えずに、俺は続く言葉を吐き出す。

「敵のHPは100000くらいかな……。オレは全然ダメージを受けない。しかしオレの攻撃も敵の防御力が高くて1000くらいずつしかHPを減らせないんだ。妙な快感を覚える反面ひどく虚しくなる。今、丁度そんな気分だ」



「HP……10000? ……気でも触れたか」

マキシマムは話にならないとばかりに苛立ちも露わにして片手を上げると、兵士たちを俺へと出撃させようとする。

合図と同時に身構える兵士たち。そしてマキシマムの両目が怪しく光り輝いた。

「キングスキャン!! ……ダメージを受けないとはどういう意味かね?」

俺のステータスを覗き見たマキシマムが不審そうな顔をする。

あーそうですね。すいませんね、適当な事言つて。

「ちよつと言つてみたかっただけだ。戯言だから忘れてくれ」

よいしょつと。ーさで、どうするか。

俺は気持ちを切り替えてマキシマムを正面から見据える。

霊丸は残り2発だけ。この後バーンと戦うことを考えるなら絶対に温存しなければならぬ。

もうひとつのとおつておきも1発しか使えない……となると通常攻撃で乗り切るしかねえな。

オリハルコン相手に? マジでHP100も減らせるか自信ねえー。

はは、何でだろう面白くもないのに笑えてくるよ。

「ん? テメエは……」

そんな自嘲ともつかないことを考えていると、マキシマムの背後に小さな影を見つけた。

「よくもキルバーンを殺したなつ。絶対にゆるさないぞ！」

ピロロとか言う魔族のクソガキだ。

あの野郎、テメエがキルバーン本体のくせに白々しい。

おそらく俺の存在をマキシマムに伝えたのもこいつの仕業。

ついさつきまで何処にも姿が見えなかったクセして……。隙を見てキルバーンの頭部を取り返す腹積もりだろうな。

となれば俺が取る手段はひとつ。

「キルバーン？ この下衆ヤロウのことかい？ なんなら火葬でもしてやろうか」

キルバーンの生首を掴みあげて意地の悪く口の端をあげる。

マキシマムは鼻で笑うが、後ろに控えるピロロは目に見えて慌て出す。

「それには及ばんよ。我輩がその生首諸共キサマを灰にしてくれよう。ガッハツハツハ」

「っ?! ーま、待って」

おいおい、俺よりも後ろのやつの方が驚いてるぜ。

なんて、俺も余裕かましてられないんだよな。そろそろ本腰入れるか。

キルバーンの頭部にオーラを流してから背後に転がしておく。ピロ口の視線がそれを追うように移動するが、それは無視する。

オーラを纏わせた。これでちよつとやそつとの攻撃じゃ誘爆することはないだろう。元々人形に埋め込んだまま戦わせてたんだ、簡単に爆発するようならさっきの戦いできっと爆発していることだろう。

ーってことで！ 行くかつ！

「待たせたなデカブツ。こっちは準備オーケーだぜ」

「うわわっ」

ピロ口は俺達の張り詰めた空気を感じて、小賢しく岩の陰へと身を潜める。

「何を戯けたことを。状況を理解するだけの知能もないとは、愚かなものよなーっ!!」  
開戦の幕を開けたのはマキシマムだった。

右手の指をパチンと鳴らすと沈黙を守っていた兵士たちは示し合わせたように動き出す。

3体のポーンが俺に向かって駆け出し、その影に隠れるようにしてナイトが付いているのが見える。

あつという間に距離を詰めてきたポーン。繰り出される3つの拳を両腕でガードし、吹き飛ばされないように踏ん張りをきかせる。

「ーおつとつ!？」

ポーンの背後に隠れていたナイトは、俺がガードするのと同じタイミングでポーン背後から飛び上がると頭上から槍と突きおろす。瞬時に足の力を抜いてポーンの拳の威力で後ろへと体勢をずらす。

空中で空振りをしたナイトは未だ宙に浮いたまま。この隙を逃す手はない。

右足にオーラを集中させると、体を回転させて全身のバネを使い渾身の後ろ回し蹴りを放つ。

響く鈍い打撃音。オリハルコンの塊を蹴り飛ばした衝撃に僅かな痺れを無視して足を引き戻す。

足が地面についたと同時に駆け出し、壁のように迫る3体のポーンを押し退ける。

こいつらはただの駒だ。操っている本体を倒ささなければ死ぬまで向かってくる。

「ふふ、甘いわっ」

真つ直ぐに向かう俺を迎撃するため、マキシマムは周囲の兵を集中させる。

残りの4体のポーンは壁のように行く手を阻み、その間にビショップとルークが迫る。

マキシマムさんよお、さつきと定跡が一緒だぜ!

俺は両手にオーラを掻き集め塊を作る。

「甘いのはそつちだ！ 喰らえやああ!!」

放たれたオーラの奔流に壁となっていたポーンは吹き飛び、後ろのルーク達を巻き込んで倒れこんだ。

「なっ!？」

見たか！ 普通にオーラを飛ばすことだって出来るんだぜ。

しかし霊丸と違って誓約と制約無しでは威力は中級呪文程度といったところだろう。オリハルコンの兵士を砕くことはできない。

だけどそれで十分。起き上がるともがく兵士を置き去りにしてマキシマムへ疾走する。

腰にさした木刀を抜き放ち、間髪入れずに振りかぶる。

「ま、待てー」

マキシマムは咄嗟に最速の兵士ナイトを呼び戻そうとするが間に合わない。

「終わりだっ」

振りかぶった木刀に渾身の力を込め、思い切り投擲する。

顔を覆うように防御するマキシマムだが、その軌道はマキシマムとは大きく逸れ、あらぬ方向へと消えていった。

身構えていただけに呆然とするマキシマムだが、すぐに余裕の表情を取り戻した。



## 77 休戦

「人間は何を考えているか分からぬな。あの魔族の小僧を殺したところで何だという。勝機を逃してまでやることとしては思えぬが」

先の攻防で僅かに怯んだ様子のマキシマムだが、未だ包囲網を敷いていることに優位を感じたのか余裕の笑みすら浮かべている。

「あのガキはあんたが思ってるより厄介なんだよ」

ピロロの正体を知る俺も、危険因子であるヤツをこの段階で葬ることができて安堵する。

その態度が気に入らなかつたのかマキシマムは途端に視線を鋭くして俺を睨みつける。

「小僧が厄介だと？　——我輩を倒すことよりもあの小僧を殺すほうが大切だと言いたいのかつ！　キサマ、我輩を侮辱するその物言い、後悔することになるぞ!!」

お前ら一応味方同士だろうが、そんなに怒るなよ。確かにあんな子供以下だなんて言われたら腹立つだろうけどさ。

とりあえず宥めなきや。さっきから言ってるけどもう時間が無いんだってば。

「あいつが死んだ今、あんたと事を構えるつもりはもう無いよ」

両手を小さく上げて闘争の意志がないことを表明する。

「むう、命乞いという訳か？ 今更聞き入れると思うかね」

言葉とは裏腹にマキシママは注意深く俺の動きを観察する。

構わず俺は言いたいことを一方的に告げる。

「死の大地はもうすぐ吹き飛ぶ。ハドラーに埋め込まれている黒のコアによつてな」

「な、なんだと…黒のコア!？」

黒のコアと聞いてマキシママは目を見開いた。魔界じゃ黒のコアは有名ならしいからな。

「もう一度言う、ハドラーの体内には黒のコアが埋め込まれている。埋め込んだのは大魔王バーンだ。むかし勇者アバンにやられた後、復活させた際に埋め込んだんだ」

「何をバカな…でたらめを言うな!!」

「でたらめかどうか、あれを見てみろー」

言いながらさつき背後に転がしておいたキルバンの頭部を指さす。

マキシママはそれを目にした後、それがどうしたという風に再び俺を見る。

「いや、スキャンで見えてくれ」

説明不足ではあったがギャグをやっている場合じゃないんだよ。



「スウウパアアアスキヤアン!!」

それ声に出す必要がある?

キルバーンの頭部をスキャンしたマキシマムは信じられないものを見たような表情でたじろいでいる。

「く、黒のコア……まさか……いや、しかし……。もしや我輩の体にも埋め込めれているのか!?!」

不安げに胸に手を当てた後、自問自答するように呟く。

バーンが黒のコアを埋め込んだのはハドラーだけで、キルバーンのは別の理由なんだけど。どうやらバーンへの猜疑心から上手く勘違いしてくれたようだ。

チャンスとばかりに畳み掛ける。

「それは分からない。だけどよく考えてみてくれ。あんたは俺を倒しに来るためにここへやってきたけど、バーンはそれを止めたか?　すぐ隣ではハドラーがダイやバランと戦っているんだぞ。いつ爆発しても可怪しくないのに」

言外にお前は見捨てられてるんだよ、と告げてみる。

上手く行けば打倒バーンの仲間として加わってくれるかもしれない。そうなれば御の字だ。

オリハルコン軍団普通に強いし。

「……へ来たのは我輩の判断だ。バーン様はこのことを存じていない。そして我輩はハドラーに黒のコアを埋め込まれているのを確認した訳じゃない。確かにキルバーンに黒のコアが埋め込まれているようだが、それがハドラーにも埋め込まれている証拠にはならん」

疑り深いなこいつ。いや、敵の言うことならすぐ信じる方がアホか。

「それに本当にハドラーに黒のコアが埋め込まれていたとして、ハドラーの黒のコアが爆発した場合はその黒のコアも誘爆してお前たちは全滅するだけ。魔族の小僧の様子からして黒のコアのことを知っていたと見えるが、回収する必要がある？ 小僧本人が危険を顧みず出向いてくるようなこととは思えぬぞ」

ぐぬぬぬ、こいつは間違いない。論破者（ロジカリスト）だつ!!

ちくしょう、負けてたまるか!!

口では理屈を並べ立てているものの動揺しているのは事実だ。押し切ってみせるぜ。「おいおいおいおい、ちよつと待てよ。あんたにとつて今一番得になることを考えようぜ。確かにあんたの言う通り、今ここでハドラーに黒のコアが埋め込まれているか確認する手段はない。だけどそれを否定する材料だつて無いんだぜ？ だったら自分も死ぬ覚悟で俺なんかの首を獲りに来るか？ 本当に良いのか？ 俺の言っていることが本当だった場合あんたもドカンだぜ」

こういうのは勢いが大事だ。

とにかく不安を煽り、一気に捲し立てることで思考する力を奪う。

すげえ騙してるっばい感じだけど、本当のことだからね。

「もう時間がない。俺とあんたの実力考えりゃ決着が付く前にハドラーは爆発しちゃう。どつかの誰かの戦いに巻き込まれて無駄死なんてマヌケな死に方したくねえだろ」

「む、むう」

何やら唸って考えをまとめてるみたいだが、どうやらタイムリミットが近づいてきたみたいだ。

遠くの方に一瞬稲光のようなものが見え、少し遅れて雷鳴が轟いた。

恐らくーいや、確実にバランのギガデインだ。

この先の展開は言わずもがな。間を置かずに大地が鳴動を始める。

「話なんてしてる場合じゃねえっ!! 早く穴掘らねえと!!」

穴を掘ると言いつつビックバンインパクトよろしく拳を地面に何度も叩き込み避難場所確保を試みる。

「うおおおおおおお!!!」

10回目くらいだろうか。十分な深さの穴が完成してからキルバーンの頭を抱えて穴に飛び込む。

その最深部で身を縮めて爆発に備えた。

呆けて見ていただけのマキシマムも、俺が何をしているのか察して穴へ飛び込んできた。

「皆の者続けいーとうっ!!」

「つぐは!!? お、重い」

オリハルコン軍団全員が穴へ飛び込んできたせいで俺は下敷きになる。

いや、お前らは飛んで帰るとかりりルーラ使うとかしろよ。と言おうと思ったけどそんな状況でもないので無視。

むしろ丁度いいのでオリハルコン軍団にオーラを流して強化しすることで壁代わりにする。

大陸吹き飛ばす爆弾相手に地面に隠れるなんて不安でしか無いからね。

原作のポップ達は無事だったけど、位置の問題でダメでしたなんてことも有り得るだろうからな。

そしてオーラを流し終えて数秒が経った頃、耳を疑うような爆音が鳴った。

地面の中にいるのに台風のような強風が襲い来る。

この世の終わりのような不気味な衝撃を一身に受けて、ただ事態が収まるのを待つ。きつと時間的には3秒も経っていない。

早く外へ出たい。光が欲しい。

人間とは如何に小さいものか思い知らされているようだった。

例えるなら目隠ししたままバンジージャンプをさせられているくらいの感じ？

まあ簡潔に言うくと死ぬほど怖い。

## 78 合流

マキシマムはバーンパレスの守護者である。

侵入者を確実に始末するため、敵が弱ったところを見計らい出陣する。

そのやり方を卑怯だと言い、ミストバーンなどは掃除屋などと揶揄するが、マキシマムはそれを気に留めることなく責務を全うしている。

先の戦いも例外ではなかった。

死の大地で繰り広げられていた2つの戦いも当然監視していた。

一つはハドラーと勇者ダイと裏切り者のバランの戦い。もう一つはハドラー新衛騎士団と勇者以外の仲間の戦いだ。

いつも通りマキシマムは監視を続け、敵が弱るのを待った。

しかし、その途中でマキシマムの元へ小さな魔族の子供がやってきた。

その子供の名はピロロ。

ピロロはマキシマムの足元に縋るようにして助けを求めた。

ただの魔族の子供の助けなど聞く義理も義務もマキシマムには無かったが、それでも魅力的な内容ではあった。

曰く、キルバーンがやられた。

キルバーンの実力はマキシマムも知っている。

そもそも軍団長を始末する任に就いていた男だ。弱いわけがない。

そんなキルバーンを倒した敵は排除すれば自分の功績はどれ程になるのか。

マキシマムは意気揚々と配下の駒を連れて侵入者の排除へと赴く。

未知の相手ではあるが消耗している敵など物の数ではないと、自らの勝利を疑うことはなかった。

――結果はあまりにも予想外だった。否、予想できるはずもない。

侵入者と僅かに戦いはしたものの、しかし決着は着かず終い。

挙句にその戦いを中断せざるを得なかった原因が主であるバーンにあったなどと。

そして、自らもただの駒としか思われていなかったなどと予想できるはずがない。

十

地面から這い出し、周りの状況を確認する。

そこに数十秒前まであった光景は見る影もなかった。

恐ろしいと思った。黒のコアとはあれ程巨大な大陸をも吹き飛ばしてしまうのか。

先の戦いで侵入者が語ったことを思い出し、今更ながらに血の気が引いていくのを感じた。

「よーいしよつとおお!!」

気の抜けるような掛け声でトーヤは地中から這い出ると服の汚れを落としている。

マキシマムはその様子を奇妙なものを見るような目を向けてから口を開く。

「何故我輩を助けた?」

「いやいや、あんたら勝手に穴に入ってきたんだろ?」

迷惑そうな顔でマキシマムの間に答えると、トーヤは身支度をしてすぐにも移動しようとしている。

それを呼び止めるような形で再度質問をぶつける。

「そうではない。何故我輩たちにーいや、どうでも良いことだ……今となってはな」

何かを言いかけて口をつぐむマキシマムと、その様子に眉根を寄せて今度はトーヤが質問をした。

「なにになに? あんたまさか落ち込んでんの? さっきまでの勢いが無いけど」

「な、何をバカな!! 我輩が落ち込むなどとあろう筈がないであろう!!」



マキシマムは追い払うようにトーヤへ向かって手を振った。

しかし、トーヤはマキシマムを正面から見据えて一向に動く気配がない。

「どうした？ さっさと行けばよからう」

「どうもこうもあんたここの守護者だろ。見逃す気か？ まあさつきも言った通り俺に

戦う気はないけどさ」

トーヤの言葉に何か言い返そうにも、マキシマムは何も思いつかなかった。

確かにトーヤはマキシマムからすれば侵入者であり、敵である。しかし先の会話とこの惨状のあとでは戦う気など起こらなかった。

嫌でも視界に入るトーヤが持つキルバーンの頭――黒のコアがその気力を奪うのだ。

「我輩は……………」

どうすればいい？

呟く様なその言葉は、しかしマキシマムの口からは溢れることなく消えていった。

だが、誰に向けて放ったわけでもない間に答えるものがいた。

「帰れば良いんじゃない？」

「帰る？」

言葉の意味を図りかねて、マキシマムはオウム返しをした。

「ああ、バーンのところに。こんな感じで戦い中断されたのにまた戦うつてもマヌケ

だしさ、とりあえず今回は無しにしようぜ」

「敵を前にしてオメオメと逃げ帰れと？」

「さつきと言っていることがーいや、やつばいい。……あんた独断でここに来たんだろ？ バーンからしたら逃げ帰ったことにはならないだろ」

トーヤの言っていることは正しかった。元より反射的に反論しただけで、マキシマムの心の内にそんな不安はない。

すなわち、マキシマムは大魔王バーンにとつて居ても居なくても構わない取るに足らない存在だった。

その事実を知るのが怖いのだ。

「一緒に行くか？」

何気なく吐かれた言葉に、マキシマムは弾かれたように顔を上げた。

「バ、バカな……我輩が人間などと行動を共にするはずがなからう！」

トーヤは頬を掻いて「そりやそうか」と小さく呟くと、身を翻してその場を去ろうとする。

「気になるならバーンに真意を聞いてみれば？ 後のことはそれから考えればいいですよ。ーじゃあな」

去り際にそう告げてトーヤはダイたちのいる魔宮の扉へと向かっていった。

その背中を黙って見送り、残されたマキシマムは一人考える。

「真意を聞くだど？ バーン様に？ 我輩はただの駒なのですかと聞けというのか？

ハ、ハハハ、ハハー」

自嘲気味に笑い、そしてマキシマムは周りに立つ部下を見る。

+

辿り着いた時、そこには横たわるバランと寄り添うように膝を付くダイの姿が見えた。

乱れる呼吸を整えてみんなの元へ駆け寄る。

「はあ、はあ……お、おい」

連戦に次ぐ連戦で体力が底を尽きそうだ。おまけに結構な距離走った。

両膝に手をやり粗い呼吸を吐く俺にようやくみな気がづく。

「……仲間は……みんな無事……か？」

消え入りそうな声でバランが話す。

宙へと伸ばされた腕をダイは掴み、涙を流しながら答える。

「みんな……みんな無事だよ、ヒュンケルだっている」

「……そうか……だがダイよ……わたしはもう助からん……みんなを困らせてはいかん……」

その言葉に息を飲むダイと悲痛そうに顔をそむけるポップ達。

みるも無残な状態のバルンの肉体は、もはや回復呪文すら意味を成さない。

「……わたしの体には生命力すら残されていない……いかなる治療も手遅れ……だ」

「う、嘘だ……嘘だ」

傷つく父の前にダイは涙を流す。その涙を見てここで再び覚悟を決めた。

バルンを救う。俺は今日そのために来たんだ。

バルンを救えばダイに双竜紋は宿らないだろう。だけどそれでいい。

ダイにこの世界の行末を背負わせちゃいけない。たった一人に責任を押し付けて、辛い思いさせて、それが必要なだって誰が言える？

アバンはダイの双竜紋が必要だって言ってたけど、それでも俺がバルンを助けたいと言った時反対しなかった。

もしかして試されていたんじゃないかって直前になって思う。だってあの人、俺よりも他人に甘そうだし。

とにかく、今この時から原作とは明確に違う未来を歩むことになる。

だけど俺は必ずバーンを倒してみせる。これはその決意表明、バーンを俺が倒すとい

う意志の現れだ。

「トーヤ!? な、なにをー」

「おい、バラン!! 勝手なことやってんなよ、育児放棄して挙句こんなところでサヨナラか? いい年して常識つてもんが足りないじゃねえか? 里親に菓子折り持つて挨拶くらいしとくのが筋つてもんだぜ!!」

ダイの言葉の先を待たずに俺は“大天使の息吹”を使う。

2 回目の大天使。カードから現れた天使は、神々しいまでの輝きを放つ。

「バランの傷を治してくれ! 今すぐに!!」

ーお安い御用。ではその者の身体を治してしんぜようー

頼もしい言葉だった。天使が一息吹きかけると、瞬く間に傷が癒えていく。

本当に一瞬だった。死にかけていたバランの傷はすっかり消えていた。

「なっ……わ、わたしはーこれは……一体……こんなことが……奇跡か……」

横たわったまま両手を動かしてバランは呆けている。

ダイは涙を流してバランの回復を喜び、みんなもまた二人の様子にうつすら涙を浮かべている。

そんな二人をみて確信する。

この選択は間違いなんかじゃないのだと。

## 79 大魔王

可怪しい。

心の奥底に小さなしこりを感じた。そしてそれは時が過ぎる毎に大きくなっていった。

違和感の正体も分からずに、焦燥ばかりが募っていく。

俺の心を映すように暗雲が立ち込める中、そんな俺の胸中など知る由もなく、ダイ達は次の戦闘に向けて準備を行っていた。

「ダイ、今度はあなたの番よ。こっちにきて傷を見せて」

マアムはダイの血の滲んだシャツに気が付き、腕をひっぱると地面へ座らせた。

ダイのシャツをまくり上げ、マアムは呪文を唱えるため腹部へ手を添えた。ほんのりと灯る呪文の光によって徐々に傷口が塞がっていく。

患部から覗く痛々しい傷をみて、ポップは僅かに顔を青くした。

「オメエも重症だったんじゃないかねえか。なんで言わねえんだよ」

「あ、うん。でもあの人の方が大変だったから忘れてたよ」

「はあく、呆れるぜまったく」

肩を竦めるポップを見上げて、ダイは申し訳程度に笑って返事をする。どうやら自覚があるみたいだ。

だけど自分の父親が目の前で死ぬ寸前だったんだ、仕方ないことだと思う。

当の balan はというと、すっかり元氣になったかと思つたら劍の手入れなんかしている始末。せつかくの和解のチャンスだというのに不器用なヤツ。

それでもこの二人が打ち解けるのは時間の問題な気がする。

ダイの方は話す切欠が見つからないだけで、かつて死闘を繰り広げたことなど気にしてなさそうだ。

balan は劍の刃紋を指でなぞり、そして眉をひそめる。

「妙だな」

「っ!? どうかしたっ?」

そのつぶやきに俺は過剰に反応した。もしかして balan も俺と同じように違和感を感じているのかもしれない。

balan は目を僅かに大きく開けてたじろいだ。

なるべく平静を装って話しかけたつもりではあつたが、どうやら驚かせてしまったらしい。

「た、大したことではない。刃が傷んでいたのが気になっただけだ」

「ーそ、そうか」

なんだ、そんなことか。

そんなのキルバーンをぶった斬った時の血糊のせいじゃん。何を今更……。

ってそうか。キルバーンは俺のところに来ていたから、バランは原作と違って刃にダメージがあることを知らないんだ。

一応説明しておくか。

「それはキルバーンを斬ったせいだよ。自慢気に語ってたからな。『ボクの血液は魔界のマグマ並みの高熱と強力な酸を含んでいる』ってね」

原作でだけど。

「奴がまだ生きていたことにも驚いたが……ハドラーの首を落とせなかったのはそういう訳だったのか」

バランとキルバーンがやり合ったことはキルバーンから聞いたことにした。不審がられるかとおもったけど、バランは謎が解けてスッキリしてみたんだ。不審が

その後もバランは何度か刃を指でなぞり、すぐに修復は不可能と悟ったのか諦めたみたいだ。

地面に突き立てるように剣を刺し、俺へと向き直った。

俺を正面から見据えるその瞳は、戦士のそれでは無かった。とてもこれから戦いに赴



く人の顔とは思えない。

どうかしたのかと心配になり声をかけようとした矢先、僅かに早くバランスが口を開いた。

「トーヤと言ったな。命を救ってくれたこと感謝する」

「え？ あ、ああ」

思いがけない一言に呆けたように口を開ける。

鳩が豆鉄砲を食ったような俺の顔は、他人から見たらさぞ間抜けに見えることだろう。

「だが見ての通り私はもう大丈夫だ。だからそんなに不安そうな眼差しを向けてくれるな。気になって仕方ない」

はい？

一体何の話をしているんだろう。不安そうな眼差しって……そんなものを向けた覚えはない。

何も言葉を返せずにいると、クロコダインは豪快に笑いながら俺の横に並び肩に大きな手を置いた。

「ぐっはっはは、そんなに腫れ物を触るようにされると居心地が悪いと言っているのだ。他人を思いやるのは結構だが、少しは当人の身になってみる」

だから何の話をーああ、なるほど。

さつき妙だと言ったバランスに詰め寄ったのが、体を心配してのことに見えたわけか。ぜんぜん違うわ、気持ち悪い。

本当に違うのでバランスに否定してみせたのだが、周りの皆からは照れ隠しに見えたの  
だろう。

「何度も違うと繰り返す俺に対し、そういうことにしておいてやろう」という空気を  
ひしひしと感じる。

「だーから違うってのに。それよりほら、皆は何か変な感じしない？俺はさつきから  
それが気になってるだけだったの」

ムリヤリ話題転換して、俺が感じていることを素直に皆に伝えてみる。

言われてそれぞれが違和感らしきものを一緒に考えてくれたのだが、誰もその疑問を  
解消するには至らなかった。

「ならよお、いつその事一旦引き返すってのはどうだ？」

「ポップの言うことにも一理ある。最初に想定していた事態とは大きく変わってしまった  
たからな」

弱々しく逃げ腰となったポップに意外にもヒュンケルが賛成とばかりに頷く。

マアムとクロコダインはその言葉に少し悩み、そして言いづらそうにして意見を述べ

る。

「わたしは反対よ。ここまで来たんだもの、一気に攻めこんだ方が良いと思うの」

「うむ。ここで引けばまた敵は態勢を整えてしまうだろう。キルバーンまで倒しているのだ、今の魔王軍の戦力は大幅に衰えいると見ていい」

なるほど、そういう見方もあるな。

真逆ではあるがどちらも正しい考えに思える。

俺はどちらに賛同しようか迷っていた。バーンとの戦いが始まってしまえば逃げる  
ことができなくなる。撤退するのであれば今が唯一のチャンスなのだ。

「ねえトーヤ、回復アイテムってまだ持つてるの？」

「……戦いの傷を癒やすために結構使ったからなあ。それに爆発やら戦いの衝撃やらで  
ほとんど割れてしまった。残りは体力を回復させるエリキシル剤が1つと、さつきバラ  
ンにも使った大天使の息吹が1回きりだ」

カバンから液体の入った小瓶を出してダイに見せる。

次にダイはマアムの方を向き、同じく質問を浴びせた。

「マアム、まだ魔法力は大丈夫？」

「ええ、大丈夫よ。それにここへ来る前にレオナに頼んで魔弾丸にベホマを込めても  
らったわ」

「へえ、そんなことして貰つてたのか。お前にしちや用意がいいじゃねえか。空いている弾丸があつたら俺も呪文をこめてやるよ」

「一言余計よ！……それに弾丸には回復呪文しか入れていないの。並みの攻撃呪文じゃこれからの戦いでは通用しないもの」

確かにギラとかヒヤド呪文を詰めておくよりも、その方が有用だよな。

メドローア詰められれば良いのに。

などと考え事をしている間に、ダイは何かを決心したようだ。その眼差しからは力強さを感じる。

「みんな、このままバーンと戦おう！」

「ず、随分と自信があるみてえだけど、勝算でもあるのか？」

「勝算って言われるとちよつと違うんだけどさ。こっちには竜の騎士が2人もいるし、それにみんなだつて万全の状態じゃないか。回復する手段だつてあるし、これならきつと大丈夫だよ」

自信満々に言い切るダイに心の奥底から勇気が湧いてくる。

それは他の皆も同じなのか、先程までの険しいだけの表情とは違い強い闘志を感じた。

「うっしやあ！ やつてやるかつ、どのみち何れは戦うことになるんだからな！ ここ

まで来て引き返せませんでしたの」

「何言ってるのよ、さつきまで青い顔して逃げようとしてたくせに」

あー、また夫婦漫才が始まった。これが始まると長いんだよな。

ダイもそう思ったのか、苦笑して二人で顔を見合わせてしまう。

ーしかし、それは突然やってきた。

血も凍るような威圧感。経験したことのない圧倒的なまでの禍々しい感覚が襲い来る。

「……………」同控えよー 大魔王バーン様がお会いになられる」

いつの間にか姿を現したミストバーンの声が響く。

殺意と悪意に満ちた風が駆け抜け、気が付けばそいつはそこに立っていた。

無機質で無表情。そして燃えるような、凍るような視線。

誰もがその老人から目を逸らせなかった。

その老人は極自然な仕草で俺達の方へと手をかざす。

「如何っ!?! 離れろ!!!」

バランスが絶叫する。しかしその意味を理解することは出来なかった。

「……………ツ!?!」

一瞬だった。

ほんの少し老人から闘気が迸ったかと思うと、光となってダイを透かすように抜けていった。

奇妙な光景だった。

辛うじて立っていたダイは数歩後退してから耐えられずに倒れ込む。

全員がその一部始終をただ見ていることしか出来なかった。

「拍子抜けだな。竜の騎士と言ってもこの程度か」

老人——大魔王バーンの言葉に我に返る。

そして、そんな俺たちを嘲笑うかのように杖から怪しい光と紫電が迸り、バーンは簡潔に告げた。

「よくぞ此処まで来た。見事である。褒美に、余が相手をしよう」

## 80 懸念

「……………うう……………ぐっ」

倒れたダイからうめき声が漏れる。

大丈夫だ。不意を突かれたけど、たった一撃で戦闘不能になるほどダイは軟じやない。  
い。

マアムは直ぐにダイの元へ駆け寄り回復呪文を唱えた。

ダイはマアムに任せておけば大丈夫だ。大丈夫、大丈夫……。繰り返し自分に言い聞かせ、俺は目の前の大魔王に集中する。

……………くっ。こうして対面するとよく分かる。

しわがれた爺さんの姿をしているが、こいつは真正正銘の化け物だ。

ビリビリと肌を焦がすような威圧感に闘争心が呼応するように膨れ上がる。

あと少し。あと少しで世界は平和になるんだ。

そしたら漸く俺はこの世界で何の不安も無く平穏に生きていくことが出来る——出来るのに目の前に立つ存在は山のように巨大な壁となり阻もうとする。

「……………ははっ。どうした？ さっさとかかって来ぬか」

ひとりとして動かない俺たちを嘲るようにバーンは笑った。

まるで蟻を踏みつぶすのと変わらないとでも言いたげなその態度。どこまでも癪に障りやがる。

「余裕こいてるんじゃないよ！」

「待てッ！ 迂闊な攻撃は——」

バランスの制止を無視して俺はバーンへ向かう。

恐怖や躊躇いをすべて怒りへ変換して一気に爆発させる。

「……ッ!？」

何も考えずに放った俺の拳は、それ故に最高の速度と最大の威力を宿していた。

想像以上の威力だったのか、光魔の杖で受けたバーンはその態勢のまま後方へ飛ばされる。

しかし驚いたのはむしろ俺自身だった。

追撃することも忘れて呆けたように飛ばされるバーンを見る。

だが流石にこの程度でダメージを受けるバーンではない。優雅に着地すると杖の矛先を俺へと向き直る。

杖を掴んでいた手を離し、そつと俺へと向けた。

さつきダイを昏倒させたのと同じ——いや、その倍以上の闘気が光となって襲いかか



る。

応戦するべく構えようとして、俺は漸く武器すら抜いていないことに気がついた。

「ーッ!? やべっ」

慌てて堅による防御へ切り替え、迫り来る鬨気に身を強張らせて衝撃に備えた。鬨気の奔流が一身を呑み込み、まるで濁流に流されるように前後不覚となる。

そこから先は反射に近い行動だった。空宙をとばされながら木刀を抜き、思い切り付きだした。木刀の切っ先は地面へと突き刺さり俺をその場へと繋ぎ止める。

「……ぐツ、クソ……痛え」

木刀を杖にして立ち上がり舌打ちする。

「お、俺たちも往くぞー！」

ポップが叫び声が響く。

それを皮切りにヒュンケルとクロコダイスが動いた。

俺の横を通り過ぎた二つの陰は瞬く間にバーンへと迫っていく。

そして更にそれを追い越してポップの呪文がバーン目掛けて放たれる。

その光弾は二人の頭上を通ると、そのままバーンへと直撃して爆発した。

土砂が舞い上がり、圧された空気が風となつて拡散する。

同時にクロコダイスが雄叫びを上げて斧を振るう。

「せええりやああー！」

粉塵を裂いて突き進む斧の一撃は、鈍い音を響かせてその動きを静止した。

「バ、バカなツ!？」

視界が開けた先には素手で斧を受け止めるバーンの姿があった。

そのまま手を滑らせてクロコダインの手首を掴むと捻るようにして態勢を崩しにかかる。

「はああああ!! ーッ」

バーンが攻撃へ移る隙を突いてブラツデイスクライドの態勢へ入るヒュンケルだったが、クロコダインの巨体をぶつけられ地面を転がった。

「喰らえ、このヤロウ!! メラゾーマツ」

二人を庇うように割って入ったポップは呪文を放つ。

その様子にはバーンは口元を歪ませて爪の先から小さな火の粉を飛ばした。

火の粉はその熱量が生み出した気流により容易くポップの火炎を弾き飛ばし、そのままの勢いでポップの胸元で炸裂した。

「うわああああああーッ」

「ーッああ」

「ぐあああッあああ」

火の粉はから溢れんばかりに噴き出した炎の渦にポップと後ろにいたクロコダイインとヒュンケルを瞬く間に呑み込むと竜巻のように宙へと巻き上げていった。

炎の威力が弱まると、三人は地面に勢いよく地面に叩きつけられる。

衝撃と全身に負った火傷により呻きながらも起き上がろうと必死にもがく。

本当に一瞬だった。

まだ攻撃を開始してから一分も経っていない。

それなのに俺たちの過半数は既に地に伏していた。

「あ、あんな小さな火の粉みてえなもんで、俺のメラゾーマを弾いたってのかよおつ

……」

「今のはメラゾーマではない……メラだ。これで力の差が理解できただろう」

バーンはつまらぬ気に告げると、右手に炎を纏った。

「そしてこれが余のメラゾーマだ。想像を絶する威力と優雅なる姿から、魔界では太古の昔よりこう呼ぶ……カイザーフェニックス!!」

三人を守るため最大出力の堅で巨大な火の鳥を受け止めるため身構えた。

すると肩を並べるようにバランも横に並び竜鬨気を輝かせる。

カイザーフェニックスが包み込むように翼を広げて目前へと迫る。

身を強張らせて衝撃に備えるーがカイザーフェニックスは目の前で弾けるように

裂けて霧散した。

……今のは？

カイザーフェニックスを吹き飛ばした正体を求めて振り返ると、そこには剣を振り抜いた姿勢で立つダイの姿があった。

「皆、あきらめるなつ。もう一息だ、俺たちなら絶対に勝てるッ！」

「ダ、ダイ!?!」

深いダメージを負っているはずなのに、ダイを見た瞬間に笑顔を取り戻した。

ダイと一緒に戦うため、ポップ達は必死に立ち上がろうとする。

「直ぐに治すわ」

やや遅れてマアムがやってきて、魔弾銃を構えると三発連続して弾を撃つ。

ベホマの光に包まれ、先程までの傷が嘘のように消えていった。

「よっしやあ! 仕切り直しだけ、大魔王お! 降参するなら今のうち………な、なんだよ、何とか言いやがれ!」

「……大したものだと思つてな。お前たち人間と言う者は少し希望が見えたと思えば途端に吠えて喚き出す。それがどれ程無駄なことだとも知らずに」

「な、なんだとお!?!」

ポップは気丈にもバーンへ言葉をぶつけるが、まるで相手にされていなかった。

しかし可怪しい。いくらバーンが強くても、この状況で変わらせずに笑っていられるなんて。

カイザーフェニックスだつてつい今しがたダイに防がれたんだぞ。

俺たちは確実にバーンを追い詰めているはずだ。……なのにどうして。

「しかし……どうしたバーンよ。随分と大人しいではないか。もつと攻めて来い。竜魔人はどうした、ギガブレイクは？ よもや怖気づいたわけでもあるまい」

……今度はバーンを挑発。一体何を考えているんだ。

その不可解なバーンの言動にバーンも僅かに逡巡した。

しかしそれも一瞬。雷鳴が轟き、稲光が眩く明滅した。

「傲つたな大魔王。竜の騎士力と恐怖をその身に刻んでくれるッ」

竜魔人と化したバーンは、紫電を散らしながら剣を構える。

……竜の騎士が二人。そして俺は霊丸を二発残している。

ミストバーンもずっと控えたままだ。バーンが呼ばない限り動くことはないだろう。

ならば当初の予定通り、このままミストバーンに真の姿を晒させること無く一気にバーンを殺す。

最高の状況であり、俺が望んだ状況そのものだった。

だというのに、何故だろう。

心に影が差すように感じるのは。

## 81 反撃の狼煙

俺たち七人の攻撃に、バーンは先とは違い苦戦を強いられている。

「海鳴閃ツ!!」

「ハアアアー海波斬つ」

ヒュンケルとダイは威力を落とし、速度重視の戦法に切り替えた。

間合いの外から一気に接近してのヒット・アンド・アウェイで間断なく攻め続ける。

俺・クロコダイン・マームの三人は二人のサポートだ。自らの身をブラインドにして、盾となる。

当然ダメージの蓄積は半端じゃないが、ここが正念場だ。堪えきつてみせる。

ポップはというと、遙か後方でメドロアを構えて必殺の瞬間を狙っていた。

一撃必殺のメドロアは、それだけで相当なプレッシャーを与えていることだろう。

バーンは意識をポップから外すことは出来ない、ポップがそこに居るといふ事実が最大級の牽制となっていた。

そしてこの戦い、一番の鍵となっているのはー。

「ーック!?!」

大空高く飛び立ち、獲物を狙う鷹の如く、超スピードとパワーでバーンを翻弄させているバーンに他ならない。

海波斬や海鳴閃などとは比べ物にならない速度。それが奇襲する様に攻め立ててくるのだ。いくら大魔王とて俺たちを相手取りながら防ぎきれものではない。

バーンに肩口を大きく切り裂かれたバーンは苦痛に顔を歪めながら怒りに眼を細める。

傷はあつという間に塞がってしまうが、それでも体力は削れているはず。その証拠に、僅かずつであるが動きが鈍くなっている。

「閃華裂光拳っ!!」

「おらアアアアッ」

「うおおおオオオオ!」

全くの同時だった。

“勝てる”ーその確信がもたらした必然だった。あるいは、心の弱さだったのかもしれない。

目の前に現れた勝利に俺たちは飛びついてしまった。

ブラインドに徹していた筈の俺たちは、示し合わせることもなく、完全に同時に攻撃



回った。

しかし、防御から攻撃に転じる僅かな隙を、バーンは逃さない。

光魔の杖を手放すと、バーンは空間を埋め尽くさんばかりの光弾を生み出し、四方へ爆散させる。

「イオラの嵐だッ、みんな伏せろ!？」

遠くからポップの叫び声が届く。

イオラの嵐ー否、そんな生易しいものでも無い。

空間が爆発したかの様だった。

着弾を待たずして爆発したそれは、次々と宇宙で連鎖爆発を繰り返し、目に見えるすべて吹き飛ばした。

+

「惜しかったな、もう少しだったのに」

嘲笑うバーンの声に眼を開くと、目の前には竜鬚気を爛々と輝かせたバランとダイ。そして、傍らには俺のように地に伏すみんなの姿があった。

マアムとクロコダインは気絶しているのか、ピクリとも動かない。ポップとヒュンケ

ルも、意識こそあるものの動ける状態では無さそうだ。むしろ、まだ生きているのが不思議なくらいだった。

疑問と共に、朦朧とする意識が少しずつクリアになっていった。

「っ?! お前らっ何をー」

やっているのか、と問おうとするも、そんなものは愚問でしかなかった。

「無事だったんだね、トーヤ」

未だ続いている魔法攻撃を、竜鬨気で弾き返して、ダイは小さく笑った。

苦しさと嬉しさが混ざったような笑顔が心に痛くのしかかる。

完全に足手まといとなっていた。

俺たちがいるから二人は攻撃できず、自分たちの身を守ることさえ出来ないのだ。

「ヒュンケル、ポップ……動けるか」

「……くっ……な、何とかな」

「あ……ああ、俺もだ……っ……」

二人に声をかけると、明らかにムリをした声が返ってくる。

俺も軀にムチを打って立ち上がると、マアムとクロコダインの様子を確かめた。

「大丈夫、息はある。二人共まだ生きている」

安堵するように息を吐き、皆に二人の無事を伝える。

それも束の間、直ぐに気を引き締める。この状況を打破しなければ意味が無い。だが、そんな時間はもう無さそうだ。

「ううッ……くッ……」

「ダイノ!?!」

ダイが片膝をついて苦悶の声を発する。竜鬮気を使いすぎたんだ。もうダイに戦う力は残っていないだろう。バランはまだ大丈夫そうだが、一人じゃとても捌ききれれる物量じゃない。

もう戦えるのは俺とバランの二人だけ……。

「やべえな、何とか反撃しないと……このまま全滅だぜ」

「しかし、イオナズン級の呪文の応酬だぞ。躲して近づくこともままならん。かと言ってバーンの魔法力が尽きるなど有り得んだろう」

「ここは、俺に任せとけ」

立ち上がり、バーンへと向かおうとする。

すると、俺の腕をダイが弱々しく掴んだ。

「どうするの……あんなの避けられっこないよ」

「そうも言つてられねえよー俺が突つ込むから、その隙に皆と安全な場所に」

「無茶だよッ、待ッー」

制止するダイの言葉を遮るように駆ける。

雄叫びを上げ、バランの横をすり抜けると、全力で降り注ぐイオラの弾幕へと飛び込んでいる。

「愚か者め、避ける隙間など無い。塵も残さず消し飛ばしてくれ」  
バーンの呪文が飛来する。

奴の言葉通り隙間なんてまるでない。無数の爆発が起こり、爆炎が舞う。

「トージャツ!!」

ダイの心配する声が耳に届く。

そんな声に応えるように、俺は大きく叫ぶ。

「いたくねー!! 避けらんねーなら、ガマンするだけでー!」

“幽助先生”の機転を思い出し、光弾の壁を突き破る。

しかし、それは言葉通りやせ我慢だった。呪文の威力は決して弱くなかった。一撃受ける毎に肉は削れ、血に塗れていく。

「よくやる。しかしその体たらくでは余に触れることすらできぬぞ」

そんなこと言われなくても分かっている。ポロポロになったシャツは血でベツタリと肌張り付いて不快感マックスだし、腕なんかは惨たらし過ぎて直視するのも憚られるくらいだ。

バーンは光魔の杖を構えると、優雅な所作で振りかぶる。

「甘く見てると痛い目見るぜ！」

「その威勢だけは認めてやろう」

残り三步。

もはや感覚すら無くなった脚で地面を蹴って、それでも勢いは止まらない。むしろ更に加速する。

併せるように光魔の杖が、綺麗な弧を描いた。

残り二歩。

槍のように遠い間合いから繰り出される一撃を、ボロボロの左腕で腰の木刀を抜き放ち、受ける。

その破壊力と切れ味により、長年愛用した木刀は容易く砕け散った。木片が飛び散り、宙を舞う。木刀と共に深々と切り裂かれた左腕の切り傷は、炭化して鮮血すら出なかった。

「これで終いだ」

「うるせえってんだよッ」

叫び、俺は右手に持っていた“魔弾銃の弾頭”を握り潰した。

潰された弾頭からはベホマの光が溢れ、俺の傷ついた躰は回復していく。



## 82 最悪の事態

「つらああああアアアアアアアアアア!!!」

全体重を載せた拳が顔面にめり込んだ。

たたらを踏んでよろめきながらも、呪文を唱えるため手を掲げるが、足元はふらふらと覚束ない。

ダメージは相当なものと窺える。

畳み掛けるべく駆け出そうとして、後ろから首根っこを掴まれた。

「うげッ!?!」

一体何を考えているのか、千載一遇のチャンスをバランによって阻まれる。

「な、なにすー」

「黙っていろっ」

抗議の声も虚しく、俺は猫よりもぞんざいに掴まれたまま、バランに連れられ空高く飛び上がる。

“止まってくれ”と言おうとするが、その前に背後から派手な爆発音が響いた。

つい先程まで俺が居た場所……バランがいなければ直撃だった。

「ようやく向こうも本気で来るらしいな」

「なにが………っ!? くそっ、時間切れか」

はるか上空から見下ろすと、そこにはバーンと一緒に立つミストバーンの姿があった。

しかもフードを剥いだ状態で、だ。

ミストバーンのやつ、やっぱり形勢が不利と判断するなり参戦してきやがったか。

こうなる前に決着をつけたかったのに……。

「ミストバーンには気をつける。もしかしたらバーンよりも強いやも知れん」

「……ああ、知ってるよ」

俺はバランに吊るされたままダイたちを見下ろすと、ポップがママムの魔弾銃を片手にみんなを介抱していた。

よし、これでみんなまた動けるな。

「バラン、とりあえず降ろしてくれ。これじゃ満足に動けない」

「わかった」

「ちよっ!! 落とせとは言ってねえエエ!!」

一瞬の浮遊感の後、俺は真つ逆さまに落ちていく。



頭から地面に突っ込みそうになるのを猫のように躰を丸めて回転させると、見事に両足で地面に着地することに成功した！

踵から頭の天辺まで衝撃が抜けてじんじんと痺れる脚に呻く。

「だ、大丈夫？」

「あ、ああ。でもあとで病院行かなきゃ」

心配するダイから顔を背けて滲む涙を拭う。

普通あの高さから落とすか？ バランのやつ絶対に頭おかしいぜ。あとで絶対文句言ってる。

痛みに耐えてロボットのようになごこちなくみんなの元へ歩みを進めると、ダイ以外は俺なんか完全無視でミストバーンの方を向いている。冷たいなあ。

「オレたち軍団長の中でもっとも謎の多い男だったが……人間……いや、魔族か」

「この気配……あの二人、似ている」

「似てるって、バーンとミストバーンがか？ まさかー」

「ーハイハイそこまで!!」

パンパンと手を叩いて何やら考察を始めたヒュンケルとクロコダインを止める。

今はそんな話をしてる場合じゃないから。

「ポップ、メドロアの準備をしてくれ」

「え？ あ、ああ、わかった」

頷いて準備を始めるポップを尻目に俺は手を口に添えて大声で叫ぶ。

「 balan、お前も降りてこいよっ!! おーい！ って……あれ？ 聞こえねえのかな。おーい！」

何度も怒鳴るように叫んでいるのに balan は宙に浮いたまま一向に動く気配がない。

なんだってんだよ、早くしろよ。

「な、なんだあ!？」

ポップのマヌケな声に視線を再び balan たちへ戻す。

すると予想だにしない出来事が起きた。

ミスト balan の躰が発光し、ブレて balan の躰と重なっていく。

「ま、まさか!？」

光の先には吐き気を催すほどの圧倒的存在感。

間違いない、これは balan の真の姿。一体何故このタイミングで……。

「お前たちの力は十分評価に値する。敬意を表して本来の姿で相手してやろう」  
balan の静かな声が辺りに響く。

困惑しながらも頭を振り、俺は再度呼びかける。

「 balan 何してる!! 早くーってお前はッ!？」

「……これは一体、どうなっている」

バランスへ向かって叫んでいると、そこにはいつの間にも現れたのかハドラーと親衛騎団十ヒムに首を締められたザボエラの姿が見えた。

「どうやらこの状況に驚いているようだが、面倒くせえこっちは取り込み中だ。」

「だがナイスなタイミングと言えなくもない。」

「よく聞けッ、ハドラー!! バーンは自分の軀を二つに別けて片方をミストバーンに預けてたんだ! あれはミストバーンから預けてた肉体を元に戻した本当の大魔王の姿だ! つまりメチャクチャ強くなったってことだ! 倒すから協力しろオツ!!」

「ーっ!?」 肉体を二つに……ミストバーンが……」

今の状況をとでも簡潔にわかりやすく大声で説明してやると、ハドラーを含めこの場にいる全員が少なからず動揺します。特にバーンの視線が痛いほどに突き刺さるが気にしない。

「な、なにを突然訳の分からねえこと言っつてやがる。それになんでテメエ等に協力しなきゃならねえんだ」

「うるっせえなクソゼロ歳児! ハドラーの体内には黒のコアって言うガチでヤバイ爆弾が仕掛けてあって、さっきのもの凄い爆発はそのせいなの! それ仕掛けたのバーンだし、お前らの大将が殺されかけたんだからお前らが協力する理由としては十分だろう

が！」

疑問を投げかけるヒムを勢いで黙らせる。

良いぞ運が向いてきた。 balan もいるしダイもベホマで回復済み。 しかも復活したハドラーは。 パワーアップしている筈だし、親衛騎団だっている。 バーンが真の姿になるのは想定外過ぎる事態だったが、このメンツなら勝機はある。

思わず顔をほころばせてダイ達を振り返ると、何故か皆の表情は硬いままだった。  
なんだよ……どうしたんだ？

「……………」

「……………え？」

いらえは短く単純なものだった。

聞こえなかった訳じゃない。ただ、信じられなかったのだ。

当たり前だと思っていた。

アバンにも言われていた。なのに俺は“心配ない”“大丈夫だ”と言って聞く耳を持たなかった。

軽んじていた、高を括っていた。それがどんなに甘い考えか——。

「聞こえなかったのか？ 断るといったのだ」

——信じて疑わなかった。

## 83 影

「――断ると言ったのだ」

ハドラーは何を馬鹿など、さも当然であると言うように断言した。

一切の迷いのない言葉に動揺するトーヤを他所に、ハドラーはバーンへと向かつて歩みを進める。

「大魔王バーン、あなたに尋ねたいことがある」

「そちらの話は良いのかな？」

一笑に付す態度にハドラーは顔を歪ませた。

体内に埋め込まれていた黒のコアは目の前の男の仕業である。忠誠を誓ったハドラーは何かの間違いあつて欲しいと心の底では願っていた。

が、それもこの瞬間まで。直前まで抱いていた疑念は完全に消え去った。やりきれない思いがハドラーの胸中を駆け巡り、そしてそれは怒りへと転換された。

「どうした、そんなに血相を変えて。まるで余を憎んでるような目つきだな」

「ヌケヌケとツ!!」

バーンの嘲りに怒りは一気に臨界点を超える。バーンを焼き尽くすため熱波の本流

を奔らせるがー

「よく考えてもみろ」

「ツ!？」

僅かにバーンの指が動くと、熱波は微かな風を残して掻き消えた。

「お前は本来アバンとの戦いに敗れ、とうの昔に散っている筈だった。それを余の力によつて生き長らえることが出来たのだ。感謝こそすれ恨むなど見当違いではないのか」

「よく言う」

噛み締めた歯はギリギリと音を立てて今にも碎ける寸前だ。

「ふっ、お前の目的はなんだ。黒のコアを埋め込み、お前の決闘に横槍を入れた腹いせか？」

「無論のこと。……がそれだけではない」

自身の攻撃を容易く封殺したことを意識の外に追いやり、忌々しく吐き捨てる。

「黒のコアの爆発……もしバランスが威力を抑えなければどれだけの被害になつていたと思つている」

「仮に黒のコアが本来の威力を発揮したとしたら地上の十分の一は消えていただろうな。だがそれがどうした。地上がどれだけ損壊しようと余には何の関係もないこと。」

それよりもお前の口から被害などという言葉が出て来ようとは驚いたな。騎士道精神の次は勇者の真似事でもするつもりか」

「オレは正義感から言っているわけではない。ただー」

何故そんなことをしたのか。その問いを遮りバーンは続きを口にする。

「決まっている。邪魔な地上を消し去り、魔界をここへ浮上させるためだ」

「地上を!? 何故そんなことを……あなたの目的は地上を支配することではなかったのかッ!」

「愚問だな。余は初めから地上になど興味はない。あるのはその先ーすなわち、天界を滅ぼすことにある」

「ならば何故最初からオレたちにそのことを話さなかった。天界を攻めるといふのならオレたち魔王軍も……」

「フハハハ、魔王軍など地上を消し去る余興として戯れに作つたまでのこと。お前たち程度の連中が天界との戦いで役になど立つものか。さあ、他にもあるのなら言ってみるといい。冥土の土産と言うやつだ」

「いや……それだけ聞ければ後はいい」

僅かに瞑目すると、その胸中を吐露し始めた。静かに、しかし厳かに、嘘偽りのない真実を。

「確かにあなたの言う通り、オレはかつて命を救われた。そう、感謝しているとも。命を賭して戦えというのなら喜んで戦場に身を投じる程にな。しかし……しかしだー」

ハドラーはバーンに傾倒していた。先のバランとダイとの一戦、力及ばずに果てたとしてもハドラーは本望だったと言いつける。だからこそ感じる無念。

横槍を入れた？ 黒のコアを埋め込まれた？ そんなことは些末事だ。

主の命ならばそれを投げ出すのは至極当然のことであり、敵の排除は最優先。故に赦せないのはただ一点。

魔王軍などという幻想で唆した。あまつさえそれを戯れと曰ったこと。それだけは決して赦せることではない。どんな理由があれー

「このオレをコケにして良い道理など何処にもないッ!!」

如何に強大な力を持つ相手だろうと変わらぬ。死をもって償わせるだけ。

「余に手向かうか。構わんで、それが出来ると言うのならー来い」

十

「一体どうなってるんだっ!?!」

「俺に聞いてもわかんねえよっーあいたっ」



目の前で始まった戦いにダイは困惑の声をあげた。ポップも飛来する砂塵から身を守るべく縮こまってダイに叫ぶ。

次々と目まぐるしく変わる状況に誰もが多かれ少なかれ迷い、動揺を隠せない。

それは俺も同じだ。

ハドラーの協力を得られないことは明白だった。しかしどうしても諦められない自分がいる。

前世の知識からハドラーのことを俺は知っている。例え表面的・立場的に敵対していても、その根幹には正義の心と意思があると信じた。

だけどそれは漫画の中での話である。いや、正確には俺が漫画を読んで感じた印象に過ぎない。

結局アバンの忠告通りか……。

だけど協力を得られなくても構わない。

どちらにせよバーンと事を構えているのは同じこと。ならばこのまま全員でかかればなし崩し的に全勢力を結集し臨むことが可能である。

だからここまでは予想外ではあるが、予定調和の範囲内でもある。

戸惑いながらも考えをまとめてみると、誰かがゆっくり近づいてくる気配を感じた。その誰かは後ろから俺の肩に手を置いた。

「なんだ、どうかしーぐあッ」

視界が真つ白に明滅して一瞬の浮遊感に苛まれた。

上も下も分からずに、それでも勝手に動いた手が鼻孔から流れる液体を押しさえていた。タイヤの焦げたような臭いを感じて懐かしいな、なんて場違いなことさえ考えていた。

「な、なにをしている!？」

誰かを咎めるクロコダインの声が耳に届く。その声を余所に、俺は今殴られたのだと他人事のように考えていた。同時に、何故殴られたのか分からなかった。

数回頭を振ってから鼻血をぞんざいに拭って面を上げる。左右に揺れる視界の先で目に映るのは幽鬼の如く佇む男の姿だった。

「お、おい……：テメエまさか」

なんとか声を絞り出す。しかしそれ以外は指どころか筋肉一本までも打ち付けられてしまったみたいに動かない。

呼吸するのも忘れてしまうほど。ともすればバーンのことすら些事に思えてしまうほどの悪夢が目の前に立っていた。

こんなのは夢だ。悪夢に違いはない。絶対に嘘だ。質の悪い冗談だ。なあ、そうだよな？ 冗談だよな？

「バーン様に仇なすモノは死ね」

そんな俺の一縷の望みをかき消すように、その男は冷淡な言葉を紡いだ。

肌は浅黒く、額には黒い影が帯となっている。それはミストバーンに操られていることとの証明だった。

「お前と戦えつてのか。冗談きついで、なあ？」

躰から暗黒闘気を蒸気のように揺らめかせる balan を見る。

## 84 敵と味方

すべては思惑通り。

ミストの存在を感じ取り、バーンは口許を吊り上げる。

この瞬間、最強の魔王軍が誕生した。地上も魔界も天界も、およそあらゆる場において敵うものなど存在しない。

「愉快な反面つまらんな。なあ、ハドラーよ。お前もそう思うだろう?」

眼前に迫る凶刃。その威力をこともあろうに掌で受けたバーンは、世間話のような自然な口調で語りかける。

それもその筈。なぜならハドラーでは命を賭してもバーンに傷ひとつ付けることは出来ない。つまりこれはバーンにとって戦いですらなかった。

「竜の騎士を手に入れたとなれば、余の勝利はどうあつても覆らない。ここまでワンサイドゲームでは面白味に欠けるといふものだ」

「舐めるなッ」

氣勢に呼応し噴き出す魔炎気は敵よりも己の躰を蝕んだ。躰の至る所は罅割れ崩れていく。

同時に再生が始まるが、崩れる速度の方が早い。このままでは遠からず全身は灰と  
なつて消え去るだろう。

それでもハドラーは止まらない。否、むしろ一層激しく猛り狂う。

「ハドラー様ツ?!」

ヒムが叫ぶ。

これ以上は力を使えばハドラーは死ぬ。そして、そこまでやったとしても結果は火を  
見るより明らかだった。

だがヒムにはハドラーを止めることは出来ない。ヒムだけではない。アルピナス、シ  
グマ、ブロック。彼ら全員がバーンとハドラーの戦いを見ていることしか出来ない。

皆が己のが主の姿を見つめていた。

「見苦しいな、いい加減諦めたらどうだ? 悪足掻きをして無様を晒すくらいなら潔く  
死に逝く方がまだマシというもの」

「生憎とそんな殊勝なものは持ち合わせていないツ。命ある限り最後の一瞬まで足掻き  
続ける。それがこのオレの生きる道だ」

「……愚かな。お前は人間に毒され過ぎた。まるで正義の使徒のようなことを言う」

ハドラーから迸る暴風に銀髪を踊らせて、憐れむような、憎むような、蔑むような声  
でバーンは告げた。

皮肉めいたバーンの言葉に、ハドラーは自嘲するように笑う。言われるべくもなく分かっていった。如何にもアバンの使徒の言いそうな言葉だ、と。

しかし、だからこそ強く思う。

「大魔王よ。ヒトを甘く見ると痛い目を見るぞ。このオレのようにな」  
「フツ、敵わないと見ると負け惜しみか」

ーピーシーー

終わりの時は突然やってきた。

踵から大腿部に至るまで大きな亀裂が入ったかと思つた矢先のこと。左手首は崩れ去り、顔の右半分が砂のように零れ落ちた。

声を出すことも忘れてその場に倒れる。

滲む視界の先に求めるのは生涯の好敵手……否、その意志を継いだ弟子の姿だった。

己の全てを賭けてまで執心した相手。その彼は今、敵の卑劣な奸計に陥り危機に貧している。だが案じてはいなかった。ハドラーは信じているのだ。

彼の意志を継ぐ者がこの程度で折れることなどない、と。

「言つただろう。ワンサイドゲームだと」

全身を苛む激痛は最早感じない。呼吸するだけで剥がれる皮膚は地に落ちる前に宙に消えていく。最期に探すのは宿敵の姿。その姿を求めて瞳を彷徨わせる。



俺たちが地に伏す傍らで、ダイが叫び立ち上がると全身を眩く輝かせた。

空が低く鳴動し、暗くなった。雷雲が一際大きく音を発し、稲妻がダイの剣へと落ちた。

「ライデインストラアアアッシュユ!!!」

空気を焦がし直進するストラッシュユは狙い変わらずミストへ向かう。そしてミストの纏う黒い光によって阻まれた。

ミストは下から打ち上げるように腕を振るってストラッシュユを上空へと弾いて除けた。

「ーなッ!」

剣と呪文と闘気に最強の武器の力。おそらくダイが剣を手に入れてから初めて放つ最大の攻撃は、今のミストには脅威ですらなく、毛ほどのダメージも追わせることは出来なかった。

それはこの場にいるただ一人としてミストに通用する攻撃手段を持たないことを意味している。

あるとすればポップのメドロアだが、そのポップは既に気を失っている。いや、仮に無事でもバラン共々倒すことなど出来るはずがない。

「打つ手が無いのならトドメを刺してやろう、と言いたいところだが」



ミストはそこで言葉を止めた。額の黒い帯が身体に染みこむように消え去ると、代わりに黒い竜の紋章が浮かび上がった。

紋章の強烈な黒い光に目を細める。

「……ううああ。つく、くあ」

同時にダイが膝から崩れ落ちて顔を俯かせた。苦しそうに呻き声をあげて右腕を押さえている。

拳の紋章が明滅し、波打つように黒いオーラを吐き出していた。

共鳴した紋章が甲高い音で鼓膜を刺激する。堪らず耳を両手で塞ぐが、それでも音は隙間をすり抜けて脳に響いてくる。

「い、何如ッ！ ミストはダイの記憶を消そうとしているッ」

クロコダインが逸早く事態を察知し叫ぶ。

しかしそれはあり得ない。ダイの紋章はバランスの支配から逃れるために額ではなく拳に移ったんだ。ならばいくら紋章を共鳴させようと無意味なはず。

だが、実際にダイは苦しみ藻掻いている。

「カアアアアアアッ！！！！」

ミストの雄叫びと共に紋章は一際大きく輝き、鳴り響いていた不快な音が止んだ。

一瞬の静寂。一拍の後、ダイは何事も無かったかのように立ち上がった。

「ダ、ダイ……？　ーアッ」

縫るようにダイの腕を掴むと、ダイの躰から電流のような何かがある中へと入り込んだ。それは俺の全身を駆け巡り、俺の魂の随まで染み込んで埋め尽くそうしてきた。

その正体は紛れもない暗黒闘気。邪気や悪意、害意といった負の感情そのもの。俺の奥底に眠るそれを、暗黒闘気は増幅させて蝕んでいく。

ガンガンとハンマーで叩かれたような頭痛に苛まれ、俺はダイの身に何が起きたのか理解する。つまりダイはー。

「さあ、こちらへ来い。暗黒の勇者よ」

ダイは暗黒闘気に支配されてしまったのだ。

ダイはゆっくりと面を上げると、迷うことなくミストの元へ歩いて行く。

おそらくミストは紋章を通して大量の暗黒闘気をダイに送り込んだ。結果は見ての通り。暗黒闘気に侵されたダイは見事ミストの傀儡となってしまう。

用は済んだとばかりに、今度こそミストは俺たちを殺すため動き出した。

暗黒闘気と竜闘気が混ざり合い、額の紋章に集中していく。ただ力を集中させているだけなのに、まるで台風にも巻き込まれたみたいなの風が吹き荒ぶ。

避けたり防いだりどころの話じゃない。吹き飛ばされないように地面に縫りつくことしか出来なかった。

「力こそ真理とバーン様は仰られた。強者こそが善であり、弱者は悪。弱いお前たちは悪なのだ」

バルンの顔で厭らしく嗤うミストと、無表情で俺たちを見つめるダイ。

放射線状の光が一箇所に収束し、解き放たれた。目を瞑り、最後の時を待つ。

しかし、待てどもその時は訪れなかった。

閉じた目をゆつくりと開く。すると俺の瞳に映ったのは光り輝く魔法陣と地面を白金色に輝く羽。そしてー。

「なんとか間に合いましたね。しかし状況は最悪、と言ったところでしょうか」

アバンの後ろ姿だった。

アバンは振り返ると柔和な笑みを浮かべた。そして再び前を向くと、見なくても分かる程に怒りを露わにする。

「貴様……アバンか。どうやって此処へ……」

「あなたがミストバーンですか。よく覚えておきなさい。この場は退くが、二人は必ず取り戻す。覚悟しておけ」

「何をー」

ミストが言い終わるよりも早く視界が暗転する。浮遊感に包まれるのも一瞬、直後に重力を全身で感じた。

驚き首を巡らすと目の前には大海原。そして空の彼方にはついさっきまで居たバーンパレスが浮かんで見えた。

そう、俺たちは逃げたのだ。………バランとダイを置いて。

## 85 この先に待つ運命

「してやられたな、ミストよ」

バーンは怒りとも嘆息とも取れる声音で告げた。

返す言葉もない。申し開きなど尚の事。ミストはただ即座に膝をつき、バーンに頭を垂れるのみ。今この瞬間に切り捨てられようと黙って受け入れるのみ。

「良い。ダイ共々竜の騎士は我が手中。アバンが生きていたのは想定外だったが」

輝く五本の羽は、未だ煌々と五芒星を描いていた。

「ハドラーと戦った時とは比較にならぬほどの力を感じる。偽物ということはあるまい」

「私の不手際は私の手で……。バーン様、私にアバン抹殺の命を」

「要らぬ、アバンを討つ者ならばもつと適任がいるだろう」

懇願するミストをバーンは一蹴する。

適任とは一体……？ 当惑するのも一瞬。すぐにそれが意味することを理解し、その言わんとする者へ顔を向ける。

アバンの使徒、勇者ダイ。

なるほど。アバンの意志を色濃く受け継ぎ、勇者の名まで冠するダイならば――否、これ以上の適任者は存在しない。

「仰せのままに。それでは時間の許す限り暗黒闘気よるダイの調整を行います」

「ああ、急げよ。地上を滅ぼすのに十日とかからんのだからな」

「――ハッ」

恭しく応じ、ミストはダイを連れてその場から消えた。

残されたバーンはこれから起こるであろう惨劇に愉悦の声を漏らし、五芒星を踏みつけた。

「ハドラーの言葉どおり、痛い目とやらを見せてくれるのだろうかアバンよ。――精々足掻くといい」

十

バランの躰を奪い、ダイすらも暗黒闘気により手中に収めたミスト。

戦う術も力も使い果たしたトーヤ達の息の根を止めるため、ミストは闘気弾を放った。その時、トーヤ達を助けるべくアバンが現れた。

アバンの力により辛くも危機を逃れたトーヤ達は、カール王国北東にあるアジトで傷

ついた身体を癒していた。

それが昨日の話。

トーヤを除く者たちはレオナやパプニカ三賢者の呪文により完全回復を遂げた。そして今、会議室で今後の作戦会議開いていた。

大魔王の目的や手段をトーヤから聞き知っているアバンは、その全貌を上手くポップ達に説明して自らの考えを伝えた。

「……………本当にこれを使えば黒のコアを無力化することができますんですか？」

まるで玩具のような吸盤付きの羽を弄ってレオナが言う。

如何にアバンの言葉でもにわかには信じ難い。冗談としか思えないようなアイテムとは裏腹に、アバンの目は真剣そのものだった。

アバンの人柄をよく知るポップやマアム、ヒュンケルでさえ頭を抱えそうなのだからレオナの反応も当然だった。

「これで一体どうしようってーのわっ!？」

質問をしようとしたポップに、アバンはその玩具のような羽をダーツの矢のように投げた。

羽は見事ポップの額に命中する。先端にある吸盤が額にピタリと吸い付き離れない。何事かと驚きポップは声を上げ、額の羽から出る青白い光の粒子が舞い出していた。

「な、なんだあ？ 先生エ、羽からなんか出てるんですけど」

「それはあなたの魔法力です。そのまま放っておけば十分くらいで魔法力が空っぽになることでしょう」

それを聞いて慌てて額の羽を掴んで外すポップ。雑に外したせいで吸盤がついていた箇所が赤くなっていた。

竜騎将バランの部下、竜騎衆ガルダンデーの羽を素材にしたこのアイテムは、取り付けた対象の魔法力を外部へ放出させる。トーヤが知るこの世界の出来事を聞いた際に得た情報から思いつき、死の大地へ乗り込む直前にアバンがトーヤに作らせたのだ。

既に亡き者となっていたガルダンデーの墓を暴く必要があったため、トーヤは終始一貫して否定的であった。しかしこれが地上を救う方法だと頭では理解していたためシブシブといった具合で協力したのだった。

その時のなんとも言えないトーヤの表情を思い出してアバンは一人苦笑する。

「つい半刻ほど前、ロモスの北西にあるポルトスの町に件の柱が落とされました。その頂には黒のコアが設置されている筈です。そこにこの羽を取り付けければ無力化は容易でしょう」

「ロモスカ、ならルーラで行けるぜ。俺が行きますよ」

意気込むポップにアバンは待ったをかける。



アバンとて黒のコアなどという危険物は一刻も早く何とかしたいが、それをやってしまえばバーンに勤づかれる可能性が高いのだ。

邪魔をされたバーンが別の手段を用意していかないとも限らない。ならば後手に回るが、それでも確実に対処する方がベターであるとアバンは考えた。

柱を使い六芒星を描くという関係から刻限は容易に知ることが出来る。死の大地へ向かう前にトーヤがアポロ達に渡した袋には、この羽と黒のコアへの対処を頼むとの言付けが記されていた。

つまり現状、黒のコアは恐怖ではあるが脅威ではない。

「黒のコアのこととは分かった。だが魔王軍が柱を落とすまで呑気に待つこともあるまい。俺達の方から再び攻撃を仕掛けるんだ」

力強く発言したのはヒュンケルだった。昨日惨敗したばかりだというのに、その闘志は衰えるどころか増しているように見えた。

防衛にばかりに意識を割いては勝機を逃す。戦士として当然の心構えであり、攻撃こそが最大の防御であると経験から理解しているのだ。

しかし、バーンパレスは遥か上空、移動も自由自在だ。周囲はバーンの魔力に覆われているためルーラでは侵入できず、飛翔して近づくこともできない。

「その準備は既に終えています」

カール王国の王女フローラは柔和に微笑むとレオナを見る。

彼女たちも皆がバーンパレスで死闘を繰り広げている際に何もしていなかった訳ではない。アバンと共に「破邪の洞窟」へと潜りミナカトールを習得している。

「姫さん、その「みなかとーる」ってどんな呪文なんだ？」

「「ミナカトール」はポップ君も使ったことのある「マホカトール」の上位呪文よ。敵の活動を停止させることが出来るの。これを使えばバーンパレスは止められるし、ルーラで行くことも出来るわよ」

「もつともそれを成功させるには五人のアバンの使徒と「アバンのしるし」が必要なのだけど」

レオナの言葉を補填するようにフローラが続ける。

ミナカトールはアバンですら習得できなかった伝説の大破邪呪文だ。しかしその大破邪呪文をもってしてもバーンパレスを停止させるには術者の他に四人の力が必要だ。

「へえ、でもなんでそれで先生のしるしが必要なんですか？ これはアバン先生の卒業の証でしょ？」

「ポップ、言うよりも実際にやってみた方が早いでしょう。「アバンのしるし」を持って、あなたが今為すべき事を思い浮かべてみなさい」

首をひねるポップにアバンがポップの胸にある「アバンのしるし」を示した。

ポップは不思議に思いながらも言われた通りに“アバンのしるし”を手にして意識を集中させる。すると“アバンのしるし”が緑色に輝いた。

「それがあなたの魂の力の色です。その印に使われている“輝聖石”は邪気を祓い、正義の心を増幅させる力があります。五人の正義の魂の力を使いミナカトールを唱えればバーンパレスを止められるでしょう」

「……待ってくれ。五人のアバンの使徒と言ったが、ダイは魔王軍に囚われている。印を持つのは俺、ポップ、マアムの三人だけだ。数が足りん」

「心配には及びません、レオナ姫にも既に印を渡してあります」

“アバンのしるし”を掲げて笑顔を見せるレオナ。

「いつの間に……。でも先生？ レオナが加わってもまだ四人ですよ。残りの一人は……まさか？」

「そう！ お察しの通り、この私です！ これからはあなた方と共に戦う同志、戦う仲間として行動を共にします」

アバンはまるで演説でもするかのような大袈裟な身振り手振りで力強く宣言する。

「つーことは、これでミナカトールを完成させられるってことか。これで心置きなくバーンパレスに乗り込むことが……って、あれ？」

「どうしたのよっ！」

「いや、だって。昨日アバン先生は俺たちを助けるためにバーンパレスに来てたよな？  
だったらわざわざこんな大掛かりなことしなくたって良いんじゃないかねえかって……」

ポップの疑問は当然と言える。考えてみればその通りだと、周りの面々もアバンへ視線を向けた。

その疑問に答えるべく、アバンは懐から三種類の羽を取り出しテーブルへ並べてみせた。

魔法力を蓄積する“聖石”の宝玉が嵌め込まれた“シルバーフェザー”。魔法の威力を増幅させる“輝石”が嵌め込まれた“ゴールドフェザー”。そして――。

「両方の性質を併せ持つ“輝聖石”を嵌め込んだ“プラチナフェザー”です。破邪の洞窟の地下で見つけた秘法は私の破邪呪文の威力を何倍にも増幅することが可能です。この力で私はバーンの結界を破りました」

「さっすが先生っ！　じゃあやっぱりミナカツールが無くたって大丈夫なんじゃないですか」

「ええ、バーンパレスに行くだけならそうでしょうね」

「そうかつ、アバン殿。マホカツールを使おうとしておられるな」

「おっさん、どういふことだよ」

「かつてオレがロモスでブラスを人質に戦った時にお前もやったことだろう。ダイヤバ

ランが暗黒闘気や邪気に侵されているというのなら、アバン殿の呪文と秘法で同じことができよう」

この手の呪法は同じ術者がやっても意味が無い。レオナのミナカトールでバーンパレスを停止させ、アバンの秘法でダイとバランを救い出す。そして再びダイとバランを主力にバーンを討つ。

平和を取り戻すために必要な手順だ。誰もがこの作戦に希望の光を見た。

ーヒュンケルとアバンを除いて。

## 86 この先に待つ運命 | 2

ヒュンケルはアバンの様子に気がつくも、それを口にすることはなかった。

この作戦には穴がある。少なくともアバンはそれに気がついている。しかし敢えて言わないのは考えがあつてのことだとヒュンケルは考えた。

アバンはとんでもなく甘い男だ。ダイを見殺しにすることはないし、手を抜くことなどないだろう。

「ところでトーヤの様子はどうなんですか？」

他の面々と違い、一晩経つても治療が完了しないトーヤについてポップがアバンに尋ねる。

「今はマトリフとブロキーナ老師に看護をお願いしています」

「老師とマトリフさんが？　なんでまた……」

ポップとマアムは互いに顔を見合わせ首をひねる。

トーヤの外傷はそれほど多くなかったはずだ。少なくとも昨日一緒に帰還した時には命に関わるような怪我はなかった。クロコダインやヒュンケルの方が余程重症だったと記憶している。

その二人が無事であるのに何故？

「それはー」

アバンは目線を彼等から僅かに逸し、低い声で話し始めた。

+

目が覚めると俺はベッド上だった。

この世界にきてからこの展開にはなれているので突然起き上がるようなことはしなくなつた。もし怪我していたら痛いからな。

手を握つては閉じたり、つま先からゆっくり動かしたりして身体の調子を確認する。

「……あれ？」

記憶を手繰り寄せるように思い返してみる。んー、ズタボロだったはずなのに怪我一つ無い。ということとは誰かが回復呪文か何かをかけてくれたんだろう。

すぐ近くには椅子に座つてコックリコックリと船を漕ぐマリンとー。

「のわあっ!!!」

メチャシリアスな表情でこつちを見るマトリフさんの顔が間近に迫っていた。更にその隣にはブロキーナ老師がいる。

「よお、気分はどうだ」

マトリフさんは俺が失礼にも悲鳴をあげたのに気にせずフランクな挨拶などをしてくれる。さすが百歳近いだけある。

「痛いところはないです。治療をしていただいたようで、ありがとうございました」

「ああ、それならこっちの二人とアバンのやつに言ってくれ。俺はほとんど何もしちゃいねえよ」

親指で隣に立つブロキーナ老師を指さしニヒルに笑う。対照的にブロキーナ老師はVサインなどを出していた。

ブロキーナ老師とはあまり絡みがないのでどう接していいのか悩む。……と思ったけど別にいいか適当で。きつと気にしないタイプだろうから。

「ちよいと失礼するよ」

おもむろに近づいたブロキーナ老師は俺の服をまくり上げる。そして腹の辺りに手を置くと目を閉じて意識を集中させている。

きつと治療の一環だろう。ジャマするのもアレなので為すがままにされること約一分。ようやく満足したのかブロキーナ老師は手をどけて服を元に戻して元の位置に戻った。

「……………」



いや何か言えよ。

何故か無言のブロキーナ老師に首だけ動かして問いかけるように目線で訴える。

「気分はどうかね？」

それさつきマトリフさんも聞いたやつ。

「痛いところはないです」

仕方ないので同じように答える。

どうやらこの答えでは不十分らしい。二人は表情を曇らせると低く唸ってみせた。そんな二人に構わず俺は俺の疑問をぶつけることにする。

「他のみんなはどうなりました？」

「無事だ。アバンのヤツがお前さん達を連れて逃げてきたのさ。ダイとその親父だけは敵に捕まっちゃったらしいがな。そこまでは覚えてるか？」

マトリフさんの言葉で何となくだった記憶はより鮮明に蘇る。そう、ダイが連れてかれてしまったんだ。

「そのとき何か変わったことは無かったかな？ 例えばダイ君に触ったり、とかね」

「……なぜダイに触ることが変わったことだど？」

あまりに限定的な質問に、意味が理解できず質問を返す。

「トーヤ君の使う『念』とやらの話はアバン殿から聞いているよ。闘気とは似てるけど

随分違うようだね」

「……………ええ」

静かに頷き肯定する。

どうしてアバンが“念”の話ブロキーナ老師にしたのか。気にはなるがこの際それは置いておく。それよりも気になるのは、何故このタイミングで老師は“念”の話なんぞをするのか、ということだ。

「闘気の扱いは非常に難しい。荒ぶる精神をコントロール出来ないと自らを傷つけることになる。弟子であるマアムにも扱いには十分気をつけるよう言いつけてある。コツは威力を極力抑えること、コレに尽きるね」

関係なく苦労話でもするかのような口振に、一体何の話やねんと言いたくなるのをぐっと堪える。

「キミの“念”は闘気に非常によく似ているが、精密さという点が闘気と一線を画しているよ」

「精密さか？」

「“念”は闘気の比じゃないほどに細かく生命力の運用ができる。だからその力で身を滅ぼすなんてことはまず無いだろうね。本来ならば」

「本来なら？」

なんかアホみたいにオウム返しばかりで申し訳なくなるが、まず何の話をしたいのかわからぬから仕方ない。この人達は一体何の話をしているんだ？

「それから精神の影響をモロに受けやすいみたいだな。ここでさっきの話だ。お前さんダイにーというよか暗黒闘気に触つちまったせいで精神を侵され始めているぞ」

な、なんだってー。

寝起きに明かされる衝撃の事実、心の中だけで叫び声をあげておく。

暗黒闘気か……：そういえばダイに触った時に頭痛ハンパなかつたな。なんて気を失う前のことをシミジミと思い返してみる。

「随分と余裕そうじゃねえか。もつと驚くかと思つたが、気づいてやがったのか？」

「いやー、べつにそういう訳じゃありませんが」

そう。別に気づいてたとか、分かつていたとかではない。自分でも不思議なくらいな人の感慨も焦躁もなかつた。

だからもしかしてコレも暗黒闘気の影響なのかな。普通は慌てたり騒いだり、それこそ二人に詰め寄る勢いでまくし立てたって可怪しくないんじゃないかな。どうだろうか。

だってカラダが動かないんだから。

## 87 この先に待つ運命 | 3

暗黒闘気に侵されたらどうなるんだろうか。

何故そんな疑問を抱くのか。それは俺が現在進行形で暗黒闘気に侵食されているからである。

侵食。英語で言うところ……あれ、なんだつけ？ 現世からコッチの世界へ来て二十余年。もはや英単語の記憶などほとんど無い。というか元から英語で覚えていない気がした。

原作において、グラス一杯分暗黒闘気を飲み干したヒュンケルは死ぬか暗黒の戦士になるかという二つが示唆されていた。暗黒闘気は液体なのかという疑問は全力でムシするとして、栄養価的に見ても体に良くないということだけは想像に難くない。

結局ヒュンケルはどちらにもならず光の闘気で押し返したのだが、俺には光の闘気など無いのです。

同じく暗黒闘気に侵されたダイは暗黒戦士という厨二的な状況へ陥ってしまった。バランスはちよつと違うけど、同様にしてミストの操り人形と化す始末。

最強の二人が最凶の敵の軍門に下るとか冗談じゃねえ。しかし俺には二人の心配を

している余裕などなかった。

このままだと俺はどっちになるんだろう。

「はい、あーん」

地上が消えるとか消えないとか、そんな最大級の悩みを解決できたとしても、このままでは俺は死ぬ。今地上で一番危機が差し迫っているのは俺なんじゃあるまいか？

リングをシャクシャクと咀嚼して飲み込む。まあ、何をやるにもカラダが資本だ。食べないことには始まらない。よってマリリンに食べさせてもらっている現状は恥ずかしいことなど何一つ無いのだ。

「……席を外した方が良いか？」

なのでそんな目で見ないでください。

冗談なのかマジなのか、ヒュンケルは少しだけ困った表情でそう進言した。クロコダインはその後ろで豪快に笑っていたりする。

俺は赤面するほど恥ずかしいが、マリリンは意外にも平然としている。というか追加でリングをフォークで刺して口元へ運んできているくらいなので羞恥心の欠片も感じていないのは明白だった。

「これから少し修行に出る。その前に見舞をと思ったのだが……マリリン殿がついていれば安心だな。ガッハッハッハ」

何がそんなに可怪しいのかと問い詰めたところだが、それよりも気になることをクロコダインが口にした。

「修行つて、今から？」

これから数日間で、魔王軍が地上を飛ばすための柱をいくつも落とすはず。となれば修行なんてしている時間はないように思えるが……。

アバンにはちゃんとそのことを伝えているが、もしかしてアバンは彼等に話していないのだろうか。

「柱のことは聞いている。しかし世界中で六つも柱を落とすとなれば数日の猶予はある。短い時間ではあるが少しでも力をつけねばダイ達を取り戻すことなど出来んならな」

「オレは新技の開発を、そしてヒュンケルは剣技に磨きをかけるつもりだ。簡単にパワーアップが出来るとは思っていないがな」

「へえ、新技に剣技ねえ……え、剣？ だってお前には槍がー」

聞き間違いかと思つた。ヒュンケルの剣技は確かに凄まじい。その実力は剣を極めたと称されるロン・ベルクにさえ匹敵するらしい。しかし今では剣ではなく槍で戦う。何故ならヒュンケルの使う“鎧の魔槍”は親友であるラーハルトから託されたものだからだ。

いくらバーンと戦うために力が必要でも、ヒュンケルがそれを手放すとは思えなかった。

そんな俺の疑問の答えは意外なところからやってきた。

「本来の持ち主が戻ったのなら返すのが道理だろう」

「おまえはっ!？」

いつの間にか扉に背を預け、一人の男が立っていた。

陸戦騎ラーハルト。竜騎将バランに仕える竜騎衆のひとりにして最強の戦士だ。生きていたのか。なんて白々しいことを言うつもりはない。そんなことは知っているからだ。ただ、ちよつと出てくるのが早すぎる気がする。

「バラン様から賜った霊薬は元を辿ればお前の物だそうだな。一応礼は言っておく」

「お、おう。……なるほどクスリか」

「しかし俺がいない間にバラン様が奪われ、ご子息であらせられるディーノ様までも連れ去られるとは。挙句にその体たらくではもう役には立たんだろう。そこで寝ている、足手まといに用はない」

「カツチーン。なんだと teme エこらっ」

完全に喧嘩を売っているとしか思えないラーハルトの言葉についつい俺も過剰に反応してしまう。しかし起き上がるにも腕に力が入らない。起き上がるどころか肘す

ら立たせることは出来なかった。

それを見てヒュンケルが顔を曇らせる。

「……暗黒闘気の影響というのは本当らしいな」

「マトリフ殿が言うには、お前の躰を蝕んでいるのは暗黒闘気そのものではなく、その影響を受けたお前自身の“念”によるものらしい。よって破邪呪文でも取り除くことは出来んそうだ」

なるほど。つまり俺がカラダを治そうと思っただけならやはり正義の心でもって邪悪な心を追い出さなければいけないらしい。

「お前が心の中の正義によって打ち勝てば良いだけの話だ。俺はお前を信じている。絶対に戻って来い」

「正義の心？」

無茶言うな。

+

「で、どうしてクロコダインは残ってるんだ？」

ヒュンケルとラーハルトが勝手なことを言い残して去った後、クロコダインはだけは



何故か帰るところか椅子まで持ちだして腰を据えていた。マリンも食器を洗ってくる席を外しているのでクロコダインと二人きりだ。

それにしてもクロコダインの巨体を支えるとは、この椅子を作った職人はいい腕をしている。

「うむ。少し相談があつてな」

顎を指で撫でて、如何にも悩んでいると眼で訴えてくる。クロコダインが俺に相談とは珍しい。

「さっきは修行と言ったが、確かにお前の言う通り時間が余りにもなさ過ぎる。そこで何かアドバイスを貰えないものかと思つてな」

「え？俺が？」

クロコダインは対オリハルコン勢との戦いの折、僅か数日で“獣王激烈掌”なる技を開発している。俺なんかアドバイスする必要があるのだろうか。

俺が余計なことを言うよりも自分で考えたほうが強力な技を覚えることが出来るそうなのがするが。

「念のことはアバン殿から聞いている。数多の技を使うお前ならば、とな」

「そう言われてもな。俺も攻撃用の技は霊丸と魔法力と念をミックスしたヤツの二つしか持つてないぜ」

「ほう。霊丸は知っているが、そのもう一つとは？ 先の戦いでも見せなかったところをみると切り札ではないのか」

「いや、全然。“邪王炎殺黒龍波”っていうんだけどな、メラをオーラで強化してぶつけるんだけど……」

一発打つと魔法力全部持つてかれるし、威力は霊丸よりやや高い程度。タメもいるうえ制御も効かないクソ技である。おまけに黒炎じゃない（これが一番重要）。

「――要は未完成ということか」

「そうそう、そういうこと。二つの力を掛けあわせたら強くなるのは当然だと思つての試みだったんだけど、そう単純なものじゃないらしい」

「二つの力、か。そういうえばヒュンケルもミストバーンから言われていたな。光の闘気と闇の闘気、二つを持っていくからこそ強かったのだと。しかしオレには魔法力も、光と闇の闘気もない。掛け合わせることなどできん」

自虐風ギャグで笑いを誘おうとするが、クロコダインは笑うどころか真面目なトーンで語りだす。

もしかして、クロコダインは自分の力の無さを悔いているのかもしれない。元々武人基質なクロコダインだ。仲間を敵に奪われたとなれば、そのシヨックは相当なものだろう。他人にアドバイスなんかを求めたのもそのためか。

「戦力がヒュンケルやラーハルトと比べれば大きく劣っているのは自覚している」

それは比べる相手が悪い。あいつらと比べて肩を並べられる奴なんぞ世界中で数えなくても片手で足りるといふものだ。

「今回の作戦の要のミナカトールでも役には立てんからな。オレなりに無い頭を捻らねば足手まといになりかねん」

「それって、アバンのしるし」の正義の光の話？」

大破邪呪文ミナカトールで空中に浮かぶバーンの要塞を止める。そのためには呪文の威力を最大限まで高める必要があり、そしてそれには五人のアバンの使徒と「アバンのしるし」が必要だ。

アバンと残る四人のアバンの使徒は簡単に印を光らせることが出来たそうだ。しかしクロコダインやアポロ達では印を光らせることは出来なかつたらしい。クロコダインが悲しそうにしているように見えた。

その気持わかるよ。俺も昔試したことがあるが光らなかつたから。

自分が正義だなんて自惚れているつもりはない。それでも割りとシヨックだったよ。まるで自分以外の何者かから「お前は正義じゃない」と言われているみたいで……。

だけど同情なんていらなげ。セルフカウンスリングにより今ではすっかり立ち直っている。結果たどり着いた俺の境地をクロコダインにも教えてやろう。

「太陰太極図って知ってる？ 陰陽五行説の」

「たいいん……いんようごぎよ……？ なんだそれは？」

まあ知らないよね。この世界での話じゃないし。

クロコダインに紙とペンを取ってもらい、そこに白と黒の勾玉を合わせたような太陰太極図を描く。

陰陽五行説。簡単に言うと、世界の物事すべては“陰”と“陽”の二つで成り立っているという考え方のことだ。月と太陽。裏と表。光と闇。善と悪。二分されたこれらに優劣はなく、どちらが間違っているとか正しいとかの話ではないのだ。

「この模様のこの部分はなんだ？」

クロコダインは描かれた白黒それぞれの勾玉の部分にある小さな丸を指さした。

「良いところに気がついたね！ それが重要なんですよ」

闇の中にも光はあり、光の中にも闇はある。完全なものなどなく、すべては混ざり合っているってことだ。

「……なるほどな。それでこれが一体どうしたというのだ？」

「つまり俺たちが悪人だろうと善人だろうと心の中に悪意も善意も持っているってことだよ。どうせ潔癖になんてなれないんだ。俺たちは俺たちのやり方を貫けば良い」

キザなセリフだと思った。柄にも無いことをしている気恥ずかしさを紛らわせるた

め明るく言い放つ。

悩んでいる時、他人が少し何かを言ったからって解決することなんか稀だ。ヒトの心ってやつはそんなに単純じゃない。むしろそんなに簡単に解決するような人間は短絡的で信用に足らないとさえ感じる。

故にこれは気休めだ。気持ちしが軽くなればポジティブになり、それが悩みの解決に繋がることもあるだろう。

「グアツハツハツハツ。もしかしてお前はオレを元気づけようとしているのか。心遣い痛み入るが、生憎とオレは落ち込んではおらんよ」

だからそれら全てが勘違いという事実には俺の羞恥心はマックスを超えてオーバーキルを果たす。加えてせっかくの配慮を無碍にされたこともあり、俺は寝返りをうってそっぽを向ける。……………いじけている訳ではありません。

「そう気を悪くするな。お前の助言は然と受け取った。オレはオレの技に磨きをかけることにする」

「はいはい、それは良かったですねー。まあ良いでねえの？ 獣王激烈掌でも神砂嵐でも、どうぞご勝手にー」

「参考までにお前が今までにやってきた特訓内容を教えて欲しい」

「ハイハイ、イイデスヨー」

適当に返事をして布団を被り、ロボットのよう機械的に質問されたことに答えることにシフトする。

しやべり疲れた俺はいつの間にか眠りについてしまうのであった。

## 88 この先に待つ運命 4

「つしやおらあつ!!!」

闇の帳が下りて数刻が経った頃。俺は歓声とも気合とも取れない叫び声をあげた。

昼間に来たクロコダインの言葉がヒントになった。曰く、暗黒闘気の影響を受けた“念”のせいでカラダを動かすことが出来ない。

理屈はよう分からんが、それはつまりオーラがジャマだつてことに他ならない。ならば“絶”でオーラを封じ込めれば動けることを意味している。

ムリヤリな解釈ではあったが実際に俺はこうして立ち上がることが可能となった。寝起き特有のフワフワした足取りでゆっくり歩みを進め、とりあえず着替えることにする。

「トーヤつ、起き上がって平気なの?」

俺の奇声を聞きつけたマリリンが部屋へと駆け込み心配そうにする。

「もっち」

親指を立てて答えるも完全に強がりである。なにしろ事態は何一つとして好転していない。これから戦うというのにオーラも無しでどうしろというのだろうか。

どうしようもなかった。これではスライム一匹倒せない。

しかしそんなことではへこたれないぜ。とりあえずパプニカの我が家に戻りアイテムを取ってこよう。

案外クスリ飲んだら治るかもしれないな。

調度良いのでそのままマリンを連れて深夜の森へとランデブーに出かけることにした。

あの時の告白とか諸々は全て有耶無耶になっているが、向こうが何も言っていないので保留だ。我ながら最低だと思いつつも、このままだと死ぬかも知れんものだから許して欲しい。

というわけであつという間に俺の家のある森の入口までやってきた。

さすがルーラだ。瞬間移動呪文と言う名はダテではないと言うべきか。アジトを出てから十分程度でこんなに遠くまで来てしまえるなんて。

本当なら「同行」を使えば良かったのだが、先の戦闘でカードが破れてしまっていた。使えねえなクソが。

「いつの間にルーラなんて覚えたんだ？」



「ふふ、これでも成長しているのよ」

褒めてみせるとマリンは嬉しそうに微笑むのだった。そして成長という言葉聞いてなんとなく胸に目がいったのは秘密だ。

俺が見ていないところで彼女たちは彼女たちなりに努力を積み重ねているところか。“念”無しの俺より遥かに強いんだだろうなきつと。頼もしい限りだ。

それにしてもー。

「なんで森の入口？」

これがゲームならばルーラで町や森の入口にしか入れないのは理解できる。しかし実際にこの世界にそんな縛りは存在しない。どうせなら森の入口ではなく洞窟の前に降りれば良いものを。

「だって、まだ障害物が多い場所だと着地に自信がないんだもの」

顔を背けて頬を染めるマリン。まるで自動車免許取立ての若者が駐車のパックが苦手と主張するみたいだった。

そんな様子が妙にコミカルチックに思えて、俺はつい吹き出してしまふ。

「も、もう。なにも笑わなくなつて」

「あつはつは、わりい。さあ、急ごうぜ」

「あ、ちよつとー」

マリンの手を引くと俺は森の中へ駆けていった。

+

トーヤ達が出立して直ぐ、アジト内は騒然としていた。

「確認ですが、本当にトーヤ君たちはマリンさんと一緒だったんですね？」

「は、はい。間違いありません」

少しだけ語気を強めて詰め寄るアバンに、番兵は及び腰で答えた。

「ああつ、もう。彼は本当にまったくー」

「らしくねえな、お前がそんな風になるなんて」

嘆くアバンにマトリフが珍しいものを見たとき笑う。しかしその実内心ではマトリフも同じ心境だった。

アジト内では半刻程前から姿の見えないトーヤの搜索が行われていた。そして今ようやくその手掛かりを見つけたのだ。発見には至らなかつたが、ひとまずこれで搜索は終了で良いだろう。

アバンは近くの番兵にフローラやレオナへの伝令を頼み、事態を収束へと向かわせた。

「彼ほど厄介な人間もそういませんよ。ヤレヤレ、自分に何が起きているか自覚がないんでしょかねえ」

「ホツホツホツ、それを隠したのはワシ等だからね。落ち度はこつちにもあるよ」

「それもそうなんですが……。まあマリンさんが一緒なのが不幸中の幸いですね」

「……そりやどうかな。いまのトーヤには襲われるという事実こそが危険だ。あの嬢ちゃんがいれば少しは緩和されるかも知れねえが、嬢ちゃんが怪我でもした場合下手すりや一気に進行しかねえぜ」

マトリフの言葉にアバンとプロキーナは口を噤んだ。

十

人間たちのーアバンの使徒達の潜伏先を見つけ、ザボエラは愉悅に口を歪めると高い笑い声を響かせた。

バーンパレスからポルトスの町へと柱が穿たれた後、ザボレラは悪魔の目玉を柱を探らせるため送りこんだ。そこへ人間達が現れたのだ。おそらく彼らの目的は柱の調査だ。だからその行動に不思議はなかった。

そんな中、ザボエラが目をつけたのは一人の兵士だった。一見してただの兵士であつ

たが、その身なりが綺麗過ぎた。世界中が魔王軍との戦闘で疲弊している中、それ程の装備を配給される者は限られてくる。故に有力な組織の一員であると結論付けるのに時間は掛からなかった。

ザボエラは送り込んでいた悪魔の目玉を使い、直ぐ様その兵士を尾行した。結果は大成功。見事アバンの使徒のアジトを突き止めることに成功したのである。

「キィ〜ツヒツヒツヒ!! やったぞい、これでワシもーなんじゃ? 小奴ら何を話している……」

悪魔の目玉を通して飛び込んできたのはバーンパレスから落とされた柱の話だった。ザボエラはその内容に驚き目を剥いた。バーンの真の目的と黒のコア。自身の知らない情報に衝撃を受けつつも、彼は同時に頭の中で計算を始める。

すなわち、どうやって生き残り利を得るか。ザボエラにとつてはそれが全てで、そこに情が入り込む余地はない。

「……となるとマズいおう。人間どもの勝ちも薄い、万が一もあり得る。情報の出所も気になるが……ん?」

続いて目にしたのはベッドで眠るトーヤとその横で話すアバン、マトリフ、ブロキーナ等の映像だった。

アバンの口から語られたのはトーヤの持つ“念”のことだった。

曰く、「念」は生命力を用いてオーラを「強化」「変化」「具現化」「操作」「放出」など様々な特性で利用・運用する法である。

聞いたことのない能力にザボエラは興味を示し、そして何かを閃き再び狂ったように笑い出す。

「良いぞいつ!! 運が向いて来おったあゝッヒッヒッヒ」

手段は決まった。ならば後は実行に移すのみ。

しかしそれをするには危険を犯す必要がある。だが自らに危険が及ぶ方法など下策も良いところ。姿を隠したまま目的はきっちりと果たす、それが賢いやり方というものの。

薄暗い部屋、そこでザボエラは通信呪文の準備をする。

“全世界の愚かなる人間たちへ。我ら魔王軍は数日のうちに地上を殲滅するだろう。しかし我らは慈悲深い。愚かしくも偉大なる大魔王様に逆らった戦士、トーヤと名乗る男を生贄として捧げよ。さすれば捧げた者とその仲間の命だけは助けよう。日時は三日後の正午。場所はロモスの北西にある柱の麓。賢い選択を期待する。以上”

間もなくして発信された通告は、余すこと知れ渡り世界中を震撼させた。

「どうせなら潰し合って貰おうかの。アレの完成も間もなくじゃ」

数十分ほど森の中を歩いて、俺たちはどちらともなく違和感を感じた。

普段ならほとんどモンスタースラ出現しない森なのにヒトの気配を感じるのだ。この先にあるのは俺の住処くらいで他にはないもない。よってヒトが入り込む理由も無いはずだが。

しかし道の先の残る足跡や折れた枝、そして草をかき分けた痕跡がそれを否定する。

「何か変だ」

ついに疑念は口をついて出た。マリンも頷き、表情を引き締めると目を細めて遠くを見る。

小さく揺らめくのは松明か。遠くに点のような灯りを見つけて、俺たちは歩みを止める。そして茂みの中へ入ると身を隠したまま移動を再開させた。

音を立てないようにつくりと歩みを進め、ようやく見渡せる場所までたどり着く。そこはやはりと言うか、俺の洞窟の前だった。

「何をやっているのかしら？」

「ドロボウだろうな。ま、貴重品は奥にあるからバレないだろ。あいつらが帰ってからどこかで時間潰すか」

小声で話すマリンに答えてその場を後にする。

洞窟から離れた場所まで移動すると、俺たちはちょうど良さげな岩の上に腰を落ち着けた。

こんな世の中だ、悪人なんて腐るほどいるだろう。盗みをはたらくなんて見下げ果てた行動だと思いが咎めるのも面倒だ。そもそも体調も優れないのに争いなんぞしたくない。

「あの人たち本当にドロボウかしら？ それにしては随分普通に見えたけど……」

眉を潜めてマリンがぼつりとつぶやく。後半は尻すぼみだったので耳に届く前に消えてしまった。

続きを確認しようとしたその時、茂みから何者かが飛び出してきた。そのまま真っ直ぐに俺たちの元へやって来る。足取りに迷いは一切感じない。

星の明りに照らされて浮かび上がるその姿には見覚えがあった。意外な場所で、意外な人物達との再開。偶然にも出会った彼らは笑顔を見せると更に駆ける足を早めた。

「ようやく見つけたぜっ!!」

大きな声をあげて騒々しくも向かってくるのはニセ勇者でろりんとその一行であった。